

一般国道
210号線 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第8集

堺町・大碓遺跡

福岡県浮羽郡吉井町所在遺跡の調査

1994

福岡県教育委員会

一般国道
210号線 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第8集

さかい まち おお いかり
堺町・大碓遺跡

福岡県浮羽郡吉井町所在遺跡の調査

1994

福岡県教育委員会



(1) 堺町・大碓遺跡遠景（鷹取山山頂、南から）



(2) 堺町遺跡全景（西から）



(1) 大碓遺跡全景（北から）



(2) 大碓遺跡・井戸（西から）

序

本書は、建設省による一般国道210号線浮羽バイパス建設に係る文化財の発掘調査の記録であり、平成元年度から二年度にかけて実施した吉井町内の遺跡についての報告であります。

遺跡の内容としては弥生時代のこの地域の主要な集落遺跡および古代・中世の生産に関わる遺構・遺物を報告しています。

本書が、この地域あるいは時代史の研究にわずかなりとも寄与することができますとともに、文化財保護思想の普及・活用の一助ともなれば幸甚であります。

最後に、発掘調査あるいは報告書作成にご協力いただいた多くの方々に対しまして感謝申し上げます。

平成6年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安 常喜

例 言

1. 本書は、福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所から委託を受けて発掘調査を実施した、一般国道210号線浮羽バイパス建設に係る遺跡の調査報告である。
2. 出土遺物の整理は九州歴史資料館で実施し、土器等は文化課岩瀬正信、金属製品は同館参事補佐横田義章の指導を仰いだ。
3. 遺構図面の作成は、担当者の他、佐々木滝子、高木政子、矢野祥子があたり、遺物実測図の作成は平田春美、棚町陽子、久富美智子、坂田順子、藤原さとみが行なった。これらの製図には豊福弥生・原カヨ子・関久江・土山真弓美があたった。
4. 遺構写真は飛野博文・水ノ江和同が、遺物写真は北岡伸一と水ノ江が撮影したものを使用した。なお、空中写真は(有)空中写真企画に依頼した。
5. 本書の執筆・編集は、堺町遺跡を飛野が、大碓遺跡を水ノ江がそれぞれ担当し、全体を水ノ江が監修した。

本文目次

1. はじめに	1
2. 位置と環境	5
3. 堺町遺跡の調査	9
1. はじめに	13
2. 遺構と遺物	13
I) 溝状遺構	13
II) その他の遺構	22
III) 小結	25
4. 大碓遺跡の調査	29
1. はじめに	29
2. 調査の概要	30
3. 縄文時代の遺物	32
4. 弥生時代以降の遺構と遺物	32
I) 竪穴住居跡	32
II) 土壇	46
III) 甕棺墓	87
IV) 溝	92
V) ピット出土の遺物	105
VI) 包含層出土および表採の石器	105
5. 古墳時代以降の遺構と遺物	107
I) 竪穴住居跡	107
II) 掘立柱建物跡	129
III) 土壇	133
IV) 溝	140
V) 井戸	141
VI) ピット出土の遺物	143
6. 大碓遺跡東部別区の調査	143
7. まとめ	144
I) 大碓遺跡の概要	144
II) 大碓遺跡出土の弥生土器について	146

図 版 目 次

- 巻頭図版 1 (1) 堺町・大碓遺跡遠景(鷹取山山頂、南から)
(2) 堺町遺跡全景(西から)
- 巻頭図版 2 (1) 大碓遺跡全景(北から)
(2) 大碓遺跡井戸(西から)

堺町遺跡

- 図版 1 (1) 1号溝西端(北上空から) (2) 9e地区以西(東上空から)
- 図版 2 (1) 1号溝9f地区(西から) (2) 1号溝d地区(西から)
- 図版 3 (1) 1号溝9f地区(東から) (2) 橋脚(南東から)
- 図版 4 (1) 橋脚(東から) (2) 草履(北東から)
- 図版 5 (1) 1号溝土層E(東から) (2) 1号溝土層H(東から)
- 図版 6 (1) 1号溝土層I(東から) (2) 1号溝土層J(東から)
- 図版 7 (1) 1号溝土層K(東から) (2) 1号溝土層N(東から)
- 図版 8 (1) 4号溝南壁東半(北から) (2) 4号溝南壁西半(北から)
- 図版 9 (1) 4号溝北壁土層(南から) (2) 5号溝南半(北から)
- 図版10 (1) 5号溝上の水田跡(南東から) (2) 同畦畔と水田(南から)

大碓遺跡

- 図版 1 (1) 大碓遺跡全景.1(北東から) (2) 大碓遺跡全景.2(南東から)
- 図版 2 (1) 大碓遺跡全景.1(北西から) (2) 大碓遺跡全景.2(北から)
- 図版 3 (1) 大碓遺跡西端部全景(北西から) (2) 大碓遺跡西端部全景(西から)
- 図版 4 (1) 1号竪穴住居跡(北から) (2) 1号竪穴住居跡炉跡(北西から)
(3) 1号竪穴住居跡出土遺物
- 図版 5 (1) 2号竪穴住居跡(北西から) (2) 2号竪穴住居跡炉跡(南西から)
- 図版 6 (1) 5・6・8号竪穴住居跡(南西から)(2) 6号竪穴住居跡(南から)
- 図版 7 (1) 6号竪穴住居跡遺物出土状態(北東から) (2) 6号竪穴住居跡出土遺物
- 図版 8 (1) 8号竪穴住居跡(南西から) (2) 8号竪穴住居跡炉跡(北から)および出土遺物
- 図版 9 (1) 21号竪穴住居跡(南から) (2) 21号竪穴住居跡炉跡(南東から)および出土遺物
- 図版10 (1) 30号竪穴住居跡(北から) (2) 30号竪穴住居跡炉跡(南西から)
- 図版11 (1) 32号竪穴住居跡(北西から) (2) 32号竪穴住居跡炉跡(北東から)
- 図版12 (1) 33号竪穴住居跡(西から) (2) 35号竪穴住居跡(南から)

- | | |
|----------------------------|---------------------------|
| 図版13 (1) 41号竪穴住居跡(南西から) | (2) 42・43号竪穴住居跡(南西から) |
| 図版14 (1) 2号土壙土層断面(南から) | (2) 2号土壙(西から) |
| 図版15 (1) 2号土壙出土遺物 | (2) 5・6号土壙(南から) |
| 図版16 (1) 7号土壙(南から) | (2) 8号土壙(西から) |
| (3) 8号土壙出土土器 | |
| 図版17 (1) 9号土壙土層断面(西から) | (2) 9号土壙(西から) |
| 図版18 (1) 10号土壙(南西から) | (2) 10号土壙土層断面(南から)および出土遺物 |
| 図版19 (1) 11号土壙土層断面(東から) | (2) 13号土壙土層断面(北から) |
| 図版20 (1) 14号土壙土層断面(北から) | (2) 15号土壙土層断面(東から) |
| 図版21 (1) 16号土壙土層断面(南から) | (2) 16号土壙(南から) |
| 図版22 (1) 17号土壙(北から) | (2) 18号土壙(北から)および出土土器 |
| 図版23 (1) 19号土壙土層断面(南から) | (2) 19号土壙(西から) |
| 図版24 (1) 20号土壙土層断面(西から) | (2) 20号土壙(西から) |
| 図版25 (1) 21号土壙土層断面(南から) | (2) 21号土壙(南から) |
| 図版26 (1) 22号土壙土層断面(南から) | (2) 22号土壙(南から) |
| 図版27 (1) 23号土壙土層断面(南東から) | (2) 23号土壙(南東から) |
| 図版28 (1) 24号土壙土層断面(南から) | (2) 24号土壙(南から) |
| 図版29 (1) 28号土壙(南東から) | (2) 29号土壙(南西から) |
| 図版30 (1) 30号土壙土層断面(北から) | (2) 30号土壙(北から) |
| 図版31 (1) 31・32号土壙(南から) | (2) 31号土壙土層断面(南から) |
| (3) 32号土壙土層断面(南から) | |
| 図版32 (1) 33号土壙(西から) | (2) 35号土壙土層断面(北から) |
| 図版33 (1) 34号土壙(北から) | (2) 34号土壙遺物出土状態および出土遺物 |
| 図版34 (1) 36号土壙(西から) | (2) 36号土壙出土遺物 |
| (3) 38号土壙出土遺物 | (4) 38号土壙(南東から) |
| 図版35 (1) 39号土壙(北東から) | (2) 40号土壙(東から) |
| 図版36 (1) 40・41号土壙出土遺物 | (2) 41号土壙(南から) |
| 図版37 (1) 43号土壙(東から) | (2) 44号土壙(北東から) |
| 図版38 (1) 47・49号土壙土層断面(北から) | (2) 49号土壙(南西から) |
| (3) 49号土壙出土遺物 | |
| 図版39 (1) 47号土壙(北西から) | (2) 48号土壙(南西から) |
| 図版40 (1) 50号土壙(北西から) | (2) 50号土壙出土遺物 |
| 図版41 (1) 51号土壙(北から) | (2) 53号土壙(西から)および出土遺物 |

- | | | |
|------|---------------------------|-----------------------|
| 図版42 | (1) 52号土壙(南東から) | (2) 52号土壙(北から)および出土遺物 |
| 図版43 | 52号土壙出土遺物 | |
| 図版44 | (1) 54号土壙(西から) | (2) 54・55号土壙出土遺物 |
| 図版45 | (1) 55号土壙(北から) | (2) 56号土壙(北西から) |
| 図版46 | (1) 56号土壙出土状態(北から) | (2) 56号土壙出土遺物 |
| 図版47 | (1) 58号土壙土層断面(南から) | (2) 58号土壙(南から) |
| 図版48 | (1) 59号土壙土層断面(南から) | (2) 59号土壙(東から) |
| 図版49 | (1) 60号土壙土層断面(北西から) | (2) 60号土壙(北西から) |
| 図版50 | (1) 1号甕棺墓(北西から) | (2) 1号甕棺(左が上甕 右が下甕) |
| 図版51 | (1) 2号甕棺墓(北西から) | (2) 3～5号甕棺墓(南東から) |
| 図版52 | (1) 3号甕棺墓(南東から) | (2) 3号甕棺(左が上甕 右が下甕) |
| 図版53 | (1) 4号甕棺墓(南東から) | (2) 4号甕棺(左が上甕 右が下甕) |
| 図版54 | (1) 5号甕棺墓(南東から) | (2) 5号甕棺(左が上甕 右が下甕) |
| 図版55 | (1) 3号溝土層断面(北から) | (2) 3号溝(北から) |
| 図版56 | 3号溝出土土器 | |
| 図版57 | (1) 4号溝土層断面(北から) | (2) 4号溝(北から) |
| 図版58 | (1) 3号溝陸橋(西から) | (2) 4号溝出土遺物 |
| 図版59 | (1) 6号溝土層断面(北から) | (2) 7号溝(北から) |
| 図版60 | 6号溝出土遺物 | |
| 図版61 | (1) 8号溝土層断面および52号土壙(北西から) | |
| | (2) 8号溝(北から) | |
| 図版62 | (1) 8号溝出土遺物.1 | |
| 図版63 | (1) 8号溝出土遺物.2 | (2) 弥生時代竪穴住居跡・土壙出土遺物 |
| 図版64 | (1) 包含層出土および表採の石器.1 | (2) 包含層出土および表採の石器.2 |
| 図版65 | (1) 3～5号竪穴住居跡(南から) | (2) 3号竪穴住居跡カマド(南から) |
| 図版66 | (1) 5号竪穴住居跡(南から) | (2) 7号竪穴住居跡(南から) |
| 図版67 | (1) 9号竪穴住居跡(南から) | (2) 10～14号竪穴住居跡(南東から) |
| 図版68 | (1) 10号竪穴住居跡(南から) | (2) 12号竪穴住居跡(南から) |
| 図版69 | (1) 11号竪穴住居跡(東から) | (2) 11号竪穴住居跡カマド(東から) |
| 図版70 | (1) 14号竪穴住居跡(東から) | (2) 14号竪穴住居跡カマド(東から) |
| 図版71 | (1) 15号竪穴住居跡(南から) | (2) 15号竪穴住居跡カマド(南から) |
| 図版72 | (1) 16～21号竪穴住居跡(北西から) | (2) 22号竪穴住居跡(南から) |
| 図版73 | (1) 23・24号竪穴住居跡(から) | (2) 24号竪穴住居跡(南から) |

- 図版74 (1) 25・26号竪穴住居跡および6号掘立柱建物跡(南から)
(2) 27～31号竪穴住居跡(北から)
- 図版75 (1) 27号竪穴住居跡(北から) (2) 28号竪穴住居跡(西から)
- 図版76 (1) 29号竪穴住居跡(南から) (2) 31号竪穴住居跡(南から)
- 図版77 (1) 34号竪穴住居跡(南東から)
(2) 36～38号竪穴住居跡および2～5号甕棺墓(南東から)
- 図版78 (1) 36号竪穴住居跡(西から) (2) 36号竪穴住居跡カマド(南西から)
- 図版79 (1) 37号竪穴住居跡カマド(南から) (2) 38号竪穴住居跡(南東から)
- 図版80 (1) 古墳時代竪穴住居跡出土遺物 (2) 14号竪穴住居跡出土遺物
- 図版81 (1) 1号掘立柱建物跡(南から) (2) 2号掘立柱建物跡(西から)
- 図版82 (1) 3号掘立柱建物跡(南から) (2) 4号掘立柱建物跡(南から)
- 図版83 (1) 5号掘立柱建物跡(南から) (2) 6号掘立柱建物跡(南から)
- 図版84 (1) 7号掘立柱建物跡(北から) (2) 1号土壙(北西から)
- 図版85 (1) 3号土壙(西から) (2) 14号土壙(北西から)
- 図版86 (1) 26号土壙(南西から) (2) 27号土壙(南から)
- 図版87 (1) 37号土壙土層断面(西から) (2) 57号土壙(北東から)
- 図版88 掘立柱建物跡および土壙出土遺物
- 図版89 (1) 井戸検出状態(南から) (2) 井戸断面(西から)
- 図版90 (1) 井戸桶内土師皿出土状態(西から)(2) 井戸出土遺物
(3) 井戸桶内獣骨出土状態(西から)
- 図版91 (1) 大碇遺跡東部別区全景.1(南東から) (2) 大碇遺跡東部別区全景.2(南東から)

挿 図 目 次

第 1 図	堺町・大碓遺跡位置図 (1/50,000)	3
第 2 図	旧生葉・竹野郡境石柱 (南西から)	4
第 3 図	周辺遺跡分布図 (1/50,000)	7 ~ 8

堺町遺跡

第 1 図	遺構配置図 (1/600)	11~12
第 2 図	溝土層図1 (1/120)	14
第 3 図	草履出土状態 (1/10)	15
第 4 図	1号溝出土遺物実測図 1 (1/3)	16
第 5 図	1号溝出土遺物実測図 2 (1/3)	17
第 6 図	2号溝出土遺物実測図 (1/3)	18
第 7 図	溝土層図 2 (1/120)	20
第 8 図	その他の出土遺物実測図 (1/3)	21
第 9 図	橋脚状遺構実測図 (1/60)	23
第 10 図	周辺字図および条里の復原 (1/10,000)	27~28

大碓遺跡

第 1 図	6号溝完掘状態 (北西から)	29
第 2 図	大碓遺跡出土縄文土器実測図 (1/3)	30
第 3 図	弥生時代の遺構配置図 (1/1,000)	31
第 4 図	1号竪穴住居炉跡実測図 (1/30)	32
第 5 図	1号竪穴住居跡出土土器 (1/4) および 1・2号竪穴住居跡出土石器 (1号は2~6、2号は7 1/2) 実測図	32
第 6 図	1号竪穴住居跡実測図 (1/60)	33
第 7 図	2号竪穴住居炉跡実測図 (1/30)	34
第 8 図	2号竪穴住居跡実測図 (1/60)	34
第 9 図	6号竪穴住居跡実測図 (1/60)	35
第 10 図	6号竪穴住居跡出土土器・石器実測図 (1~3は1/4 4~7は1/2 8・9は1/3)	36
第 11 図	8号竪穴住居跡実測図 (1/60)	37
第 12 図	8号竪穴住居炉跡実測図 (1/30)	38
第 13 図	8号竪穴住居跡出土土器・石器実測図 (1・2は1/4 3・4は1/2 5・6は1/3)	38

第 14 図	21号竪穴住居炉跡実測図 (1/30)	39
第 15 図	21号竪穴住居跡実測図 (1/60)	39
第 16 図	21号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	40
第 17 図	30号竪穴住居跡実測図 (1/60)	41
第 18 図	30号竪穴住居跡周溝土層断面実測図 (1/20)	42
第 19 図	30号竪穴住居炉跡実測図 (1/30)	42
第 20 図	30・32・33号竪穴住居跡出土土器 (1/4)・ 石器 (1/2) 実測図 (30号は1～5・9 32号は6 33号は7・8・10)	42
第 21 図	32・33・35号竪穴住居跡実測図 (1/60) および32号竪穴住居炉跡実測図 (1/30)	43
第 22 図	35号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	44
第 23 図	39・40号竪穴住居跡実測図 (1/60)	45
第 24 図	41～43号竪穴住居跡実測図 (1/60)	47
第 25 図	2・5・6号土壙実測図 (1/40)	48
第 26 図	2号土壙出土土器・土製品・石器実測図 (1～8は1/4 9～11は1/2)	49
第 27 図	7～10号土壙実測図 (1/40)	51
第 28 図	7・8号土壙出土実測図 (7号は1 8号は2・3 1/4)	52
第 29 図	9号土壙出土石器実測図 (1/2)	52
第 30 図	10号土壙出土土器 (1/4)・石器 (1/2) 実測図	53
第 31 図	11・13～15号土壙実測図 (1/40)	54
第 32 図	17号土壙出土土器実測図 (1/4)	55
第 33 図	18号土壙出土土器 (1/4)・石器 (1/3) 実測図	55
第 34 図	16～18号土壙実測図 (1/40)	56
第 35 図	19・20号土壙実測図 (1/40)	58
第 36 図	21・23号土壙実測図 (1/40)	59
第 37 図	22・24号土壙実測図 (1/40)	60
第 38 図	25号土壙実測図 (1/40)	61
第 39 図	30号土壙出土土器実測図 (1/4)	62
第 40 図	28～31号土壙実測図 (1/40)	62
第 41 図	31号土壙出土石器実測図 (1/2)	63
第 42 図	32～35号土壙実測図 (1/40)	63
第 43 図	34号土壙出土土器 (1/4)・石器 (1/2) 実測図	64
第 44 図	38号土壙出土土製品・石器実測図 (1/2)	65
第 45 図	39号土壙出土土器実測図 (1/4)	65

第 46 図	36・38・39・41号土壙実測図 (1/40)	66
第 47 図	40号土壙実測図 (1/40)	67
第 48 図	40号土壙出土土器実測図 (1/4)	68
第 49 図	41号土壙出土土器実測図 (1/4)	68
第 50 図	42~44・47号土壙実測図 (1/40)	69
第 51 図	42号土壙出土土器実測図 (1/4)	70
第 52 図	44号土壙出土土器実測図 (1/4)	70
第 53 図	48~51・53号土壙実測図 (1/40)	71
第 54 図	49号土壙出土土器 (1/4)・石器 (1/3) 実測図	72
第 55 図	50号土壙出土土器・土製品実測図 (1/4 6は1/3)	73
第 56 図	51号土壙出土土器 (1/4)・石器 (1/3) 実測図	74
第 57 図	52号土壙実測図 (1/40)	75
第 58 図	52号土壙出土土器実測図.1 (1/4)	76
第 59 図	52号土壙出土土器実測図.2 (1/4)	77
第 60 図	53号土壙出土土器 (1/4)・石器 (1/3) 実測図	78
第 61 図	55号土壙出土土器 (1/4)・石器 (1/2) 実測図	78
第 62 図	54~56号土壙実測図 (1/40)	79
第 63 図	54号土壙出土土器実測図 (1/4)	80
第 64 図	56号土壙出土土器実測図.1 (1/4)	81
第 65 図	56号土壙出土土器実測図.2 (1/4)	82
第 66 図	58~60号土壙実測図 (1/40)	83
第 67 図	58~60号土壙出土土器実測図 (1/4)	84
第 68 図	1号甕棺実測図 (1/10)	85
第 69 図	1・2号甕棺墓実測図 (1/20)	86
第 70 図	3・4号甕棺墓実測図 (1/20)	87
第 71 図	3号甕棺実測図 (1/6)	88
第 72 図	4号甕棺実測図 (1/6)	89
第 73 図	5号甕棺実測図 (1/6)	90
第 74 図	5号甕棺墓実測図 (1/20)	91
第 75 図	3号溝完掘状態 (北西から)	91
第 76 図	3号溝土層断面実測図 (1/40)	92
第 77 図	3号溝下層出土土器実測図 (1/4)	93
第 78 図	3号溝下層出土土製品実測図 (1/3)	93

第79図	4号溝陸橋(南から)	94
第80図	4号溝土層断面実測図(1/40)	94
第81図	4号溝陸橋部実測図(1/60)	95
第82図	4号溝出土土器実測図(1/4)	96
第83図	4号溝出土土製品・石器実測図(1/3)	97
第84図	6号溝土層断面実測図(1/40)	97
第85図	6号溝出土土器・石器実測図(1~8は1/4 9~12は1/3 13は1/2)	98
第86図	7号溝土層断面実測図(1/20)	99
第87図	7号溝出土土製品(1/3)	99
第88図	8号溝および52号土壌土層断面実測図(1/40)	99
第89図	8号溝出土土器実測図.1(1/4)	100
第90図	8号溝出土土器実測図.2(1/4)	101
第91図	8号溝出土石器実測図(24は1/3 25・26は1/20)	102
第92図	ピット出土土器実測図(1/4)	103
第93図	包含層出土および表採の石器実測図(1~16は1/2 17~21は1/3)	104
第94図	古墳時代以降の遺構配置図(1/1,000)	105
第95図	3号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)	106
第96図	3・4号竪穴住居跡実測図(1/60)	106
第97図	3・4号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	107
第98図	5・7・9号竪穴住居跡実測図(1/60)	108
第99図	10・13号竪穴住居跡実測図(1/60)	109
第100図	10号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)	110
第101図	10号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	110
第102図	11・12号竪穴住居跡実測図(1/60)	111
第103図	11号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)	112
第104図	11・12号竪穴住居跡出土土器実測図(11号は1~6 12号は7・8 1/3)	112
第105図	14号竪穴住居跡実測図(1/60)	113
第106図	14号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)	114
第107図	14号竪穴住居跡出土土器・石器実測図(1/3)	114
第108図	15号竪穴住居跡実測図(1/60)	115
第109図	15号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)	116
第110図	15・16・19号竪穴住居跡出土土器実測図 (15号は1~4 16号は5 19号は6 1/3)	116

第111図	16～20号竪穴住居跡実測図 (1/60)	118
第112図	22号竪穴住居跡実測図 (1/60)	119
第113図	23・24号竪穴住居跡実測図 (1/60)	120
第114図	23・25・26号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	121
第115図	25・26号竪穴住居跡実測図 (1/60)	122
第116図	27・28号竪穴住居跡実測図 (1/60)	123
第117図	27～29号竪穴住居跡出土土器実測図 (27号は1 28号は2 29号は3・4 1/3)	124
第118図	31号竪穴住居跡出土土製品実測図 (1/3)	125
第119図	29・31号竪穴住居跡実測図 (1/60)	125
第120図	34・36号竪穴住居跡実測図 (1/60)	126
第121図	31・36号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	127
第122図	37・38号竪穴住居跡実測図 (1/60) および37号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	127
第123図	37号竪穴住居跡出土土器・土製品実測図 (1/3)	128
第124図	1・3・4号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	129
第125図	2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	130
第126図	2・6号掘立柱建物跡出土土器実測図 (2号は1 6号は2 1/3)	130
第127図	5～7号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	131
第128図	1号土壙実測図 (1/40)	132
第129図	3・4・12・37号土壙実測図 (1/40)	133
第130図	12号土壙出土土器.1・鉄器実測図 (1/3)	134
第131図	12号土壙出土土器実測図.2 (1/3)	135
第132図	26号土壙実測図 (1/40)	136
第133図	26号土壙出土土器実測図 (1/3)	136
第134図	37号土壙出土土器実測図 (1/3)	136
第135図	27・57号土壙実測図 (1/40)	137
第136図	27号土壙出土土器実測図 (1/3)	138
第137図	3号溝上層出土土器実測図 (1/3)	139
第138図	井戸発掘風景.....	140
第139図	井戸実測図 (1/30)	140
第140図	井戸出土土器実測図 (1/3)	141
第141図	ピット出土土器・土製品実測図 (1/3)	142
第142図	大碓遺跡東部別区調査範囲実測図 (1/300)	142
第143図	大碓遺跡東部別区出土土器実測図 (1/3)	143

第144図	調査風景	143
第145図	大碓遺跡 遺構別弥生土器編年図 (1/10)	149
付 図	大碓遺跡遺構配置図 (1/200)	袋入

1. はじめに

一般国道210号線は、福岡県久留米市から大分県大分市を繋ぐ北部九州の重要な横断道路である。福岡県内では北を一級河川の筑後川が西流し、南には屏風のような耳納山系が連なる、その中ほどを東西に走る。この道路は天領日田を中間に抱えることから江戸時代以降賑わったらしい。そして福岡県（筑後）側の宿場として千足あるいは吉井が発展してきた。今でも吉井町内には白壁を残す旧家が多く、村興しの一端を担っている。

上記したように古い町並みを通ることからこの道路は必ずしも良好な状態ではなく、昭和48(1973)年にバイパス建設が認可され、昭和54(1979)年からそれに伴う調査が実施されている。

過去に数度にわたる路線内の文化財分布調査の依頼を受けていたが、平成元(1989)年9月、改めて吉井町大字生葉～鷹取に至る工事計画が提示され、踏査を実施した。しかし、この地域は大規模な洪水が頻繁に発生する地域であって、現況での文化財の把握は困難であり、路線予定地内全域の試掘調査を行うよう要請し、同年12月に試掘調査を実施した。その段階では用地が未買収であったが、路線予定地周辺の圃場整備事業との関わりがあって発掘調査を先行したいとの意向を受け、九州地方建設局福岡工事事務所・福岡県甘木農林事務所・地元改良区との協議を経て試掘・調査を実施した。

発掘調査、そして報告書作成に至る関係者は以下の通り。

建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所

	平成元年度(2.3.31)	二年度(2.4.1~6.10)	同(6.11~3.3.31)	五年度
所 長	中垣 光弘	中垣 光弘	中垣 光弘	長谷部正和
副 所 長	岩田 秀人	岩田 秀人	横溝 敏治	中空 進
建 設 監 督 官	梅田 正信	梅田 正信	梅田 正信	野鶴 博任
同	石原 俊郎	山田 茂利	山田 茂利	平川 澄雄
工 務 課 長	肥後橋讓治	肥後橋讓治	肥後橋讓治	久原 義宣
第 一 係 長	笹山 勝之	笹山 勝之		田中 秀明
第 三 係 長	緒方 郁夫	小島 一郎	小島 一郎	逆瀬川方久
調 査 課 長	岩屋信一郎	並河 良治		
専 門 職		石田 満之		
調 査 係 長	後藤 昌隆			
建 設 技 官	竹下 卓宏	竹下 卓宏		

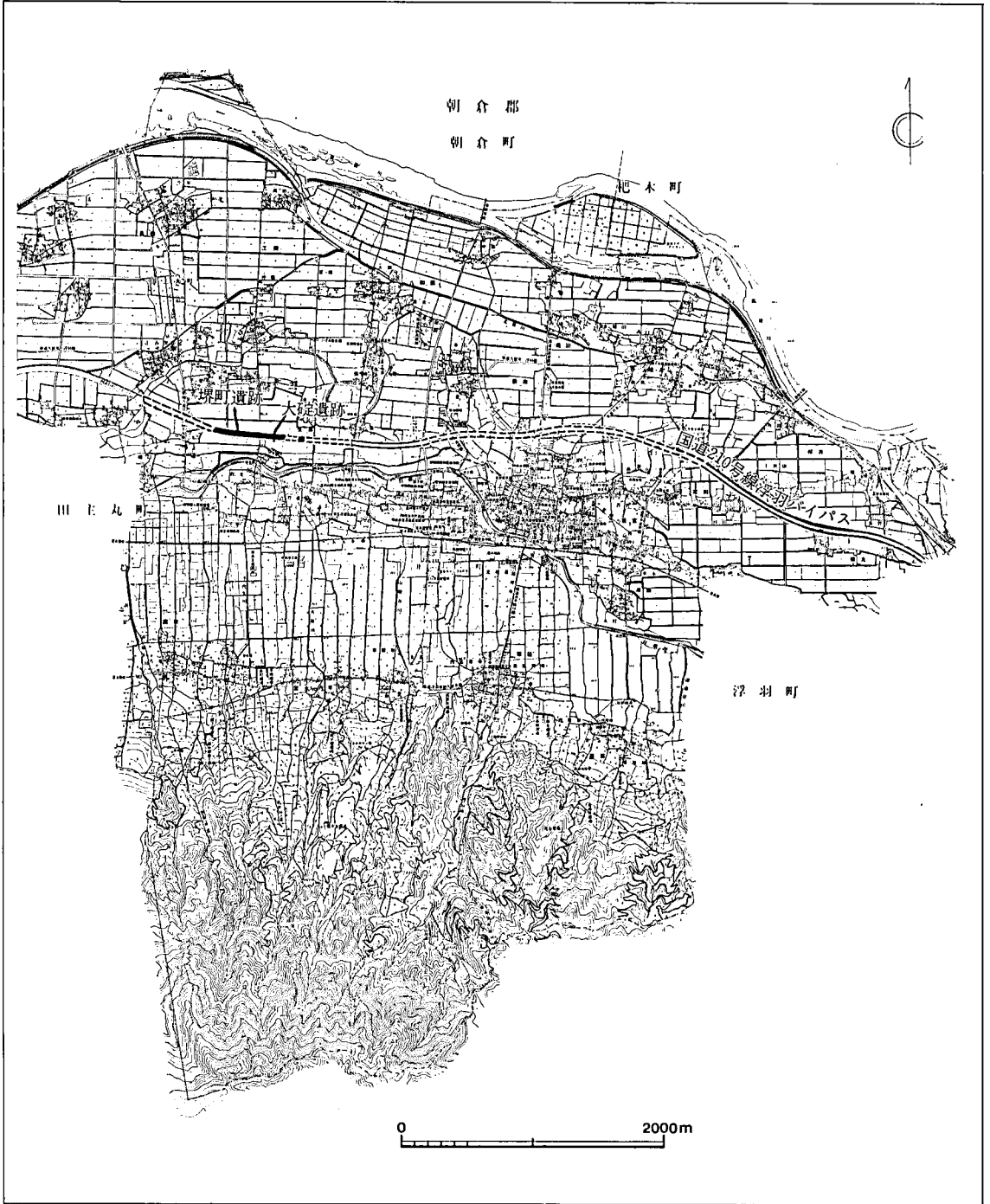
計 画 係 長	松尾 義信		
調 査 第 二 課 長		中川 蔵太	西原 広寿
調 査 係 長		松尾 義信	島 義博
建 設 技 官		清時 義雄	神崎 博章

福岡県教育委員会

	平成元年度	二年度	五年度
総 括			
教 育 長	御手洗 康	御手洗 康	光安 常喜
教 育 次 長	淵上 雄幸	濱地 甫伯 亀谷 陽三	樋口 修資
指 導 第 二 部 長	月森清三郎	月森清三郎	丸林 茂夫
文 化 課 長	六本木聖久	六本木聖久	森山 良一
参 事	森本 清造	森本 清造	松尾 正俊
同 課 長 補 佐	平 聖峰	安野 義勝	清水 圭輔
同課長技術補佐	宮小路賀宏	石松 好雄	
文化財保護室長			柳田 康雄
文化課参事補佐	柳田 康雄	柳田 康雄	井上 裕弘
同	井上 裕弘	井上 裕弘 浜田 信也 副島 邦弘	橋口 達也 高橋 章
庶 務			
文化課管理係長	池原 脩二	池原 脩二	毛屋 信
同 事務主査	和田 健作		富田 浩一
同 主任主事		沢田 俊夫	
調 査			
同 主任技師	飛野 博文	飛野 博文	飛野 博文
同 主任技師			水ノ江和同
同 技 師	水ノ江和同	水ノ江和同	

発掘調査にあたっては上記した諸機関をはじめ、吉井町・同教育委員会、浮羽町教育委員会、吉井町・浮羽町在住の方々、文化課の諸氏等々のご協力を得て無事に完了することができた。ここに記して謝意を表する。

吉井町全図



第1図 堺町・大碓遺跡位置図 (1/50,000)

なお試掘調査の結果を簡略に記しておく。試掘調査は県道下秋月田主丸線を中心にして西は町境となる美津留川までの300mの間、東は約1km隔てて南北に走る町道までの間で実施した。

その結果、対象地域東端では付近で吉井町教育委員会が圃場整備に先立つ調査において三重の周溝を有する前期古墳を発掘しており、関連遺跡の存在が期待されたが、安定した黄褐色の地盤であるにも拘わらず、大きく削平されているのか文化財の存在を確認できなかった（後、調査時において土器包含層を検出し追加調査を行った）。

中央付近の微高地では住居跡を発見（大碓遺跡）、そしてその西では顕著な遺構を検出しなかったが中世の遺物および溝状遺構（堺町遺跡）を、また、県道以西では住居跡や多量の弥生土器を検出した（鷹取五反田遺跡）ことからこの3地点を調査対象に決定した。

なお、これ以前の分布調査との位置関係は次の通りである。

当初の8地点（清宗遺跡）は、今回試掘対象の東端部分で、安定した地盤であるが遺構を確認できなかった地点で、対象地から除外した。この状況は町道を狭んで東に隣接する地区の圃場整備事業に伴う発掘調査でも同様であった。当初の9地点（上菅遺跡）は鷹取五反田遺跡として発掘調査を実施した地点であるが、両者の間、約800mの長さにわたる地点がここに報告する2遺跡で、町道付近を境として東を大碓遺跡、西を堺町遺跡と呼称している。より厳密には弥生時代・古墳時代の遺構が立地する微高地を大碓遺跡、主として溝状遺構からなる低地を堺町遺跡としている。

それぞれ調査前には9c、9d～f地点と仮称していたものである。



第2図 旧生葉・竹野郡境石柱（南西から）

2. 位置と環境

本遺跡の所在する吉井町は東を浮羽町、西は田主丸町に接し、現在は3町で浮羽郡を形成している。はじめに記したように、浮羽郡の南には標高700～800mの耳納山脈が屏風のように聳え、その北麓には小河川が形成した扇状地が発達している。北の郡境は九州の大河である筑後川をもって朝倉郡に接する。両者の間には巨勢川・美津留川等の小河川が西走し、丘陵と呼べるような地形はほとんどなく、地形はおおむね低平に見える。ここに報告する遺跡もちょうど平野部の中央付近に位置する。ただ、現状の地形は頻繁に襲った筑後川の氾濫、そして絶え間ない開墾の結果であり、子細に見れば、かなりの微高地が観察できる。そしてその多くには遺跡が包蔵されている。

縄文時代以前の遺跡の調査例はまだ乏しいが、耳納山脈北麓の扇状地上で多くの遺物が採集されており、生活領域の一端が窺える。

弥生時代になると低地の遺跡も多く知られる。今回報告する大碓遺跡^{at1}は、現在までに調査された当該地域最古の弥生集落に属するであろう。田主丸町水分遺跡^{at1}は標高20m弱の低地に位置する遺跡で、小規模な調査であったが弥生前期～後期にいたる土坑・住居跡を検出している。

近年の大規模な圃場整備事業によって弥生遺跡の調査例も増しているが、多くが未報告であり、詳細を知り得ない。特筆すべきは低地に位置する浮羽町日永遺跡^{at2}から出土した広形銅矛・銅戈である。ここに報告する遺跡と同様に浮羽バイパス建設に先立つ発掘調査によって検出された埋納遺構出土であり、不時に発見されることが多い中で注目に値する資料である。周辺には調査区約19,000㎡の範囲に後期～古墳時代前期・奈良時代の竪穴式住居跡76軒、掘立柱建物跡22棟などが併せて発見された。低地出土の青銅器としては他に町内清宗出土の細形銅戈等が知られるが、量的には山麓地域から出土する例が多い。とはいっても青銅器の総量は他地域に比して少ないといえる。

大規模な墓地は浮羽町岩野遺跡^{at3}で発見された。成人用を含む甕棺墓81基、両小口にのみ板石を立てる土壙墓や箱式石棺墓53基などを調査したが、副葬品はきわめて乏しい。

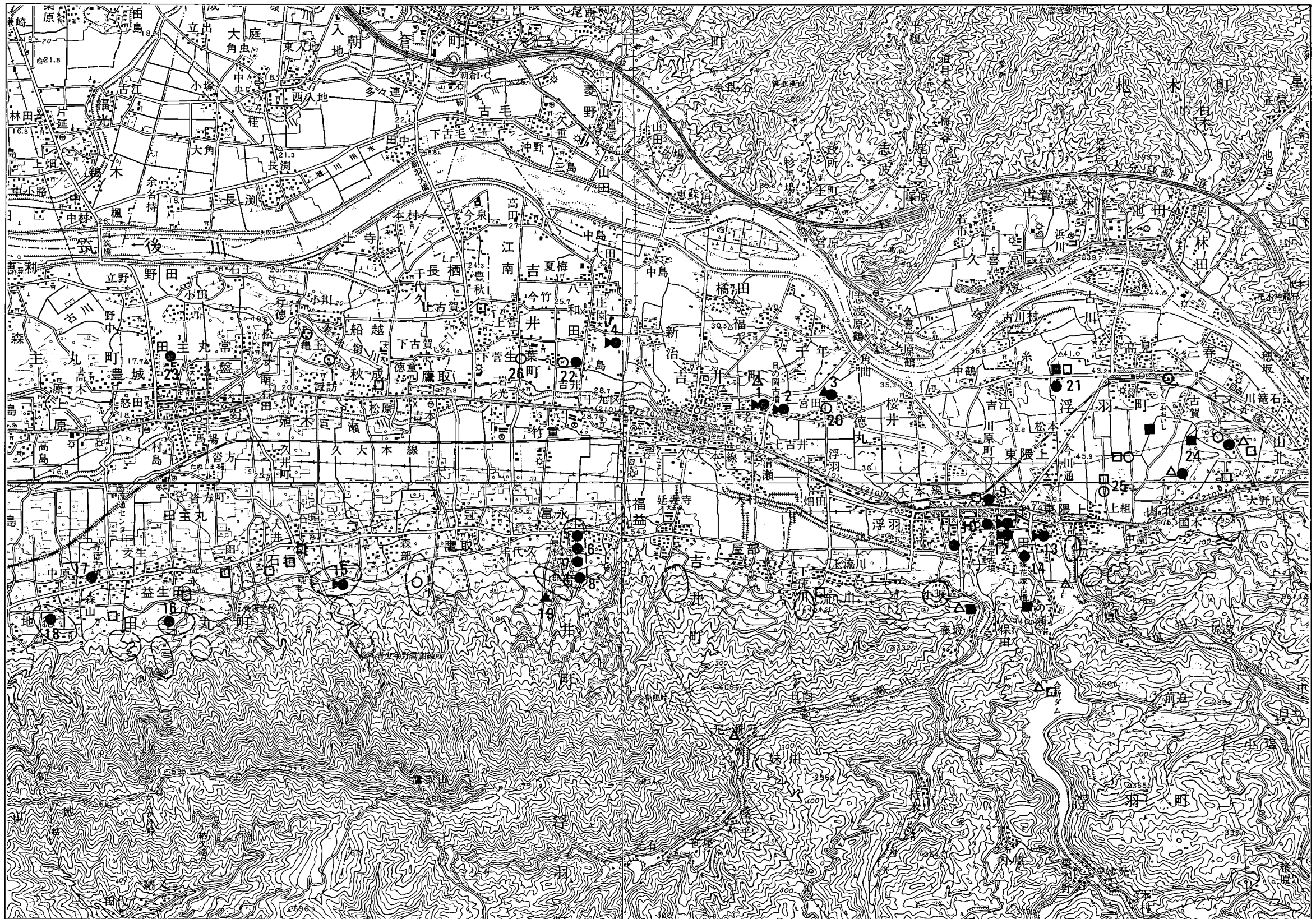
古墳時代の集落は至る所で発見されている。大規模な例としては弥生末から古墳中期に至る塚堂遺跡^{at4}があげられる。しかし、当地の古墳時代を彩る遺跡は吉井町日の岡・珍敷塚・浮羽町重定古墳^{at5}などに代表される装飾を有する古墳群で、10数基が集中する。加えて吉井町月の岡古墳^{at5}・塚堂古墳に見る畿内色の濃い豊富な副葬品は5世紀のこの地方を治めた支配者の性格をよく反映しているといえる。内容が不明な古墳にも浮羽町法正寺古墳（前方後円墳、全長100m）、同屋次郎丸古墳（前方後円墳、墳長約40m）、田主丸町大塚古墳（前方後円墳？、後円部直径65m、推定全長約130m）などの数基の前方後円墳が所在する。

さらに、近年の圃場整備に伴う発掘調査で、上記の前方後円墳に先立つ初期の古墳が、いずれも山麓から離れた微高地上で発見されている。一つは吉井町大字生葉で発見された生葉1号^{註6}墳である。22×18mの隅丸方形に近く巡らされた幅2.2mの溝を含む三重の周溝を有する古墳で、外側の溝は幅3.2m、径約60m前後で円形に近い平面プランを有し、陸橋部が伴う。埋葬部はすでに失われているようだが、周溝中から二重口縁壺などの比較的古式の布留式土器を出土している。また、浮羽町田島南遺跡^{註7}でも水田下から、主体部を削平された周溝を伴う円墳を調査した。ここでは墳裾に葺石が残存しており、周溝から波状文で装飾された古式土師器が出土している。法正寺古墳等の大型の前方後円墳（古墳）が出現する以前の、より小地域の首長層の墓地であろう。

律令時代、浮羽郡は筑後国に属し、その国府は現在の久留米市東部、耳納山地の西端裾に位置していた。その南の同山地東端には神籠石の名の由来となった高良山神籠石、筑後国一宮高良大社が存在する。

本遺跡の所在する大字生葉は旧生葉郡に属し、その西端に位置して竹野郡に接する。後述する堺町遺跡はその遺称である。延喜5年の筑前国観世音寺資財帳に記された「生葉庄」がこの付近に比定されているが、その中心地はまだ確認できていない。

- 註1 田主丸町教育委員会「田主丸古墳群」(『田主丸町文化財調査報告書』第2集、1985)
註2 福岡県教育委員会「日永遺跡」(『浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第6・7集、1993・94)
註3 浮羽町教育委員会「岩野遺跡」(『浮羽町文化財調査報告書』第5集、1990)
註4 福岡県教育委員会「塚堂遺跡」(『浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第1～5集、1983～85・88)
註5 吉井町教育委員会「若宮古墳群Ⅰ」(『吉井町文化財調査報告書』第4集、1989)
「若宮古墳群Ⅱ」(『吉井町文化財調査報告書』第6集、1990)
註6 吉井町教育委員会「吉井町遺跡群－生葉地区遺跡Ⅰ」(『吉井町文化財調査報告書』第5集、1990)
註7 浮羽町教育委員会寺島克史氏よりご教示を受けた。
その他、特記しない遺跡については、註4、および『福岡県の地名』(角川書店、1987)を参照した。



凡例

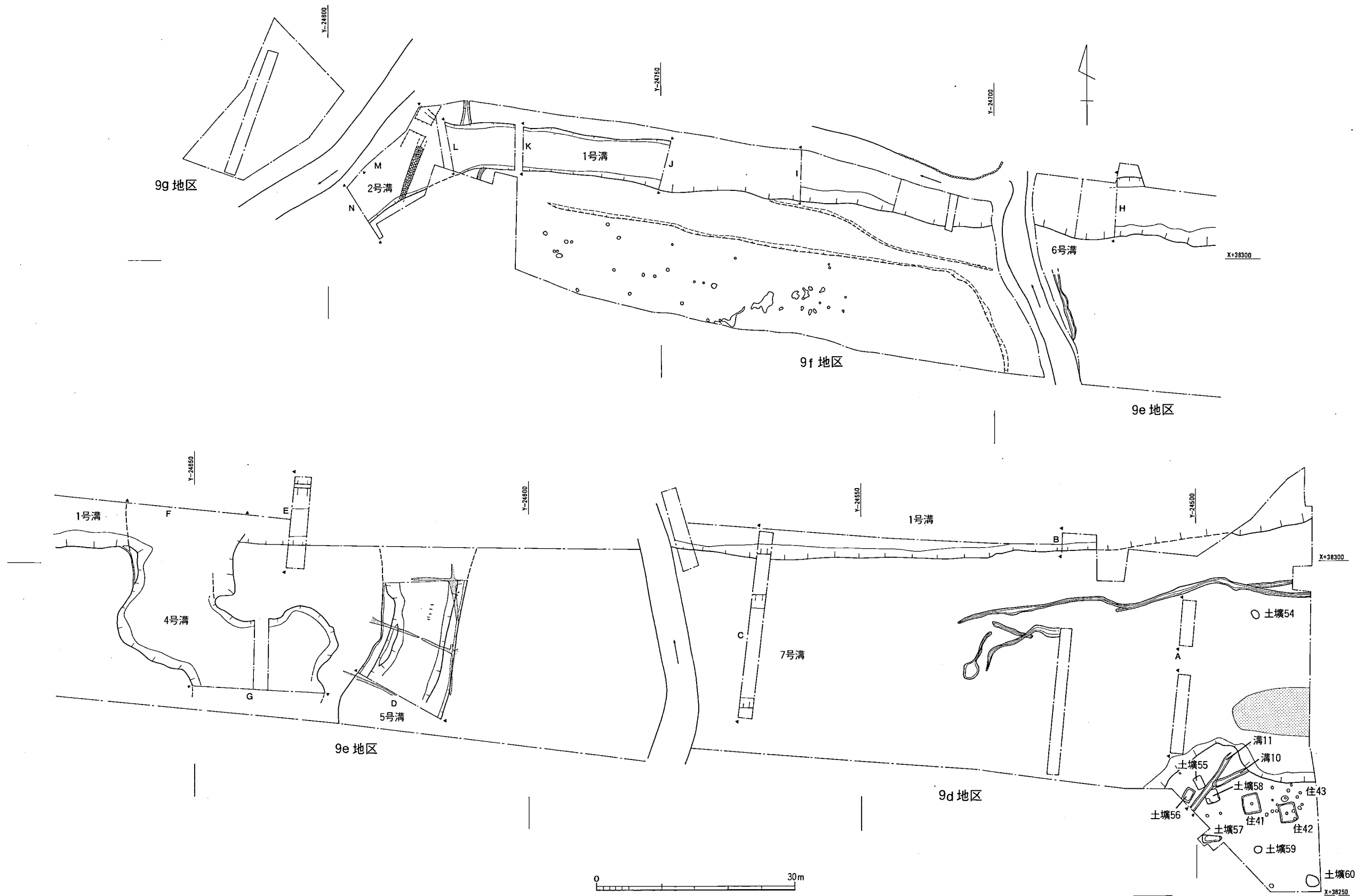
- 縄文時代 △ : 集落地
- 弥生時代 □ : 集落地
- 古墳時代以降 ■ : 墓地
- : 集落地
- : 墓地

- 1 月岡古墳
- 2 日岡古墳
- 3 塚堂古墳
- 4 女塚古墳
- 5 珍敷塚古墳
- 6 原古墳
- 7 鳥船塚古墳
- 8 古畑古墳
- 9 西隈上古墳
- 10 楠名古墳
- 11 重定古墳
- 12 法正寺古墳
- 13 矢次郎丸古墳
- 14 塚花塚古墳
- 15 大塚古墳
- 16 西館古墳
- 17 寺徳古墳
- 18 狐塚古墳
- 19 法華原遺跡
- 20 塚堂遺跡
- 21 田島南遺跡
- 22 生業地区遺跡
- 23 水分遺跡
- 25 日永遺跡
- 26 塚町・大碓遺跡

注：ゴチックで示した古墳は
 装飾古墳
 破線は古墳群を示す。

第3図 周辺遺跡分布図(1/50,000)

さかいまち
堺町遺跡



第 1 图 遺構配置図 (1/600)

1. はじめに

この調査区は福岡県浮羽郡吉井大字生葉の西端に位置する。所在する字名を用いて堺町遺跡としたが、正確には字久シ、小塚、五反田にまたがる。堺町という地名の由来はこの地が旧竹野郡と生葉郡の郡境に位置することによるものであろう。調査区西端の南150mほどの地点には元禄8年に建てられた石製の郡境標柱が現存する（4頁、第2図）。

試掘調査時に検出した遺構は溝状遺構のみであったが、発掘調査の結果もほぼ同様であった。なお、発掘調査は平成2年1月16日に開始し、5月にはほぼ隣接する大碓遺跡へ移動を完了した。調査面積は約10,000m²。

2. 遺構と遺物

検出した主要な遺構は以下の通りである。

溝状遺構（自然流路を含む）……………5条（+ α 、1・2号溝は同一、3号溝は欠番）
道路跡（橋を伴う）……………1条

その他に若干の土坑・柱穴を発掘したが、確実な遺構であるとの確信を持たず、ここでは省略する。以下で順次説明を加えるが、便宜上、調査区を水路等で区切り、東からそれぞれ9d～9g 地区とする。

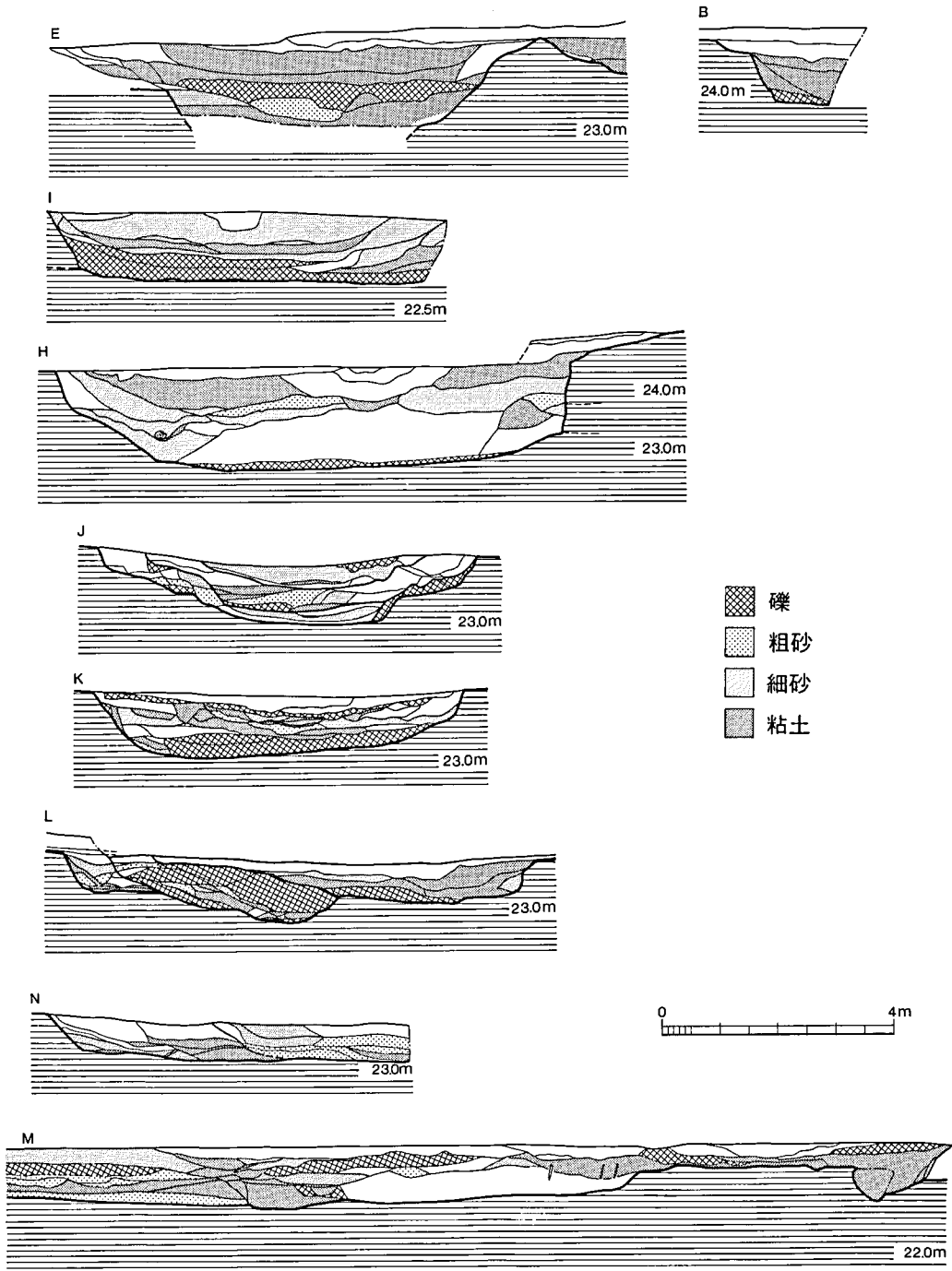
I) 溝状遺構

1号溝（図版1～3・5～7、第2図）

調査区内北端近くをほぼ東西に走るが、9f 地区西端で南へ曲がる（2号溝）。というよりは、第4図のように9g 地区にトレンチを開けたが溝の立ち上がりを確認できず、全体が氾濫原の中であるとの感触を得たこと、また、西200mに位置する鷹取五反田遺跡の状況では東に向かって地山が下降し、地表下1.8m（標高21.6m）で遺構を検出したことなどを勘案すると、1号溝が曲がる付近の西側は元来低地となっていて、流路が拡散しているのであろう。

いくつかの土層を観察した結果、この溝は大きく3層に分かれるが、平面的に捉えることはできなかった。溝の幅は6～9m、深さは1m内外である。

溝の埋積は粘土・砂礫・細砂・粗砂が複雑に堆積しており、よどんだ状態あるいは静かな流れ、

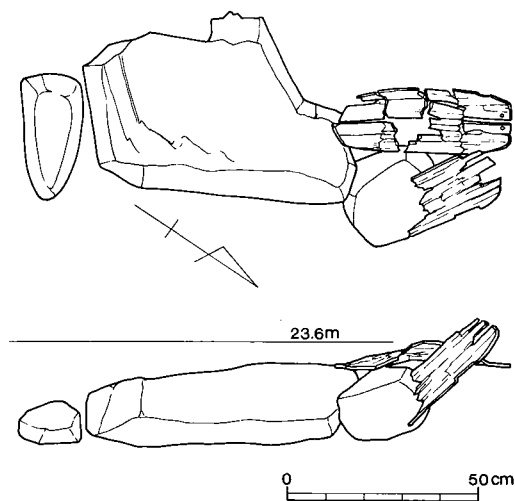


第 2 図 溝土層図1(1/120)

そして時には洪水が幾度か襲った様子が窺える。また、上述したように数層の不整合面が認められることから掘り直しのような管理がなされていたことも間違いないであろう。そのことと併せて、溝の当初の断面形が整った形状を示している点はこれが自然に形成された河道ではなく、人為的に開削された水路であることを思わせる。

この溝の後の姿が調査区のすぐ北を西流する用水路と思われる。

なお、9f 地区西端で道路・橋の跡を検出しており、それについては後述する。



第 3 図 草履出土状態(1/10)

出土遺物 (第4・5図)

土器は大きく上・下層に分けて取り上げたが、境は任意である。また、層位を明確にし得ない遺物もあるが、それは上層として扱う。1～10・21～23が上層、他が下層出土である。

草履 (図版4、第6図)

橋脚と思われる杭列の南西隅近くで検出したもので、左右1対が残っていた。残存状態の良い西側のものは、長さ24cm、幅8.6cmであった。一方の小口面に2孔1対の孔があり、側縁に切り込みが観察できる。

土師器 (1～5、11～13)

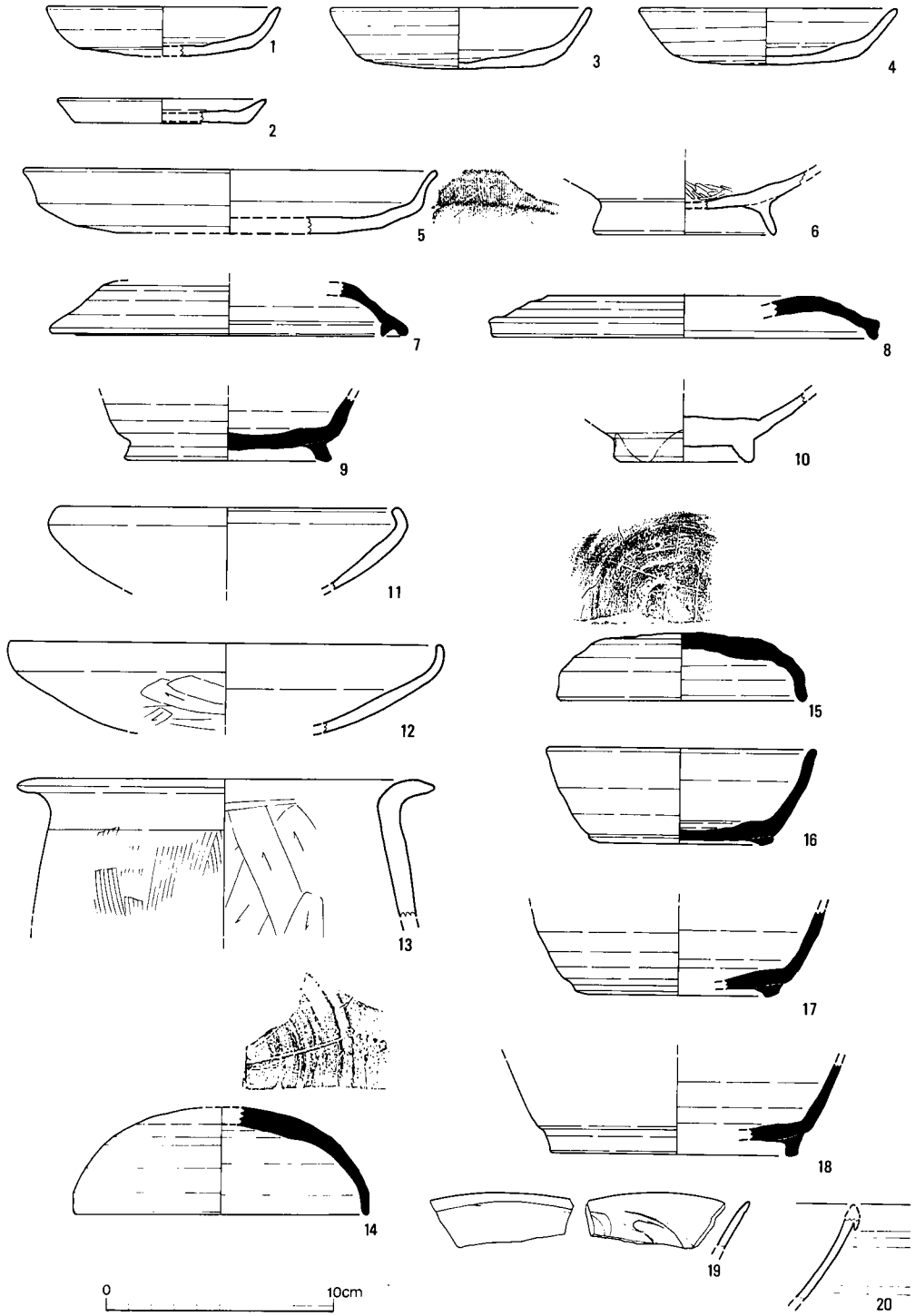
1は外底面に篋切り痕・板状圧痕が、2は回転糸切り痕を、そして3・4は板状圧痕を観察できる。5は淡赤褐色を呈する胎土・仕上げにも丁寧な皿出、外底面を回転篋削りで仕上げる。又、口縁部直下に「卅」のような篋記号(?)が刻まれる。

黒色土器 (6)

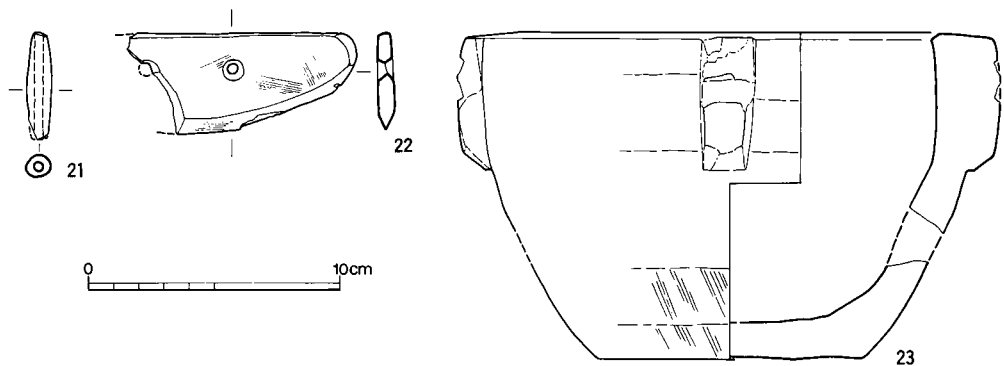
体部内面のみを黒色に仕上げるもの。内面には篋磨きを密に施す。

須恵器 (7～9・14～18)

9は高台内に篋切り痕を残す。14・15は天井部外面に篋記号を有する。16は一見すると無高台のように思えるものである。高台内は丁寧に撫でる。



第 4 图 1号沟出土遗物实测图1(1/3)



第 5 図 1号溝出土遺物実測図2(1/3)

磁器 (10・19・20)

10は同安窯系、19は龍泉窯系青磁碗。20は大振りの玉縁を有する白磁碗の小片。

土製品 (21)

21は長さ4cm余、最大径1cmほどの土錘。中位に最大径部分がくるが、稜をもたず、断面形状は不整。胎土は精良で、灰黄褐色ないし灰褐色を呈する。

石製品 (22・23)

22は粘板岩製と思われる石庖丁の断片。背は丸みを有し、刃部の研ぎ出しが大きい。青みを帯びる暗灰色を呈する。23は滑石製の石鍋で、おそらく同一個体であろうと思われ、図上復原した。口端部から縦位に取っ手を付すもので、取っ手の一端のみが残る。内面には使用痕らしき窪みが右下がり方向に観察でき、底部付近ではやはり同方向の整形時の条痕が見える。

以上、1号溝から出土した遺物は13世紀前後の時期を下限とするものである。

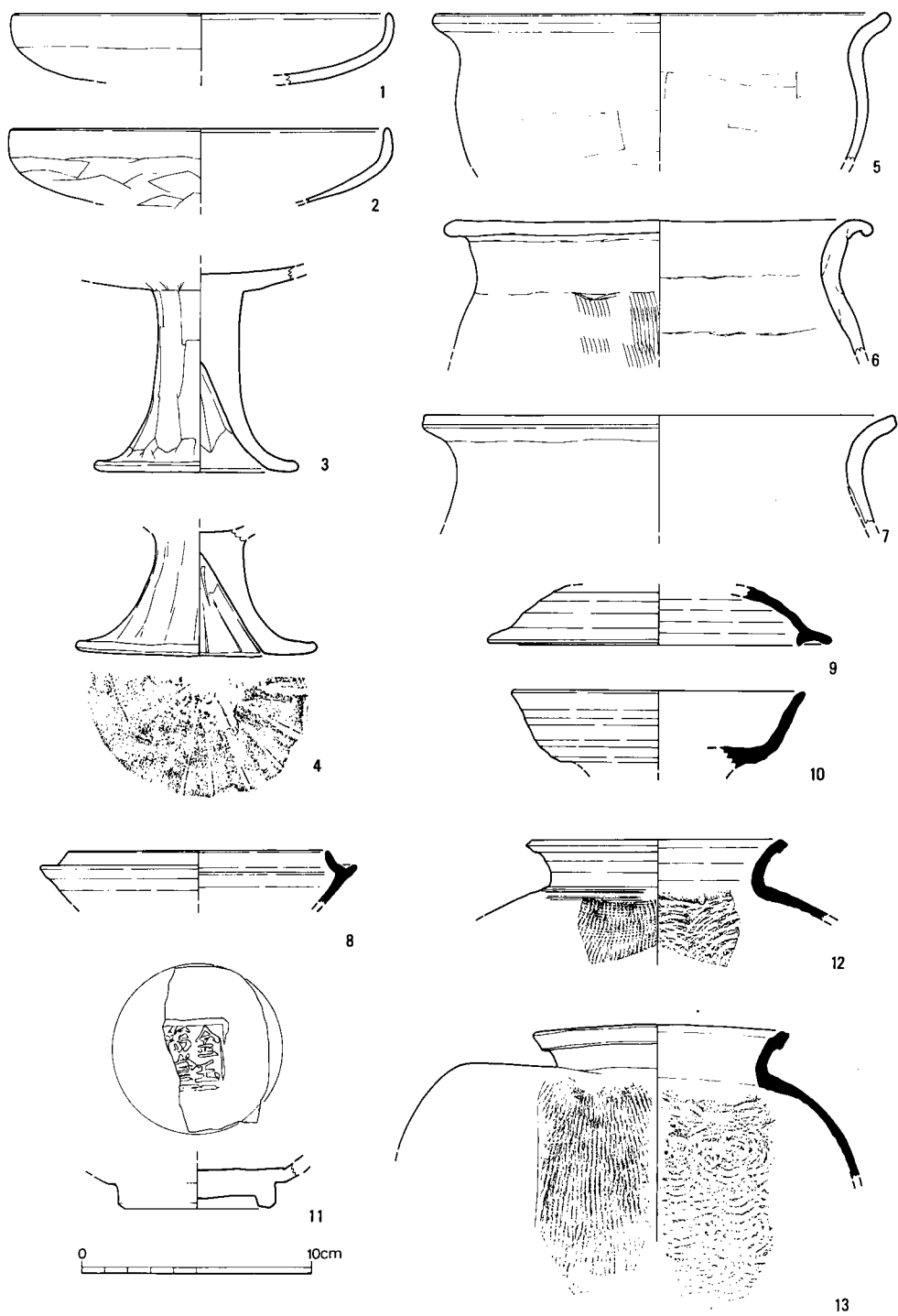
2号溝 (図版2・3、第2図)

1号溝のうち、9f地区西端のカーブする部分をこう呼称した。粗砂を埋土の主体とする上層、そして細砂・粘土を主体とする下層に分かれる、それぞれ1号溝の下・中層に対応するものであろうが、流路が拡散するせいか埋土の状態は必ずしも整合させえない。下層粘土層から弥生土器や有機物片が出土したが、図示に耐える遺物は粗砂層から出土している。

出土遺物 (第6図)

土師器 (1～8)

1・2はほぼ同巧で、碗とすべきであろうが、ここでは便宜上皿としておく。体部が曲線を描き、口縁部は直立する。口縁部付近は横撫で、以下の外面は不定方向の篋削りで仕上げる。3・4は



第 6 图 2号沟出土遗物实测图(1/3)

高杯の脚部で、柱状部に長短があるものの、外面は縦方向の、内面は横方向の篋削りで仕上げられる。5～8は甕。5は外面は最大頸部分以下を篋削りで仕上げ、内面ははっきりしないが磨きのようなものである。6は口端部を巻き込むようにして垂下させる。内外面に粘土紐の巻き上げ痕が見える。この2点は胎土精良である。7は胎土が非常に粗く、口端部に面を持つ。これは器表も磨滅している。

須恵器 (8～10・12・13)

8は図示した部分の1/4強が残る。9は返りを有する蓋の小片。10は1/4弱が残るが、高台部の剝離痕は明瞭。体部は丸味を有し、口縁部は外反する。12・13は口縁部外面に粘土帯を付して断面長方形に造作する。13は口縁部内面に段を有し、大きく焼け歪んでいる。

磁器 (11)

見込みに「金玉満堂」を刻印した龍泉窯系青磁碗片。周縁に圈線があり、外底面、高台内には目跡が残る。高台周辺にムラがあるが、総釉である。

以上の多くは8世紀前後の遺物を中心とし、下限は龍泉窯系青磁碗が示す13世紀頃である。

先述したように、1・2号溝は同一の遺構であり、出土遺物の内容も当然ながらほぼ同様である。したがってこれらの溝が13世紀頃に埋没したことが想定される。また、出土した古代に属する遺物のほとんどがさしたるローリングを受けた痕跡が認められず、本遺跡の東側の卑近な位置に該期の遺跡が存在するものと思われる。

4号溝 (図版8・9、第7図)

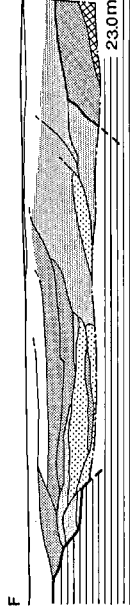
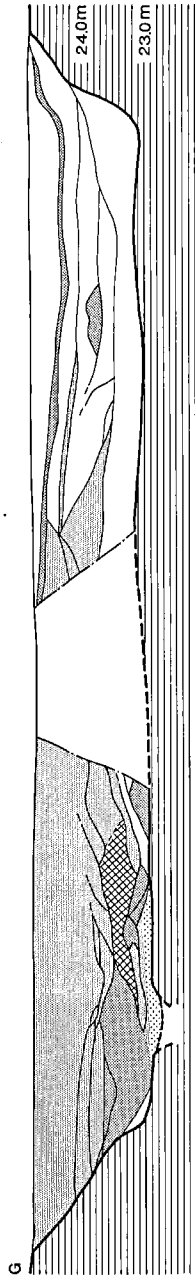
9e地区中程を南北に、大きく蛇行して走る溝で、幅は最大20mにおよぶ。深さは約1.8m。南壁で作成した土層図では東西にずれて新旧2条の流路を確認できる。より古い西側の流路は主として砂で埋没しており、かつ、堆積は比較的単純な層序をなす。新しい東側のそれは粘土が多く堆積していて、特に中層以下では複雑な層を成す。

北壁の土層観察では、1号溝の流路を切っており、かつ下層は主として砂層が、上層は主に粘土が堆積しており、南壁での新旧関係と対応するようである。

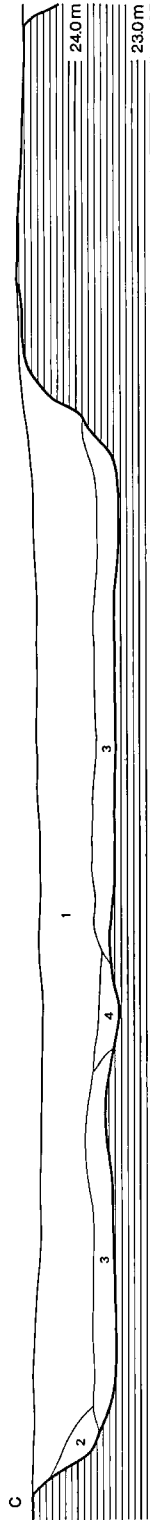
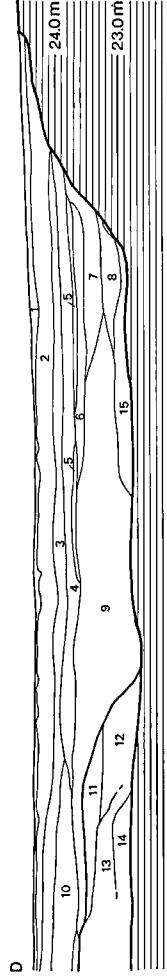
以上のことから、当初比較的直線的に流れていた流路に、洪水が押し寄せて大きく蛇行するに至ったものと思われる。

出土遺物 (第7図1)

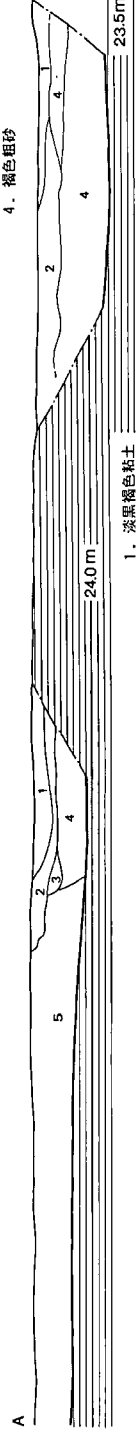
出土遺物はほとんどないが、1点を図示した。南端の下層近くから出土し、東西のいずれに属するかはわからない。1/4弱の小片である。口縁部付近は横撫で、以下の外面を不定方向の篋削りで丁寧に仕上げる。胎土は精良で、全体が淡赤褐色を呈する。



- 1. 黄褐色細砂
- 2. 灰黄褐色粘質土
- 3. 2に似るが少し暗い色
- 4. 暗灰青色粘土
- 5. 赤褐色粘質土(Fe多量沈着)
- 6. 灰黒色粘質土
- 7. 暗灰色粘質土・細砂の互層
- 8. 粘土ブロック
- 9. 暗灰色細砂
- 10. 灰黒色粘質土
- 11. 黄褐色粘質土
- 12. 黄褐色粘質土
- 13. 青灰色シルト
- 14. 黄褐色粗砂
- 15. 粗砂干様



- 1. 茶褐色粘質土
- 2. 灰色粘土・灰色細砂の互層
- 3. 黒褐色粘質土・灰褐色細砂の互層
- 4. 褐色粗砂



- 1. 淡黄褐色粘土
- 2. 黒褐色粘質土
- 3. 茶褐色土
- 4. 黒褐色粘土
- 5. 褐色土

第 7 図 溝土層図2(1/120)

5号溝（図版9、第7図）

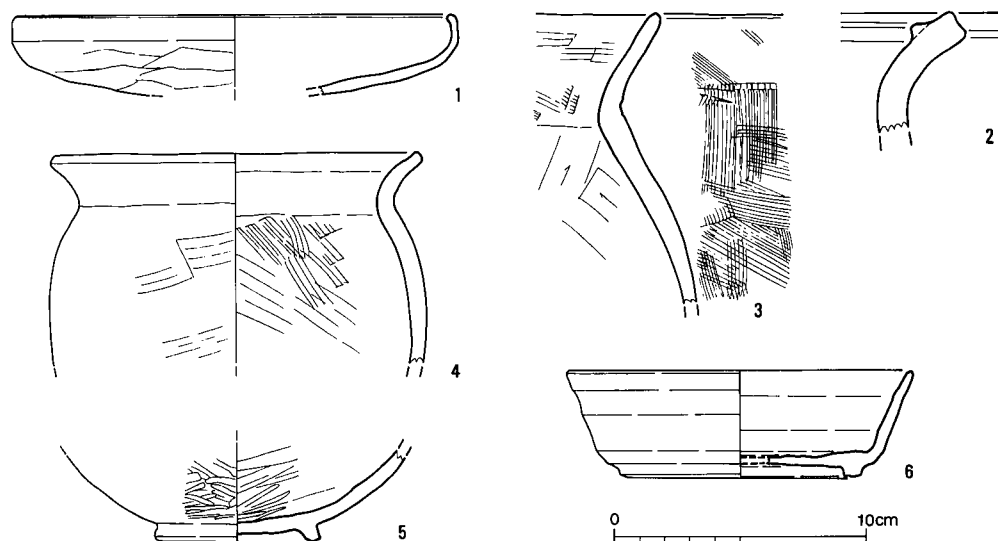
4号溝のすぐ東に位置する南北方向の溝で、4号溝と斜交するような方位をとる。しかし、調査区内では切り合う部分はない。規模は幅約12.6m、深さ1m強である。南端で作成した土層図から、一旦細砂層で埋没して後は流路を西端に変えたことが窺える。

調査の過程で気付いたことは最下層の粗砂・礫の混ざった層中に弥生土器がまとまって出土したことや、暗灰色粘土・細砂が互層となった部分に枝・葉などの有機物がかなり含まれていた点である。

北東よりの底近くで杭列を5本検出した。いずれも大きく傾き、かつ先端は床面に達していなかった。また、北東隅では溝の法面中で4本検出している。なお、周辺には木材が散乱していたが、製品と認められるものはない。

出土遺物（第8図2～6）

2～4は最下層の粗砂層中から、5は記録を怠るが、器表に鉄分が付着していることから中層付近から出土したものと思われる。2は口縁部内面に三角突帯を巡らせる弥生土器で、前期末



第 8 図 その他の出土遺物実測図(1/3)

から中期初頭に属する。3は口縁部が短く外反し、体部の丸みが強い。胎土は粗く、体部内面は弱い刷毛目、同外面は刷毛目を撫で消しているようである。4は最下層から出土した土師器甕の小片。体部外面を彫りの浅い刷毛目で、同内面を篋削りで調整するが、口縁部付近の横撫でとともにいずれも粗雑な仕上げである。5～6世紀頃のものであろう。6は瓦器椀で、内外面に太い暗文を密に施す。胎土精良、器面は漆黒色を呈する。

6号溝（第1図）

9e 地区西端にある幅1m前後の小溝で、深さは約0.2m。埋土の記録を怠っているが、さほど古いというものではなく、むしろ新しい遺構という印象を持っている。現水路のかつての姿である。

7号溝（第7図）

9c 地区では数条の小規模な溝を検出し、それぞれ7a・7b・8・9号溝と呼称していたが、後にはこれらのすべてが大溝中であって、一時的に形成されたものであると判断したことから、大溝を新たに7号溝として説明を加える。

9c 地区では北端および南東隅に黄褐色の安定した土質が現れていたが、その他は全体にはっきりしない土質であり、当初は全体が河道の中であろうかとの判断をしていた。はたして、B地区西端近くに開けたトレンチで幅19m強、深さ1.3mの溝状遺構が確認され、同東端近くのトレンチ（長さ約23m）では肩の立ち上がりを確認できない落ち込みを検出した。いずれのトレンチでも土層の堆積は単純で、粘質土が多く礫・粗砂層が少ないことから埋没は徐々に進んだものと思われる。なお、この旧河道と思われる遺構の続きは9d 地区では検出しておらず、南に曲がると推測される。

出土遺物（第8図7）

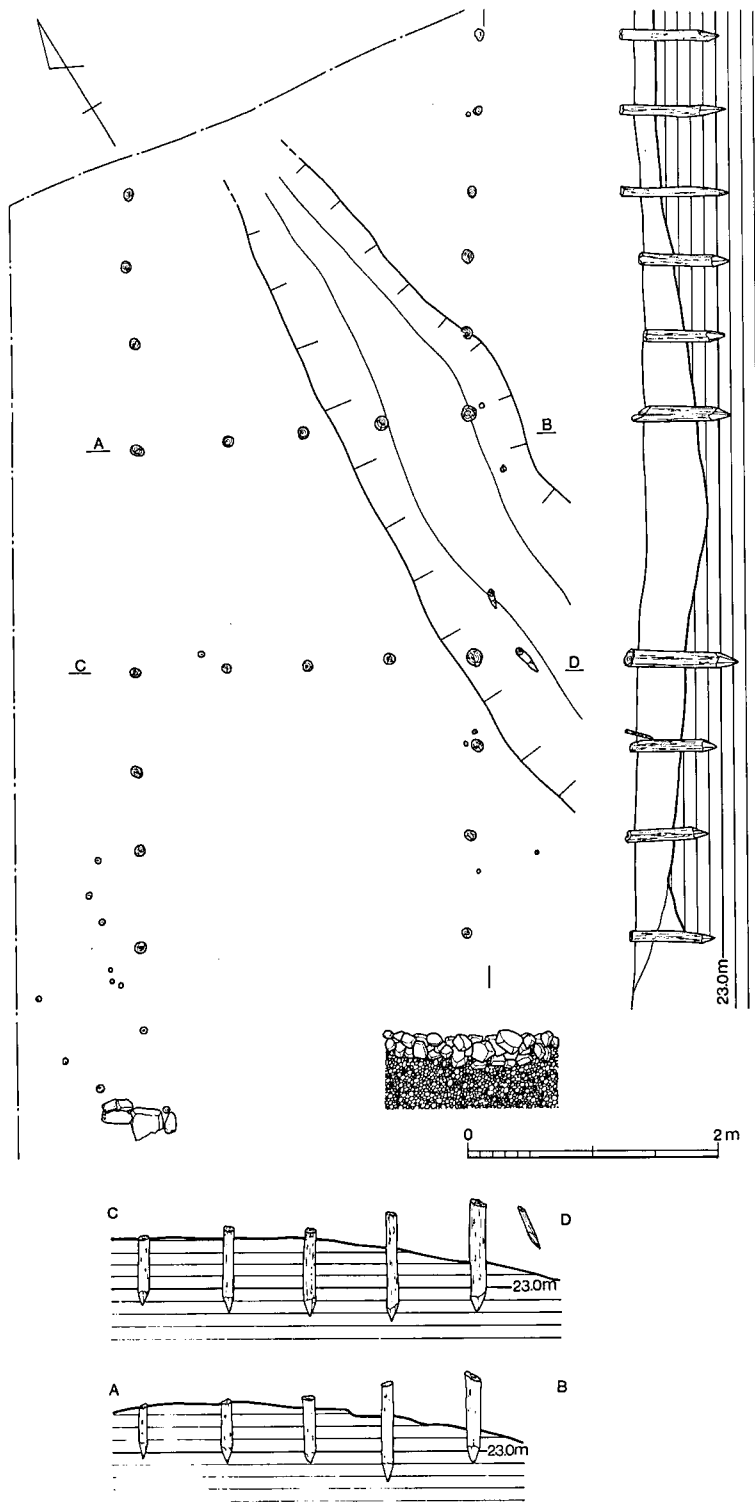
トレンチからは遺物を採集していないが、9c 地区東端近くに薄い遺物包含層がのっており、そこから出土した土器を図示した。

須恵器杯身で、全体の約1/3が残存する。体部は浅く、直線的に立ち上がる。8世紀後半のものであろう。したがって、その頃までにこの河道は埋没していたものといえる。

Ⅱ) その他の遺構

道路状遺構（図版2～4）

9f 地区西端近く、ちょうど1号溝を2号溝と呼び変える付近を南北に走る。当初はそうと気



第 9 図 橋脚状遺構実測図(1/60)

付かず、溝を掘り下げる際に軽率にも大部分を掘り飛ばしてしまった。

道路敷き部分は幅約1.3mを測り、拳大前後の小角礫を敷き詰めていた。少なくとも調査区内南半部では直線的に続いていた。橋脚との関連で言えば橋の東辺延長線上にあって、道路がさらに直線的であったならば橋脚を覆う形となることから、両者には時期差を想定できる。標高からみて道路面が新しいであろう。

第10図に掲載した付近の字図には、この付近を通過してほぼ直線的に南北に走る境界線があり、これが旧郡境を示すものと思われ、それに沿って道路があったのであろう。

橋脚状遺構（図版3・4、第9図）

0.5～0.8mの間隔で整然と並ぶ杭列を検出した。その部分が1号溝の中であり、かつ石敷道路がほぼ重なって通ることから橋を想定したものである。橋脚幅2.7m、長さは約8mまで確認できたが、北端は未確認である。検出部分の中央付近に東西に渡す杭列があり、そこを中心部付近とすれば検出した以上には続かないのかも知れない。

この付近の土層は複雑であるが、橋脚長軸に沿って土層を観察したところでは杭は青灰色細砂層に打ち込まれており、杭の中位以上は黒褐色粘土層が覆っていた。この粘土層が形成される頃（沼地状であったものと思われる）に架けられた橋の痕跡であろう。その時期は1・2号溝から出土した遺物から12～13世紀頃と推測される。

水田跡（図版10、第1図）

9e地区、5号溝の埋土上でその一部を確認した。幅30cm前後の畦畔および水口の一部が確認できた。畦畔部分は周辺より固く締まり、かつ明るい色調を呈していた。

これらを検出した面は標高24.8m前後で、地表下約0.8mである。大正4年に記録された地籍図に記す畦畔とは全く一致せず、それ以前のものであることは間違いない。

ほぼ東西（座標上）に走る、あるいはそれから45度ほど振れる東西方向の畦畔計3条、ほぼ南北方向に走る畦畔1条を確認できたが、南北方向の畦畔は必ずしも一直線とはならないようであり、あるいは東西方向畦畔に見られる方位のずれが時期差を示すものかも知れない。その場合には座標に乗る水田が1号溝が使用されていた当時の遺構である可能性が強い。ちなみに方位がずれる水田の畦畔レベルは標高24.8m前後、水田面は同24.7mであり、座標に乗る水田は同24.6m前後、24.7mとなっている。

方位がずれる水田の東西方向畦畔の間隔は8～9mであり、東西方向には約16mまで確認でき、面積が106㎡を上回ることは確実である。

Ⅲ) 小 結

以上が堺町遺跡の調査で得た内容である。遺構としては8世紀にすでに埋没していた7号溝、そして中世前期に埋没したと思われる1号溝などを中心とするものである。

『日本地名大辞典 福岡県』（角川書店、1988）には次のようにある。

（古代）生葉荘

平安期に見える荘園名。筑後国生葉郡のうち。延喜5（905）年10月1日の筑前国観世音寺資財帳の荘所章に、「筑後国壱所 生葉庄 有生葉郡」と見える初期荘園で、草（葺）屋の東一屋・北一屋、草葺板倉の3棟で構成されていた（東京美術学校所蔵／平遺194）。当時筑後国内の観世音寺領水田は、和銅2（709）年に寄進された三原郡8町・竹野郡4町、生葉郡4町の計16町あり、生葉荘はこれらの水田管理や年貢収納などの任務を果たす建物であったと思われる。これまでに復原された条里と、資財帳記載の寺田の位置から考えて、庄園・庄園西などの地名が残る現在の吉井町生葉・八和田に存在したと推定される。

（中世）生葉荘

鎌倉期～南北朝期に見える荘園名。生葉郡のうち。「吾妻鏡」寛元2（1244）年7月16日条に、筑後国御家人吉井四郎長広と同御家人矢部直澄が「生葉庄内得安名」の屋敷田畠などのことで相論し、幕府で評定したと見える。得安名の比定地は不明だが、両者は名前から考えて、吉井と屋部を各々根拠地としていたと思われる。中世の生葉荘は、院政期に成立した皇室御領であったため、承久の乱後その管理権をめぐる在地御家人が争っていたものと考えられる。文永6（1269）年8月21日の東市正某奉書によると、生葉荘と宅間荘（讃岐国）からの年貢運上の際は毎年石別2升分を「割分」して、撰津勝尾寺（現大阪府箕面市）に送り千手供・荒神供などにあてることとある（勝尾寺文書／鎌遺10477）。この頃の生葉荘は山門末寺の勝尾寺に信仰を寄せる皇族を領主としていた。年末詳2月5日の西市正資高書状にも、皇室領の山前荘（近江国）や河越荘（武蔵国）などとともに生葉荘の名があり（兼仲卿記建治元（1275）年11月巻裏文書／鎌遺12140）、正安4（1302）年の室町院御領目録によって、生葉荘が後堀河天皇第1皇女の室町院領になっていたことが確認できる（御領地志稿）。建長元（1249）年に式乾門院（利子内親王）が、一期の後は中書王（宗尊親王）に譲るとの条件で、姪の室町院に譲与したものである。しかし南北朝期になると……（以下略）

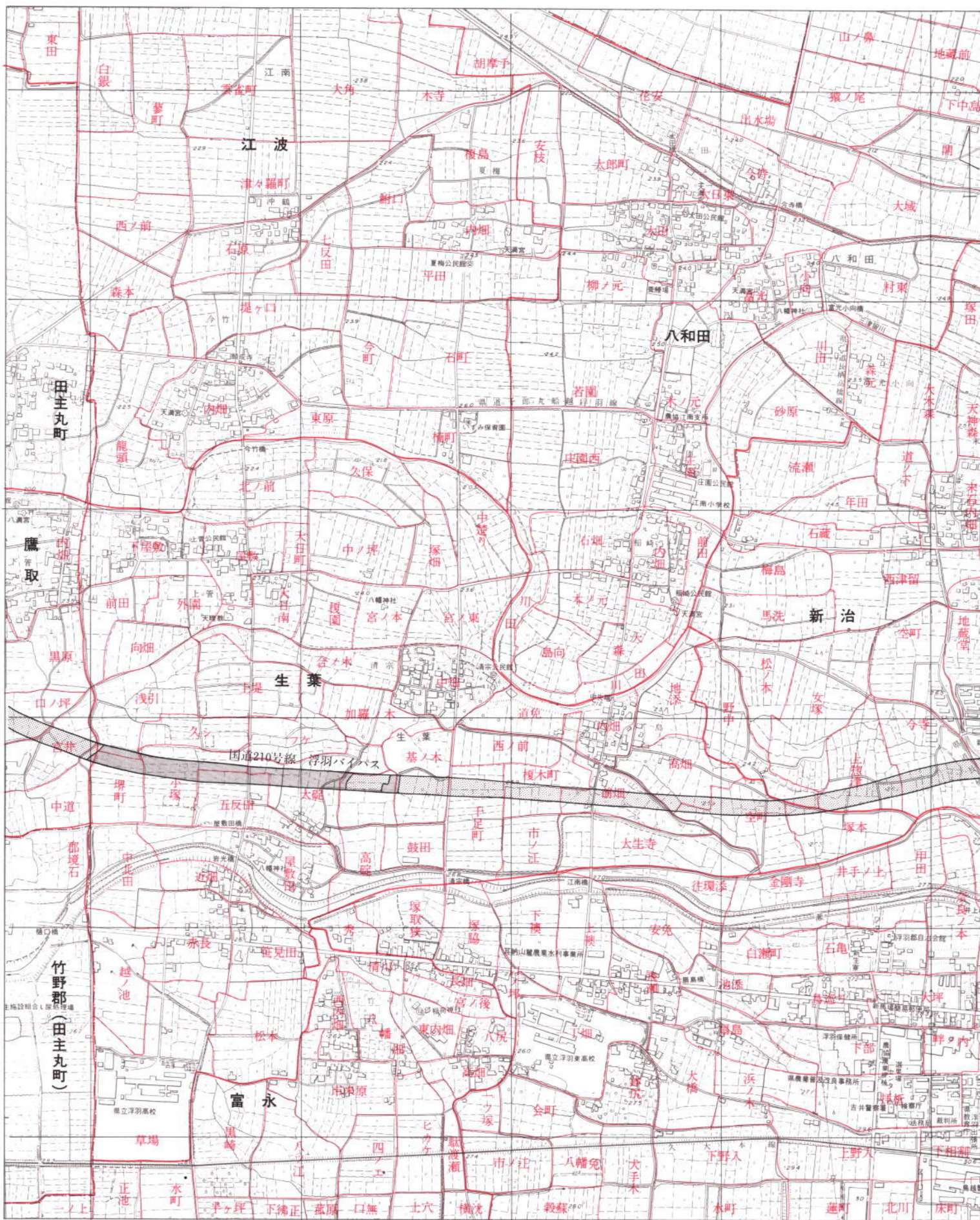
1号溝は幅6～9m、深さ1mの規模で、約300mの長さまで確認しており、これがさらに続くことは確かである。また、9f地点で南側の肩が大きく曲がるが、上述したようにこれ以西では氾濫原が広がっており、当初は直進していたあるいは遊水池のような低地に流入していたと

も考えられる。これが人為的な遺構であることは先に記した。また、堆積土の状態は一時的な滞水状態を認めても、大部分は流入したものであり、流路と考えるべきものであった。堰のような痕跡を検出できず、9f 地区西端、1号溝がカーブする付近で調査した小溝は構造物を伴わない（遺存しない？）単純なものであるなど、直行する小水路の取り付け部分の詳細も確認できなかった。しかし、このような長大かつ直線的な溝に想定できる性格は水路であり、かつ地割りに沿うことから条里制に組み込まれた主要な水路であった可能性が高いものと思われる。

さて、ほぼ東西に走るこの1号溝は現状で見る地割りに整合する。この調査区付近ではほぼ100mの間隔をもって道路あるいは水路が基盤目状に巡らされており、度重なる水害を経てきたものであるが、条里の地割りが生きていないとも断定はできない。

1号溝は調査区西半付近では座標上で南へ6度ほど振れてほぼ直線的に、東半では緩くカーブしつつ、北へ2度ほど振れて走る。上記に引用した「庄園」・「庄園西」は大字生葉の北東に隣接する大字八和田、現在江南小学校が位置する付近にあるが、西・南の字境は直線的で、大雑把ではあるが1/5,000の地形図からは字「若園」・「木の元」などを囲む方4町前後（430m）の区画を読みとることができ、その方位はほぼ国土座標軸に揃う。この地割りを基本に拡大して行くとかかなりの点で現在の地割りに合致する。今仮にこの復原条里が「生葉莊」当時の形制を残しているとするれば、また、2～6度の方位の振れが古代の土木技術上容認できる範囲であるならば先の1号溝は条里地割りに乗るといえる。そしてこの溝の延長は「道免」・「中畑」の字境へと通じるのではなからうか。現在では大きく蛇行する美津留川がそこで遮るが、想像を逞しくするならば、さらに「庄園」・「庄園西」境を通る現道に沿って「出水場」そして筑後川まで通じていたと考えることも堆積土の状態から推してあながち荒唐無稽の論ではないが、ただし、筑後川から直接引水することは古代の技術ではいささか無謀にすぎるであろう。現在の美津留川の流路は調査区付近で大きく蛇行しており、古代に何処を流れていたか確認できないが、美津留川に通じていたと考える方が無難であると思われる。

『筑前国観世音寺資財帳』に記された「生葉莊」の範囲は4町であるが、先の「庄園」付近の地割りはほぼ16町に相当する。したがって、「生葉莊」がこの付近に存在したとしてもその一角を占めるに過ぎないのであり、この地割りを敷衍することには古代に条里制が施行されたという資料的裏付けが伴っていない。仮定に仮定を重ね、あるいは思いつきで記述してきたが、近年の圃場整備事業に伴う大規模調査において、条里遺構として周知の遺跡が登録されていても今回のような水路が検出された例をあまり聞かない。この調査・報告が今後の調査研究に新たな視点をわずかなりとも提供することができれば幸いである。



第 10 図 調査区周辺字図および条里の復原(1/10,000) (折り込み)

さかいまち
堺町遺跡
図版



(1) 1号溝西端（上空北から）



(2) 9e 地区以西（東上空から）



(1) 1号溝 9f地区 (西から)



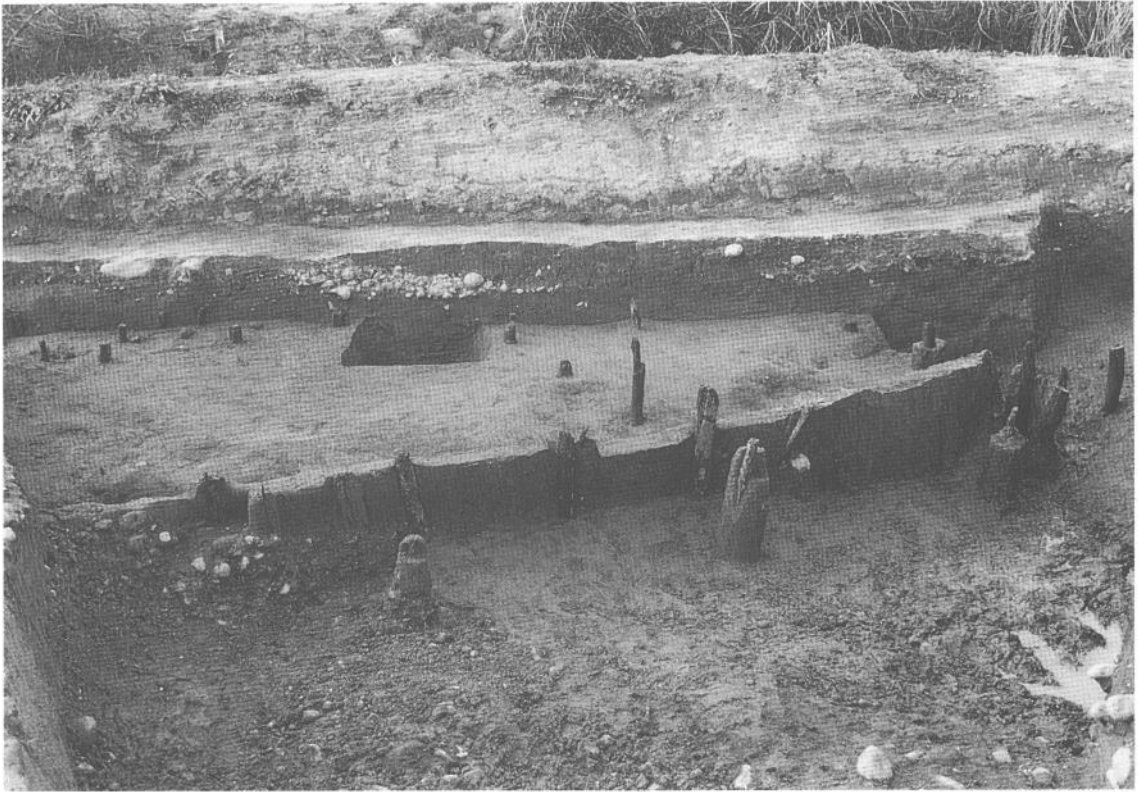
(2) 1号溝 d地区 (西から)



(1) 1号溝 9f 地区 (東から)



(2) 橋脚 (南東から、左畔上の小碑は道路状遺構)



(1) 橋脚 (東から)



(2) 草履 (北東から)



(1) 1号溝土層E (東から)



(2) 1号溝土層H (東から)



(1) 1号溝土層I (東から)



(2) 1号溝土層J (東から)



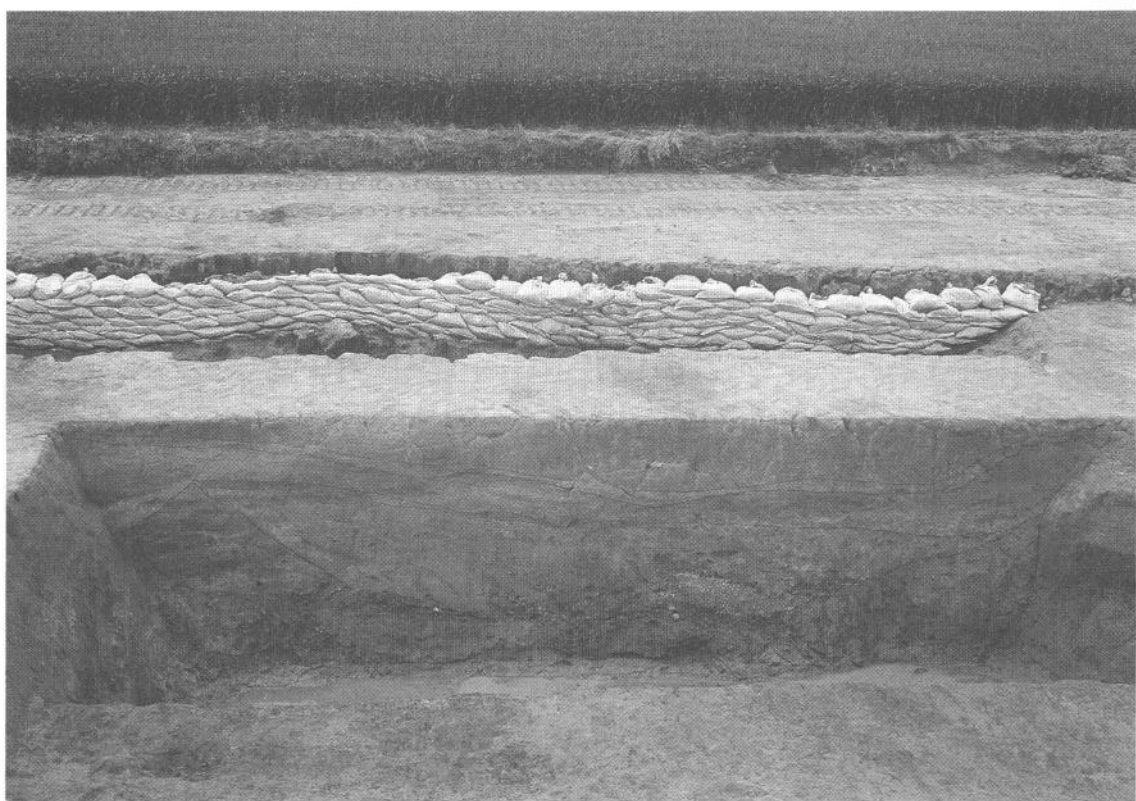
(1) 1号溝土層K (東から)



(2) 1号溝土層N (東から)



(1) 4号溝南壁東半（北から）



(2) 4号溝南壁西半（北から）



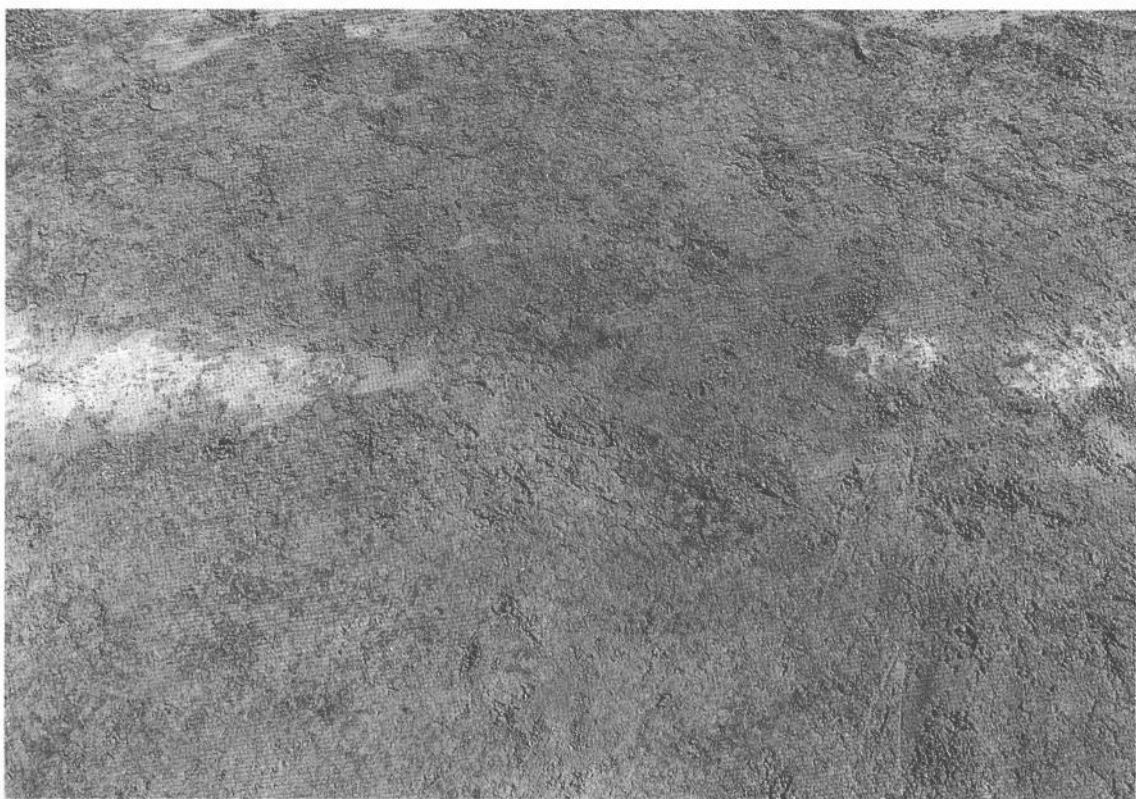
(1) 4号溝北端土層 (南から)



(2) 5号溝南半 (北から)



(1) 5号溝上の水田跡（南東から）



(2) 同畦畔と水田（南から）

おおいかり
大碇遺跡

1. はじめに

堺町・大碓遺跡の発掘調査は、平成2年（1990）1月6日から同年11月28日の約11か月間に亘って実施された。一般国道210号線・浮羽バイパスの建設に伴う事前調査であるため、調査区は長さ約550m、幅約38mとかなり細長く、様々な遺構が検出される反面、遺跡の全体像の把握はむしろ困難であった。実際の調査では、この細長い調査区のはぼ中央部を南北に分断する町道を中心に、西側を堺町遺跡、東側を大碓遺跡として便宜的に分け、堺町遺跡の調査から始め、5月中旬より大碓遺跡の調査へと移行していった。

大碓遺跡は福岡県浮羽郡吉井町大字生葉に所在するが、性格には字大碓、五反田、鼓田、墓ノ木、千足町に股がる。調査面積は約8,800㎡。調査区西側半分の北端部では、堺町遺跡へつづく旧河道の痕跡が谷状の大きな落ち込みとなって広がる。この谷部以外ではほぼ全面に亘って遺構が存在していたと考えられるが、主に田畑の開墾・削平等により、現在では弥生時代の溝や貯蔵穴の底面付近がわずかに残っているだけの部分も、調査区西側を中心に約2,000㎡ほど広がる。また、調査区東端部には墓地（小字・墓ノ木）があったため大部分の遺構が削平されほとんど残っていない。

ところで、先述したように町道を中心に調査区を便宜的に堺町遺跡と大碓遺跡に分けたが、堺町遺跡の東端部には大碓遺跡の弥生時代集落跡のつづきが約300㎡ほど広がる。調査時には、この部分の遺構を堺町遺跡の遺構番号で登録したが、報告書作成時では混乱を避けるため、下記のように大碓遺跡の遺構番号に登録しなおした。

堺町遺跡. 1～3号竪穴住居跡 → 大碓遺跡. 41～43号竪穴住居跡

堺町遺跡. 2～8号土壇 → 大碓遺跡. 54～60号土壇

堺町遺跡. 10・11号溝 →

大碓遺跡. 10・11号溝

なお、堺町・大碓両遺跡の調査においては、建設省福岡国道事務所・吉井町教育委員会・吉井町建設課・吉井第4土地改良区との協議・調整を随時行ない、また協力して頂いた。記して感謝の意を申し上げたい。またこの他にも、実際の発掘作業においては下記の方々をはじめ多くの方々に惜しみない御協力・御配慮を賜わったことを改めてお



第 1 図 6号溝完掘状況（北西から）

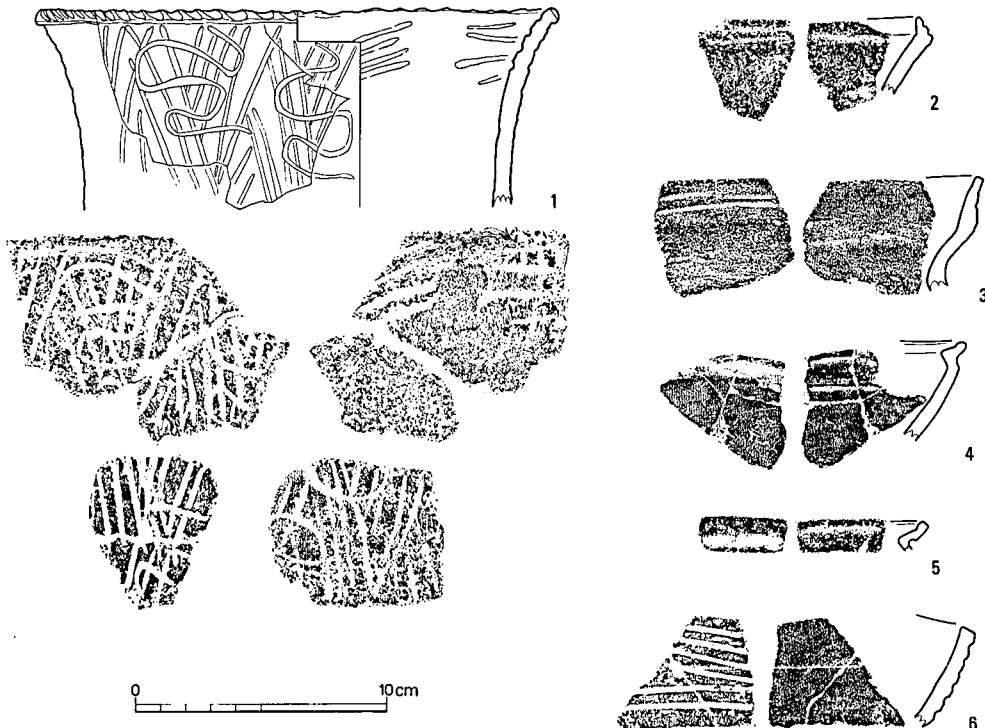
礼申し上げます。

淵上 牧男	日野 正義	本松久美子	石井 弘子	大野マスマ	梶村さつき
梶村美津子	梶村 福見	庄山 節子	庄山加代子	中川トシ子	中川 初子
中川 君子	中川サトキ	手島恵美子	手島 キリ	矢野 祥子	松竹ミホ子
田中スム子	権藤タキエ	権藤フミエ	田中 富江	田中恵美子	田村フミエ
王 敬珍	古賀いつ子	古賀まさ子	猪山ミユキ	松岡 京子	井浦 仁江
堤 忠夫	堤 利男	坂本サダ子	樋口リツ子	泉 みさ子	中山スミ子
佐々木滝子	高木 政子	高市 礼子	舎川てる子	二宮 真弓	佐藤 勝子
堤 チヨ子					

2. 調査の概要

大碓遺跡では弥生時代前期後半～中期初頭、古墳時代後期（7世紀後半）、中世（13世紀代）の集落跡を中心に、若干の縄文時代遺物も検出されたが、削平が全体的に著しく遺構の遺存状態は必ずしも良好でない。

弥生時代では前期後半～中期初頭の竪穴住居跡14軒や土塼50基の他に、最大幅3m、深さ2.5m程度の断面V字形の溝（第1図）が4本検出されたが、いずれも細長い調査区をほぼ垂直に横断



第2図 大碓遺跡出土縄文土器 (1/3)

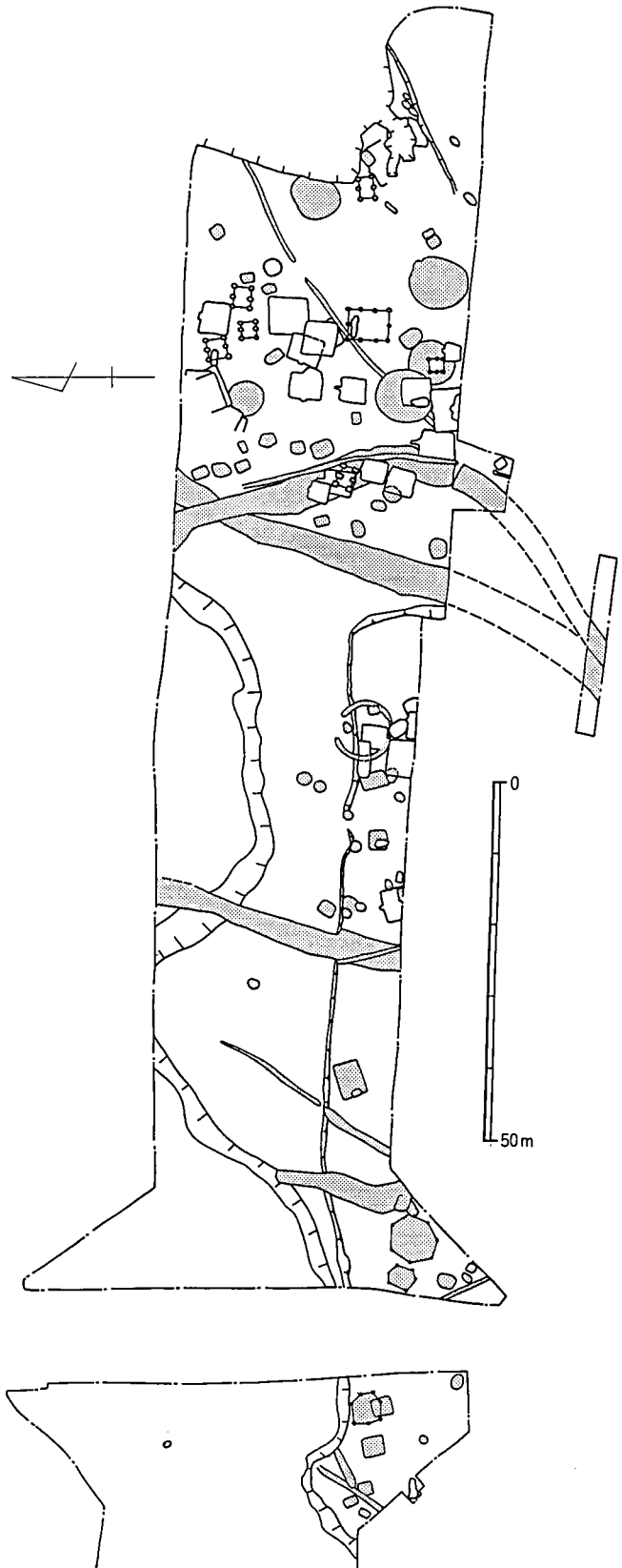
しているため、どの溝とどの溝が
つながって環濠となり、どの竪穴
住居跡や貯蔵穴と有機的な関係を
有しているのか今ひとつ判然とし
なかった。なお、調査区の東端で
甕棺墓が5基検出されたが、これ
らは弥生時代中期前葉に属し、前
期後半～中期初頭の集落とは直接
関係を有したものではなかった。

古墳時代の遺構はその大部分が
7世紀後半に属するが、一部6世紀
後半に比定されるものもある。竪
穴住居跡29軒、掘立柱建物跡7棟、
土壇8基等が上げられるが、建物
跡については中世に属するものも
含まれるであろう。

中世13世紀代に属する遺構は2
×3間の掘立柱建物跡と井戸だけ
である。両者は比較的近接した位
置関係にあり、年代的にもおよそ
共通する。

この他に調査区から東へ約
100mの地点で、浅い谷状の落ち
込みが検出され、古墳時代初頭期
の遺物が若干採集されている。こ
の地点は便宜的に「東部別区」と
呼称する。

以上のように、各時代の様々な
遺構が大碓遺跡では検出されてい
るが、以下では時代別にその内容
について説明していきたい。



第 3 図 弥生時代の遺構配置図 (1/1,000)

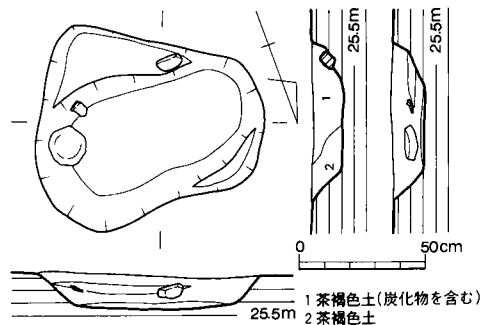
3. 縄文時代の遺物 (第2図)

縄文時代の遺物は弥生時代以降の遺構に包含されることがほとんどで、確実に縄文時代に属する遺構を検出することはできなかった。遺物としては縄文土器と各種の石器が上げられるが、石器については弥生時代に属するものもあると考えられ、縄文時代と明確に分離することが困難であった。したがって、石器は「包含層出土および表採の石器」という項目で別個に説明している。

第2図1は20号土壙から出土した縄文前期後半の曾畑式土器である。比較的多くの破片1個体が纏まって出土したため縄文時代遺構の存在を想定したが、確実に弥生時代前期後半の貯蔵穴中位付近に包含されていたことと、摩滅が特に著しかったことなどから、後世の混入という見解に至った。復原口径約21cm、外面には粗い複合鋸歯文の上に縦位の波状文が付加され、口縁部内面には4本単位の短沈線文が施される。口縁端部は刻まれ胎土に滑石は含まれず、曾畑Ⅱ式新段階B類に属すると考えられる。2は後期後葉の太郎迫式、3は後期末の御領式、4~6はそれぞれ晩期前半代に属する土器であるが、いずれも摩滅が著しく器面調整はほとんど窺えない。

4. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構としては、竪穴住居跡14軒、土壙（主に貯蔵穴）50基、溝11本、甕棺墓5基の他に、多数のピットが検出された。11本の溝のうち4本はかなり大きなもので、本来は竪穴住居跡や貯蔵穴と共存して環濠集落を形成していたものと考えられるが、環濠の規模や共存遺構の対応が難しくその全体像は明瞭でない。



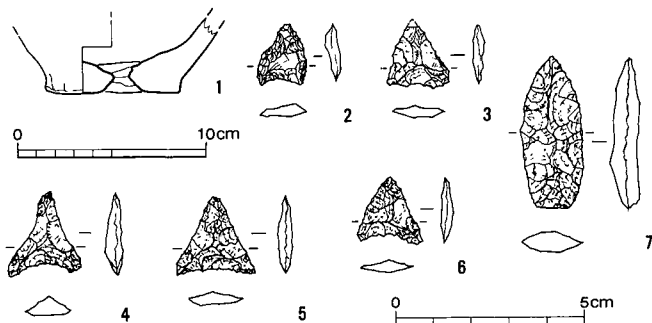
第4図 1号竪穴住居炉跡実測図(1/30)

I) 竪穴住居跡

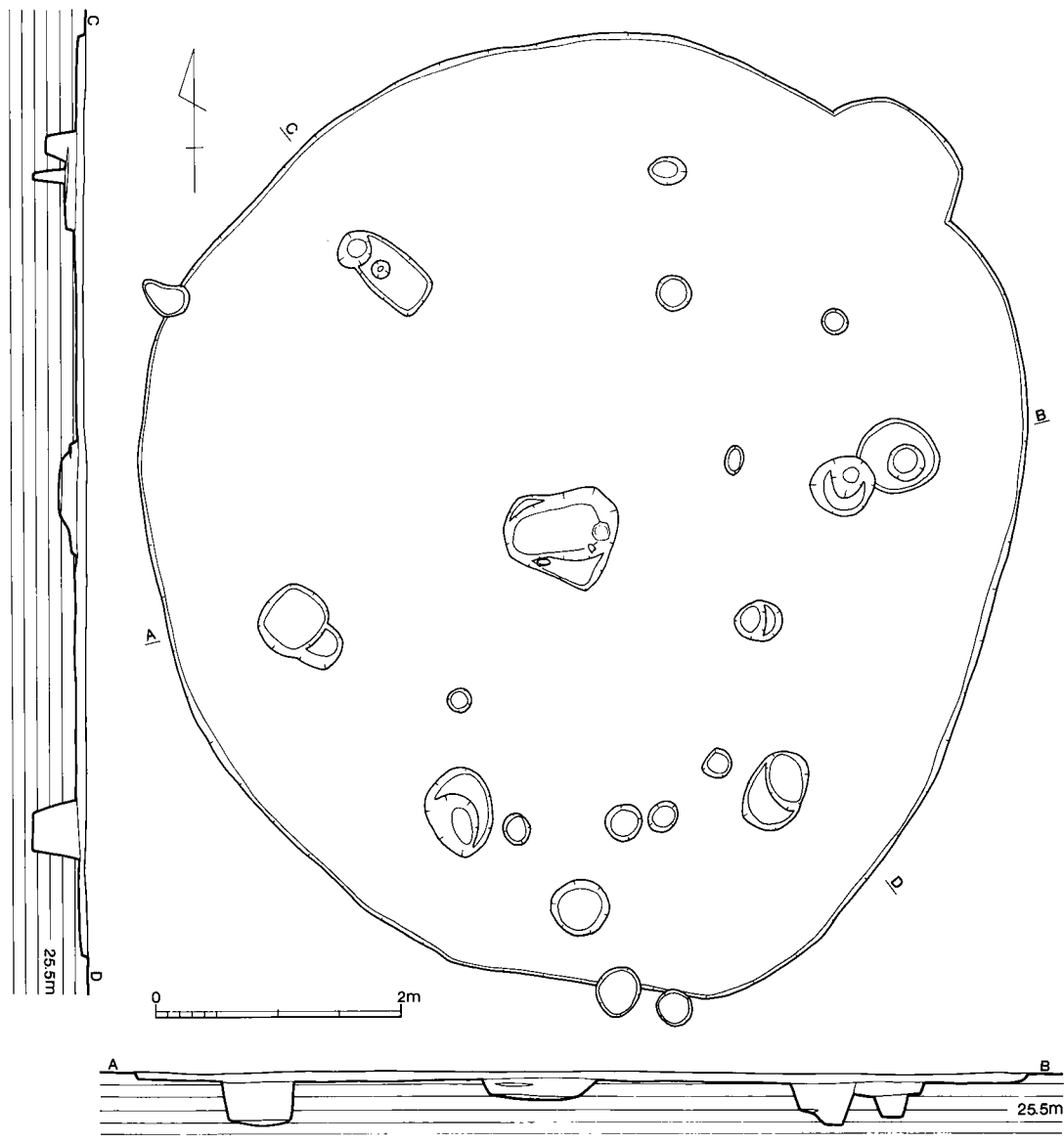
1号竪穴住居跡

(図版4 第4・5図)

1号竪穴住居跡は調査区の東端部で検出され、7.9×7.1mのほぼ正円形を呈する。住居自体はすでに貼り床も削平されて残存せず、最も深くて8cm程度しか残らない。主柱穴は6本で、



第5図 1号竪穴住居跡出土土器(1/4)および1・2号竪穴住居跡出土土器(1号は2~6、2号は7 1/2)実測図



第 6 図 1号竖穴住居跡実測図 (1/60)

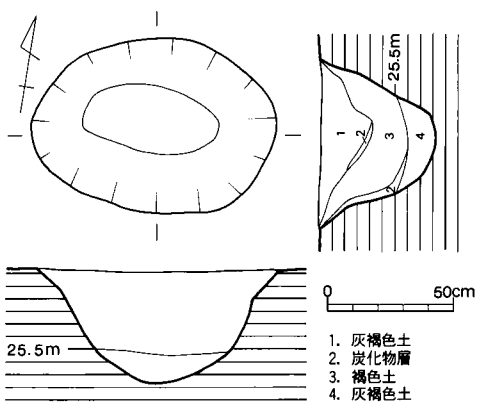
北東部に入り口とも考えられる 1.2×0.4 mの突出部が存在する。炉跡(第4図)は $90 \times 80 \times 25$ cmの規模を測り、南側にテラス状の段を有する。礫が包含されていたが、加熱の痕跡はない。第5図2・3の石鏃は炉跡の埋土より出土。

出土遺物(第5図) 遺物は少なく、図示した土器は1の焼成前に穿孔された甕の底部だけである。炉跡から出土した端部に刻みを有する甕の口縁部破片は、整理作業の過程で紛失してし

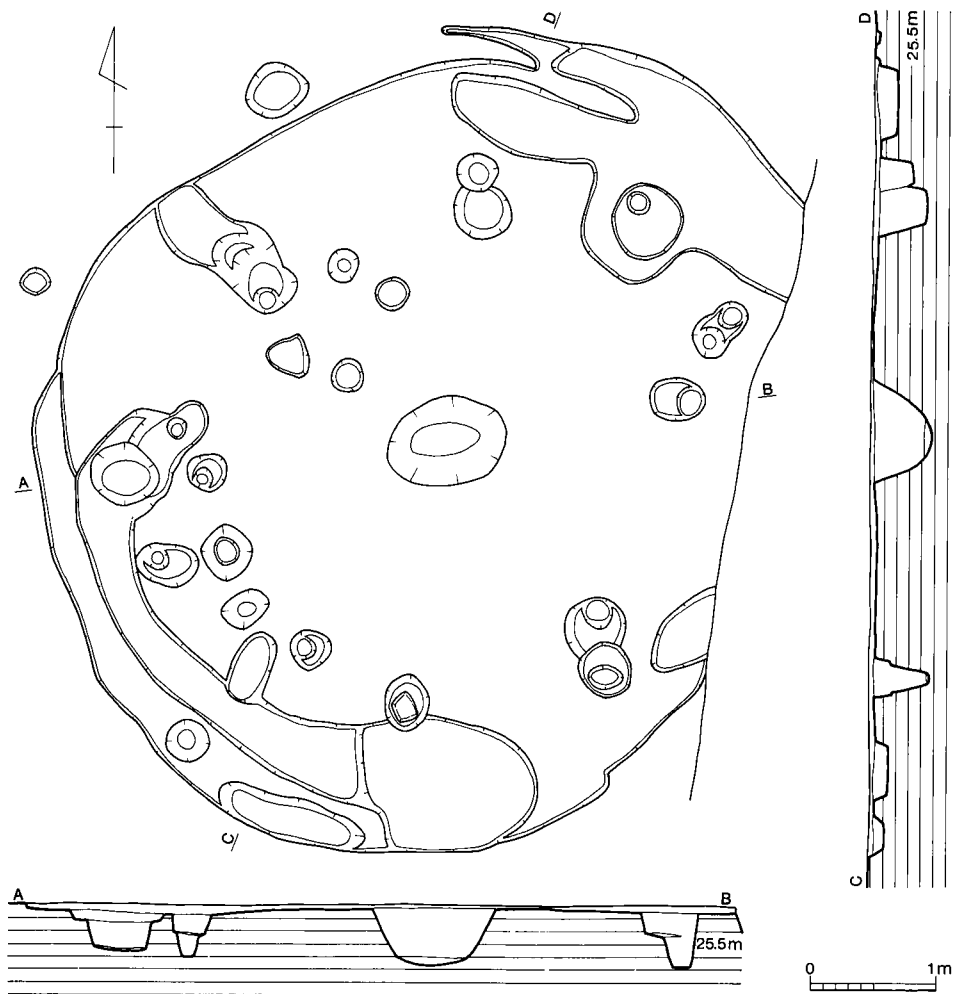
まい図示できなかつたが、弥生前期後半に比定されるものである。この住居跡出土遺物で特徴的なのが石鏃の多さである。2は0.7gの腰岳産黒曜石製、3～6はサヌカイト製でいずれも完形品である。重量は3が0.9g、4が1.3g、5が1.2g、6が0.8g。

2号竖穴住居跡 (図版5 第7・8図)

2号竖穴住居跡もやはり調査区の東端部で検出された。住居跡の東端は削平され遺存しないが、

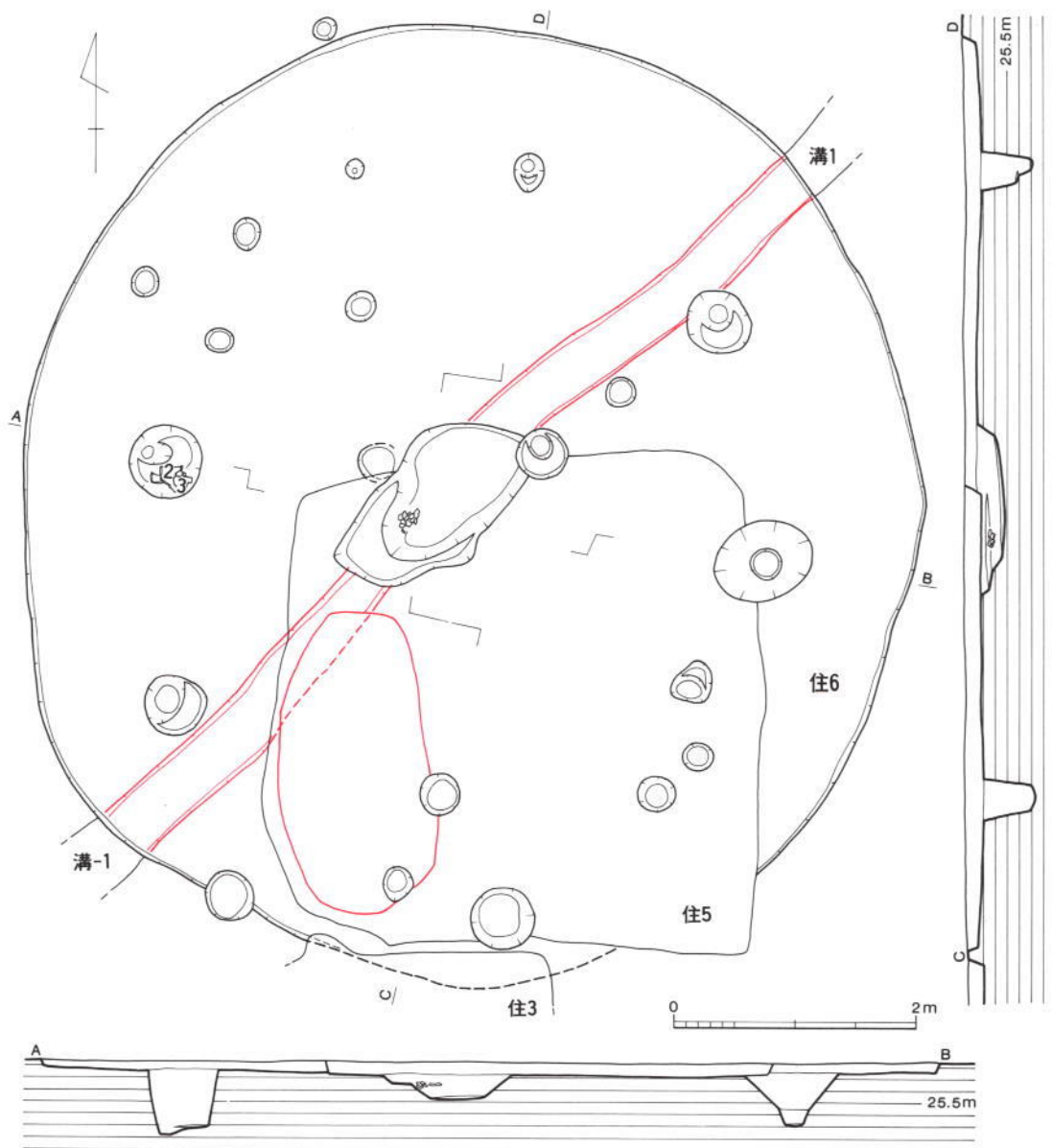


第 7 図 2号竖穴住居炉跡実測図 (1/30)



第 8 図 2号竖穴住居跡実測図 (1/60)

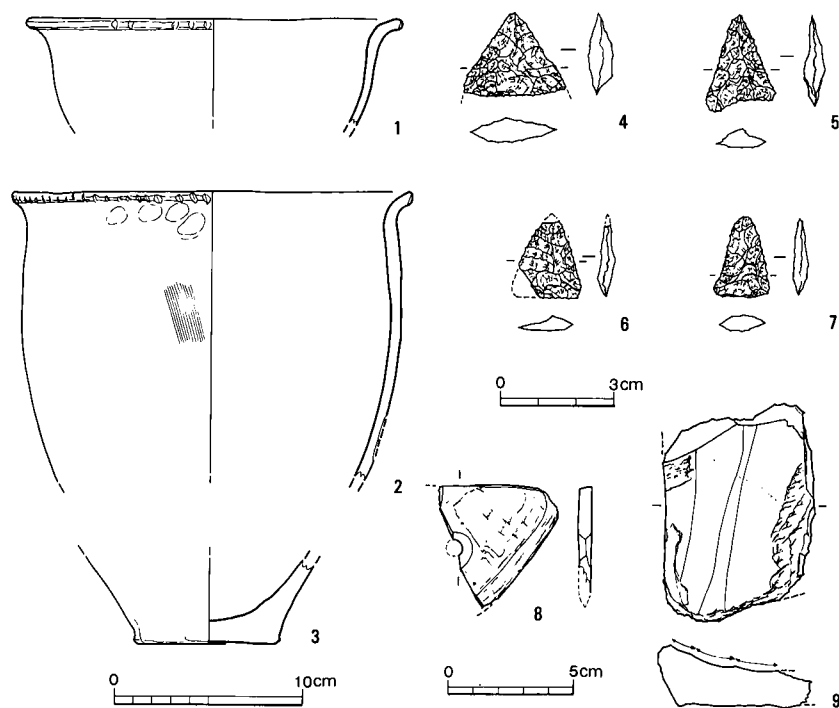
6.9×5.9mの長楕円形を呈していたと考えられる。遺存状況は極めて悪くて貼り床はすでになく、最高で深さ6cmしか残らない。主柱穴は6本で40~50cmの深さに揃っている。炉跡(第7図)は95×76×45cmの規模を測るが、平面のプランに対してかなり深いのが特徴的である。埋土には第2層とした薄くて広がりも少ない炭化物層を除いて炭化物が全く含まれておらず、また焼けた面や焼土もなく他の炉跡とは異なった様相を呈する。



第 9 図 6号竖穴住居跡実測図 (1/60)

さて、この住居跡のプランについて注意を払いたい。先述したように長楕円形を呈するが、長軸方向に相当する北東部と南西部には深さ3cm程度の段と極く浅い落ち込みがあるのに対し、短軸方向に相当する北西部と南東部にはそれがない。この場合、住居跡北端部の細長い突出部の存在などを考慮にいれるなら、本来は住居の全体に浅い段状のものが作出されていたと考えられるが、著しい削平により北西部と南東部のそれが消失してしまったようである。

出土遺物(第8図) 出土遺物は極めて少なく小破片の弥生土器ばかりで図示できなかったが、7の長さ4.1cm、重量4.7gのサヌカイト製石鏃が目を引く。



第 10 図 6号竪穴住居跡出土土器・石器実測図 (1~3は1/4、4~7は1/2、8・9は1/3)

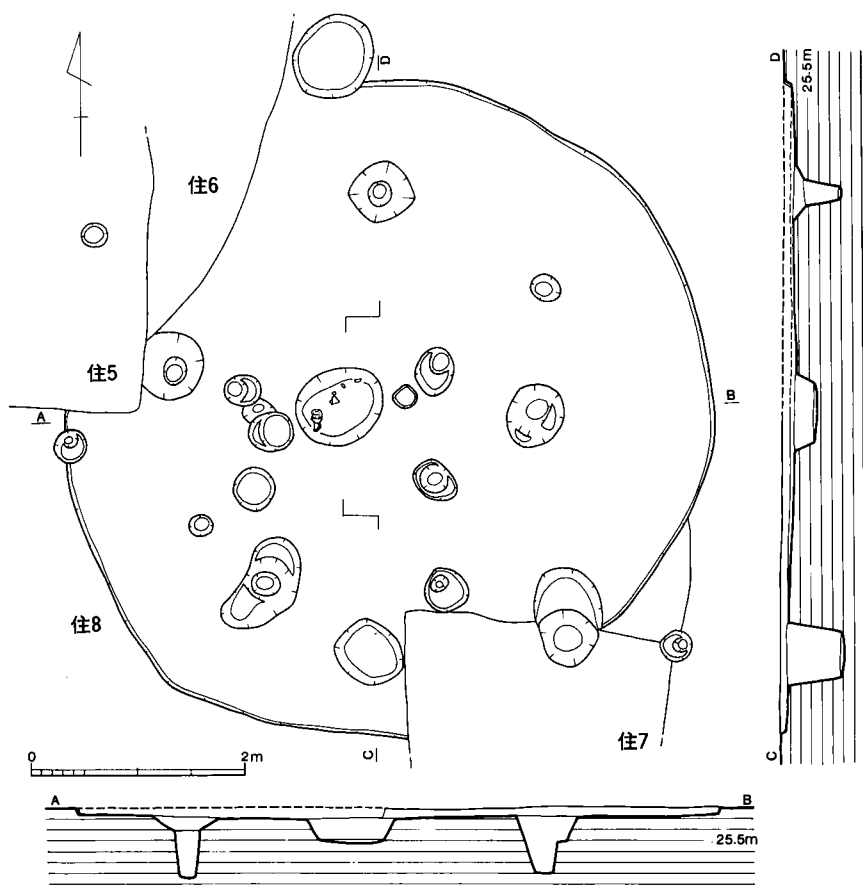
6号竪穴住居跡 (図版6・7 第9図)

6号竪穴住居跡は8号竪穴住居跡と1号溝は切るが、3・5号竪穴住居跡や3号土壌といった古墳時代の遺構には切られるという先後関係を有する。7.7×7.5mのほぼ正円形を呈するプランで、やはり遺存状態は悪く最高で10cm程度の深さしか残らない。貼り床も部分的にしか確認できなかった。主柱穴は6本でいずれも50cm程度の安定的な深さを有し、またテラスを作出して2段掘りとなる。炉跡は1.8×1.1mの長楕円形を平面プランとし、深さは20cmと浅い。第10図6のチャート製石鏃はこの炉跡からの出土。

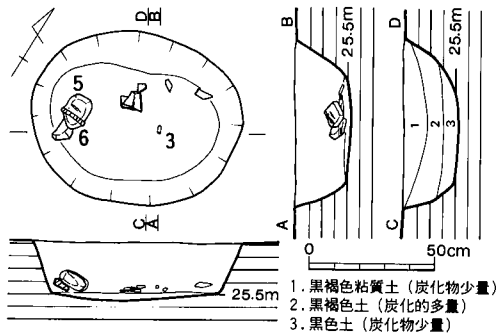
出土遺物 (第10図) 遺物はやはり少ないが、石器を中心に図示することができた。1は復原口径約20cmの甕で、口縁端部には刻みが施される。2は支柱穴の上面から出土した甕で、復原口径は約21cmを測り外面にはハケが、口縁端部には刻みが施される。3は甕の底部。2・3は重なるように出土したが、別個体である。4～7の石鏃は6がチャート製であるほかは3点ともサヌカイト製。8の石庖丁は砂岩質製、9の砥石は片岩製である。石鏃の重量は、4が2.8g、5が1.5g、6が1.3g、7が1.0g。

8号竪穴住居跡 (図版8 第11・12図)

8号竪穴住居跡は弥生前期後半の6号住居跡をはじめ、5・7号竪穴住居跡や1号掘立柱建物跡といった古墳時代以降の遺構にも切られるという先後関係を有する。平面プランは6.1×5.9mの正円形を呈するが、遺存状態はやはり悪く最高で深さ8cm程度と浅い。支柱穴は6本でいずれも深さ60cmと安定しているが、配列は必ずしも整然としていない。炉跡(第12図)は85×68×23cmの楕円形を呈し、埋土にはいずれも炭化物が含まれる。この炉跡からは少量の土器片の他に、



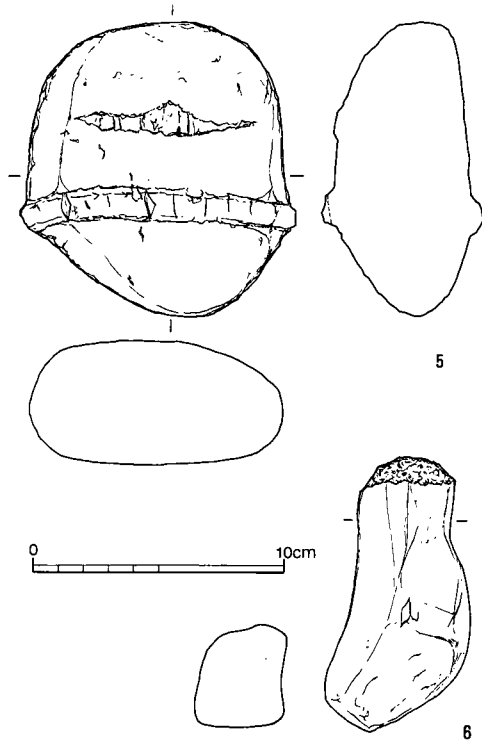
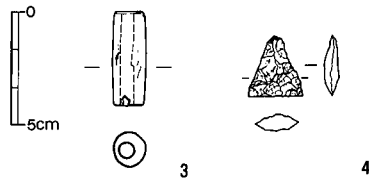
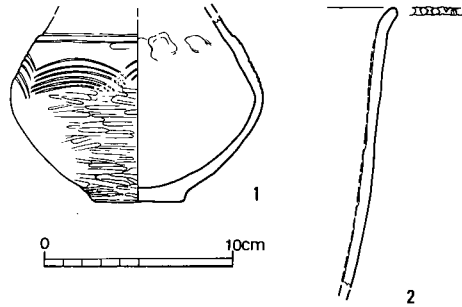
第 11 図 8号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第12図 8号竪穴住居炉跡実測図 (1/30)

加熱を受けた碧玉製管玉や突帯状の隆起部に刻みの施された石や敲き石等が炉跡の底面付近から出土した。これらの遺物は通常の炉跡から出土するものではなく、祭祀的要素の強い性格が想定される。なお、この住居跡からは拳大の石英塊が5点と石英の剥片が20点ほど出土した。

出土遺物 (第13図) 遺物はやはり少ないが、1の小型壺は最大腹径13cmを測り、頸部と胴部の境には2本の沈線文が、胴部上半には5ないし6本の重弧状の沈線文が施される。外面の胴部下半には細かく丁寧な研磨が施され、内面の頸部と胴部の接合部には明瞭な指圧痕が残る。2の甕の口縁端部には刻みが施される。3の碧玉製管玉は長さ2.5cm、太さ0.9cmをはかり、穿孔は両端部から行なわれたことが中央付近のズレから判断される。加熱を受け表面が若干剝落し、青白く変色している。4はサヌカイト製の石鏃で重量0.8g。5は12×11×5cmの玄武岩製の原石で、約1cm間隔で刻みを施した幅1.5cm、高さ4mmの突帯状の隆起が短軸部の全周を巡る。また、この隆起に平行してやはり刻みを持った隆起がもう1本あるが、これは長さ7cmで全周はしない。



第13図 8号竪穴住居跡出土土器・石器実測図 (1・2は1/4、3・4は1/2、5・6は1/3)

これらの隆起はおそらく石質の堅い部分が残って隆起化したものであろうが、刻みには人為的なものもある。6の敲き石は細長い自然礫の一端を敲打に使用したものである。

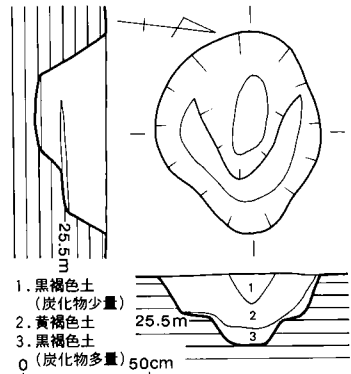
21号竪穴住居跡 (図版9 第14・15図)

21号竪穴住居跡は調査区中央付近の北端に位置し、古墳時代の17・20号竪穴住居跡に切られる。本遺跡では比較的小さい4.8×4.6mの正円形の平面プランを呈し、遺物も多く深さは20cmと比較的良好な遺存状況を示す。主柱穴は5本でいずれも深さは60cmと安定しているが、その配列は必ずしも整然としていない。炉跡(第14図)は80×66×28cmで東側に段を有し、最下層

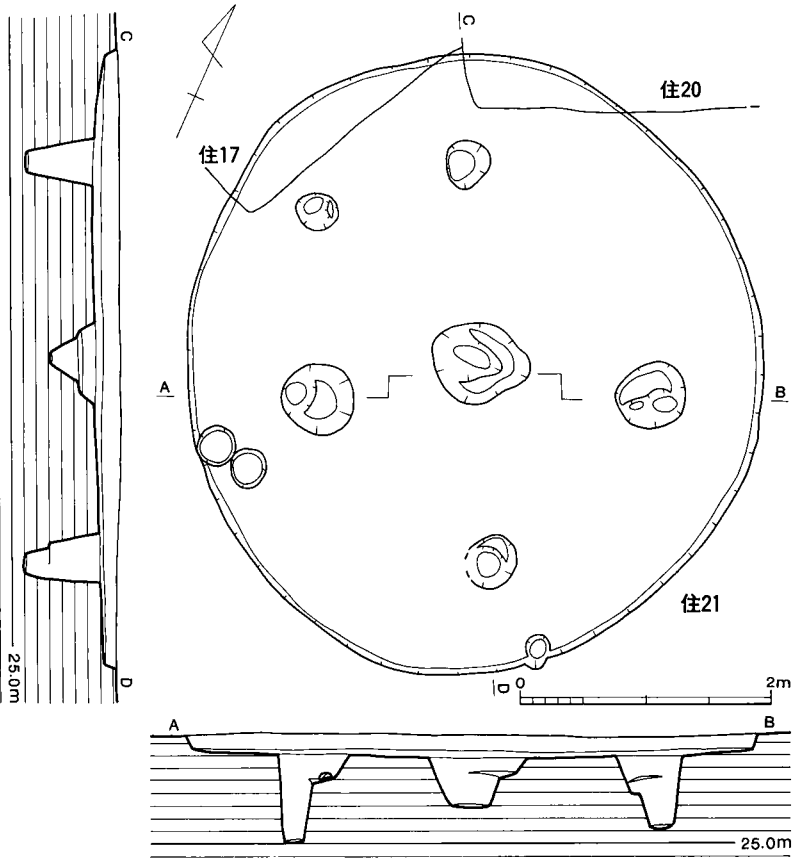
に当たる第3層では多量の炭化物が壁に貼り付くように検出された。遺物は土器だけで比較的大きな破片が出土したが、摩滅は著しく器面調整が観察されるものはなかった。

出土遺物 (第16図)

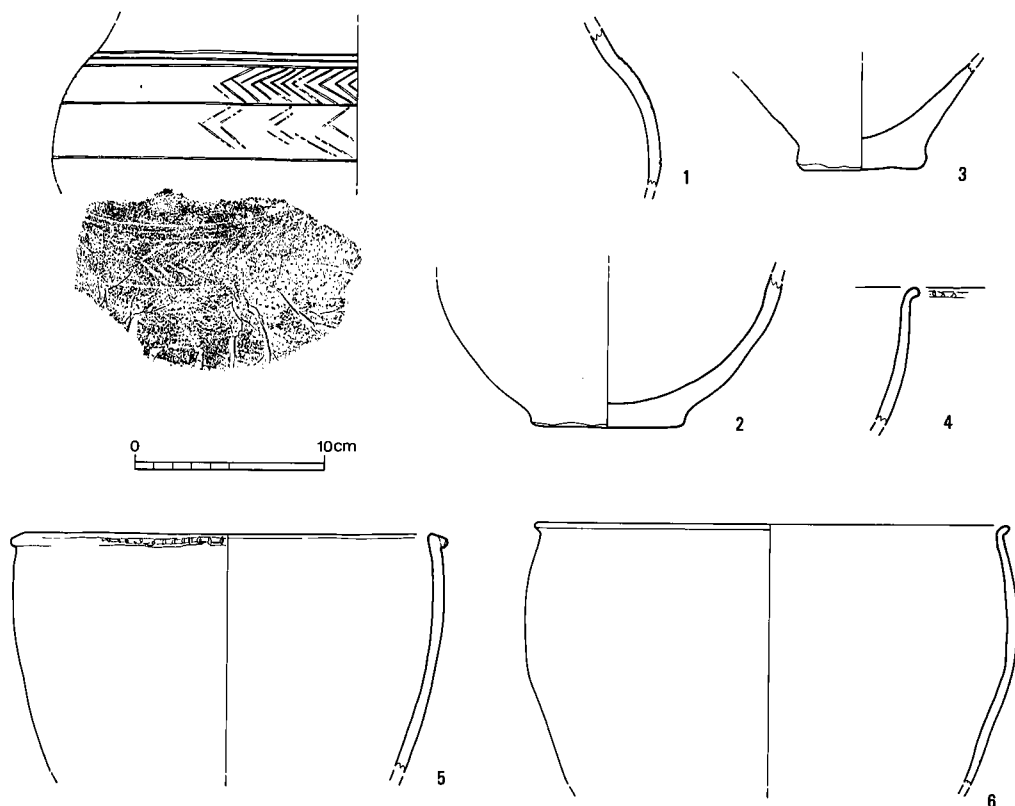
1の壺には頸部と胴部の境に3本の沈線文が施され、胴部上半には沈線文によって横位に区画された2段の空間部に無軸の羽状文が充填されている。2は壺の、3は甕の底部。4~6の甕の中でも、4・5には口縁端部に刻みが施される。5の口縁部はほぼ直線的に立



第14図 21号竪穴住居炉跡実測図(1/30)



第15図 21号竪穴住居跡実測図 (1/60)

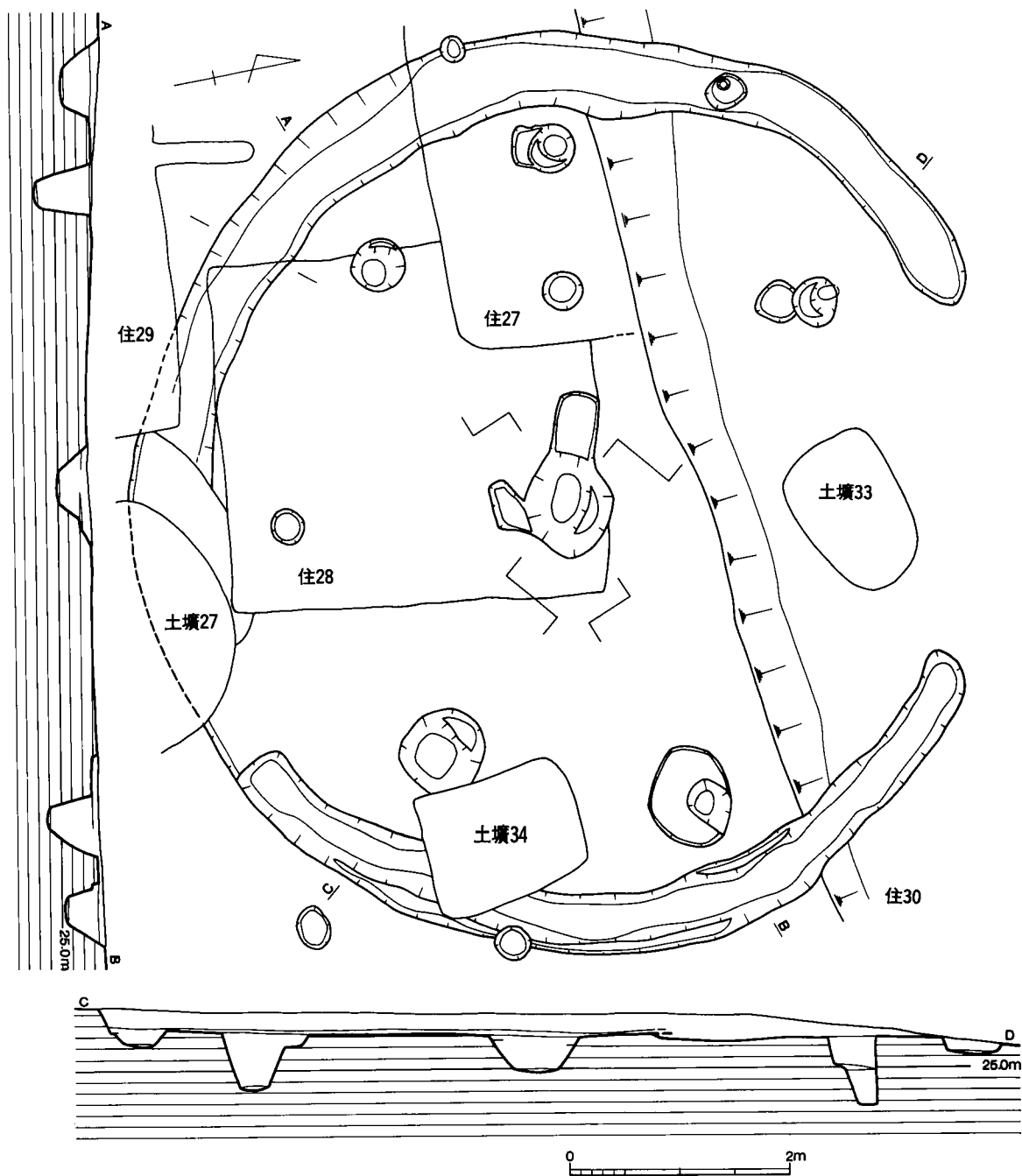


第 16 図 21号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

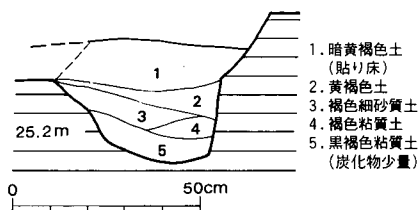
ち上がり、端部で外側に粘土紐を貼り付けている。復原口径は5が約22cm、6が24cmを測る。

30号竪穴住居跡 (図版10 第17~19図)

30号竪穴住居跡は調査区の中央部南側に位置し、弥生前期後半の34号土壌をはじめ古墳時代の27・28・31号竪穴住居跡や27号土壌にも切られる。住居跡の北側1/3は大きく削平され、すでに地山が剥き出しになっていた。したがって、本来33号土壌とも切り合い関係を有していたはずだが確実な先後は不明である。本遺跡では弥生時代最大の8.4×7.6mの円形の平面プランを呈し、幅50~60cm、深さ20~30cmの周溝が壁際を巡る。もっとも、北端部と南端部ではこの周溝は途切れており、ここに入り口か何かの施設があったと考えられるが、2方向に入り口があったとするのはいささか不自然である。なお、第18図の土層断面図に示したように周溝の最下部には炭化物が少量含まれる。炉跡(第19図)は95×79×26cmの規模を測り、西側に深さ10cm、南側に深さ5cmの浅い突出部を有する。この突出部には少量の炭化物が含まれており、炉跡に付帯したものと考えられる。なお、炉跡の壁面にはほぼ全面に亘って炭化物が貼り付くように広がっており、また石鏃(第20図9)も出土した。主柱穴は6本でいずれも深さ50~60cmと安定



第 17 図 30号竖穴住居跡実測図 (1/60)



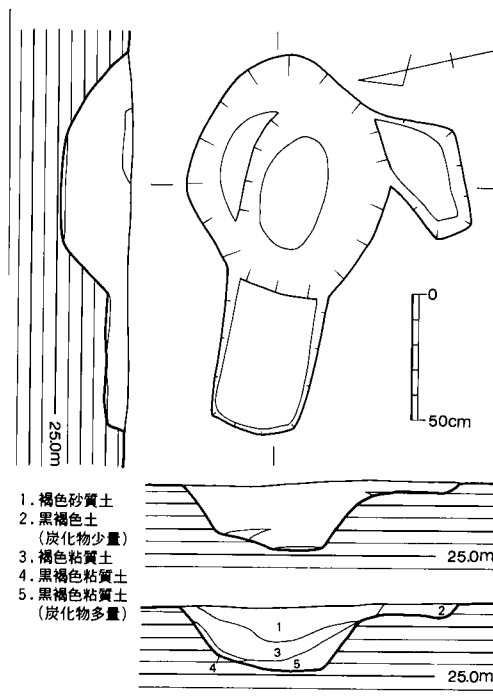
第 18 図 30号竖穴住居跡周溝土層断面
実測図(1/20)

しているが、配列は若干不自然で33号土坑付近にもう一つあっても良さそうな印象を受ける。このことについては33号土坑の項目で改めて検討している。

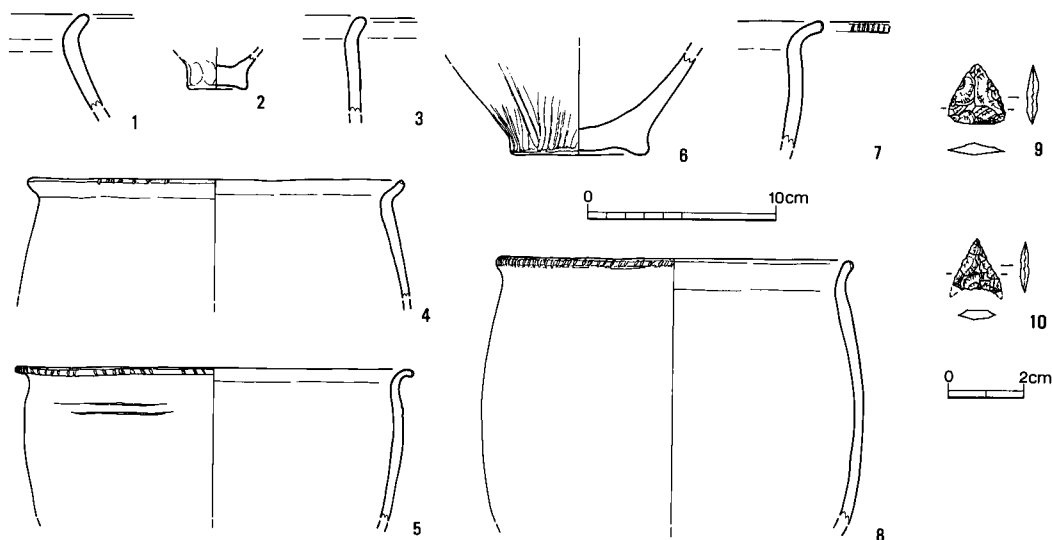
出土遺物 (第20図) 遺物は少なく第20図1は壺の口縁部、2は小型土器 (あるいはミニチュア) の底部、3~5は甕で、いずれも摩滅が著しく器面調整は不明。4・5の口縁端部には刻みが施され、復原口径はともに約20cmを測る。なお、5の頸部には2本の沈線文が痕跡的に残る。9はサヌカイト製の打製石鏃で、重量は0.8g。

32号竖穴住居跡 (図版11 第21図)

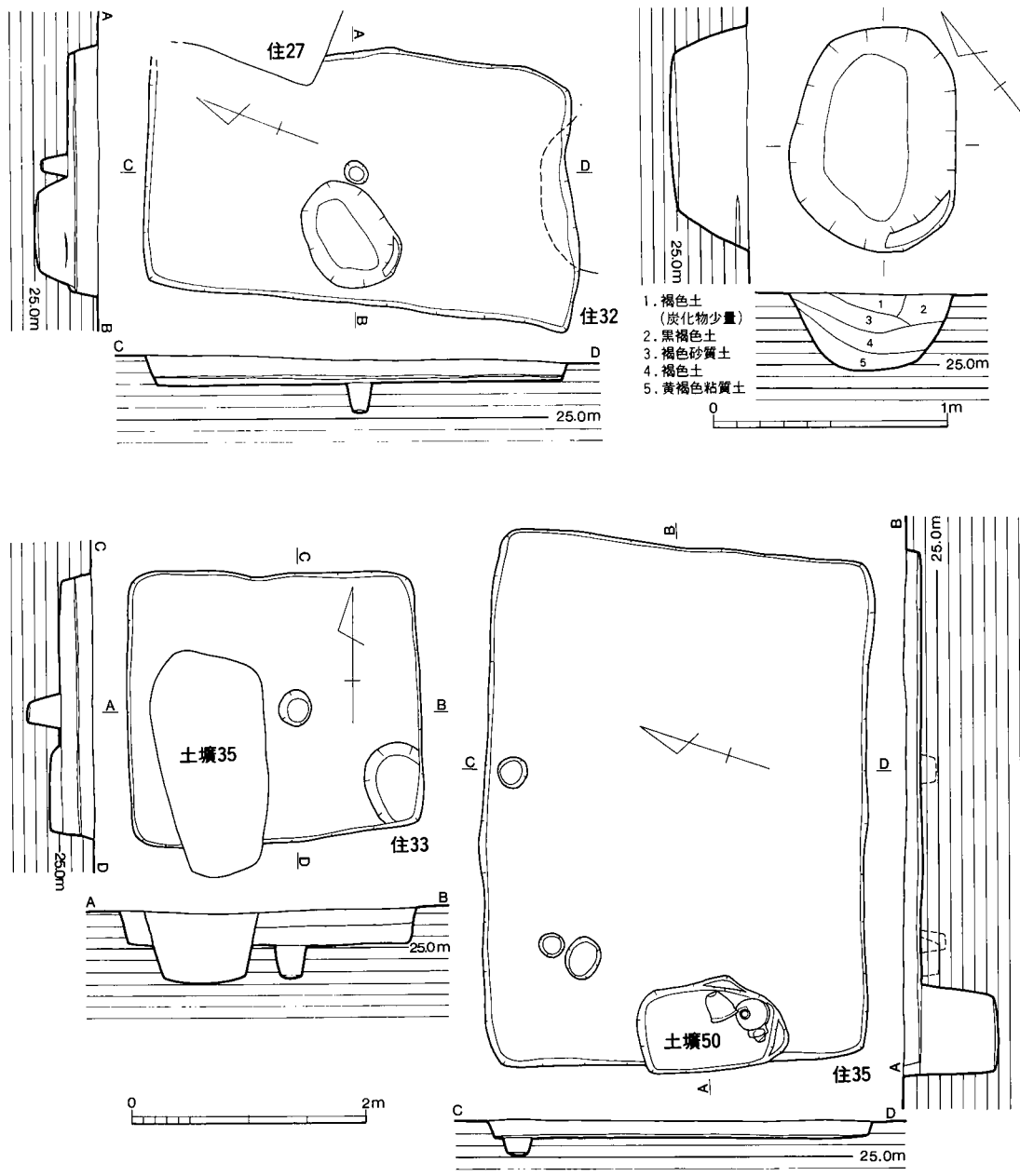
32号竖穴住居跡は30号竖穴住居跡の西3.5mに位置し、古墳時代の28・31号竖穴住居跡に切



第 19 図 30号竖穴住居跡実測図 (1/30)



第 20 図 30・32・33号竖穴住居跡出土土器(1/4)・石器(1/2)実測図(30号は1~5・9、32号は6、33号は7・8・10)



第 21 図 32・33・35号竖穴住居跡実測図 (1/60) および32号竖穴住居跡実測図 (1/30)

られる。3.7×2.2mの長方形プランを呈し、厚さ5cm程度の貼り床を剥がした時点で中央部に柱穴を1基だけ検出した。炉跡らしきもの（第21図）も床面まで掘り下げた段階で検出したが、炭化物や焼土がほとんど含まれず、また壁や柱穴に近すぎるなどから炉としての機能は疑わしい。

出土遺物（第20図） 遺物は極めて少なく、図示できた第20図6の外面にハケ目が明瞭に観察される甕底部も、本遺構の埋土上部に包含されていた。

33号竪穴住居跡（図版12 第21図）

33号竪穴住居跡は32号竪穴住居跡の西6mに位置し、古墳時代の35号土壙に切られる。2.5×2.3mのほぼ正方形に近い平面プランを呈し、厚さ10cmの貼り床を剥がした段階で中央部に柱穴を1基だけ検出した。南東隅には緩やかな浅い落ち込み状の窪みがある。32号住居跡と同様に、規模や床面構造から考えて住居とするにはいささかの躊躇を覚えるが、とりあえず住居跡として扱った。

出土遺物（第20図） 遺物はやはり少ないが、第20図7・8は口縁端部に刻みを有する甕で、8の復原口径は約21cmを測る。摩滅により器面調整は不明。10はサヌカイト製の石鏃で、重量は0.5g。

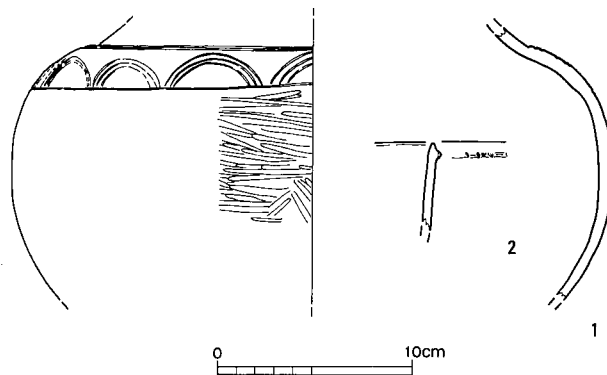
35号竪穴住居跡（図版12 第21図）

35号竪穴住居跡は調査区の西側に位置し、弥生前期後半の50号土壙に切られる。平面プランは4.6×3.2mの長方形を呈し、壁高さ10cmほどしか遺存しない。柱穴は3基検出できたがいずれも浅く、また配置も不規則で上部構造を支えていた柱が建つ柱穴にしては心許ない。

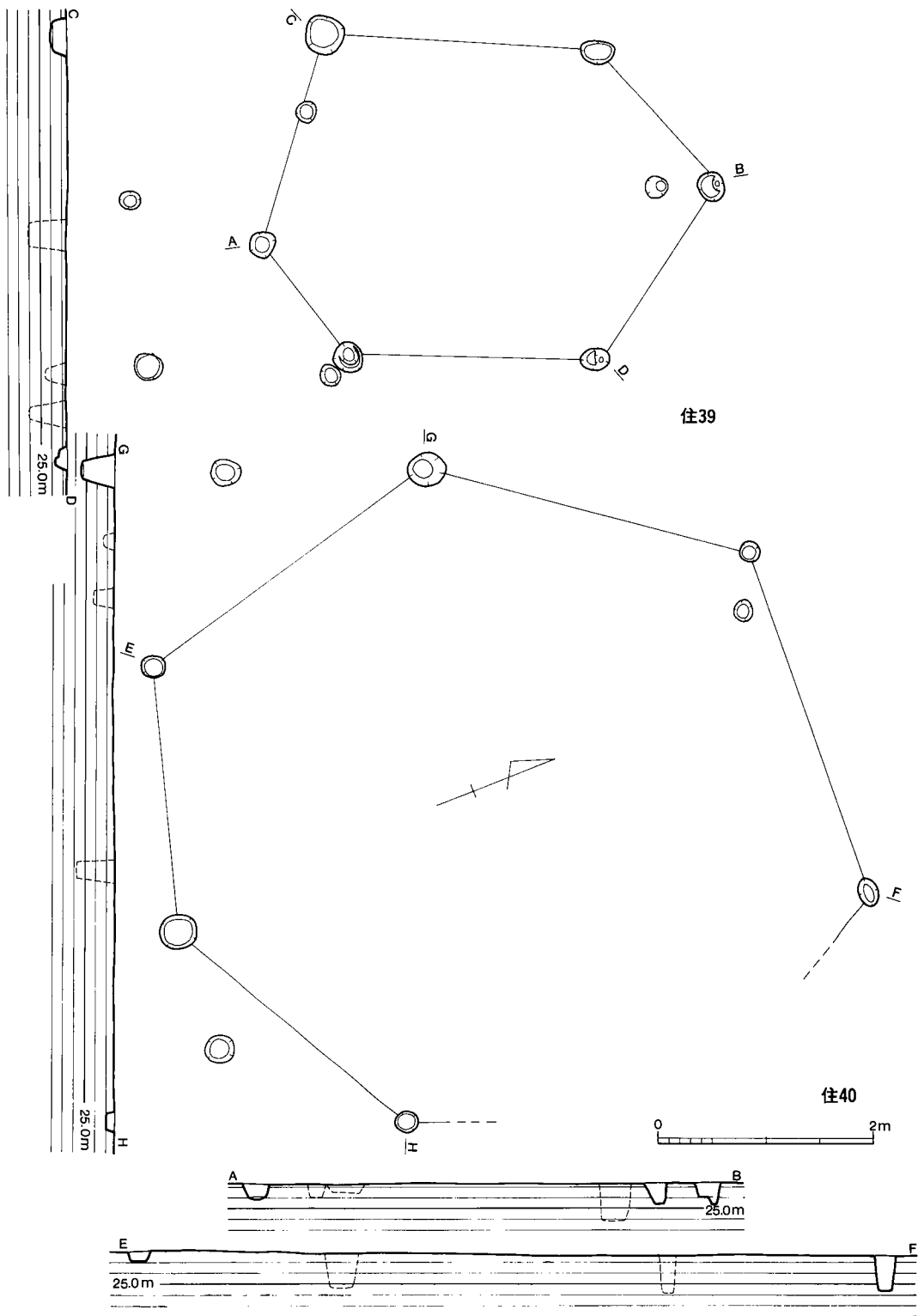
出土遺物（第22図） 遺物はやはり少ないが、第22図1は壺の胴部破片で全体の1/3ほど残る。頸部と胴部の境の段は接合と削り出しによって作出されるが、それが部分的には沈線文のように見えることもある。この段と胴部上半に施された1本の沈線文の間には3本単位の重弧文が充填される。外面には丁寧な研磨が器面調整として施される。最大腹径は約31cm。2は外面に粘土紐を貼り付け、その上を刻んだ甕の口縁部である。

39・40号竪穴住居跡（第23図）

39・40号竪穴住居跡は調査区の西端部に位置する、支柱穴のみが残存した竪穴住居跡である。両竪穴住居跡は支柱穴だけでも1mほどしか離れずに近接しており、本来は先後関係を有していたと考えられる。支柱穴



第 22 図 35号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第 23 図 39・40号竪穴住居跡実測図 (1/60)

は39号が6本で4.3×3.2mの範囲に、40号は6ないし7本の支柱穴が6.9×6.0mの範囲に配列される。深さはいずれも15cm前後と浅いが、炉跡が残っていないことを考慮に入れるならそれほど不自然な深さではないであろう。

41号竪穴住居跡 (図版13 第24図 堺町遺跡.1号竪穴住居跡)

41号竪穴住居跡は調査区の西端で、42号竪穴住居跡の東3mに位置する。3.0×2.6mの正方形に近い平面プランで、削平が著しく深さは5cmほど残るだけであった。中央部に1基だけ柱穴を検出し、径15cmの柱痕を確認した。遺物は数点の弥生土器片だけである。

42号竪穴住居跡 (図版13 第24図 堺町遺跡.2号竪穴住居跡)

42号竪穴住居跡は41号竪穴住居跡の西側3mに位置し、2.9×2.5mのほぼ正方形に近い平面プランを呈する。これも削平が著しく深さ2~3cmが残るだけであるが、43号竪穴住居跡に切られている。中央部にやはり深さ60cmの柱穴を1基だけ検出した。また、南壁中央部には幅15cm、深さ5cmの溝があるがその機能は不明である。41号と42号は32・33号と共に、規模の小ささや炉を有しない床面構造等から、人間が生活する一般的な竪穴住居とは異なり、その一般的な竪穴住居に付随する小屋（あるいは倉庫か？）的機能を有した竪穴状遺構と考えられる。

43号竪穴住居跡 (図版13 第24図 堺町遺跡.3号竪穴住居跡)

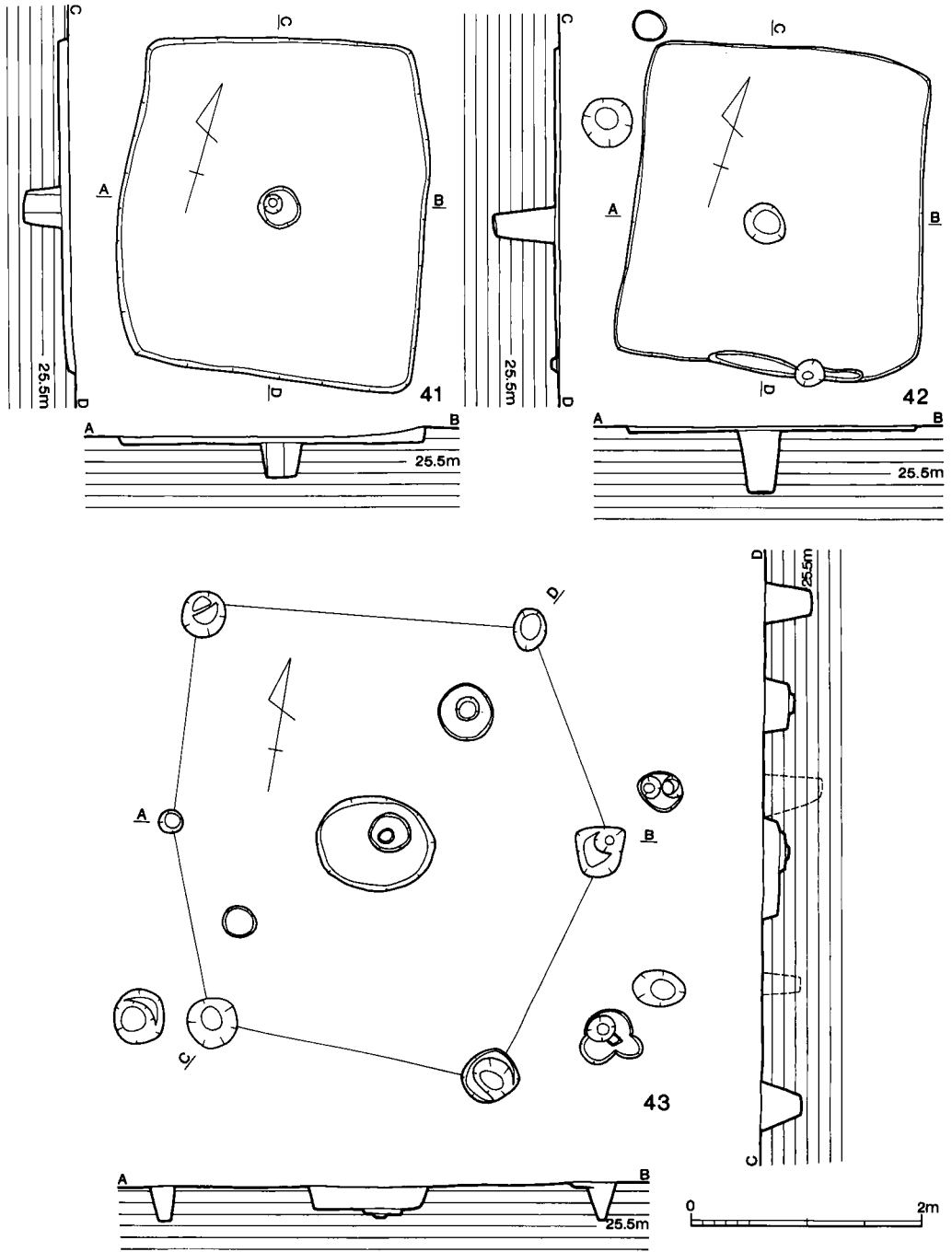
43号竪穴住居跡は6本の支柱穴と炉跡だけが残る住居跡で、42号竪穴住居跡を切っている。住居自体の規模は不明だが、支柱穴は4.1×3.9mの範囲に配列されており、本遺跡にあっては比較的小型の円形住居であったと考えられる。深さ40~50cmのこの6本の支柱穴のほぼ中央部には、102×83×22cmの埋土に炭化物が少量含まれる炉跡が存在する。支柱穴や炉跡からは遺物は全く出土していない。

II) 土 壙

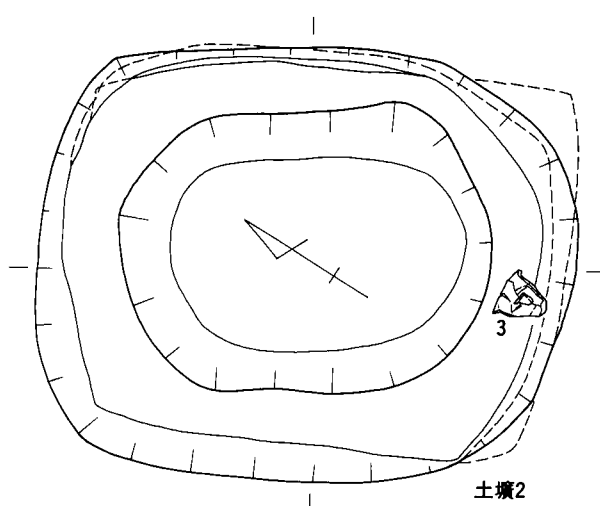
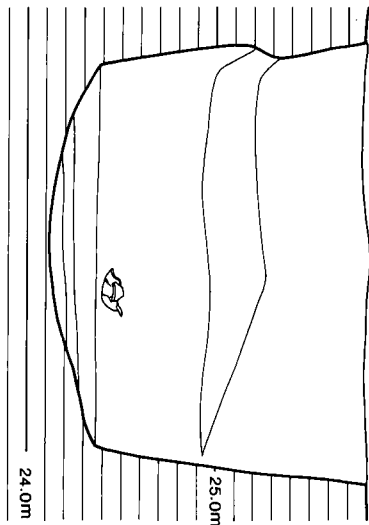
大碓遺跡では弥生時代に属する土壙を50基検出したが、その多くは竪穴住居跡とほぼ同じ前期後半~中期初頭に比定される。機能はその多くが貯蔵穴と考えられるが、部分的に纏まることはあってもそれらがどの竪穴住居跡とどのような関係にあるのか等、集落における性格的な位置づけは限定された調査範囲と著しい削平により困難であった。以下では土壙の説明を行なうが、45・46号土壙は欠番である。

2号土壙 (図版14 第25図)

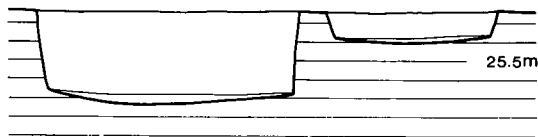
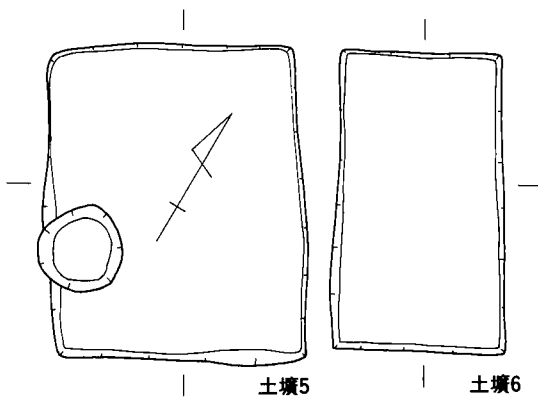
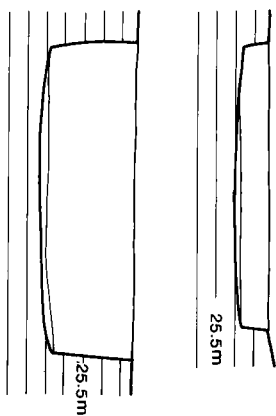
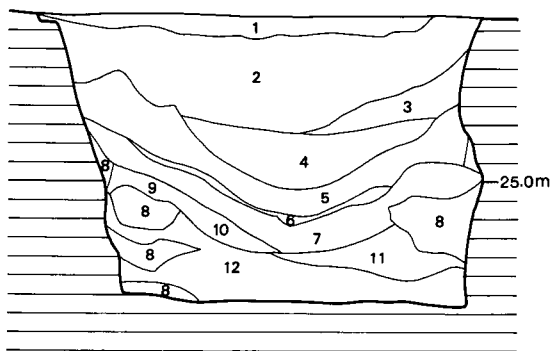
2号土壙は弥生前期末の8号竪穴住居跡の北東部に近接するが、他の遺構とは切り合い関係を全く持たない。2.9×2.3×1.7mの規模は、本遺跡の弥生時代土壙の中で2番目に大きなものである。平面・底面プランとも隅丸方形を呈し、壁は緩やかに広がって立ち上がるが崩落して挟まれる部分もある。土層断面図からこの土壙が自然堆積によって埋没していった様子が観察されるが、土壙の中位には第6層とする炭化物層が薄く全体に広がる。遺物はかなり多いが、その



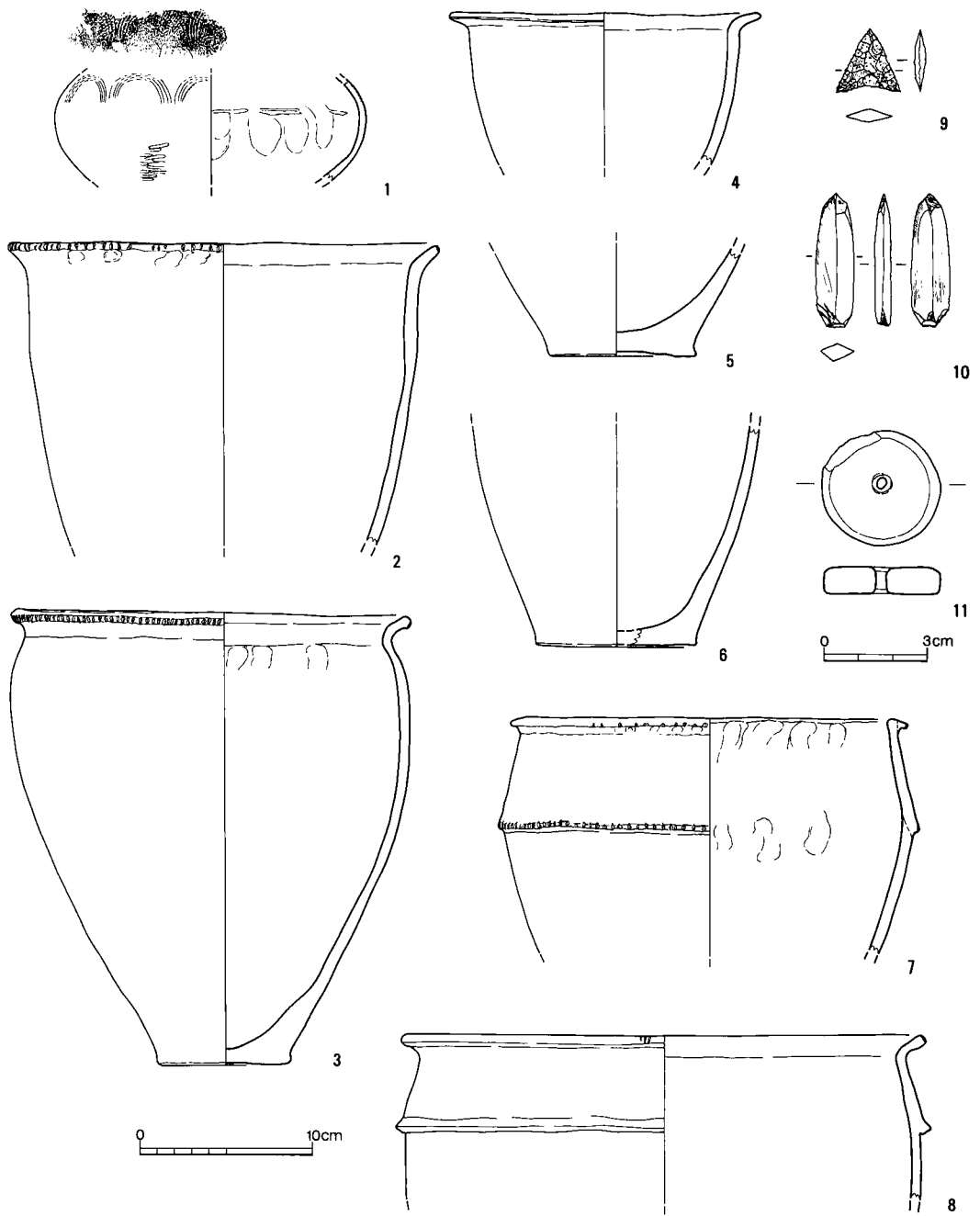
第 24 图 41~43号竖穴住居迹实测图 (1/60)



- 1. 淡褐色土 (バサバサ)
- 2. 茶褐色土
- 3. 茶褐色土 (地山の黄褐色をわずかに含む)
- 4. 茶褐色粘質土
- 5. 茶褐色土 (地山の黄褐色を多量に含む)
- 6. 炭化物層
- 7. 茶褐色粘質土 (地山の黄褐色土を多量に含む)
- 8. 黄褐色土 (地山の崩落)
- 9. 黒褐色粘質土
- 10. 黄褐色粘質土 (地山の崩落)
- 11. 黄褐色土
- 12. 黒褐色粘質土



第 25 図 2・5・6号土壌実測図 (1/40)



第 26 図 2号土壙出土土器・土製品・石器実測図 (1~8は1/4、9~11は1/2)

大半はこの第6層より下位から出土したものである。本土壙は形態、遺物の出土状況、埋土の堆積状況、前期後半という年代等から判断して、貯蔵穴という機能を有していたものと考えられる。

出土遺物（第26図） 第26図に示した11点の土器・土製品・石器のうち第6層の上位より出土したのは7の甕だけで、他はすべて第6層より下位の出土である。7は復原口径が約22cmで、内傾する口縁部の外側に刻みを施した粘土紐を貼り付け、また胴部の最大腹径部には刻みを付けた突帯文状の突出部を土器成形時の粘土紐の接合によって作出している。1は比較的小型の壺胴部で、最大腹径は約18cmを測る。二枚貝腹縁の押圧による4単位の重弧文のみが、胴部上半部に施される。外面の器面調整には丁寧な研磨が観察される。2は復原口径約25cmの甕で、口縁端部には刻みが施される。3は土壙底面においてほぼ完全な形で出土した甕で、口径23.5cm、器高26.2cmを測る。強く外反した口縁部の端部には細かい刻みが狭い間隔で施される。4は復原口径約18cmの口縁端部に刻みを持たない甕、5は底径8.7cm、6は底径7.0cmの甕底部である。8は復原口径約30cmの刻みが施されない甕で、胴部上半の突帯は7の甕と同様に粘土紐を貼り付けたものではなく、土器成形時の接合による作出である。2～8の甕については摩滅が著しく器面調整の観察ができなかったが、口縁部の成形時に付いたと考えられる指頭圧痕はその内面でしばしば窺えた。9はサヌカイト製の打製石鏃で重量0.5g。10は凌ぎが明瞭に残る粘版岩質の磨製石鏃で重量2.5g。先端部・基部ともに欠損した後の研ぎ直しが窺える。11の有孔土製円盤は径3.5cm、厚さ0.8cm、重量11.6gを測る。

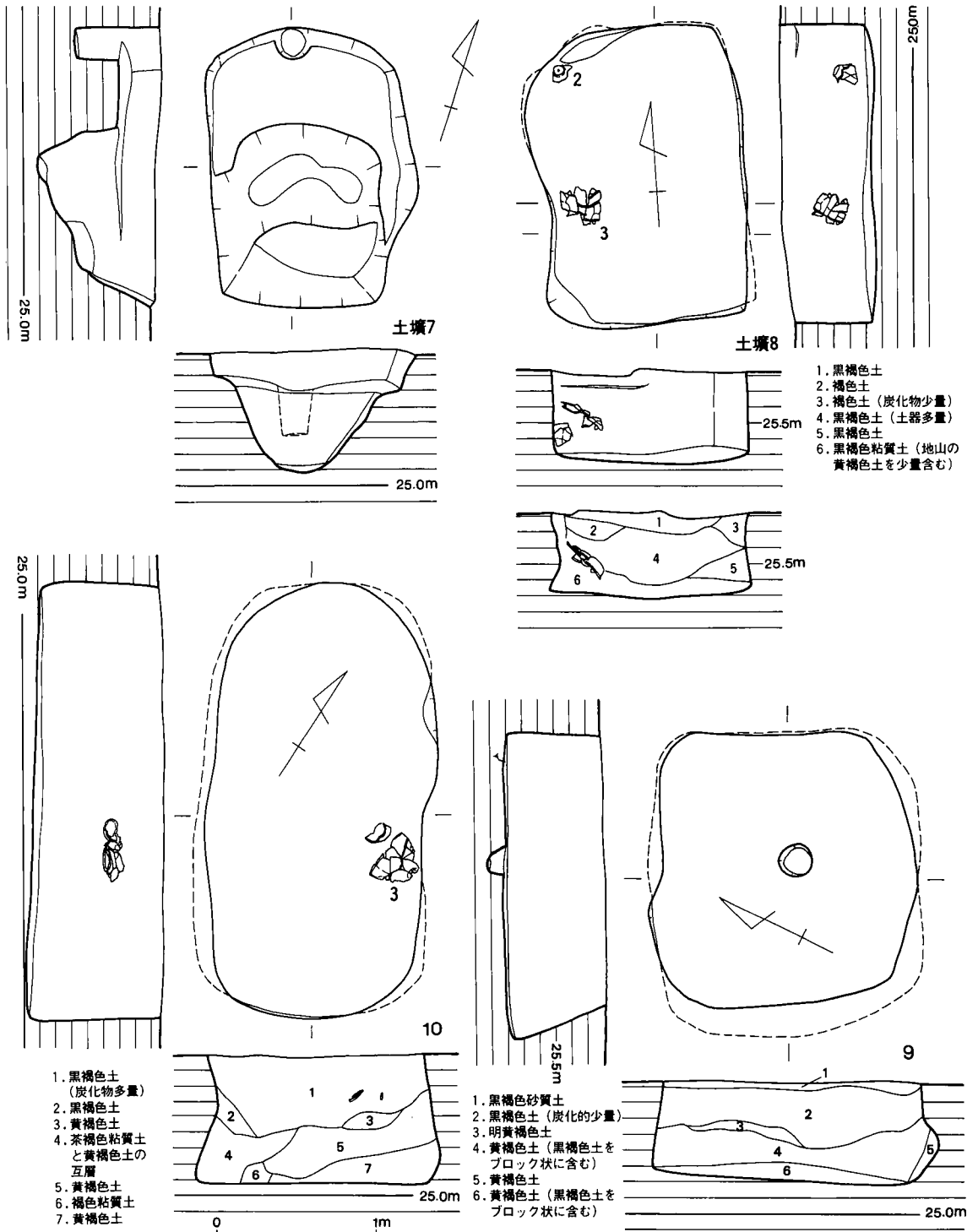
5・6号土壙（図版15 第25図）

5・6号土壙は調査区東端の1号竪穴住居跡の東1.5mに位置する。5号土壙は1.6×1.3×0.5mの長方形プラン、6号土壙も1.6×0.9×0.2mの長方形プランを呈するが、長軸の長さと同方向が等しく、また20cmの距離をおいて並列することなどから、おそらくほぼ同時期に掘り込まれた遺構と考えられる。遺物は小さくて摩滅した弥生土器片が数点出土ただけで、埋土は土層断面から自然堆積の様子が観察された。貯蔵穴とも墓壙とも決めがたく、その性格は不明である。

7号土壙（図版16 第27図）

7号土壙は調査区東側12号竪穴住居跡の北東隅から約0.5mの位置に近接する。1.8×1.3×0.7mのほぼ長方形に近い平面プランを呈するが、壁は極く緩やかに開いて立ち上がる断面U字形となり、北側に大きなテラス状の段を有する。北壁の中央部には壁に接した径20cm、深さ50cmの柱穴が伴うが、これが本土壙においてどのような役割を果たしていたかは判然としない。遺構の形態は他の貯蔵穴とは大きく異なり、また遺物から年代的にも中期前半代と他に比べてやや新しく、その性格には注意を払いたい。

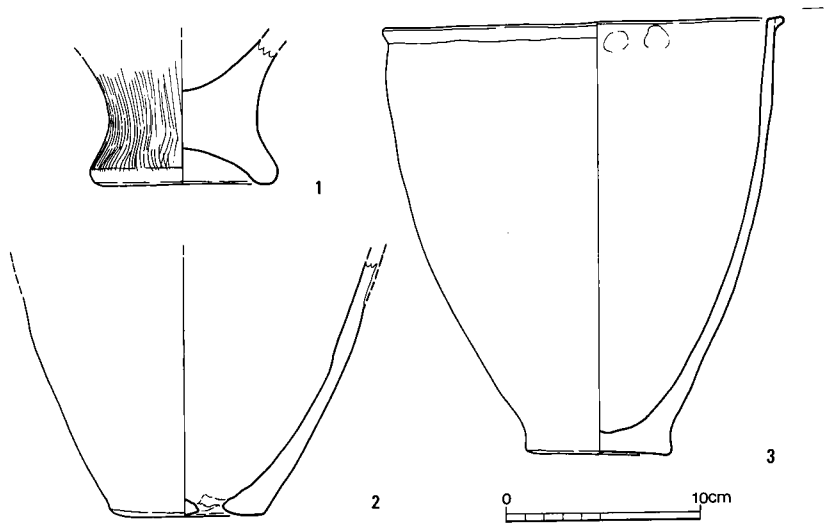
出土遺物（第28図） 遺物は少なく、図示できたのは第28図1の外面にハケ目が明瞭に残る上げ底状の甕底部である。底径10cm。



第 27 図 7~10号土壌実測図 (1/40)

8号土壙 (図版
16 第27図)

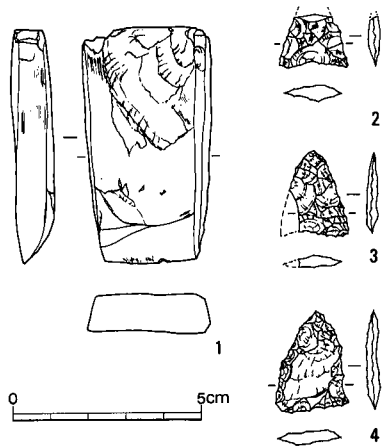
8号土壙は7号土壙の北東2mに位置し、1.9×1.3×0.6mの規模を測る。本来は壁がほぼ垂直に立ち上がる整った長方形であったと考えられるが、土壙の西側は大きく崩れて不定形となり壁も抉



第28図 7・8号土壙出土実測図 (7号は1、8号は2・3 1/4)

れる。ただし、この崩落による埋土の堆積は土層断面図では観察されないで、それが掘削時によるものである可能性が強い。底面付近からの遺物の出土はほとんど見られないが、土層断面図からこの土壙の埋没過程で比較的残りの良い土器が混入している様子が窺える。

出土遺物 (第28図) 2は焼成前に底部が穿孔された甕の胴下半部。3は完形近くまで復原できた甕で、口径21.5cm、器高23.5cmを測る。直線的に立ち上がる口縁部の外側に粘土紐を貼り付けるが、刻みは施されない。



第29図 9号土壙出土石器実測図(1/2)

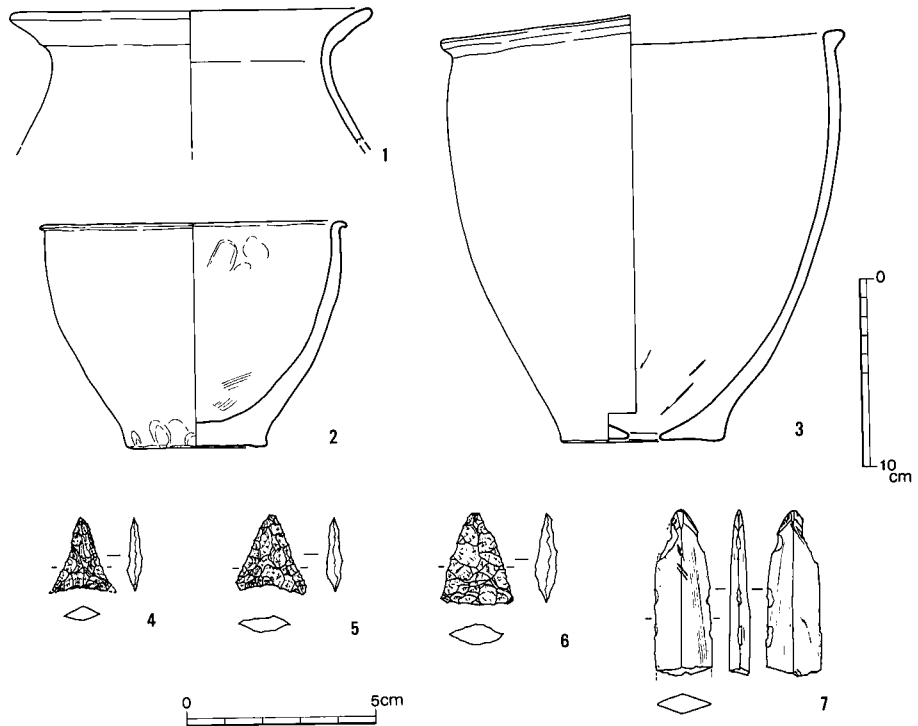
9号土壙 (図版17 第27図)

9号土壙は調査区の北東隅で検出された貯蔵穴で、1.7×1.6×0.6mの隅丸方形を平面プランとする。壁は全体的に崩落して抉れ、底径は2.0×1.7mと広くなり、その中央部に径20cm、深さ15cmの浅い柱状の窪みがある。土層断面図の第5・6層は壁が崩落した土であろう。遺物は少なく摩滅した弥生土器小片が埋土中から出土したが、底面付近からは石鏃3点と石斧1点が出土した。

出土遺物 (第29図) 1は頁岩質で磨製の扁平片刃石斧である。基端部はわずかに欠けるがほぼ完全な形で、6.1×3.6×1.0cmを測る。2・3はチャート製、4はサヌカイト製の打製石鏃で、重量は2が0.9g、3が0.9g、4が1.8gを量る。

10号土壙 (図版18 第27図)

10号土壙は弥生前期後半の21号竪穴住居跡の南東3.5mに位置する貯蔵穴である。平面



第30図 10号土壙出土土器 (1/4)・石器 (1/2)実測図

プランは2.7×1.5×0.8mの長楕円形で、本来壁は直線的に真っ直ぐに立ち上がっていたと考えられるが、全体的に崩落して若干挟れている。遺物は必ずしも多いほうではなく、土層断面図第1層の下面である土壙中位より比較的纏まって出土したが、これらは当然埋没過程で混入したものである。また、底面付近からは石鏃が4点出土した。

出土遺物 (第30図) 1は復原口径約19cmの壺で、口縁部と頸部の境には成形時における粘土紐の接合によって段が作出されている。2は口径16cm、器高12cmの鉢である。口縁端部は摘み出すように強く外反しており、内面の底部付近にはハケ目がわずかに残る。3は復原口径約21cm、器高22.5cmの甕で、底部には焼成前の穿孔がある。歪みの大きい口縁部には粘土紐が貼り付けられているが、刻みは施されない。内面の底部付近にハケの工具痕がわずかに残るだけで、全体的に摩滅が著しく器面調整は窺えない。4～6はいずれもサヌカイト製の打製石鏃で、欠損はほとんど見られない。重量は4が0.8g、5が1.0g、6が2.3g。7は粘版岩質の磨製石鏃で重量は3.7g、先端部から4.4cmだけ残存する。凌ぎや研磨痕も明瞭に残る。

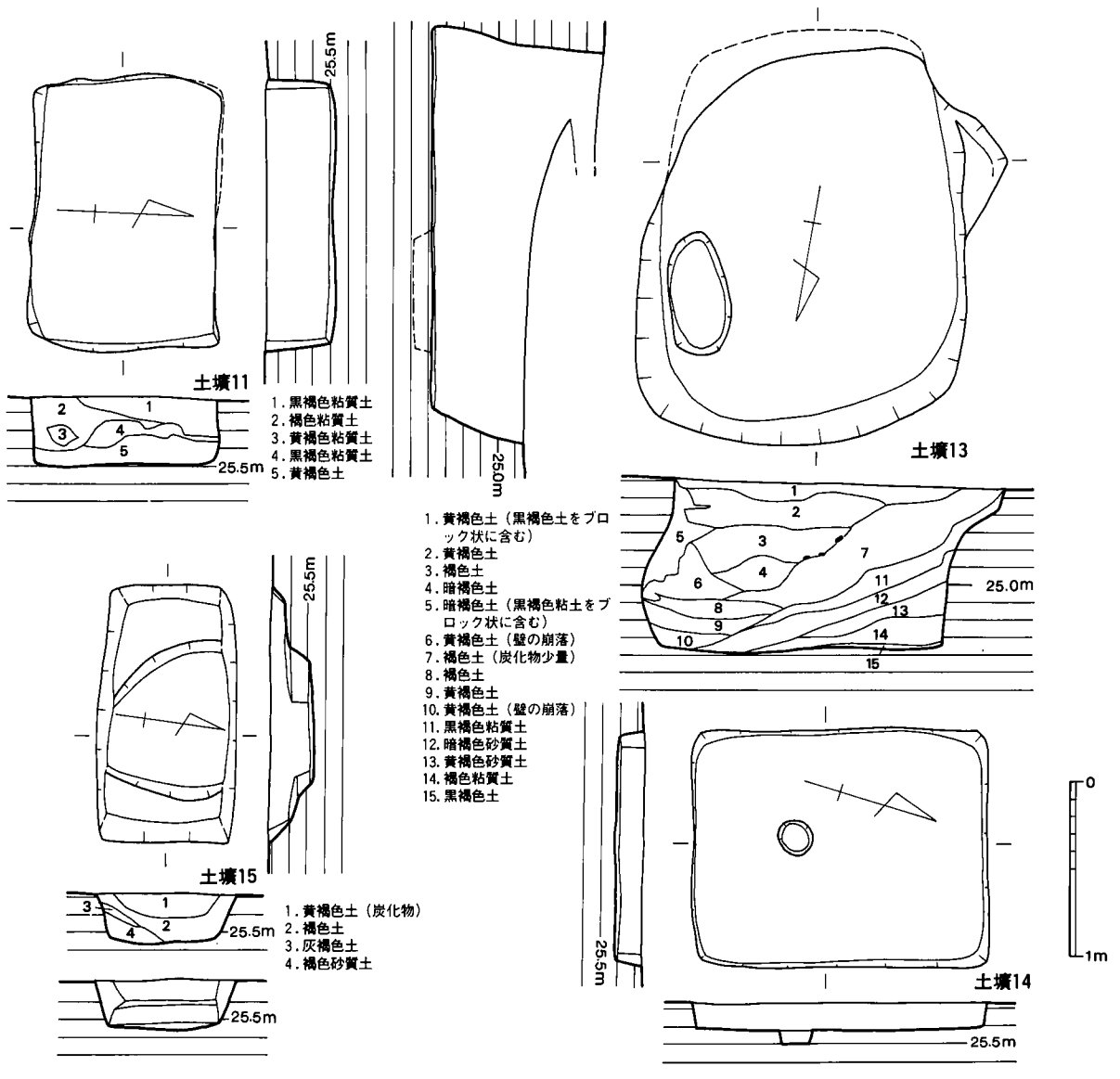
11号土壙 (図版19 第31図)

11号土壙は弥生前期後半の6号竪穴住居跡の北西約3mに位置する。1.5×1.0×0.5mの規模で長方形の平面プランを呈する。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、崩落は部分的にしか窺えない。

遺物は極く少なく弥生土器小片が数点出土しただけであるが、他の土壙との比較からおおよそ弥生前期後半の貯蔵穴と考えられる。

13号土壙 (図版19 第31図)

13号土壙は調査区中央部北端で検出された貯蔵穴であるが、北側2/3は大きく削平されている。そのため平面プランははっきりしないが、恐らく隅丸方形を呈していたものと考えられる。現時点での平面規模は2.2×1.8mで、最も深く残っている部分で1.0mを測る。西壁には小さ



第 31 図 11・13～15号土壙実測図 (1/40)

なテラスがあるが、これは崩落によるものであろう。また、底面の東壁寄りには深さ15cm程度の浅い落ち込みがあるが、柱などが建った痕跡は窺えない。南壁の抉れも崩落によるものであろう。遺物は極めて少なく、弥生土器小片がわずかに出土した。

14号土壙 (図版20 第31図)

14号土壙は13号土壙の南1mに位置する。1.7×1.3×0.2mの長方形を平面プランとし、底面の中央部やや南寄りに10cmほどの小さな柱穴が存在する。遺物は小さな弥生土器片が数点出土しただけである。平面プランやその規模から判断すると貯蔵穴としてもほとんど問題ないが、他の遺構と比べてみてもあまりにも浅く、別の機能を有した遺構と考えたほうが無難であろう。

15号土壙 (図版20 第31図)

15号土壙は調査区の中央部北端で、14号土壙の東約1mに位置する。平面プランは長方形で1.5×0.8mの規模を測るが、長軸両端部にはテラス状の段を有し、中央部が深さ25cmで1段深くなる。小さな弥生土器片が数点出土しただけであり、形態的にも規模的にも貯蔵穴とは異なったものと考えられる。

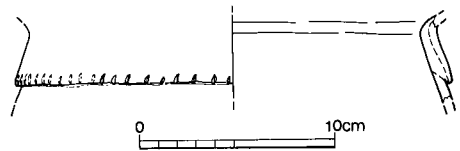
16号土壙 (図版21 第32図)

16号土壙は調査区中央部で、23号土壙の北西1m、20号土壙の南東5mに位置する。平面プランは2.0×1.3mの楕円形を呈するが、底面にはいくつかのテラスが作られ平坦ではなく、最も深いところで0.7m

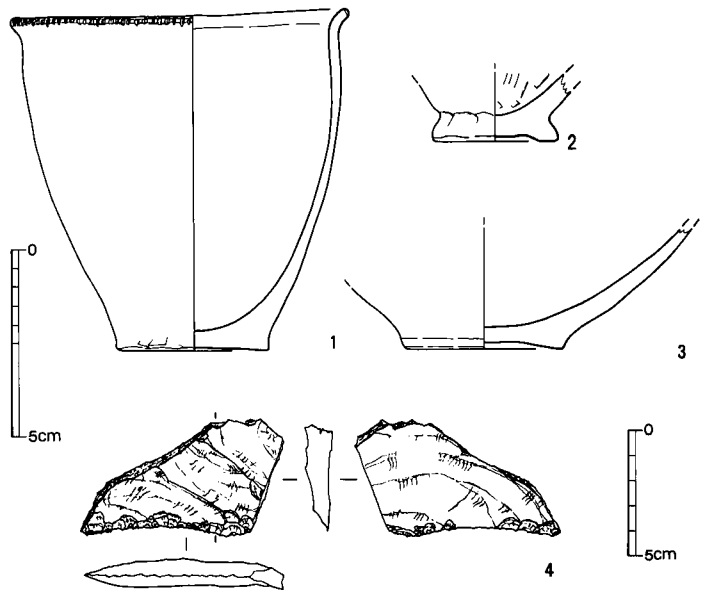
を測る。壁は緩やかに立ち上がり断面U字形を呈するが、これは崩落によるものではないことが土層断面図から窺われる。遺物は少なく、弥生土器小片が若干出土しただけである。形態的には他の土壙とやや異なるが、貯蔵穴と考えて大過ないであろう。

17号土壙 (図版22 第32図)

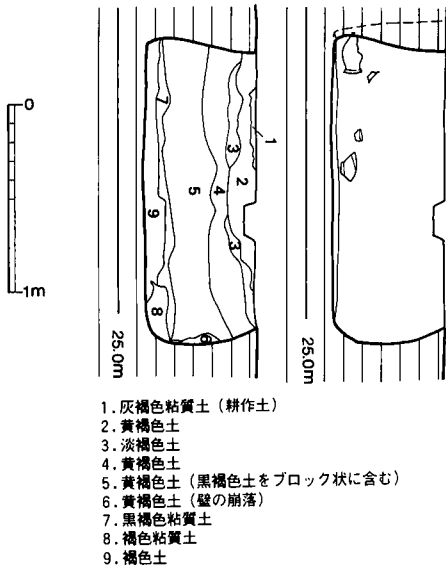
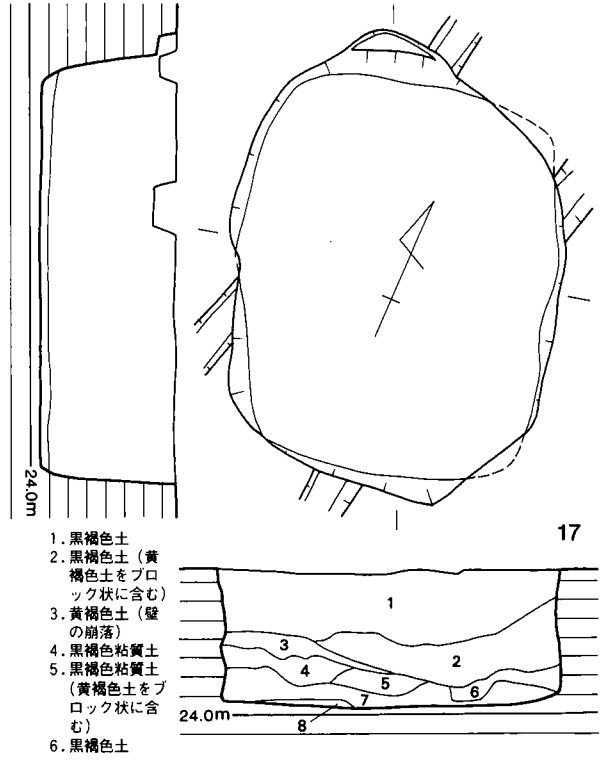
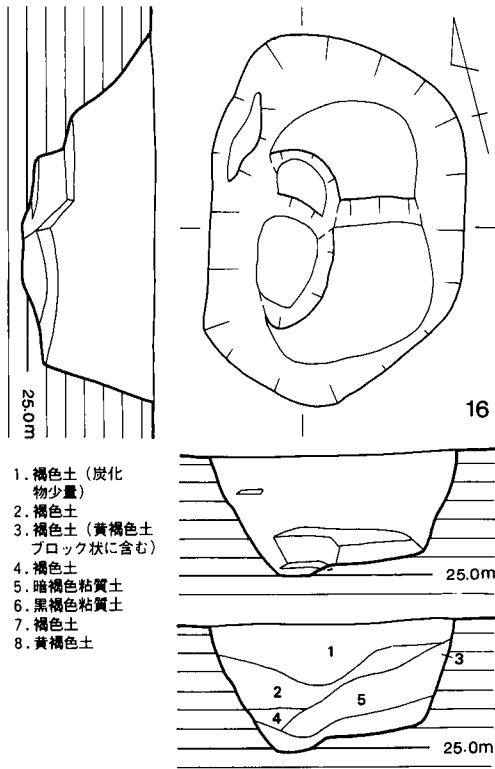
17号土壙は21号竪穴住居跡の南西約3m、15号土壙の南東約3mに位置する。規模は2.4×1.8×0.7mを測り、隅丸方形に近い楕円形を呈す



第 32 図 17号土壙出土土器実測図(1/4)



第 33 図 18号土壙出土土器(1/4)・石器(1/3)実測図



第 34 図 16~18号土坑実測図 (1/40)

る。壁はほぼ直線的に立ち上がるが、崩落による抉れが部分的に窺える。

出土遺物（第33図） 遺物はやはり少ないが、第33図の弥生土器の甕をかりうじて実測することができた。この土器は口縁部が欠落するが、復原径は約22cmを測る。刻みが施されている部分は粘土紐を貼り付けたものではなく、土器成形時の接合によって作出されたものであることが土器の断面観察によって知られる。

18号土壙（図版22 第32図）

18号土壙は調査区のほぼ中央部で、後述する19号土壙の北約1mに位置する。1.9×1.5×0.6mの規模を有し、隅丸方形の平面プランを呈する。壁は本来ほぼ直線的に立ち上がっていたものと考えられるが、全体的に崩落して抉れ、底面の規模がやや大きくなっている。遺物は少ないながらも底面付近に比較的纏まっている。

出土遺物（第34図） 1は復原口径約18cm、器高18.5cmの甕で、口縁端部には刻みが施される。摩滅により器面調整はほとんど窺えないが、外面底部付近にのみハケ工具の痕跡が観察される。2は底径5cmの甕底部である。内面にハケ工具痕が窺える。3は底径6.5cmの壺底部である。摩滅により器面調整は不明。4はサヌカイト製のスクレイパーで、欠損のため全体の2/3程度しか残っていないようである。刃部の反対側には自然面が残る。

19号土壙（図版23 第35図）

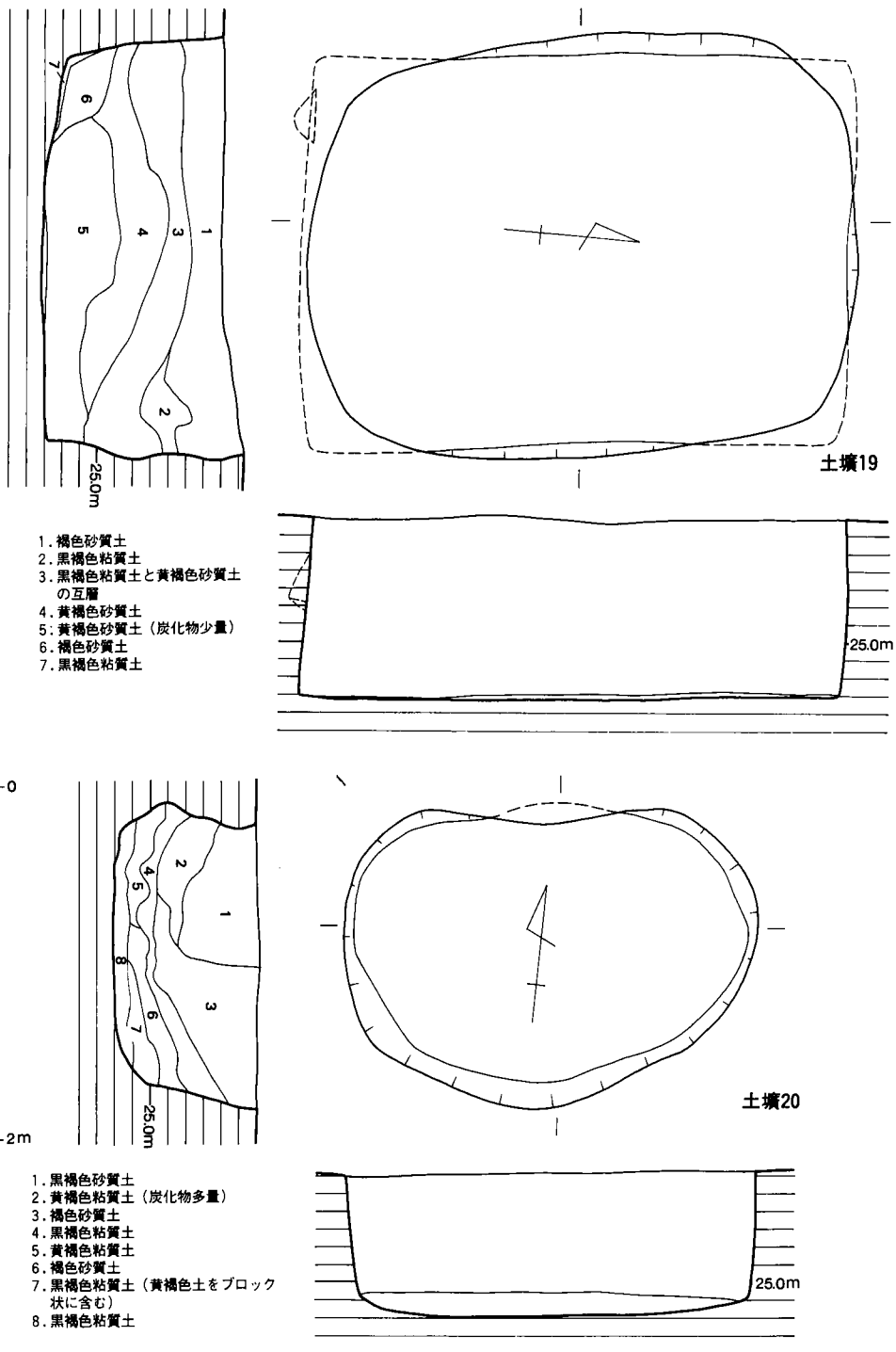
19号土壙は調査区のほぼ中央部で、18号土壙の南1mに位置する。規模は本遺跡最大の3.1×2.4×1.0mを測り、隅丸方形の平面プランを呈する。壁は部分的に崩落しながらもおよそ直線的に立ち上がり、底面プランは長方形となる。南壁の西寄りには小さく掘り込まれた部分があるが、これはあるいは足掛けの機能を有していたものかもしれない。これだけ大きな貯蔵穴においても遺物の出土は極くわずかで、小さな弥生土器片のみで図示できるものはなかった。

20号土壙（図版24 第35図）

20号土壙は調査区のほぼ中央部で、21号土壙の南4mに位置する。楕円形を平面プランとするこの貯蔵穴は、2.3×1.7×0.8mの規模を有する。壁は直線的もしくは緩やかに開いて立ち上がるが、北壁の中央部だけは崩落して大きく抉れている。少量の弥生土器小片だけでやはり図示できるものはなかったが、土層断面図第3層からは第2図1に示した曾畑式土器が1個体分出土している。当初、本土壙を縄文時代の遺構として調査を進めたが、この曾畑式土器が弥生土器片と混在して包含されていたこと、第3層より下位の層からは弥生土器しか出土しないこと、曾畑式土器の摩滅が特に著しかったことなどから、この貯蔵穴が埋没する過程で混入したという結論に至った。曾畑式土器の特徴については「縄文時代の遺構と遺物」で詳述しているのでそちらを参照して頂きたい。

21号土壙（図版25 第36図）

21号土壙は調査区の中央部で、20号土壙の北4mに位置する。1.9×1.3×0.5mの規模を有す

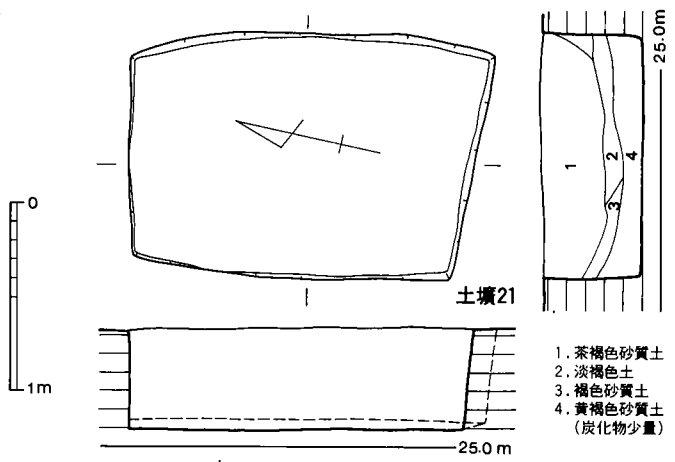


第 35 図 19・20号土壌実測図 (1/40)

るこの貯蔵穴は、平面プランは長方形を呈し、壁も崩落することなくほぼ直線的に立ち上がる。遺物は極めて少なく、弥生土器小片が数点出土しただけである。

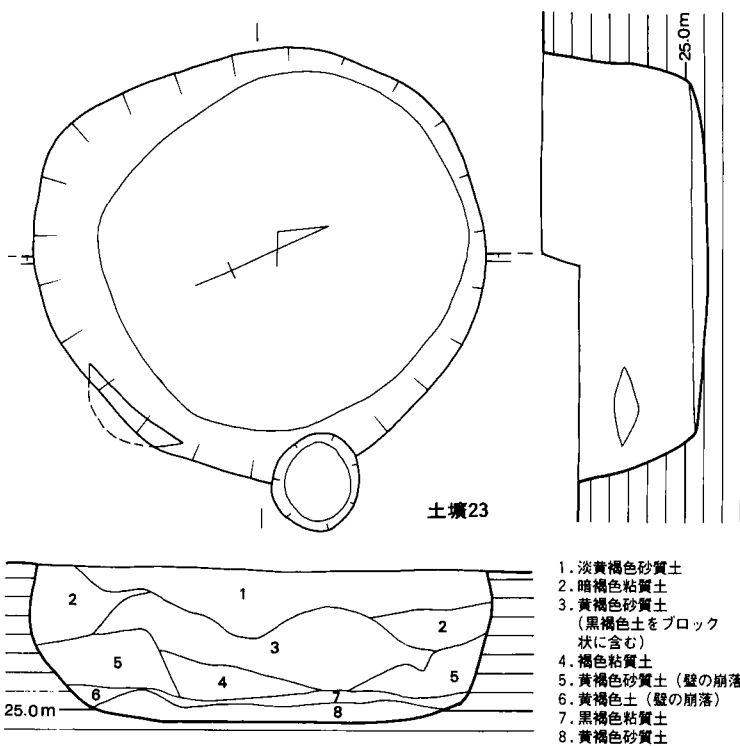
22号土壙 (図版26 第37図)

22号土壙は調査区中央部の南端で、3号溝の東肩に接するような位置にある。平面プランは2.9×2.4mの楕円形を呈するが、土壙内には大きく2段のテラスがその北側に形成され、底面は2.2×1.1mの不定形で深さ1.2mを測る。遺物は少量の弥生土器小片だけで、図示できるものはなかった。形態的には他の土壙と異なるが、弥生前期後半頃の貯蔵穴と考えるのが最も無難であろう。

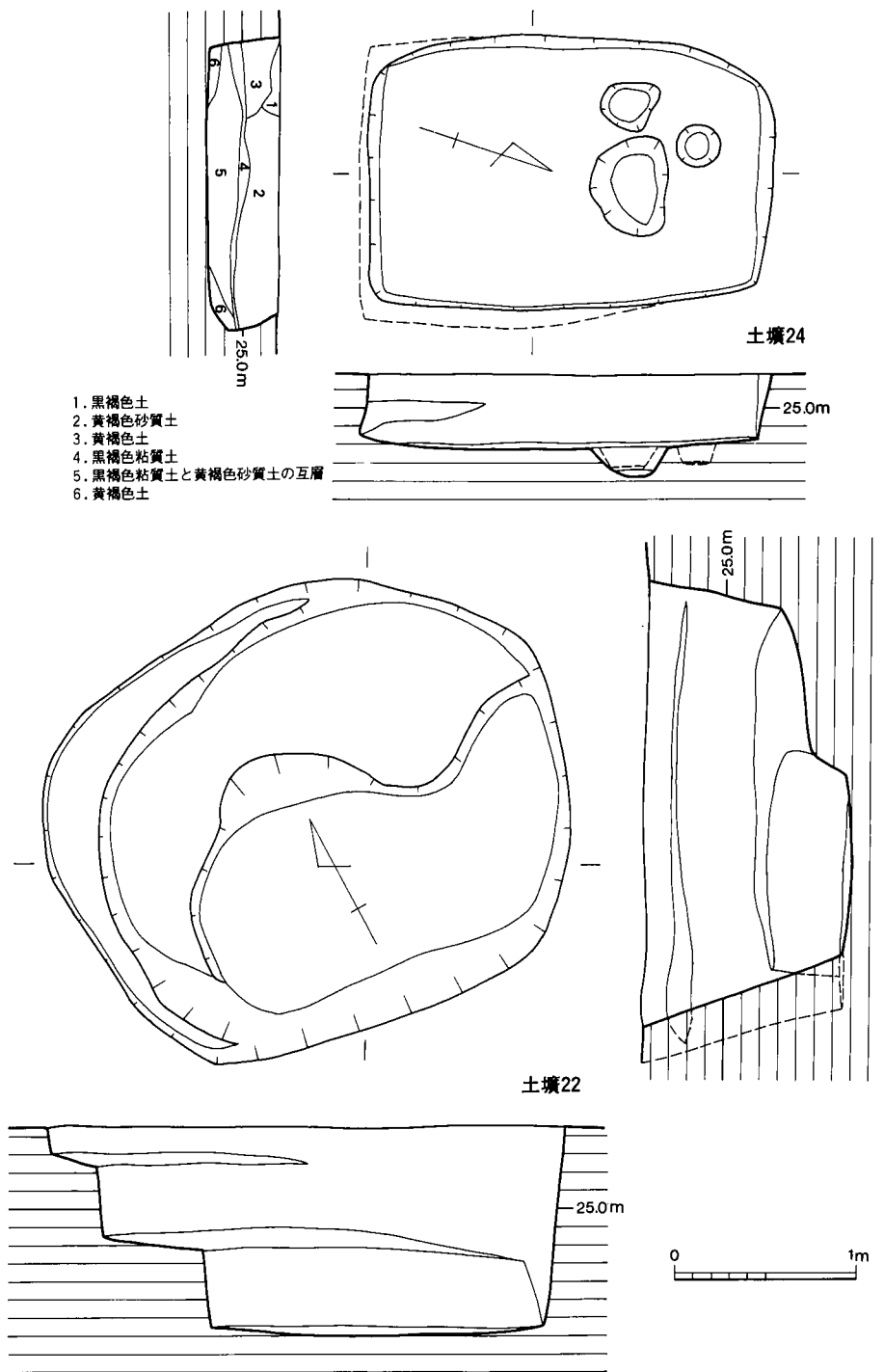


23号土壙 (図版27 第36図)

23号土壙は調査区の中央部で、16号土壙の南東1mに位置し、古墳時代の23号竪穴住居跡に切られる。そのため土壙上部の東側半分が大きく削平されているが、2.4×2.3×0.8mのほぼ正円形に近い底面プランを呈している。壁は緩やかに開くように立ち上がっている



第 36 図 21・23号土壙実測図 (1/40)



第 37 図 22・24号土壙実測図 (1/40)

が、これは土層断面図第5・6層の存在が示すように壁の崩落によるものである。遺物は少なく、図示できない弥生土器小片ばかりである。

24号土壙 (図版28 第37図)

24号土壙は調査区中央部の北端で、13号土壙の北1mに位置する。この付近は遺跡自体が大きく削平されているところで、土壙の残りも40cm程度しかない。平面プランは2.3×1.5mを測る長方形で、南壁と東壁は崩落により若干挟れている。底面北側にはピット状の穴が3基存在するが、いずれも20cm前後と浅く、落ち込み状の窪みといったほうが適当かもしれない。遺物は少なく、弥生土器小片だけである。

25号土壙 (第38図)

25号土壙は調査区中央部南端の拡張区で検出された貯蔵穴である。1.5×1.2×0.3mの規模を有する長方形を平面プランとし、壁は崩落もなくほぼ垂直に立ち上がる。埋土は自然堆積によるもので、遺物は弥生土器小片だけである。

28号土壙 (図版29 第40図)

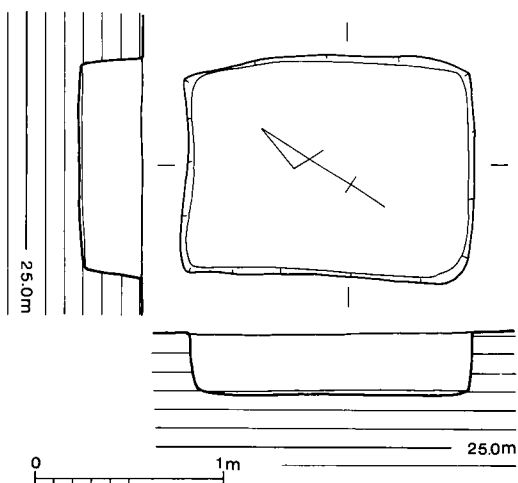
28号土壙は調査区中央部南寄りに位置し、弥生前期後半の32号竪穴住居跡や古墳時代後期の29号竪穴住居跡に切られる貯蔵穴である。規模は1.8×1.5×0.7mを有し、平面プランは楕円形を呈する。壁は緩やかに開いて立ち上がるが、南西壁の下部だけは崩落により大きく挟れている。底面中央部には径10cm、深さ15cmの柱穴が存在する。遺物は少なく、弥生土器小片のみである。

29号土壙 (図版29 第40図)

29号土壙は調査区中央部南寄りで、30号土壙の東3mに位置する。この土壙は大きく削平され深さはわずかに10~15cm程度しか残っておらず、遺構としての性格判断が難しいが、当遺跡の状況を考慮すれば貯蔵穴と考えるのが最も適当であろう。平面プランは1.3×1.3mのほぼ正円形を呈し、底面中央部には径40cm、深さ30cmの柱穴が残る。遺物は比較的多く出土したが、いずれも弥生土器の甕の胴部破片が主体を占め図示できるものはなかった。

30号土壙 (図版30 第40図)

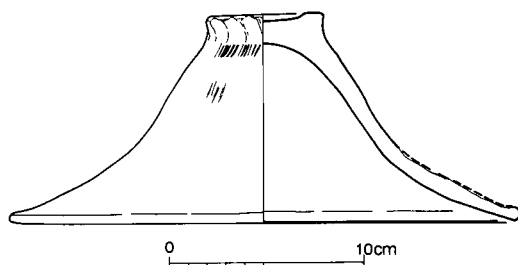
30号土壙は調査区中央部の南寄りで、29号土壙の西3m、33号竪穴住居跡の北1.5mに位置する。土壙の北側1/4は削平され全く残っていないが、径1.5m程度の規模を有する正円形に近い平面プランを呈していたものと考え



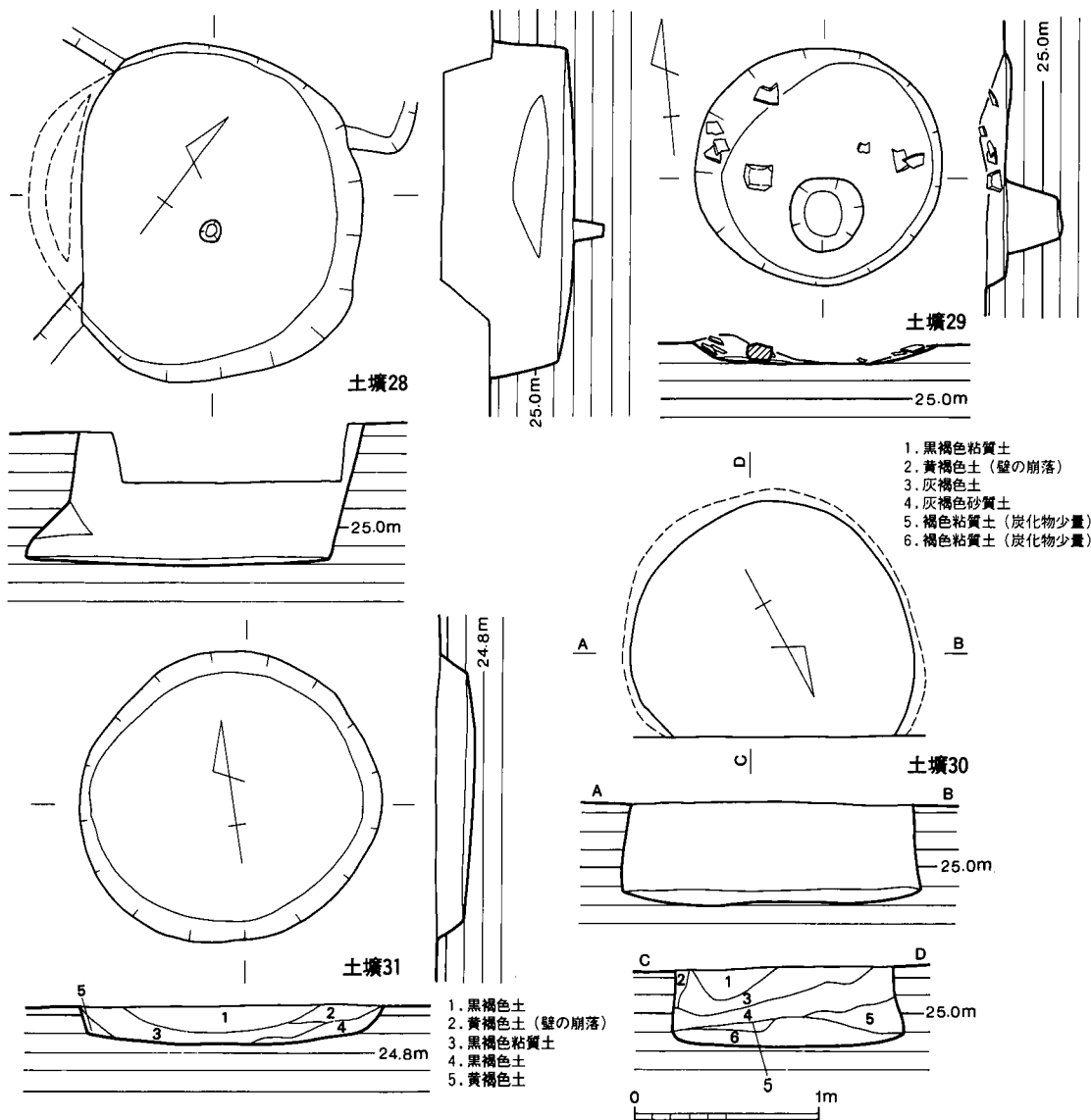
第 38 図 25号土壙実測図 (1/40)

られる。壁は全体的に内傾ぎみに立ち上がるため、底面は径1.6m程度とやや広くなる。

出土遺物 (第39図) 遺物は少なかったが、土層断面図中第3層としたものの下位から第37図に示した甕の蓋が出土した。復原口径約27cm、器高11.3cm。摩滅が著しい



第 39 図 30号土壙出土土器実測図 (1/4)



第 40 図 28~31号土壙実測図 (1/40)

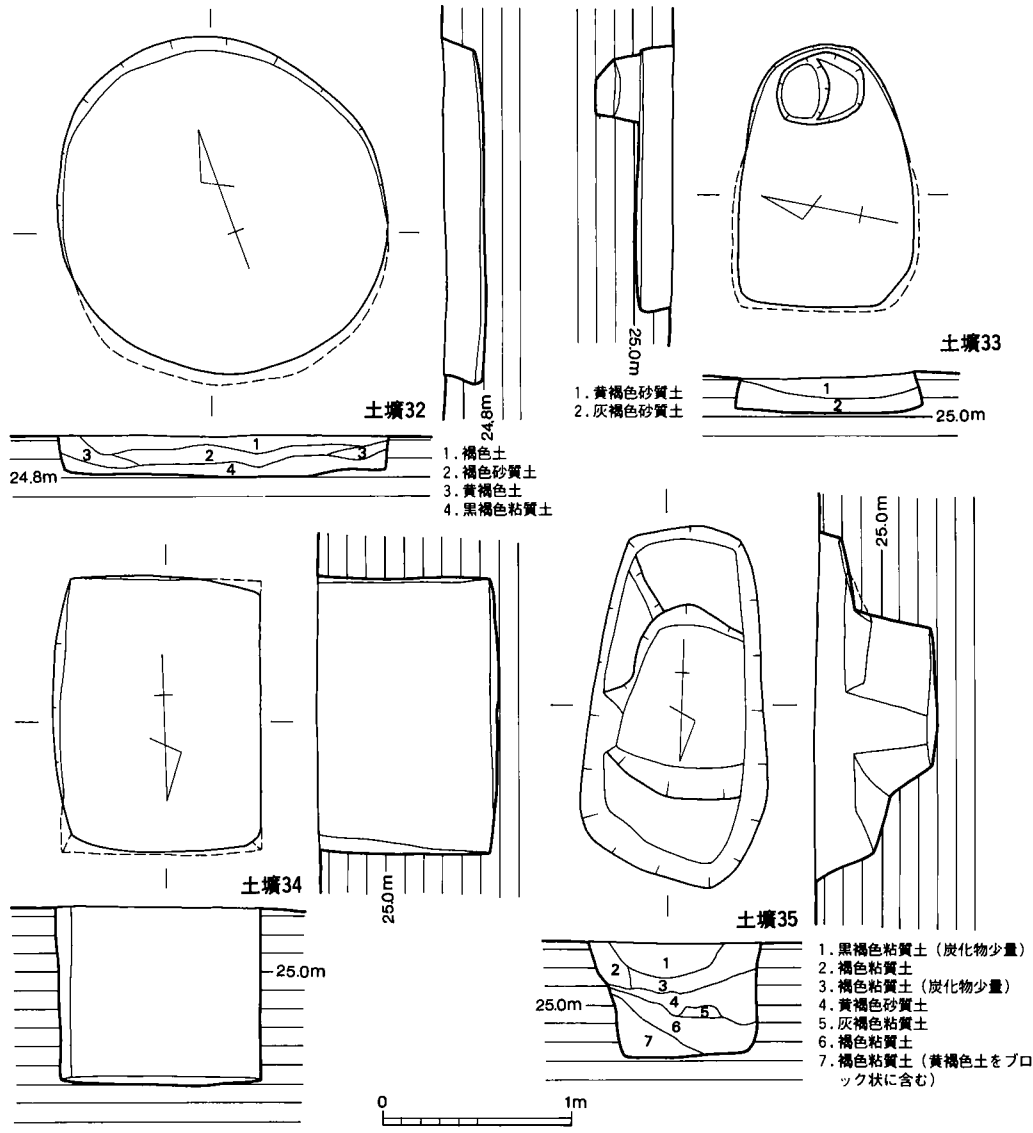
ながらも外面にはハケ目がわずかに残り、頂部には指頭圧痕が比較的明瞭に窺える。



31号土壙 (図版31 第40図)

31号土壙は調査区中央部に位置し、32号土壙に極く近接する。このあたりは特に削平の著しいところで、この土壙も深さは20cmほどしか残らない。1.6×

第41図 31号土壙出土
石器実測図 (1/2)



第 42 図 32~35号土壙実測図 (1/40)

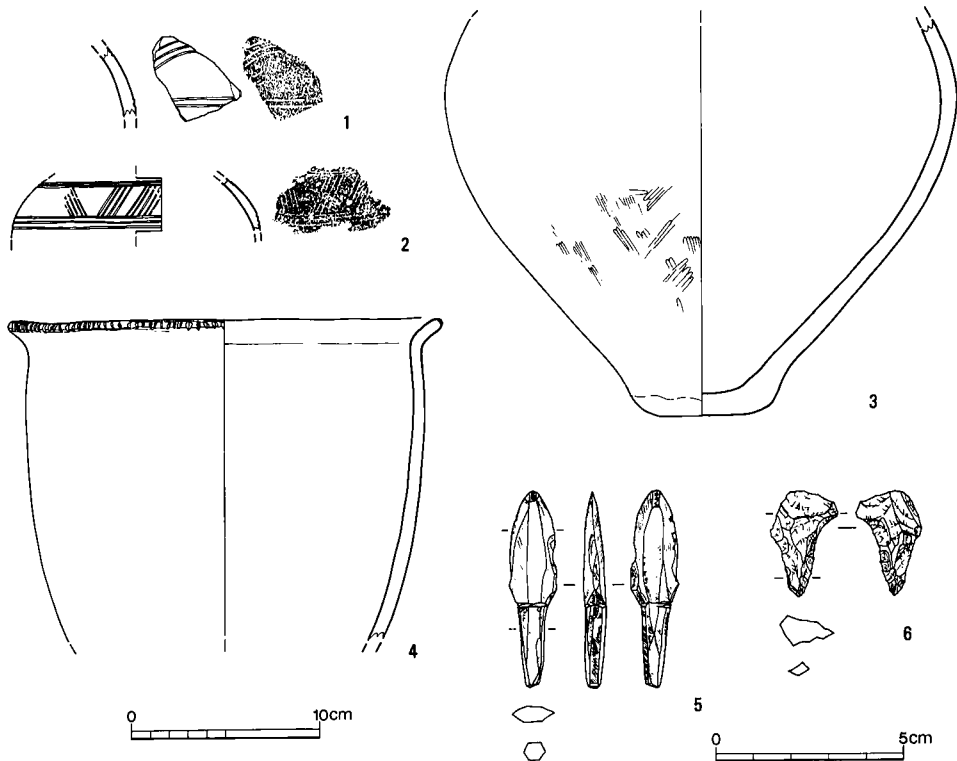
1.6mのほぼ正円形を呈する。規模や形態から判断して、貯蔵穴と考えるのが適当であろう。遺物は第41図に示した1.4gのサヌカイト製の石鏃だけで、土器は全く出土していない。

32号土壙 (図版31 第42図)

32号土壙は前述の31号土壙に極めて近接する貯蔵穴である。1.8×1.8×0.2mのほぼ正円形で、規模・深さ・プランとも31号土壙に類似する。遺物は弥生土器小片が数点出土しただけである。

33号土壙 (図版32 第42図)

33号土壙は弥生前期後半の30号竪穴住居跡の範囲内で検出された土壙である。平面プランは1.4×0.9×0.2mを測る卵形楕円形で、底面東端に径40cm、深さ30cmの柱穴を有する。問題はこの柱穴で、調査時点では土壙の底面まで掘り下げ初めてその存在に気づいたものである。30号竪穴住居跡は周溝を有する6本柱の円形住居であるが、33号土壙と切り合っている部分については著しい削平によりすでに地山が剥き出しになっていた。したがって、両者の切り合い関係は不明であったが、30号住居跡の柱の配置を考慮するなら、33号土壙底面に存在する柱穴は30号住居の支柱穴の1つである可能性が非常に高くなる。つまり、調査時の所見からすれば33



第 43 図 34号土壙出土土器 (1/4)・石器 (1/2) 実測図

号土壙が30号堅穴住居跡を切っていたことになるのである。なお、33号土壙からは弥生土器小片が数点出土しただけである。

34号土壙 (図版33 第42図)

34号土壙は弥生前期後半の30号堅穴住居跡を切る貯蔵穴である。規模は1.5×1.1×0.9mを測り、長方形を平面プランとする。調査の都合上土層断面を残すことができなかったが、壁の崩落などはなく、直線的に立ち上がっているのが印象的である。遺物は比較的多いがいずれも埋土中に包含されていたもので、底面付近からはほとんど出土していない。

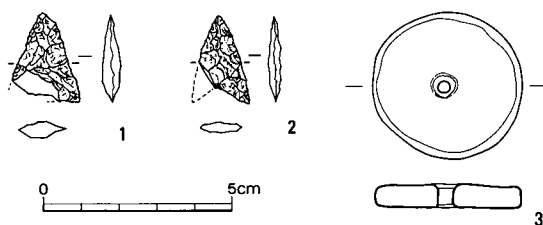
出土遺物 (第43図) 1は壺胴部上半の破片で、最大腹径部に2本の沈線文と、その上に3本単位沈線文による重弧文が施される。径は復原できなかったが、比較的大きいサイズになるであろう。2も1とほぼ同じ部分の壺の破片であるが、復原径は約13cmで比較的小さい。最大腹径部に3本の沈線文を、頸部と胴部の境には2本の沈線文を施し、その間を4ないし5本単位の沈線文による平行斜線文で充填する。3は復原最大腹径約28cmの比較的大きな壺である。外面の胴部下半には研磨による器面調整がわずかに観察される。この土器で注意されることは、距離にして約70m西に離れた52号土壙出土土器片と接合したことである。また、両土壙の土器片は遺存状態や色調が微妙に異なり、器面調整の研磨が観察されたのは52号土壙の土器片だけであることにも注目したい。4は復原口径約23cmの甕で口縁端部には刻みを施すが、摩滅により器面調整は窺えない。5は粘版岩質の磨製石鏃で何度も研ぎ直されたためか、片面の凌ぎはなくなり基部と繋がる平坦な面を作っている。重量は3.6g。6はサヌカイト製の石錐で、先端部は使用によりかなり摩滅して鋭さがなくなっている。

35号土壙 (図版32 第42図)

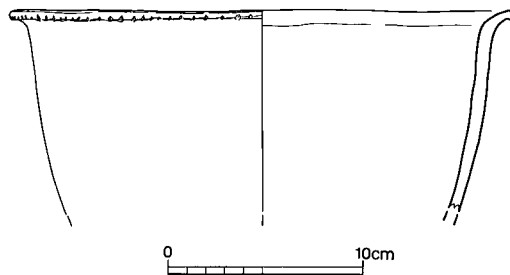
35号土壙は調査区中央部南寄りに位置し、33号堅穴住居跡を切る土壙である。1.9×0.9mの長楕円形を平面プランとするが、長軸両端部にはテラス状の段を作り、底面は0.8×0.6mの長方形プランで深さ60cmを測る。遺物は弥生土器小片が数点出土しただけであるが、また形態も特異なものであるが、貯蔵穴と考えるのが適当であろう。

36号土壙 (図版34 第46図)

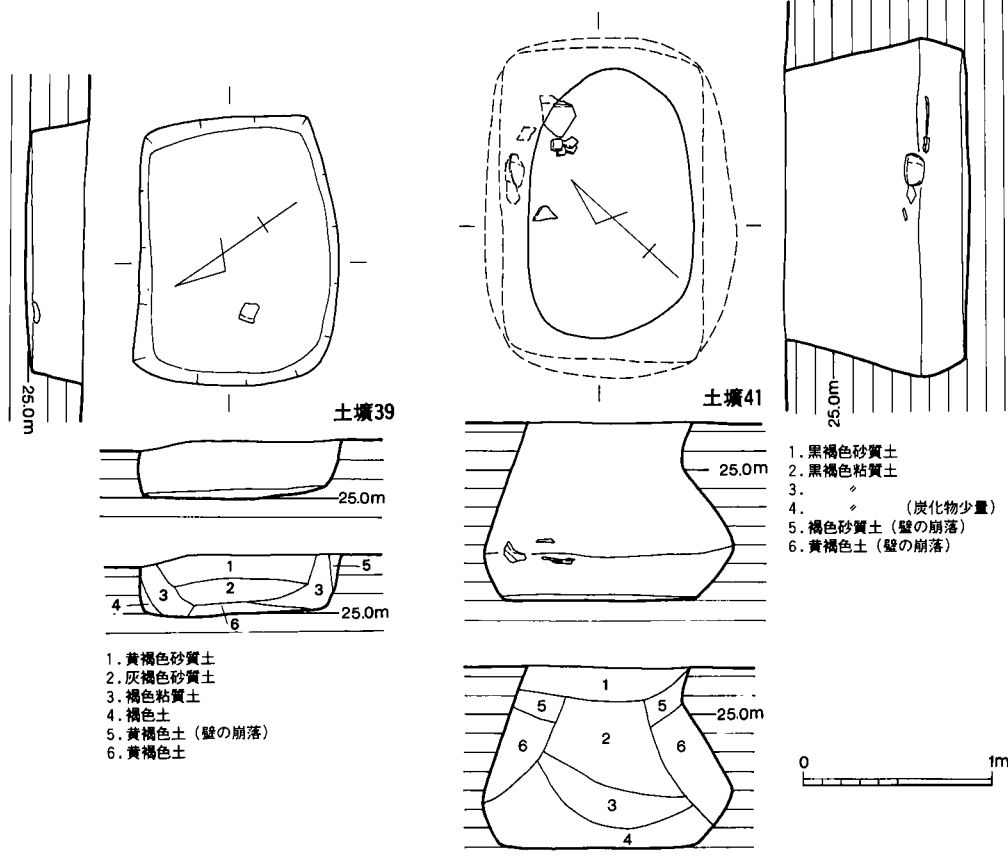
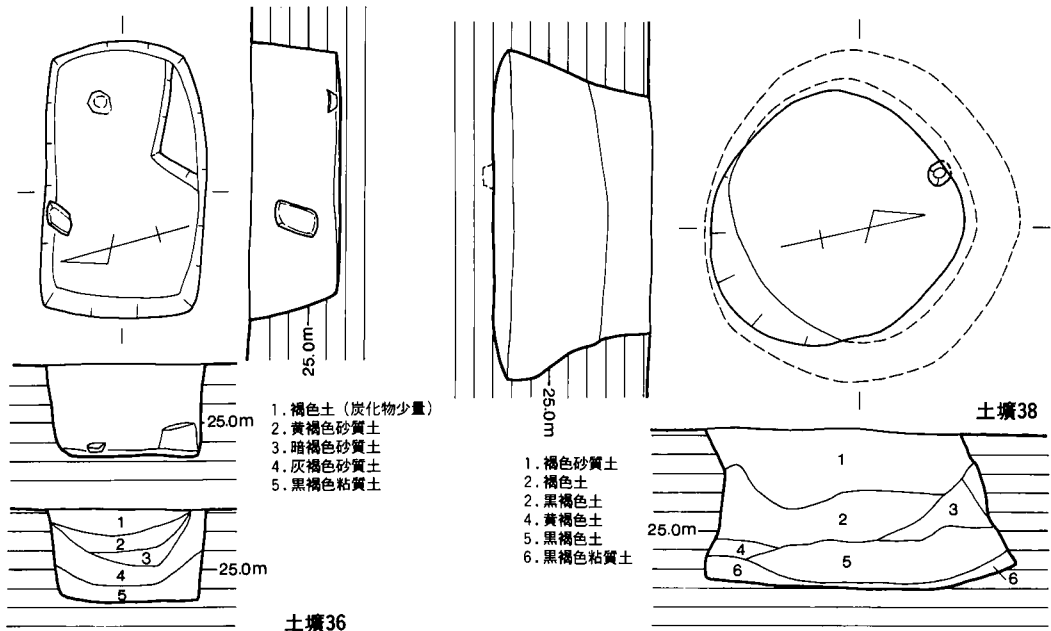
36号土壙は調査区中央部の南端で、51号土壙



第 44 図 38号土壙出土土製品・石器実測図 (1/2)



第 45 図 39号土壙出土土器実測図 (1/4)



第 46 図 36・38・39・41号土墳実測図 (1/40)

の東1mに位置する。1.5×0.8×0.5mの規模を有し、隅丸方形を平面プランとする。調査での検出時点では、土層断面図第1層に相当する炭化物が多量に観察されたことが印象的であった。南壁の東寄りのところにテラス状の段が存在する。底面に貼り付くように弥生土器の甕の底部が出土したが、それ以外の遺物の出土はほとんどなかった。

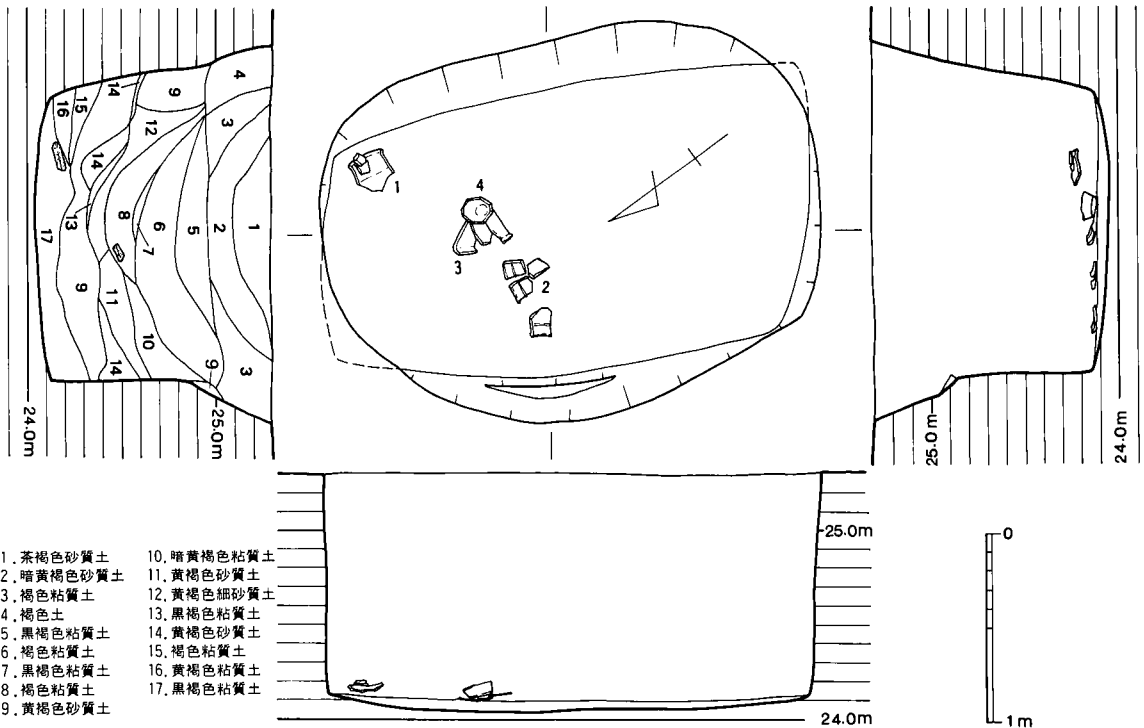
38号土壙（図版34 第46図）

38号土壙は調査区中央部の南寄り、32号竪穴住居跡や28号土壙の南西2mに位置する。平面・底面ともに正円形に近いプランを呈するが、壁は全体的に崩落して下部が大きく抉れているため、平面1.4×1.3mであるのに対し、底面は1.7×1.7mと大きい。深さは80cmで、底面の北寄りに小さなピットがある。

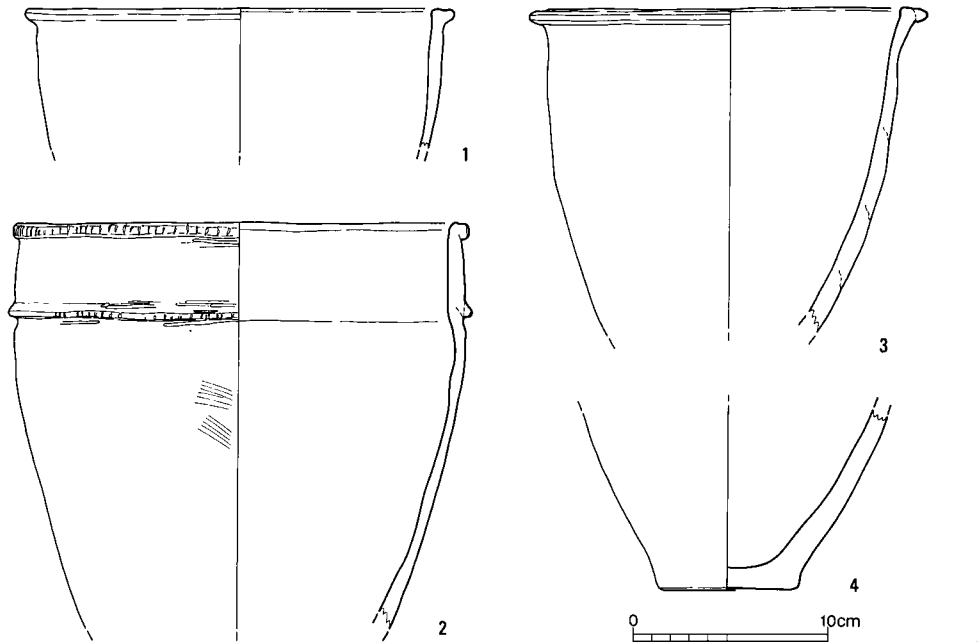
出土遺物（第44図） 遺物は弥生土器の小破片中心であるが、第45図に図示したように石鏃や有孔土製円盤もある。1・2ともにサヌカイト製の石鏃で、基部がいずれも欠損している。1は1.6g、2は0.8g。3の有孔土製円盤は径4.1cm、厚さ0.7cmで、重量は14.1g。

39号土壙（図版35 第46図）

39号土壙は40・41号土壙と群集して調査区の西部に位置するが、他の遺構と切り合い関係を有することはない。本来は整然とした長方形を呈していたと考えられるが、土層断面図に見ら



第 47 図 40号土壙実測図 (1/40)



第 48 図 40号土壙出土土器実測図 (1/4)

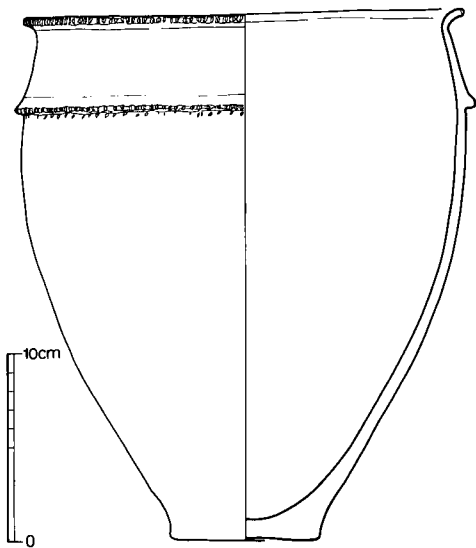
れるように、南壁は崩落してやや広がっているようである。規模は1.4×1.1×0.3mで残りはそれほど良好ではないが、遺物は第46図の弥生土器が唯一実測できた。

出土遺物 (第45図) 復原口径約27cmで、口縁端部には比較的鋭い刻みが施されるが、摩滅により器面調整は窺えない。

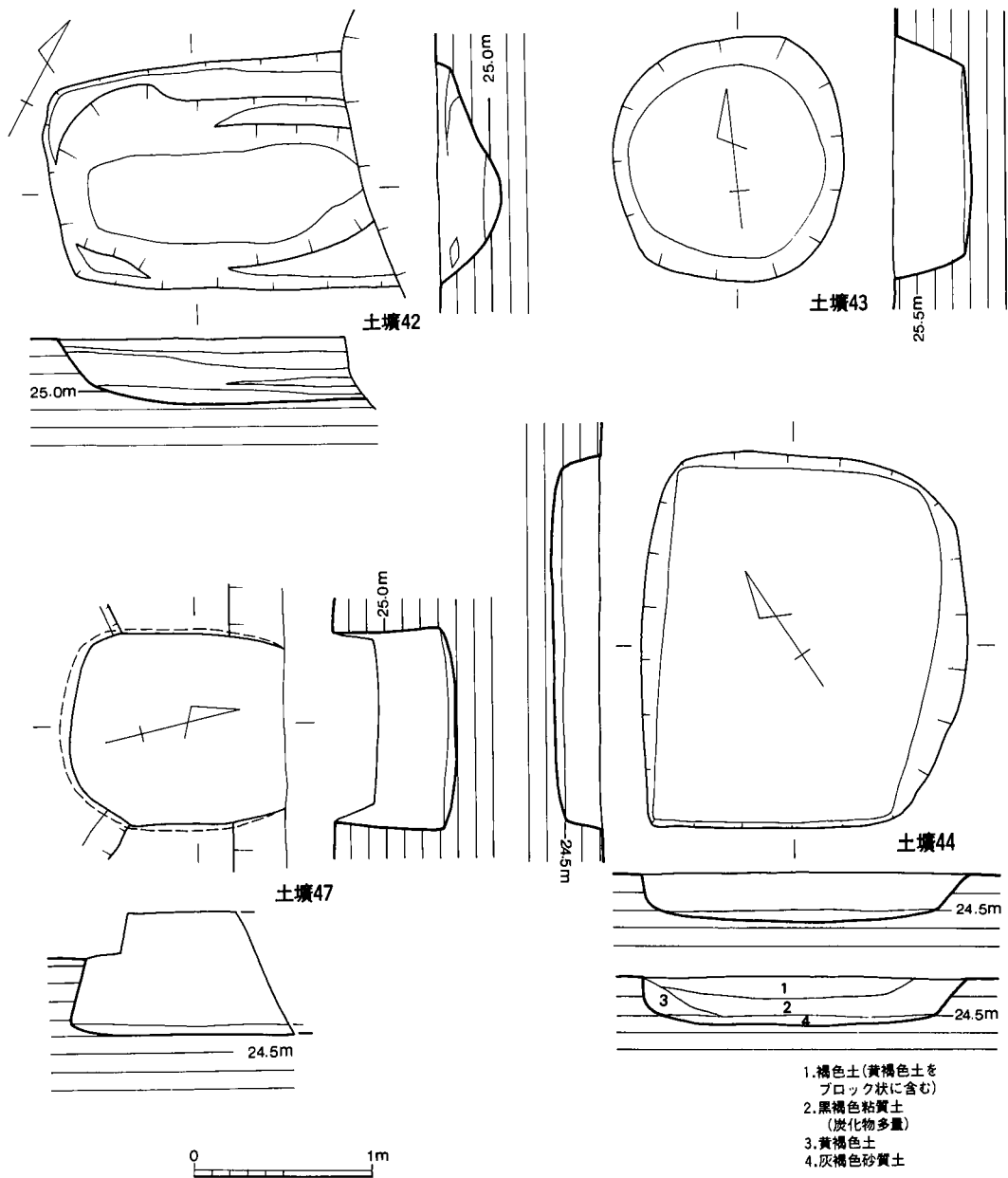
40号土壙 (図版35 第47図)

40号土壙は39・41号土壙と群集するが、位置的には41号土壙の北約1.5mにある。平面は2.6×2.0mの楕円形、底面は2.0×1.4mの長方形を呈するが、土層断面図からもわかるように、平面プランも本来は長方形であったのが壁の崩落により楕円形になってしまったようである。埋土中に含まれた遺物は必ずしも多くないが、底面からは比較的纏まった資料を得られた。

出土遺物 (第48図) 図示した遺物はすべて甕である。1は復原口径約23cmの甕で、口縁端部の外側に粘土紐を貼り付ける。2の復原口径は約24cm。口縁端部の外側には刻みの施された粘土紐が貼り付けられる。胴部上半では土器成形時の粘



第 49 図 41号土壙出土土器実測図(1/4)



第 50 図 42~44・47号土壌実測図 (1/40)

土紐の接合によってある程度突帯状に隆起していた部分に、さらに刻みを有した突帯文が貼り付けられる。この粘土紐を貼り付けた際の強いナデが明瞭に残る。また、胴部外面には器面調整としてのハケ目が観察される。3は復原口径約21cmの甕で、口縁端部にはやはり粘土紐が貼り付けられる。4は底径7.3cmの甕底部である。

41号土壙 (図版36 第46図)

41号土壙は39号土壙の西側に近接し、40号土壙の南約1.5mに位置する。平面プランは1.4×0.8mの楕円形、底面プランは1.8×1.3mの隅丸方形に大きく広がる。このように底面付近が大きく広がるフラスコ状の断面形態は、壁の崩落によって生じたことが土層断面図から明瞭に観察される。深さは1.0mで残りは比較的良好である。遺物は底面付近からは極くわずかしか出土していないが、土層断面図第3層下面からほぼ1個体分の土器が出土した。

出土遺物 (第49図) 第49図の甕は口径23.3cm、器高28cmを測る。口縁部はやや強めに外反して、その端部には刻みが施される。胴部上半には土器成形時の粘土紐の接合によって突帯文状の隆起が作出され、さらにその上に粘土紐を追加して刻みを施している。なお、この刻み目突帯文の直下に小さな爪のあたった痕跡が残るが、これは粘土紐を指で摘みながら貼り付けた際に付いたものと考えられ、装飾的効果のないものである。

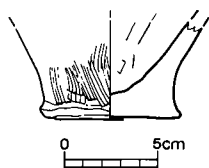
42号土壙 (第50図)

42号土壙は調査区の西端に位置し、52号土壙に切られる。39号竪穴住居跡と切り合い関係を有するがその先後は不明。52号土壙に切られるため長軸方向の長さははっきりとしないが、現存長では1.8×1.3×0.4mの隅丸長方形を呈していたと考えられる。底面は平坦でなくやや播り鉢状に丸くなっており、またテラス状の段が随所に存在して、他の貯蔵穴と考えられる土壙とはかなり異なった様相が感じられる。

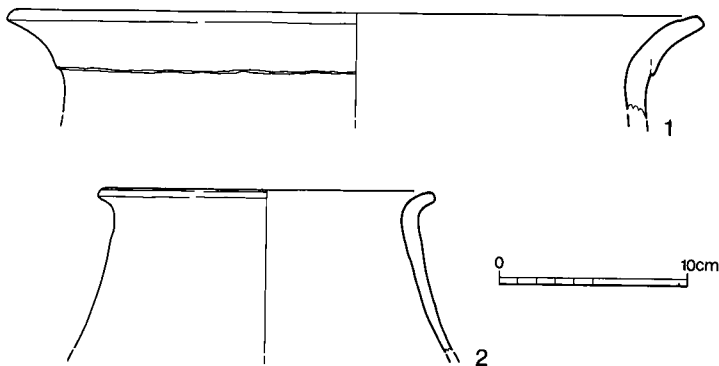
出土遺物 (第51図) 遺物は少ないが、第50図に図示した外面にハケ目が窺える甕底部が出土した。

43号土壙 (図版37 第50図)

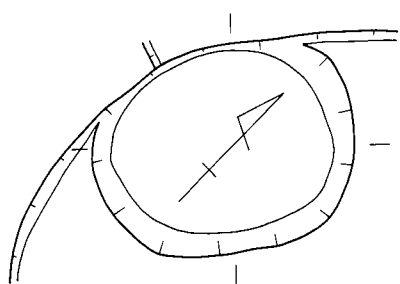
43号土壙は調査区西側中央部にほとんど孤立的に存在する。本来



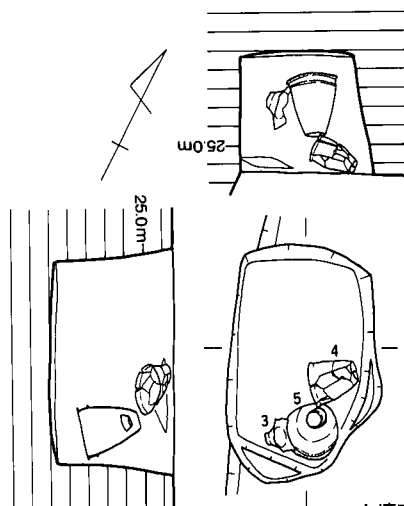
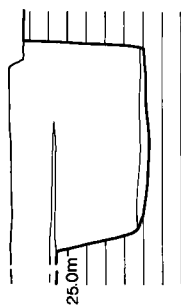
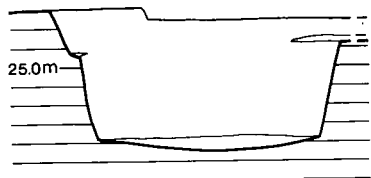
第51図 42号土壙出土土器実測図 (1/4)



第52図 44号土壙出土土器実測図 (1/4)

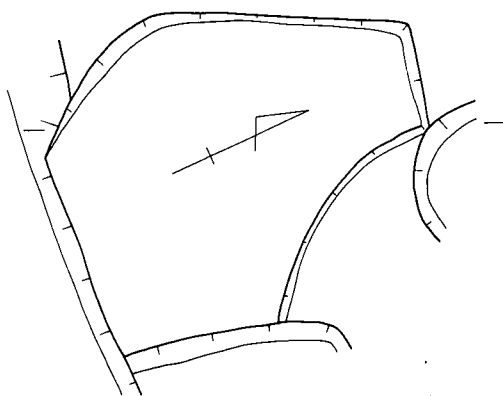
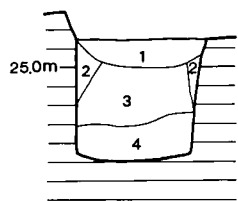


土壌48

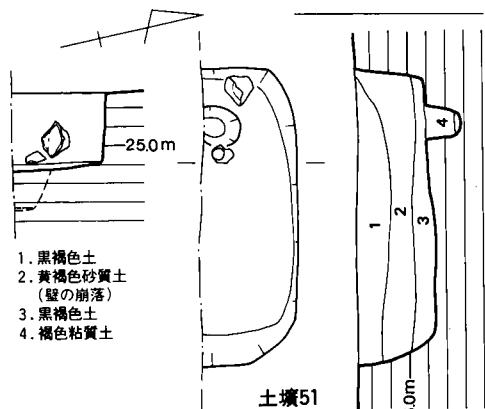


土壌50

- 1. 黒褐色土
- 2. 褐色砂質土
- 3. 黒褐色土（炭化物少量）
- 4. 褐色粘質土

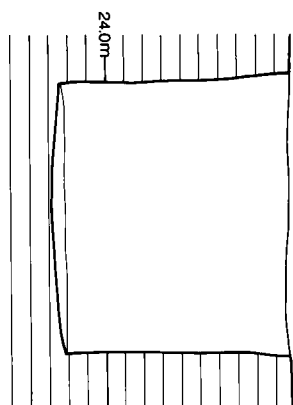


土壌49

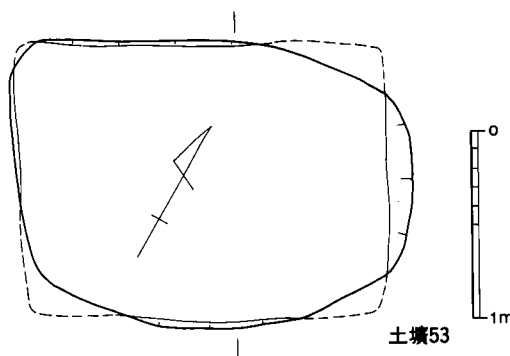


土壌51

- 1. 黒褐色土
- 2. 黄褐色砂質土（壁の崩落）
- 3. 黒褐色土
- 4. 褐色粘質土



第 53 図



土壌53

48~51・53号土壌実測図 (1/40)

は他にも遺構が存在していたであろうが、かなり削平の著しいところであり、この土壙自体も深さ20cmほどしか残っていない。1.3×1.3mの正円形プランで、遺物はほとんど含まれないが、恐らく弥生時代前期後半頃の貯蔵穴であろう。

44号土壙 (図版37 第50図)

44号土壙は調査区中央部のやや西寄りで、47・49号土壙の北約1.5mに位置する。ここも削平の著しいところで、深さは25cm程度しか残っていない。平面プランは2.1×1.8mの隅丸方形。遺物は少ないが2点だけ実測できた。

出土遺物 (第52図) 1は復原口径約35cmの壺で、口縁部と頸部の境には粘土紐の接合によって段が作出されている。2は復原口径約17cmと比較的小さめの壺である。いずれも摩滅が著しくて器面調整は不明。

47号土壙 (図版38・39 第50図)

47号土壙は調査区中央部やや西寄りに位置し、49号土壙は切るが、48号土壙には切られるという先後関係を有する。また、北側1/4程度は大きく削平され消失している。現存する規模は1.2×1.2×0.7mでおよそ隅丸方形に近い楕円形を呈していたと考えられる。壁は全体的に崩落して抉れるが、機能的には貯蔵穴と考えられよう。遺物は弥生土器片が少量。

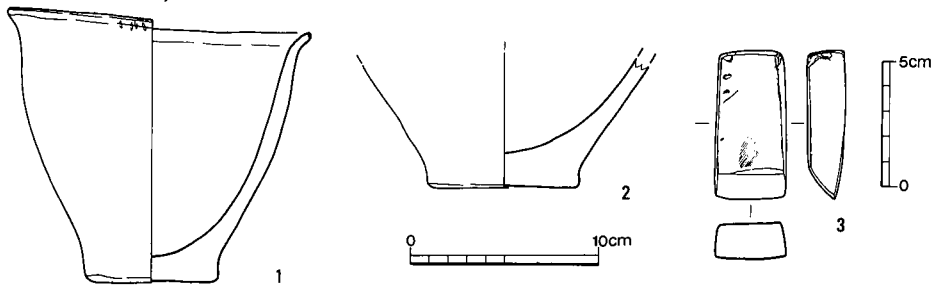
48号土壙 (図版38・39 第53図)

48号土壙は調査区中央やや西寄りに位置し、47・49号土壙を切るという先後関係を有する。1.4×1.1×0.7mという規模は本遺跡の貯蔵穴においては比較的小型のほうで、楕円形の平面プランを呈する。遺物は弥生土器小片のみで少ない。

49号土壙 (図版38・39 第53図)

49号土壙は調査区中央部やや西寄りで、47・48号土壙に切られるという先後関係を有する。さらに北側が大きく削平されているため、平面プランを復原することはもはやできない。現存する最大長軸は2.0mで、深さは30cm。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は貯蔵穴と考えられる土壙とほぼ同じ様相で、おそらくはこの土壙も貯蔵穴であろう。遺物は決して多くないが3点ほど図示しえた。

出土遺物 (第54図) 1は復原口径約16cm、器高14cmの小型の甕で、口縁端部には刻みが施

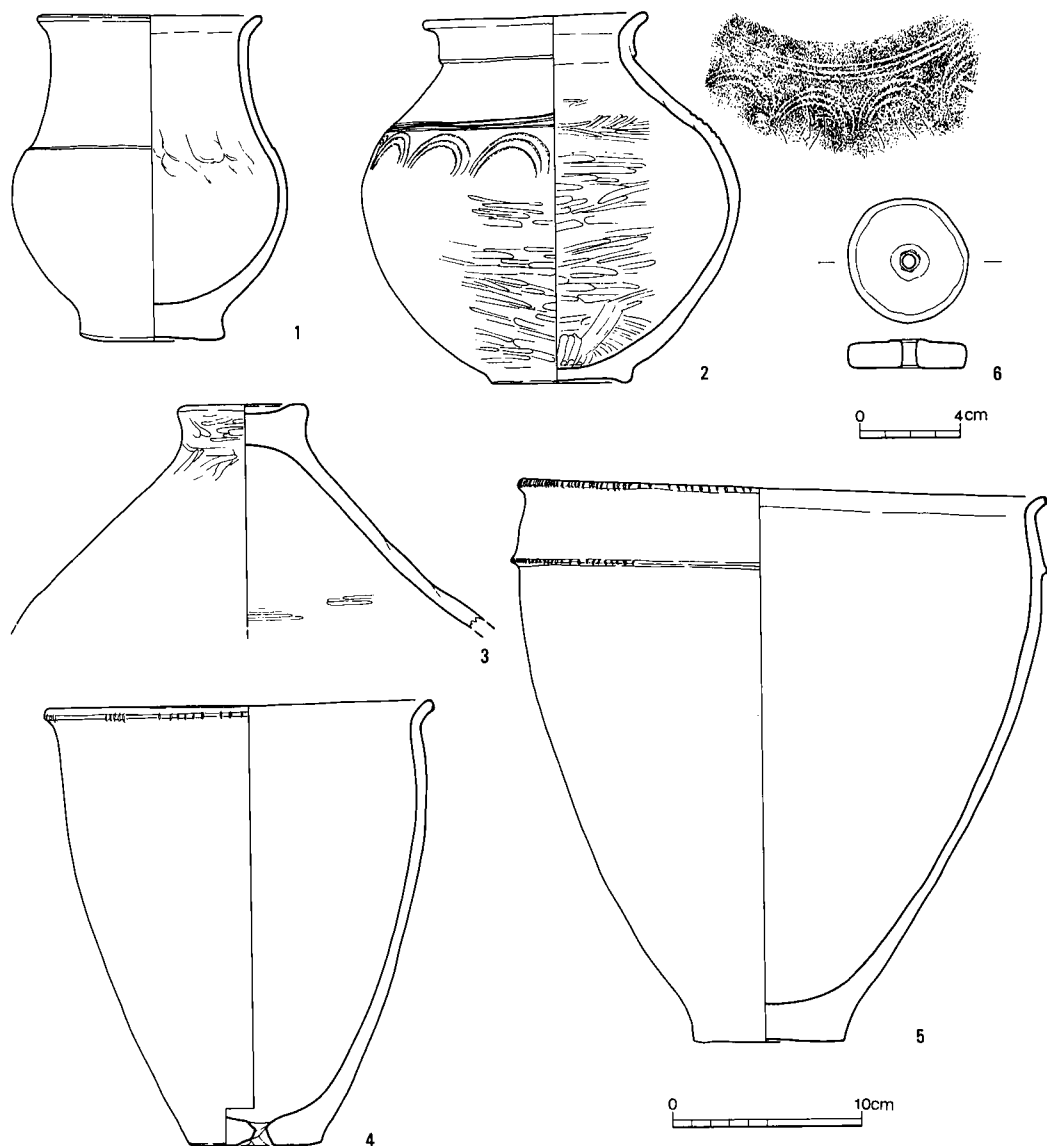


第54図 49号土壙出土土器 (1/4)・石器 (1/3) 実測図

される。2は壺の底部で、底径8cm。3は頁岩質の片刃石斧で、長さ6.0cm、幅2.8cm、厚さ1.5cm。

50号土壙 (図版40 第53図)

50号土壙は調査区西側にあり、弥生前期後半の35号竪穴住居跡を切る貯蔵穴である。1.3×0.8×0.7mと比較的小型の規模で、やや崩れた感じの隅丸長方形を呈する。この崩れた感じのプランは、やはりほぼ直線的に立ち上がっていた壁が崩落したためであることが、土層断面図から観察される。遺物はほぼ完形に復原できる5個体分の土器を除いては極く少量の弥生土器



第 55 図 50号土壙出土土器・土製品実測図 (1/4 6は1/3)

小片のみである。なお、これらの土器はいずれも土壙底面付近からの出土ではなく、中位以上の第1・3層より出土した。

出土遺物（第55図） 1は口径12.0cm、器高17.3cmの小型の壺で、頸部と胴部の境には沈線文が1本施される。頸部が比較的長いのが特徴的。2の口径は11.8cm、最大腹径20.1cm、器高19.7cmで、口縁部と頸部の境には成形時の粘土紐接合によって段が作出される。頸部と胴部の境には3本の沈線文が引かれ、その下に二枚貝腹縁による3単位の重弧状の押圧文が施される。内外面ともに器面調整として丁寧な研磨が施される。3は甕の蓋で、口縁部が欠損しているため口径はわからない。外面の頂部と内面の口縁部に近い場所に器面調整としての研磨が施されている。4は口径20.5cm、器高23.4cmの甕で、外反した口縁部の端部には刻みが施される。底部に焼成前の穿孔がある。5は口径28.0cm、器高29.2cmを測るが、摩滅により器面調整不明。口縁部は外反させて刻みを施す。口縁端部下4cmにある刻み目突帯文は粘土紐の貼り付けによるもので、土器成形時の粘土紐の接合によって作出されたものではない。6の有孔土製円盤は、径6.3cm、厚さ1.3cm、重量33.9g。

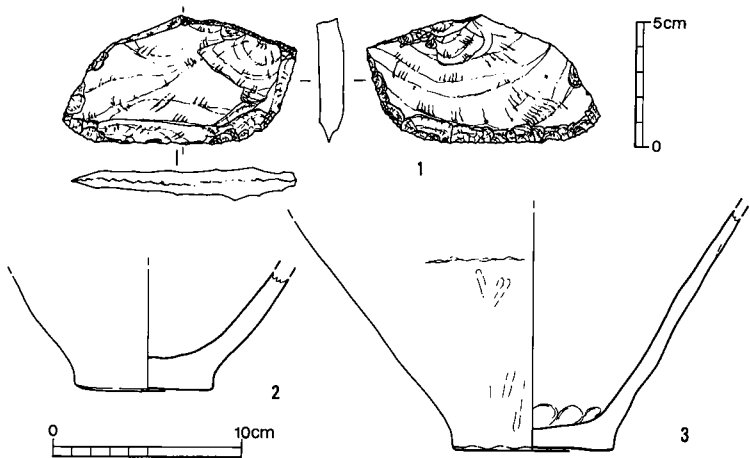
51号土壙（図版41 第53図）

51号土壙は調査区中央部のやや西寄り、36号土壙の西約1.5mのところにある。大部分が調査区外へ延びていっているためその全容はほとんどわからないが、現存する東西幅は1.6m、南北0.5m、深さ0.4mを測る。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面の西側には深さ20cmのピットがある。遺物は少ないが、3点だけ図示できた。

出土遺物（第56図） 3は底径8.6cmの甕の底部。外面には粘土の接合痕が窺える。2は底径7.3cmの壺の底部。1はサヌカイト製のスクレイパーで、刃部の反対側には自然面を残す。

52号土壙（図版42 第57図）

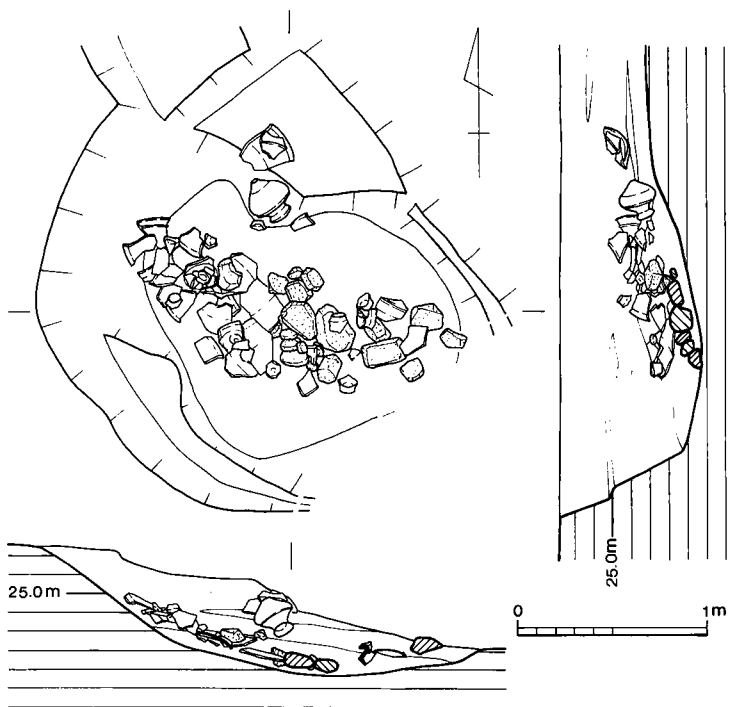
52号土壙は調査区西部に位置し、42号土壙を切る。調査の時点では、本土壙は8号溝の張り出し部という認識であったが、8号溝の土層断面図（第88図）の観察に際して8号溝が本土壙を切っているという認識に至り、「8号溝張り出し部」という遺構名から「52号土壙」という名称に変更した。しかし、もともと52号土壙は8号溝の張り出し部で、溝の埋没過程



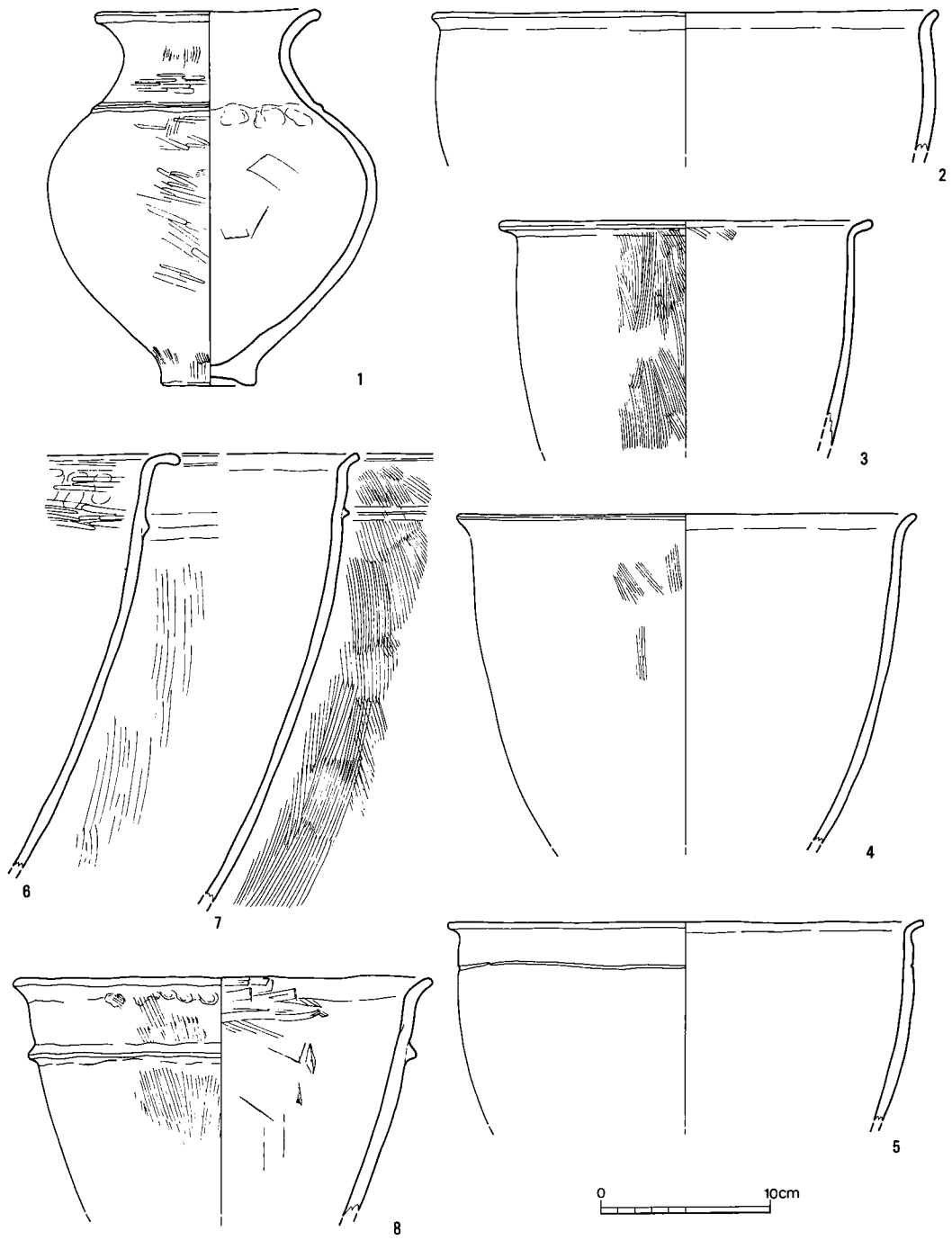
第 56 図 51号土壙出土土器 (1/4)・石器 (1/3)実測図

でこの土壙も順次埋没していったと考えることもでき、実際に出土する土器は52号土壙のものが年代的には明らかに新しく、この考えを傍証している。さて、この52号土壙からは多量の弥生土器が加熱などを受けていない大きな礫と共に出土したが、これらはいずれも土壙の西側から投棄されたような状況にあり、また、壁が極めて緩やかに椀状に立ち上がるという特徴なども考慮すると、弥生前期後半～中期初頭に普遍的に存在する貯蔵穴とはかなり異なった様相を呈しているようである。そういった意味からでは、本土壙を8号溝の張り出し部として位置づけたほうが適当かもしれない。なお、ここから出土した壺の胴部破片が34号土壙の土器と接合したが、その詳細については34号土壙の項目を参照して頂きたい。

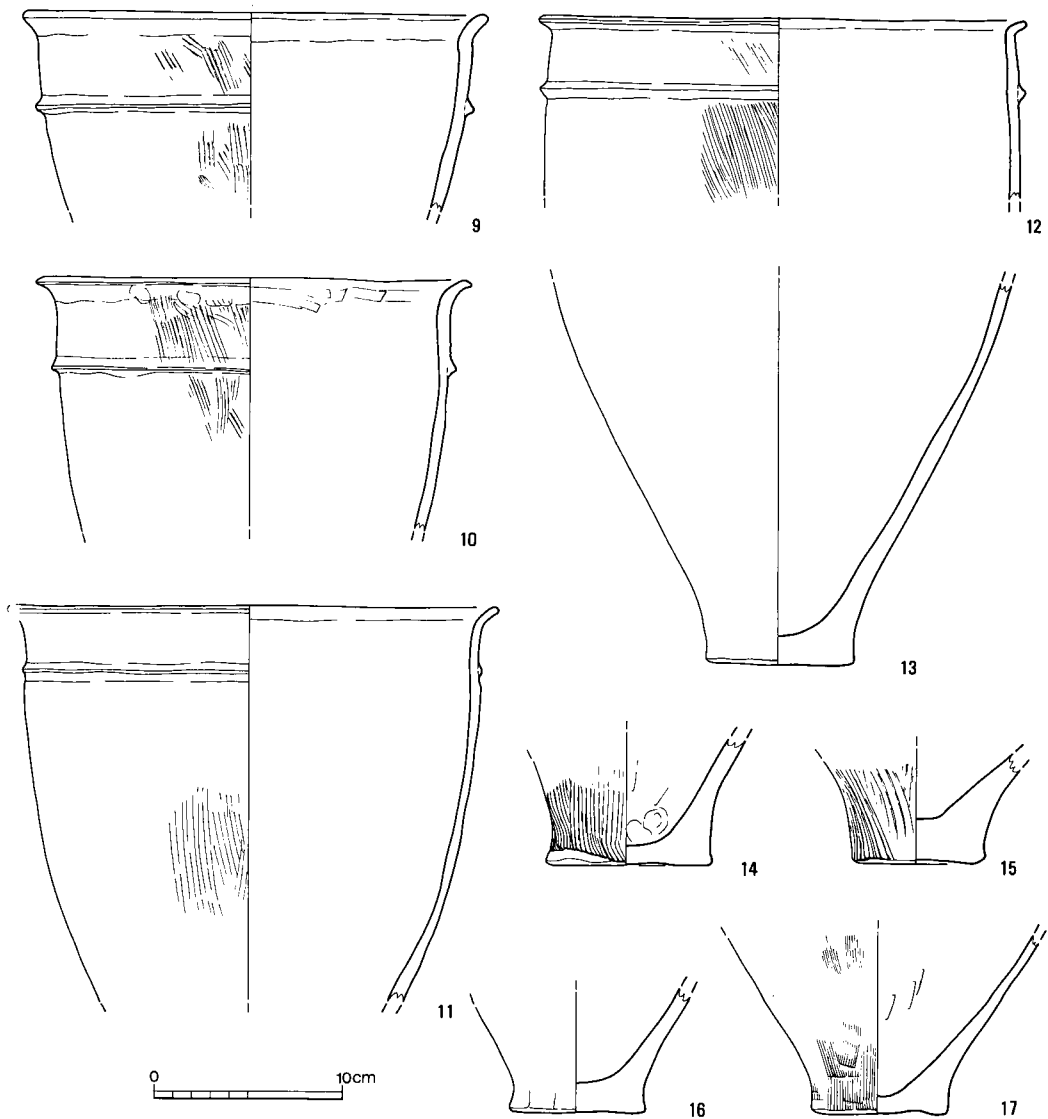
出土遺物 (第58・59図) 遺物は多くパンケース3箱分が出土した。土器の9割以上は甕で、口縁端部等に刻みが全く施されないのが特徴的である。第58図1の口径は14.7cm、最大腹径19.3cm、器高22.1cmを測る。頸部と胴部の境の突帯は削り出しによるもので、粘土紐の貼り付けではない。外面にはハケ調整の後に研磨が施され、内面には頸部と胴部の境目の接合痕が明瞭に残る。2は復原口径約30cmの甕。3は復原口径約22cmの甕で、外面にはハケ目が明瞭に残る。4は復原口径約26cmの甕で、外面にはハケ目がわずかに残る。5は復原口径約28cmで、口縁端部から2.5cm下がったところに1本の沈線文が引かれている。6・7は共に外面にハケ目が明瞭に残り、口縁端部から約4cmほど下がったところに粘土紐が貼り付けられ突帯文となっている。なお、6の口縁部内面には粗くではあるが研磨が施される。8は復原口径約25cm、内外面ともにハケが施される。粘土紐の貼り付けは6・7と同様で、ハケ調整の後である。第59図9～12の復原口径は順に25cm、23cm、26cm、26cmで、いずれもハケ調整を十分に施した後に粘土紐を口縁端部下4cm前後のところに貼り付け、さらに指でそれを押さえて摘みながらナデているので、この突帯文の上下0.5～1.0cmの範囲ではハ



第 57 図 52号土壙実測図 (1/40)



第 58 图 52号土壙出土土器实测图. 1 (1/4)

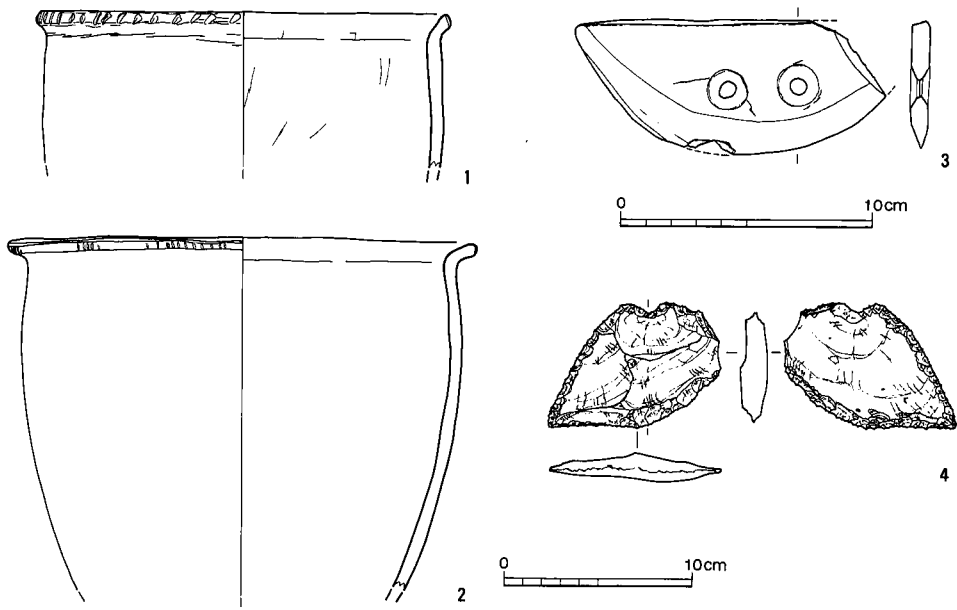


第 59 図 52号土壙出土土器実測図. 2 (1/4)

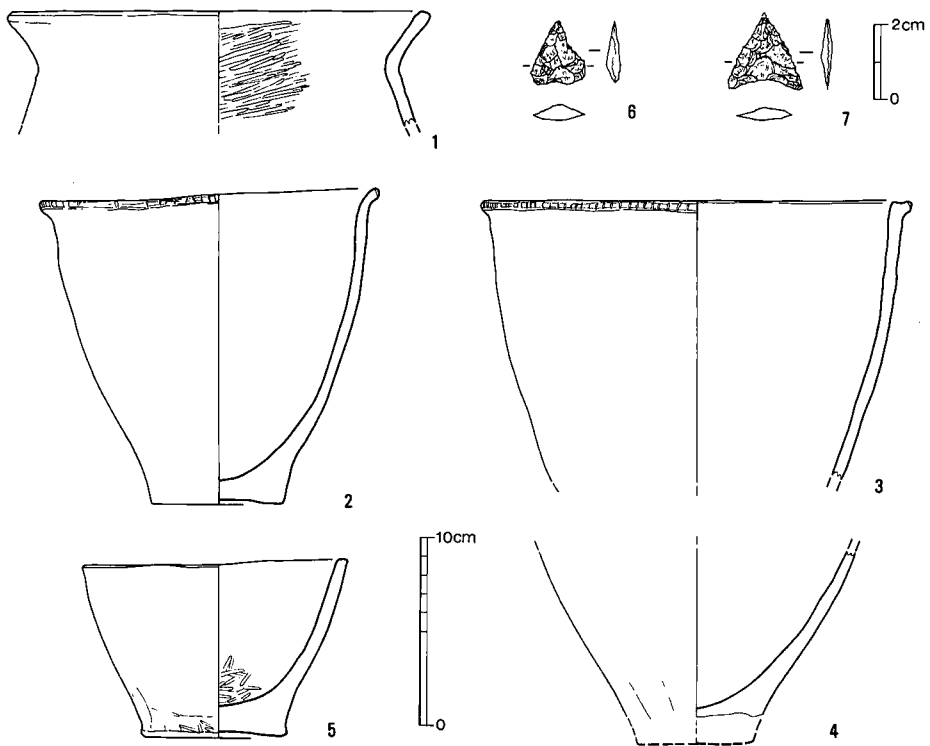
ケ目が消えている。13~17は甕の底部で、底径はおよそ7.0~8.5cmの範囲に収まる。外面にはハケ目がしばしば残っている。

53号土壙 (図版41 第53図)

53号土壙は調査区の東端に位置し、古墳時代に属する38号竪穴住居跡の床面を剥がした時点で検出された貯蔵穴である。平面プランは2.1×1.5mの規模を有する隅丸長方形に近い楕円形であるが、底面プランはやや広がって正長方形を呈する。深さは1.2mで、遺物は少ないながらも数点図示できた。



第 60 图 53号土城出土土器 (1/4)·石器 (1/3)实测图



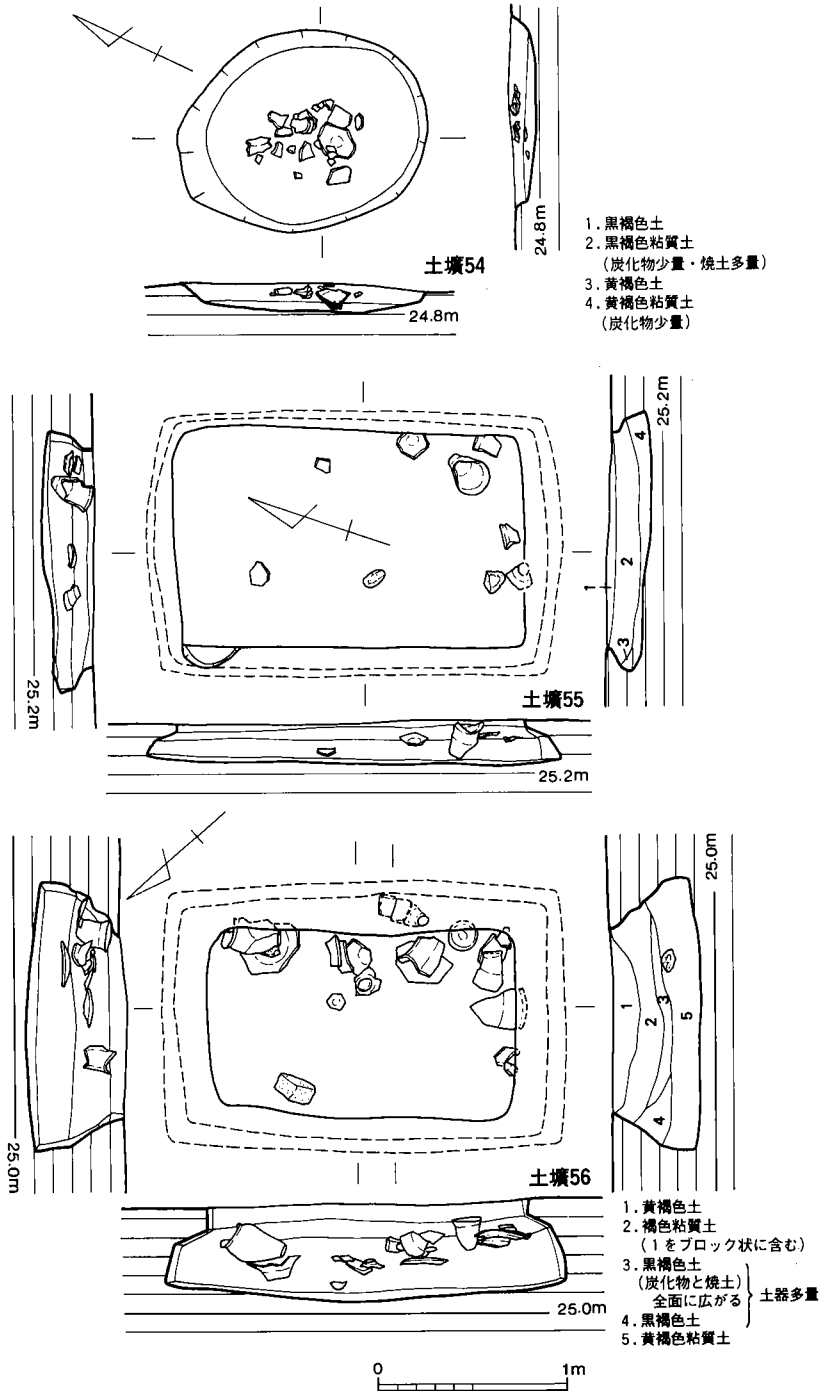
第 61 图 55号土城出土土器 (1/4)·石器 (1/2)实测图

出土遺物 (第60図)

1は復原口径約22cmの甕で、口縁端部には刻みが施される。外面口縁部下と内面には、ハケ工具痕が残る。2は復原口径約25cmの甕で、口縁端部には刻みが施されるが、摩滅が著しく器面調整は不明。3は安山岩質の石庖丁で、摩滅により研磨や使用痕は窺えない。4はサヌカイト製のスクレイパー。主要剝離を行なった際の打点付近に1箇所だけノッチを入れた部分があるが、本来は石匙の製作を意図したものであったと考えられる。

54号土壌 (図版42 第62図 堺町遺跡.2号土壌)

54号土壌は調査区東端の北寄りに位置する。竪穴住居跡や土壌が立地する微高地(低位段丘)ではなく、この微高地を形成したであろう谷(旧河川)の中にあるため、この土壌の周辺には他の遺構



第 62 図 54～56号土壌実測図 (1/40)

が存在しない。1.3×1.1×0.15mの浅い楕円形を呈し、2個体分の弥生土器だけが出土した。土器の年代や遺構の形態と立地から判断して、この土壌は貯蔵穴以外の機能を有していたものと考えられる。

出土遺物（第63図） 1は甕の胴下半部で、外面の底部付近にハケ目がわずかに窺える。2は口縁部が欠落する壺で、最大腹径は約31cmを測る。摩滅が著しく器面調整は観察できないが、頸部と胴部の境が強く屈曲するのが特徴的である。

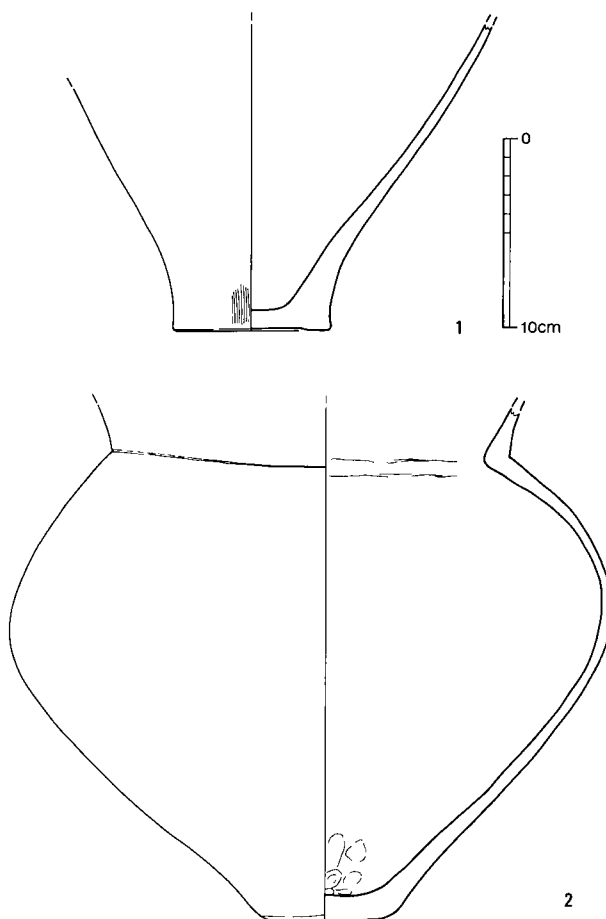
55号土壌（図版45 第62図 堺町遺跡.3号土壌）

55号土壌は調査区西端部において、56・58号土壌と近接する。1.8×1.2mの長方形プランで深さは25cm程度と浅いが、壁は大きく抉れ底面は2.2×1.4mとかなり広くなる。土層図を観察する限りでは壁の崩落ももちろん窺えるが、この貯蔵穴を掘削した時点ですでにフラスコ状に広がっていたことがわかる。土層断面図中第2層の黒褐色粘質土に多量の炭化物と焼土が含まれているのが特徴的である。遺物は比較的多い。

出土遺物（第61図） 1は復原口径約23cmの壺で、内面には細かい研磨が観察される。2は口径18.2cm、器高16.5cmの小型の甕で、口縁端部には刻みが施される。3は復原口径約23cmの甕で、口縁端部外面に粘土紐を貼り付け刻みを施す。4は甕の胴下半部で、底部との接合痕が疑口縁状に明瞭に残る。5は口径14.1cm、器高9.2cmの小型鉢である。形態的には従来の鉢とは異なり甕を成形途中でやめたようなものだが、内面に研磨が施されており甕とは別の用途で製作されたものであろう。6・7ともサヌカイト製の石鏃で、ほぼ完全な形を残す。重量は6が0.7g、7が0.9g。

56号土壌（図版46 第62図 堺町遺跡.4号土壌）

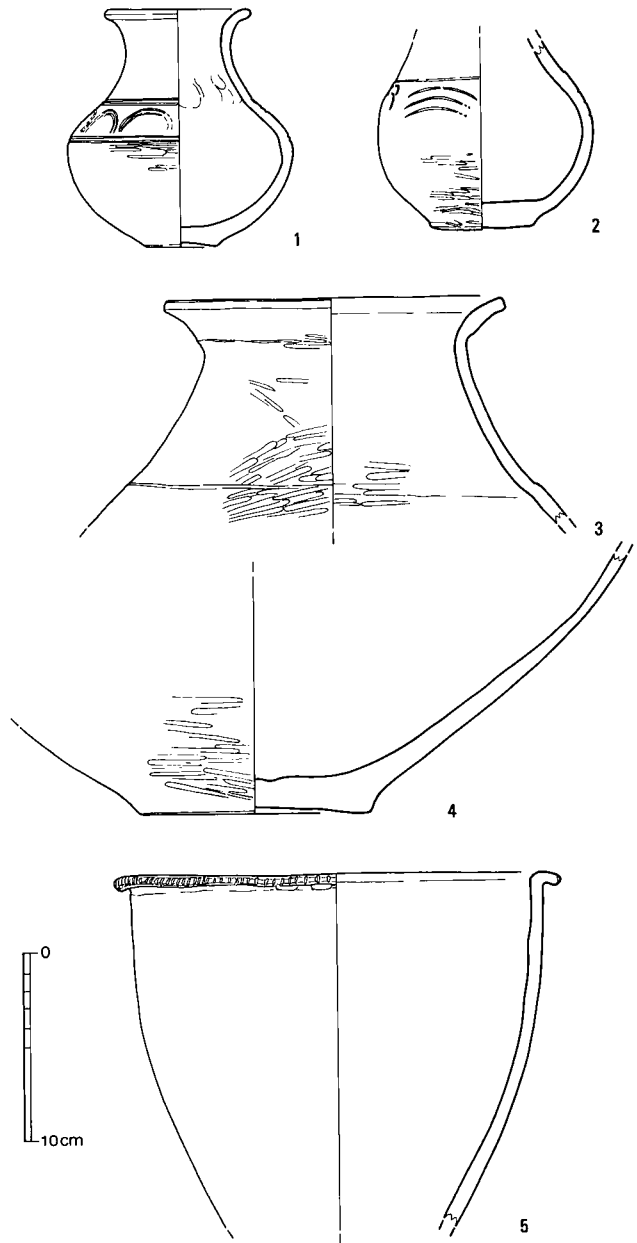
56号土壌は調査区西端部で55・58号土壌と近接するが、中でも55号土壌とは1mしか離れて



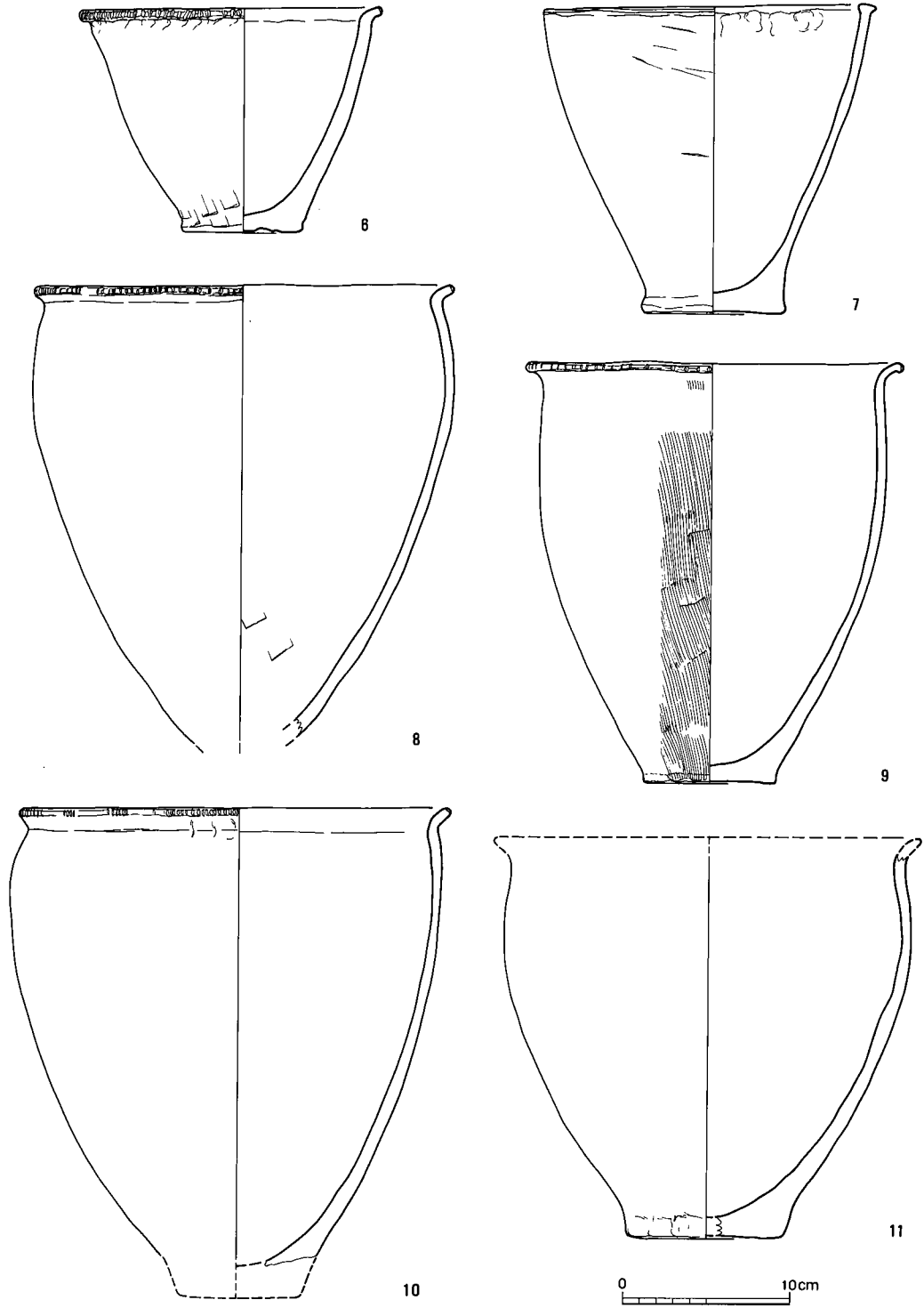
第63図 54号土壌出土土器実測図（1/4）

いない。平面プランは1.6×1.0mと比較的小さな長方形を呈するが、約10cmほど下がったところで急激に抉れ、底面は2.1×1.4mとかなり広がる。土層断面図を観察するともちろん壁の崩落も窺えるが、この土壌を掘削した時点ですでに大きくフラスコ状に掘り込んでいたことがわかる。また、抉れた部分にも土器が多く存在することからも、このことの傍証になろう。埋土中第3層は炭化物と焼土が多量に含まれる層で、土壌の中央部に薄く広がる。遺物は多量で本遺跡の貯蔵穴からは最も多く、パンケース4箱分出土した。これらの土器はおよそ第2層に含まれ、炭化物や焼土が堆積（投棄）した後に入ったものである。

出土遺物（第64・65図） 1は口径7.7cm、最大腹径12.0cm、器高12.7cmの小型壺で、頸部と胴部の境と最大腹径部には2本の沈線文が引かれ、その間を充填するようにやはり2本の重弧状沈線文が施される。外面には研磨がわずかに観察される。2は復原最大腹径約11cmの口縁部が欠落する小型の壺で、頸部と胴部の境には1本の沈線文が引かれ、その下に3本単位の重弧状沈線文が施される。3は復原口径約18cmの壺で、口縁部と頸部の境、そして頸部と胴部の境には土器成形時の粘土紐の接合によって段が作出されているが、頸部と胴部の境ではその段を強調するため先端の尖ったような工具で削り出しが行なわれ、結果として部分的に沈線文が施されたように見える。内外面ともに研磨が施される。4は底

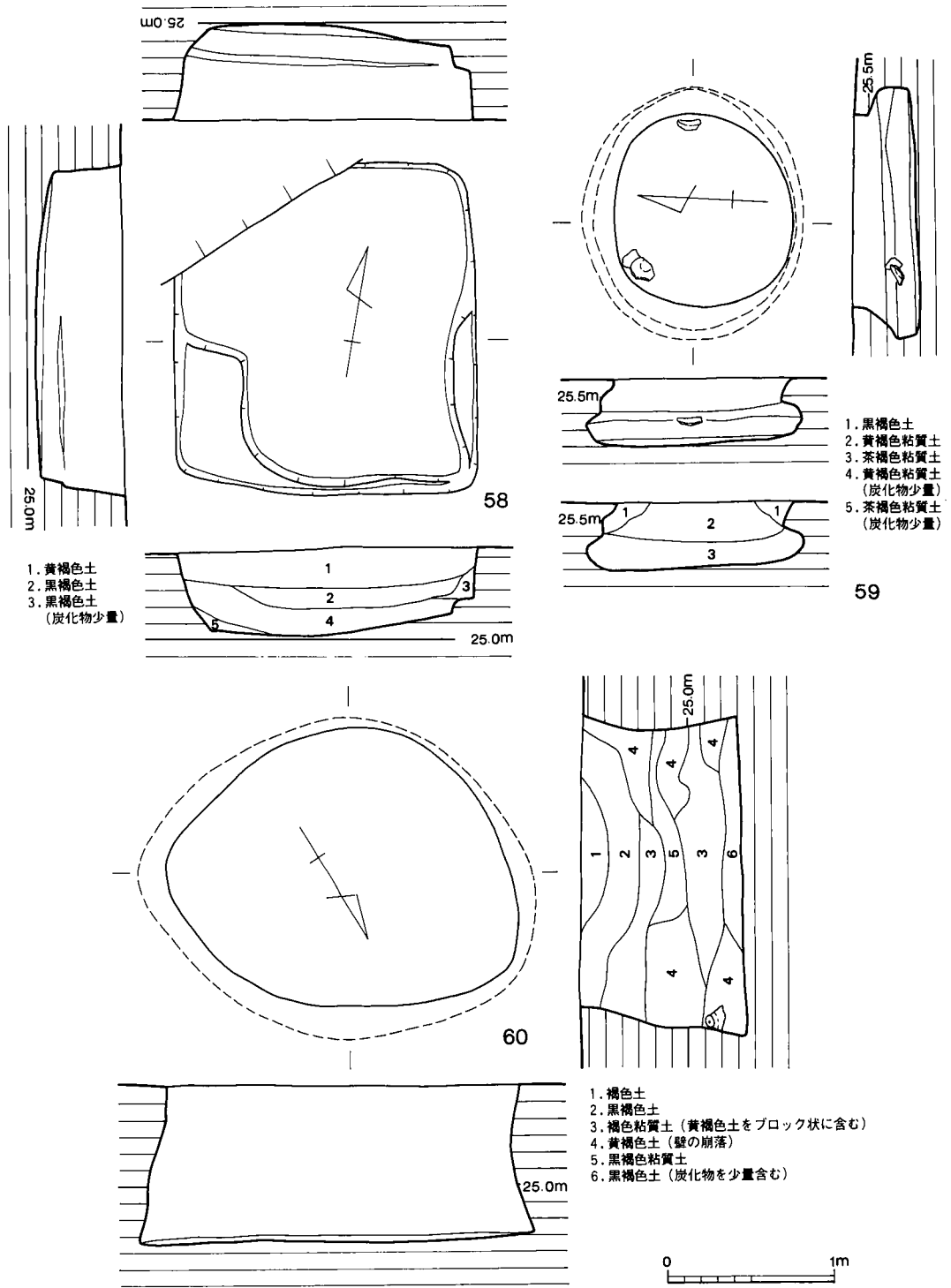


第 64 図 56号土壌出土土器実測図. 1 (1/4)



第 65 图

56号土壙出土土器实测图. 2 (1/4)



第 66 図 58~60号土坑実測図 (1/40)

径12.4cmの壺の胴下半部で、外面には比較的粗い研磨が観察される。5は復原径約24cmの甕で、外側へ強く折り曲げられた口縁部の先端には刻みが施される。6は口径18.1cm、器高13.3cm、7は口径20.2cm、器高18.0cm、8は口径25.0cm、残存器高27.1cm、9は口径22.5cm、器高25.1cm、10は口径26.0cm、残存器高27.2cm、11は復原口径約26cm、残存器高23.3cmをそれぞれ測る。いずれも口縁部を比較的強く外反させ、その先端部に刻みを施すが、7については口縁端部を上から押さえて粘土を口縁部の両側へはみ出させており、またそれを刻むこともしない特異なタイプである。器面調整が残るのは9だけで、外面にハケ目が観察される。

58号土壙 (図版47 第66図 堺町遺跡6号土壙)

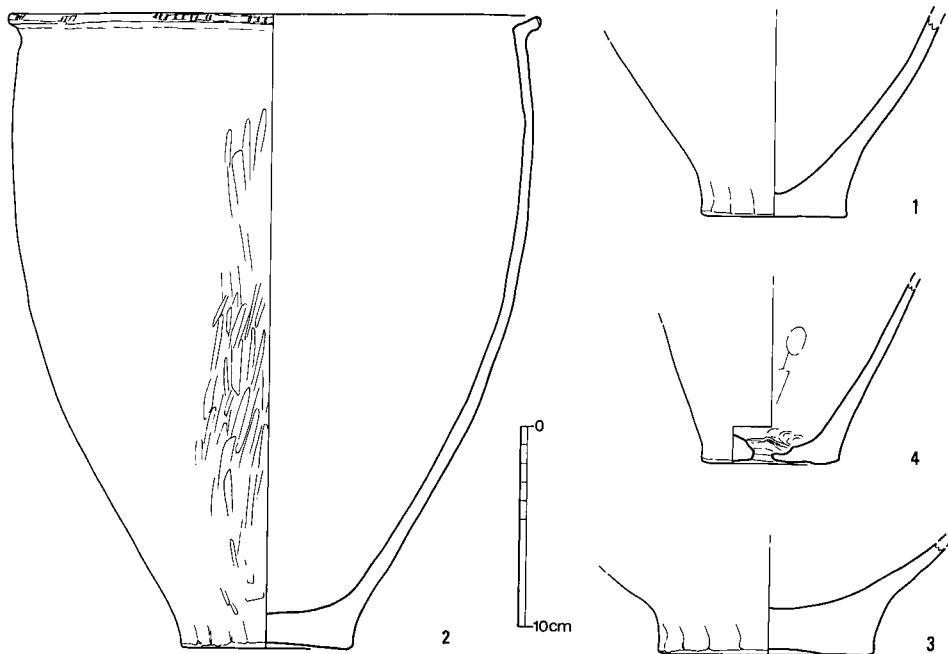
58号土壙は調査区西端部で55・56号土壙に近接し、11号溝に切られる。規模は2.0×1.8×0.5mで正方形に近いプランを呈していたようである。南西隅と東壁にテラスがあり、底面は不定形になっている。遺物は少ないが、1個体分だけ大きな破片が出土した。

出土遺物 (第67図) 1は底径7.5cmの甕の胴下半部。

59号土壙 (図版48 第66図 堺町遺跡7号土壙)

59号土壙は調査区西端部で、41号竪穴住居跡の南5mに位置する。1.2×1.1×0.4mの規模で正円形を平面プランとするが、底面付近は大きくフラスコ状に掘り込まれており1.5×1.3mと大きくなる。遺物は少ないが、2点だけ図示できた。

出土遺物 (第67図) 2は復原口径約28cm、復原器約33cmの甕で、外側へ強く屈曲した口縁



第 67 図 58～60号土壙出土土器実測図 (58号は1 59号は2・3 60号は4 1/4)

部の先端には刻みが施される。外面にはごく粗い研磨が観察される。3は底径8.7cmの壺の底部で、外面にハケ工具の当たった痕跡が窺える。

60号土壙（図版49 第66図 堺町遺跡8号土壙）

60号土壙は調査区西端部で、他の遺構と離れて単独で存在する。平面プランは2.1×1.6×0.9mの楕円形するが、壁は崩落して抉れてしまい、底面は2.3×1.9mとひとまわり大きくなる。出土遺物は少なく、図示できたのは1点だけである。

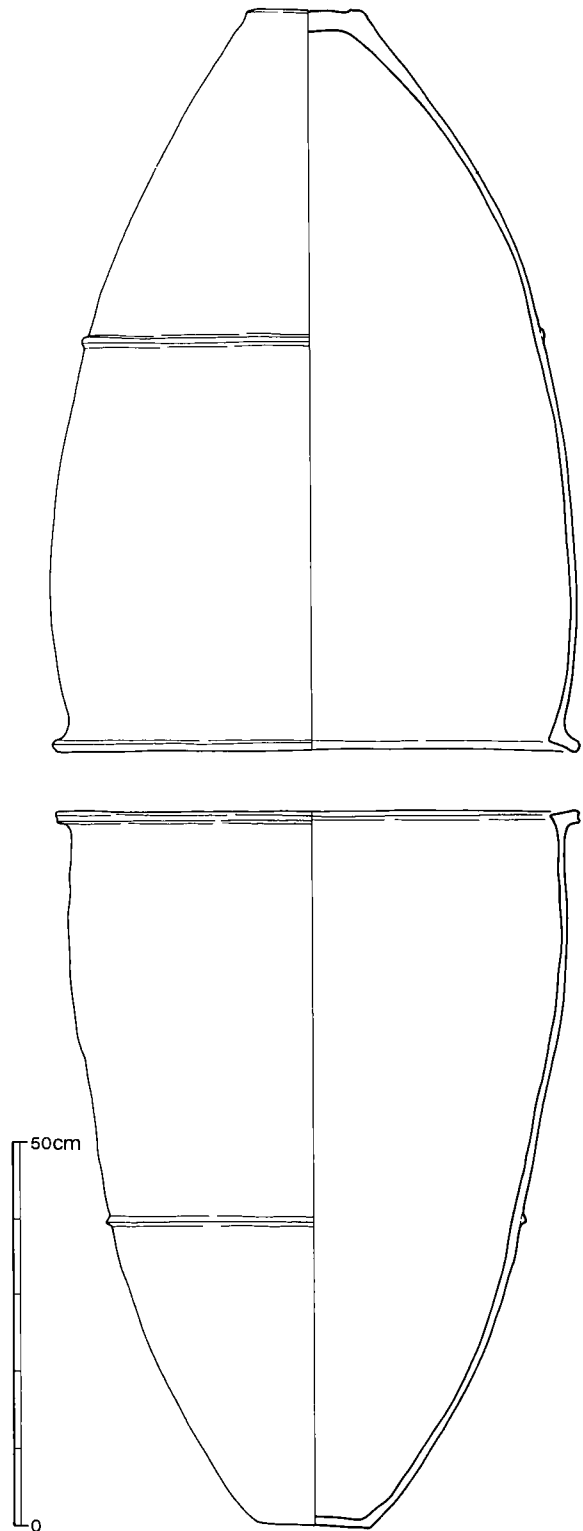
出土遺物（第67図） 4は底径7.3cmの甕の胴下半部で、内面にハケ工具の当たった痕跡が窺える。また、穿孔は焼成前のものである。

Ⅲ) 甕棺墓（付図）

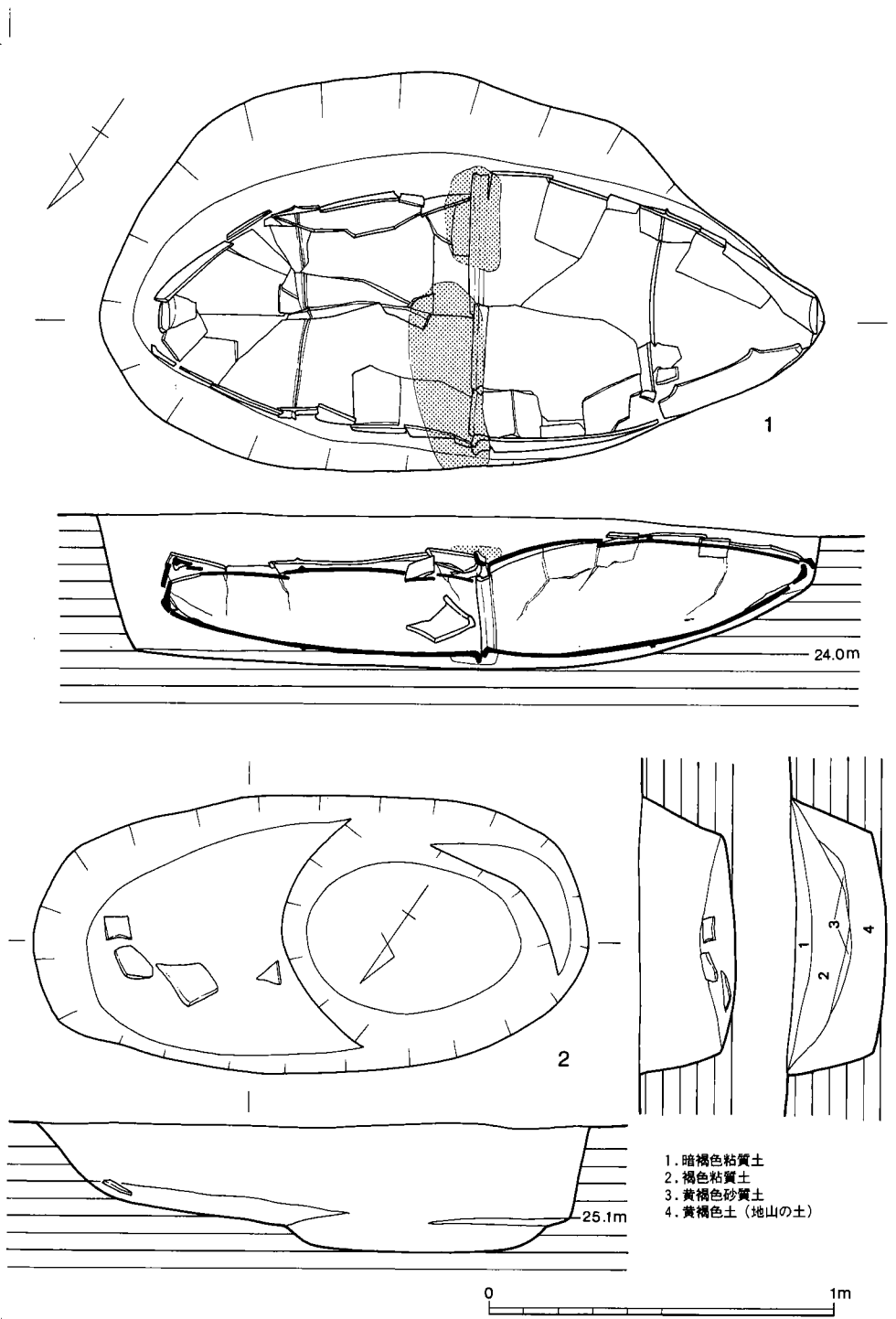
大淀遺跡では調査区東端部で5基の甕棺墓が検出された。しかし、この地区は削平が特に著しく、あるいはすでに消失してしまったものもあると考えられる。その根拠はこれら5基の甕棺墓が列状に配置されているからであり、弥生中期前半代に位置づけられる甕棺墓の性格から判断して、本遺跡のようにかなりの距離をおいて配列されることは稀だからである。以下、この5基の甕棺墓について説明を行ないたい。

1号甕棺墓（図版50 第69図）

1号甕棺墓は5基ある甕棺墓の中でも最も南（南西）に位置する。2.10×1.15m



第 68 図 1号甕棺実測図 (1/10)



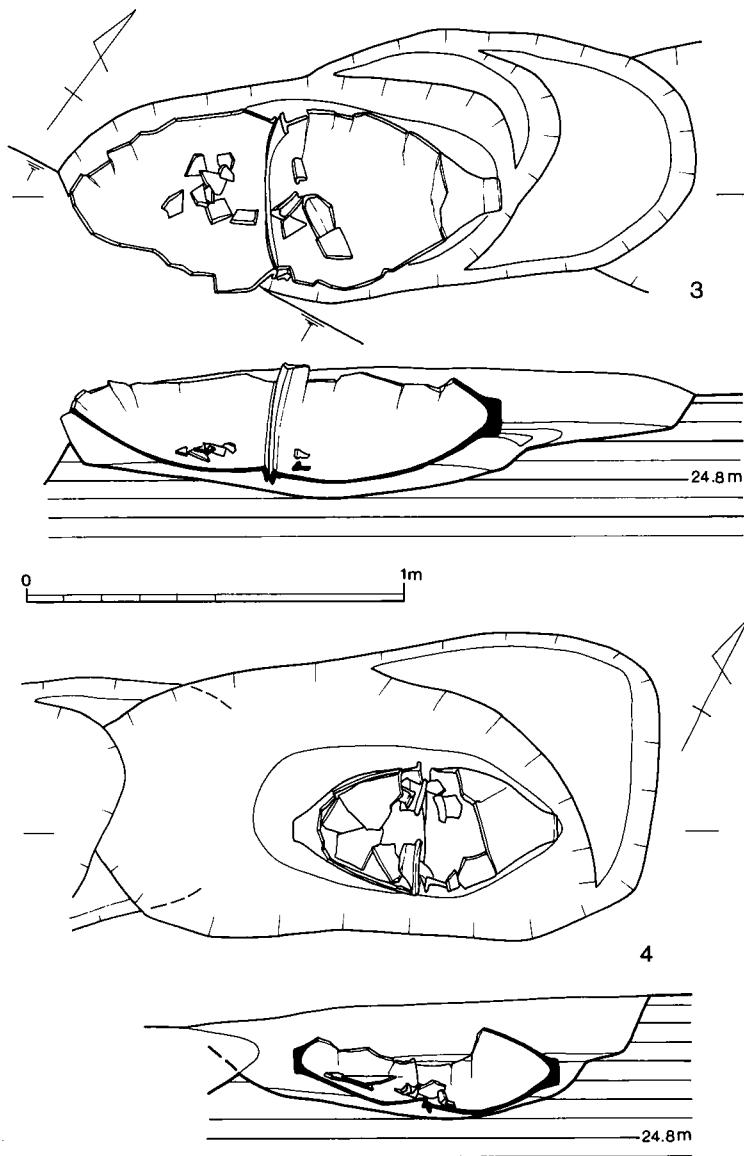
第 69 図 1・2号甕棺墓実測図 (1/20)

の楕円形に近いプランで削平により深さは45cmと浅いが、甕棺は潰れていたため消失せずに残っていた。下甕は掘りかたに接するように埋置されていた西側の甕棺で、東側が上甕であろう。両方の甕が口を合わせた部分には、最高で厚さ5cmの黄褐色粘土が目張りとして口縁部を覆うようにほぼ全周に施されていた。なお、甕棺の内部には副葬品はなく、人骨も残っていなかった。

1号甕棺 (第68図) 上甕は口径67.6cm、器高96.4cmを測る。端部が滑らかに仕上げられる口縁部の厚さは1.4cm

で、内面には明瞭な稜ができるほど強く「く」字状に屈曲する。器壁は厚さ8~9mmで、口縁部から下へ20cmほどのところで胴部はわずかな膨らみをみせる。幅1.7cmで断面形が台形を呈する突帯が底部から45cmほどのところへ貼り付けられるが、この突帯の上面はナデられて緩やかに窪む。底部は径15.2cm、厚さは2.9cmを測る。摩滅が著しく器面調整は窺えない。

下甕は口径については上甕と同じ67.6cm、器高は93.4cmを測る。端面が凹線状に窪む口縁部の厚さは1.6cmで、強く屈曲して内面に明瞭な稜を作るが、断面形態は「く」字状というよりもむしろ「逆し」字状に近い。器壁の厚



第 70 図 3・4号甕棺墓実測図 (1/20)

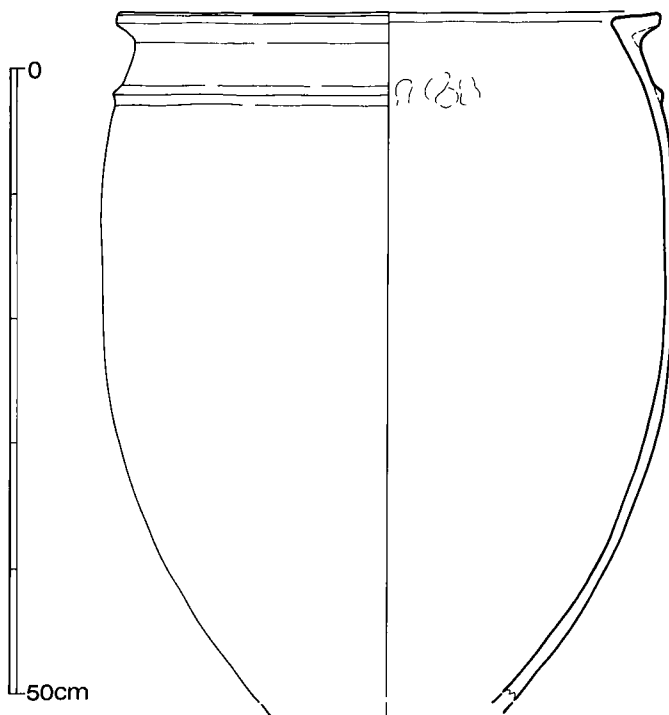
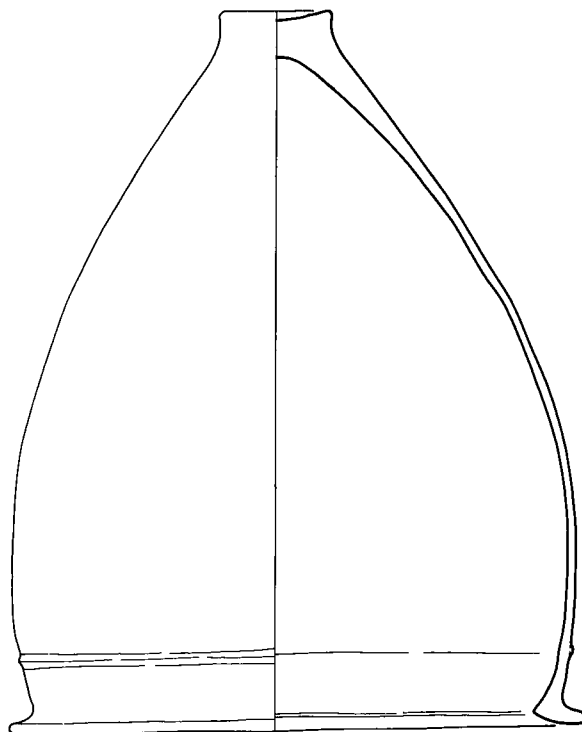
さは9~10mmで、胴部はほとんど膨らまずほぼ直線的に立ち上がる。幅2.0cmで断面形態が三角形状の突帯が底部から40cmほどのところへ貼り付けられる。底部付近の立ち上がりは上甕に比べて鈍く、径14.5cm、厚さ1.0cmでわずかに上げ底状になる。摩滅が著しく器面調整はほとんど窺えない。

2号甕棺墓 (図版51 第69図)

2号甕棺墓は1号甕棺墓の北東7m、3号甕棺墓の南西6mに位置する。平面プランは1.6×0.8mの楕円形で、南側が1段低くなり深さ40cmを測る。遺物は大型甕棺の胴部破片が4点出土しただけだが、遺構の大きさ、他の甕棺墓との位置関係等から、甕棺が抜き取られた甕棺墓の跡と考えられる。おそらく1段下がっている南側に下甕が埋置されていたのであろう。

3号甕棺墓 (図版52 第70図)

3号甕棺墓は4・5号甕棺墓と密集するが、4号甕棺墓とはそれを切るという先後関係にある。削平のため上甕・下甕とも全体の半分ほどしか残らないが、掘りか



第 71 図

3号甕棺実測図 (1/6)

た自体は1.7×0.7mの長楕円形を呈していたと考えられる。北側の甕棺の周囲は段々に広く上がっているため、こちらが上甕になろう。副葬品はなく、人骨も残らない。

3号甕棺（第71図） 上甕は口径45.8cm、器高57.3cmを測る。口縁部の断面形態は「逆L」字状に近く、上面・端部とも比較的丸く滑らかに作られる。口縁部から下へ6cmほどのところに、幅1.4cmで断面形態が低いカマボコ形の突帯が貼り付けられる。最大腹径44.8cmで、厚さ3.0cmの底部は上げ底である。摩滅により器面調整は窺えない。

下甕は口径43.3cm、残存器高55.0cm、最大腹径45.9cmを測る。口縁部の形態は屈曲するというよりも、断面三角形状に外側へ突出するといった感じ。口縁部から下へ7cmほどのところには、幅2.0cmで断面形態が低いカマボコ形の突帯が貼り付けられる。器壁厚は8～9mm。摩滅が著しく器面調整は不明。

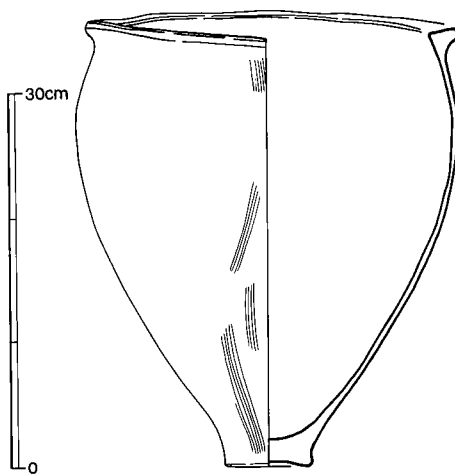
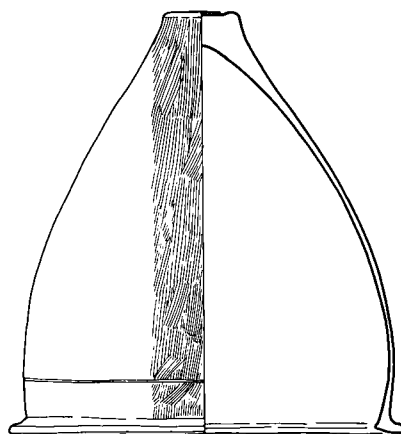
4号甕棺墓（図版53 第70図）

4号甕棺墓はその南側の掘りかたを3号甕棺墓の掘りかたに切られる。掘りかたは1.4×0.8mの隅丸長方形に近いプランを呈するが、北隅に大きなテラスを持つ。北側の甕棺のほうがやや深く掘り込まれ、また掘りかたに接して埋置されているので、下甕になるのであろう。削平により甕棺自体も一部消失するが、それでも全体の2/3ほど遺存する。

4号甕棺（第72図）

上甕は口径29.3cm、器高36.2cm、最大腹径33.1cmを測る。口縁部の断面形態は「逆L」字形というよりも、背の高い台形といった感じで、上面は平坦に仕上げられている。外面にはハケ目がわずかに残る。底部は径6.8cm、厚さ1.9cmでわずかに上げ底になる。

下甕は口径31.5cm、器高33.7cm、最大腹径29.5cmを測る。口縁部の断面形態は丸く滑らかに仕上げられた「逆L」字形を呈するが、内側にも摘んだように軽く突出する。外面全体に器面調整としてのハケ目が観察されるが、このハケ調整の後に口縁部から下へ4cmほどのところに1本の沈線文が施される。器壁厚5mm。底部は径6.1cm、厚さ2.5cm



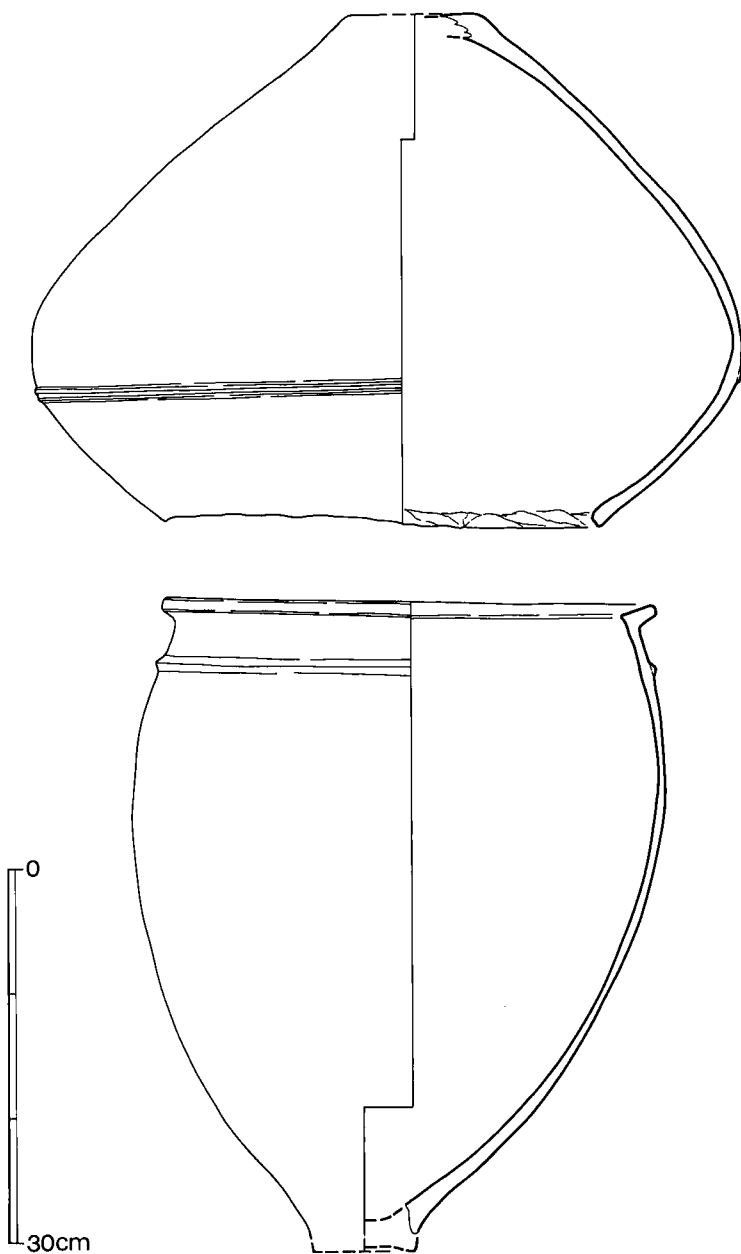
第 72 図 4号甕棺実測図（1/6）

でわずかに上げ底になる。

5号甕棺墓（図版54
第74図）

5号甕棺墓は4号甕棺墓の東30cmほどのところに位置する。削平され掘りかたの全体像はわからないが、甕棺の形態に合わせた瓢箪形を呈するようで、1.3×0.7mが現存する最大の数値である。西側の壺を転用した甕棺のほうが掘りかたが深く掘られ、それによって両方の甕棺は西の方へと傾斜している。しかし、西側の甕棺は東側の口径に合うように口縁部と頸部が打ち欠かれており、このことが上甕を意図した痕跡と考えられ、取り敢えず東側の甕棺を下甕とした。削平により、いずれも1/2ほどしか残らない。

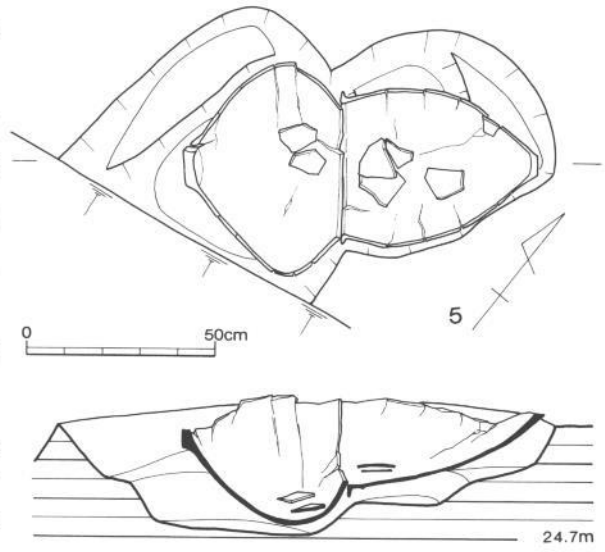
5号甕棺（第73図）
上甕は最大腹径56.5cm、残存器高41.1cmを測り、胴部がかなり張った壺の転用品であ



第 73 図 5号甕棺実測図 (1/6)

る。頸部と胴部の境に相当する部分が打ち欠かれているが、これは下甕の口径に合わせてもので復原径で34cmを測る。最大腹径部よりやや上位に、幅1.1cmで断面形態が台形状の突帯が貼り付けられるが、その上面はナデによって凹線状に窪んでいる。

下甕は復原口径約39cm、残存器高49.9cm、復原最大腹径約42cmを測る。口縁部は面的に角張っており、「逆L」字状に近くなっている。口縁部から下へ6cmほどのところには、幅1.7cmで断面三角形の突帯が貼り付けられている。摩滅により器面調整は不明。



第 74 図 5号甕棺墓実測図 (1/20)

IV) 溝

大碓遺跡では合計11本の溝を検出したが、それらはいずれも弥生時代に属するものである。この中でも、3・4・6・8号の大溝は堅穴住居跡や貯蔵穴を取り囲む環濠に相当し、大碓遺跡の性格を考えるうえで重要な要素となる部分である。以下では、1号溝から順に説明を行いたい。

1号溝 (付図)

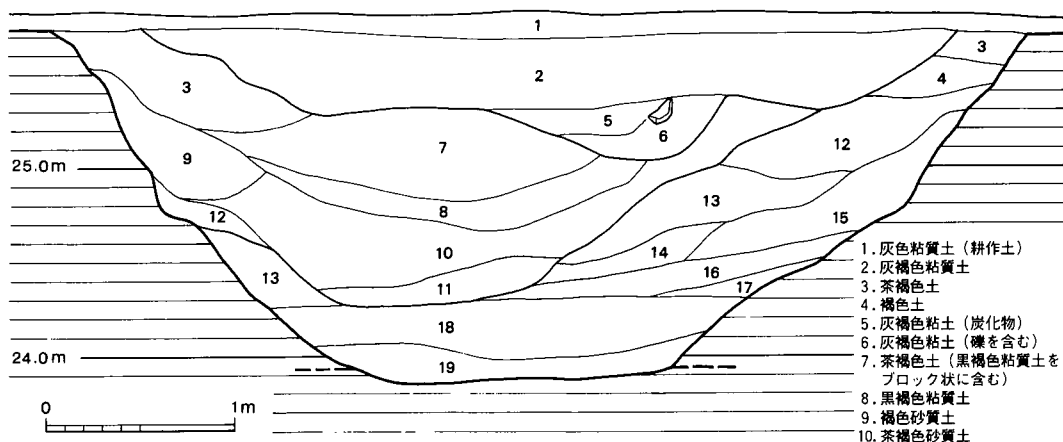
1号溝は途中で途切れているが、本来は1本の同じ溝である。調査区中央南から調査区の北東端へ向けて長さ約50mに亘って南西—北東方向に走り、埋土は黒褐色粘質土で幅50cm、深さ20cmを測る。摩滅した弥生土器の小片のみが少量出土するだけであるが、弥生前期後半の6号堅穴住居跡に切られることから、弥生前期後半頃に掘削されたものと考えられる。断面形態はU字形。

2号溝 (付図)

2号溝は調査区中央南の拡張区から北北東方向へ、約35mに亘って検出された。幅40cm、深さ30cmで断面四角形を呈し、弥生時代前期後半の



第 75 図 3号溝完掘状況 (北西から)



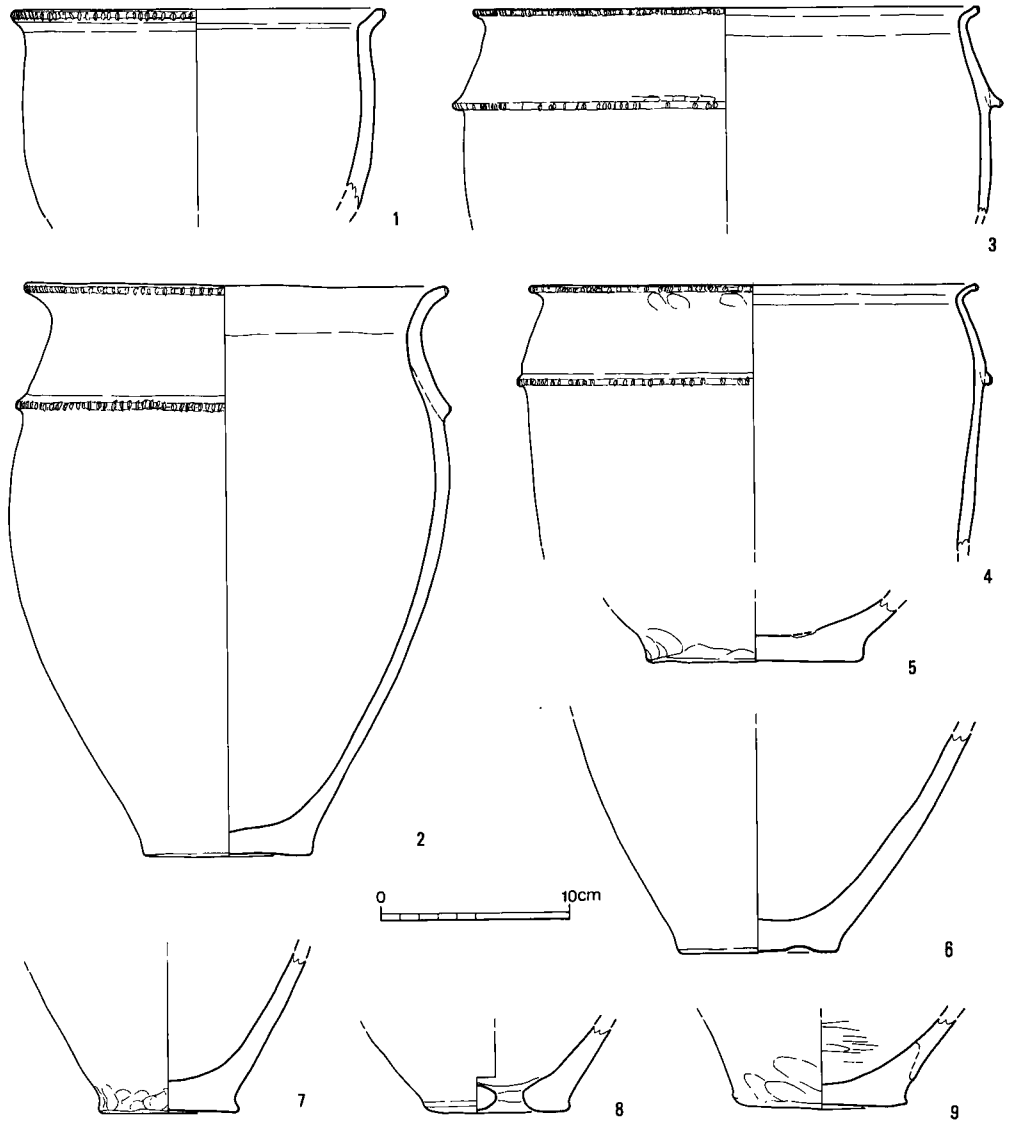
第 76 図 3号溝土層断面実測図 (1/40)

3号溝を切るが、古墳時代の堅穴住居跡等には切られる。出土遺物は小破片の弥生土器だけであり、本遺構も弥生時代に属すると考えられる。

3号溝 (図版55 第76図)

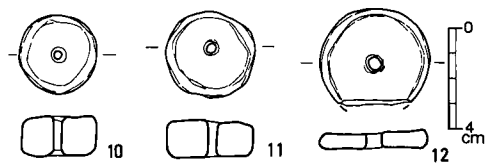
3号溝は調査区の中央やや東寄りで検出された溝で、細長い調査区をほぼ直交するように北北東—南南西方向へ走る。調査区の北端においては4号溝に切られる。調査時においては、今後この溝と集落との関係が問題になると考えられたので、調査区の南25mの調査区外にトレンチを入れたところやはり4号溝に切られることが確認された。これで全長65mに及ぶがほとんど直線的で、どのように集落を巡る(取り囲む)のかがはっきりしない。土器型式から判断すると、50m西に併走する8号溝と年代的にやや近そうだが、これ以外に両者が1本の溝として環濠を形成する根拠は望めそうにない。3号溝の断面形態は底面が平坦で緩やかに開くU字形を呈し、最大幅2.6m、深さ2.0mを測る。土層断面図第2・5・6層より古墳時代後期の遺物が出土したが、この範囲は調査区中央部より南側の10mほどに限られており、古墳時代後期にこの部分は浅い落ち込み状に窪んでいたと考えられる。また、土層断面の観察により、弥生時代においても最低1回の掘り直しが行なわれたようであるが、遺物から年代差を認識することはできなかった。なお、上層出土の古墳時代後期の遺物については、「古墳時代以降の遺構と遺物」の項で説明する。

出土遺物 (第77・78図) 下層から出土した弥生土器は多いが、大部分は小破片ばかりで、図示できるものは意外と少なかった。1は復原口径約20cmの甕で、強く屈曲した口縁部の端部には刻みが施される。2は復原口径約23cm、器高30.7cmの甕で、曲線的に強く外反した口縁部の端部に刻みが施される。また、口縁部の下7cmほどのところにある刻み目突帯文は粘土紐の貼り付けによるものではなく、土器成形時の粘土紐の接合によって作出されたものである。3



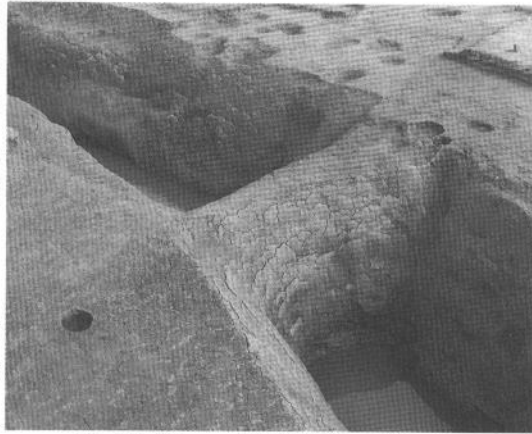
第 77 図 3号溝下層出土土器実測図 (1/4)

は復原口径約27cm、4は復原口径約23cmの甕で、共に曲線的に強く外反した口縁部の端部に刻みを施す。また、口縁部の下6cmほどのところにある刻み目突帯文は、成形時の粘土紐の接合によってある程度突出させてはいるが、その上にさらに粘土紐を貼り付けている。5は壺の底部で径11.3cm。



第 78 図 3号溝下層出土土製品実測図 (1/3)

6～9は甕の底部で、8の穿孔は焼成前のものである。第78図の3点は有孔土製円盤である。10は径4.0cm、厚さ2.1cm、孔径0.4cm、重量21.8g、11は径4.5cm、厚さ2.0cm、孔径0.4cm、重量18.3g、12は径5.7cm、厚さ1.0cm、孔径0.6cm、重量17.4g。



第 79 図 4号溝陸橋 (南から)

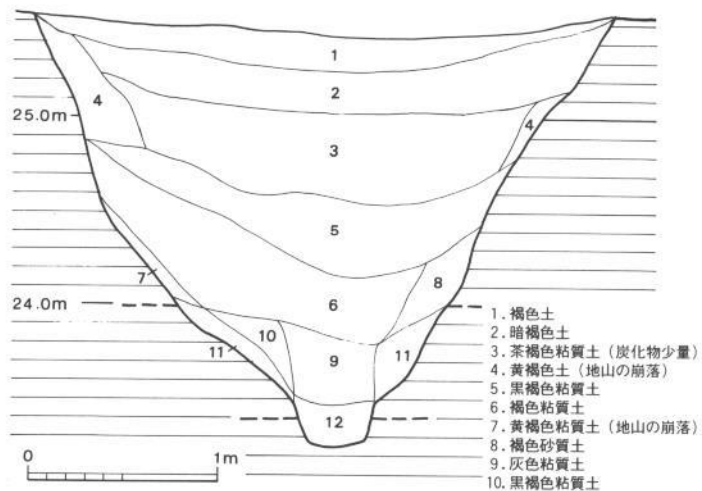
4号溝 (図版57 第79～81図)

4号溝も3号溝と同様で細長い調査区をほぼ垂直に横断するが、西向きに湾曲するのが特徴である。その北端部で3号溝を切るが、土器型式から判断しても、この切り合い関係は

妥当なものといえる。この溝も3号と同じで集落との関係が当然問題になってくるため、先述したようにトレンチでその走行方向を確認したところ、3号溝を切ってさらに湾曲していくことが判明した。そうすると、約70m西にある6号溝やさらに6号溝から約30m西にある8号溝との関係が想定されるころではあるが、出土する弥生土器には年代差があり、今後に残すこととなった。ちなみに、4号溝の弥生土器は中期初頭に属するもので、大淀遺跡においてこの時期に相当する遺構は唯一52号土壇に限られる。

ところで、調査時においてこの溝の土層断面図を作成するためその南端部壁を清掃していたところ、陸橋らしき地山が現われた。そこで急遽調査区を拡張したところ、第79・81図のような作り出しの陸橋を検出することができた。清掃のため幾分削ってしまったが、陸橋上面の幅は約1.2m、最下部の幅は約3.2m、高さ2.3mを測る。陸橋部周辺にはしばしば門に関連した遺構が存在するので再度精査を行なったが、それらしき柱穴等は確認できなかった。

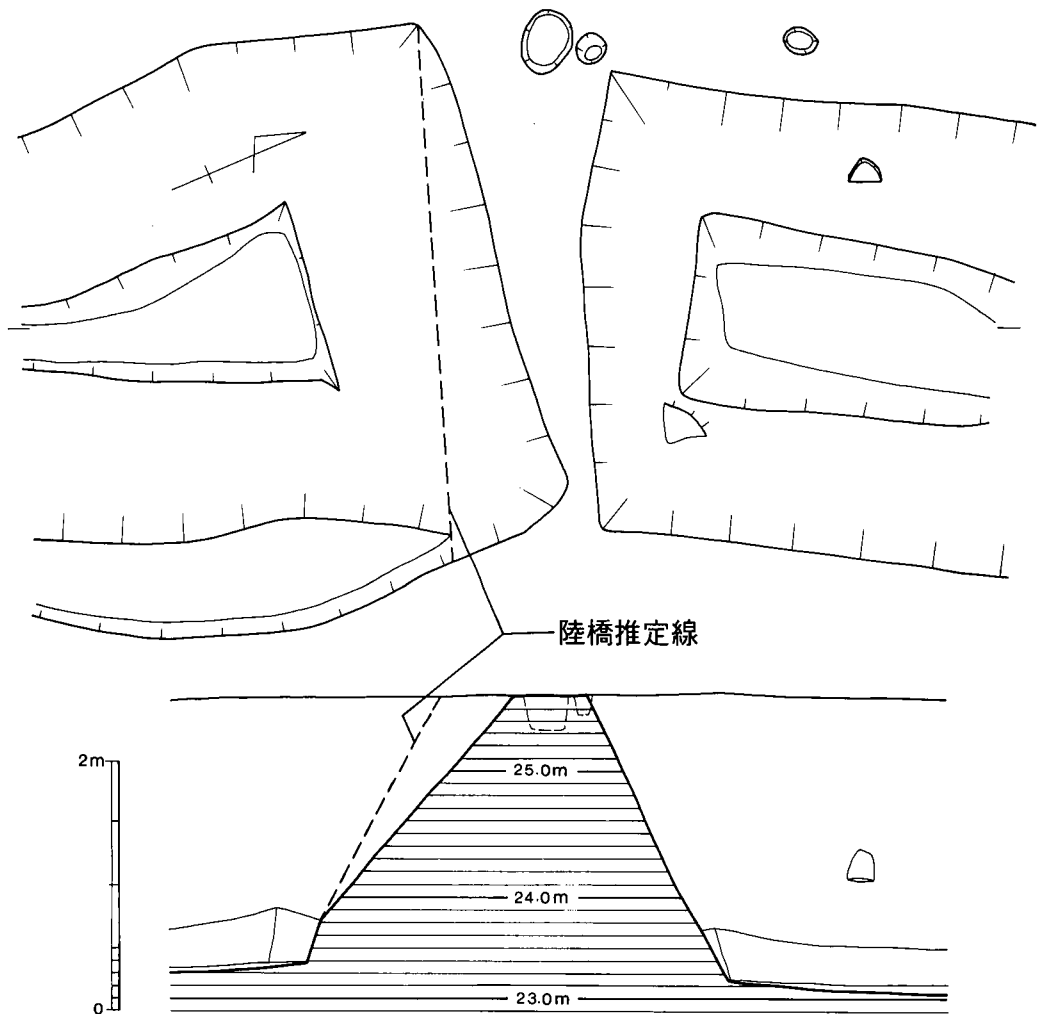
溝の断面形態はかなり急峻なV字形で、人間がこの斜面を素手で登ることはかなり難しい。最大幅3.5m、深さ2.4mを測る。特徴的なのは、最下部において幅40cm、深さ30cmほどだけ直線的にさらに深く掘削されていることである。また、溝の東側斜面にの



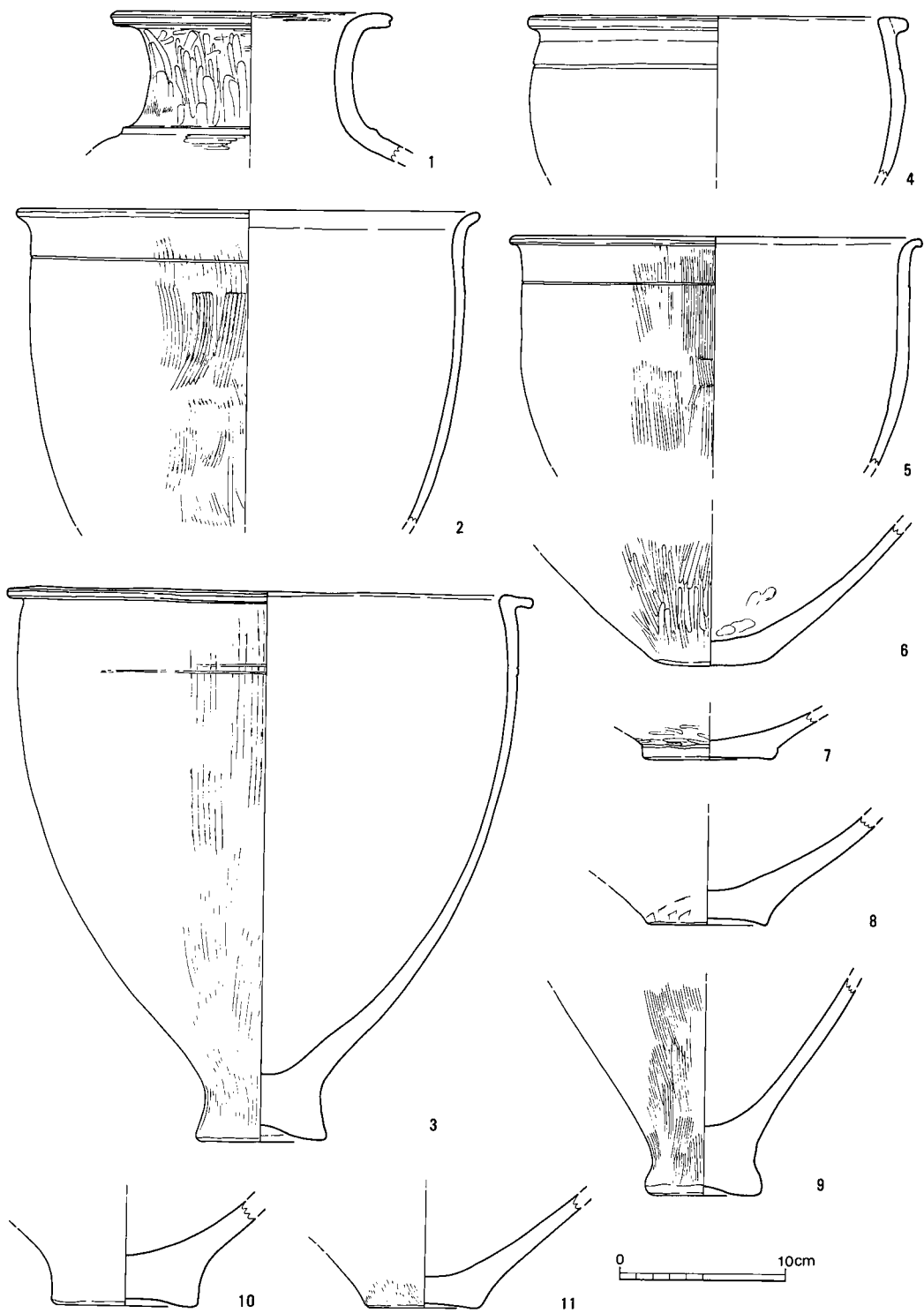
第 80 図 4号溝土層断面実測図 (1/40)

みピットが散在的に存在することにも注意を払っておきたい。

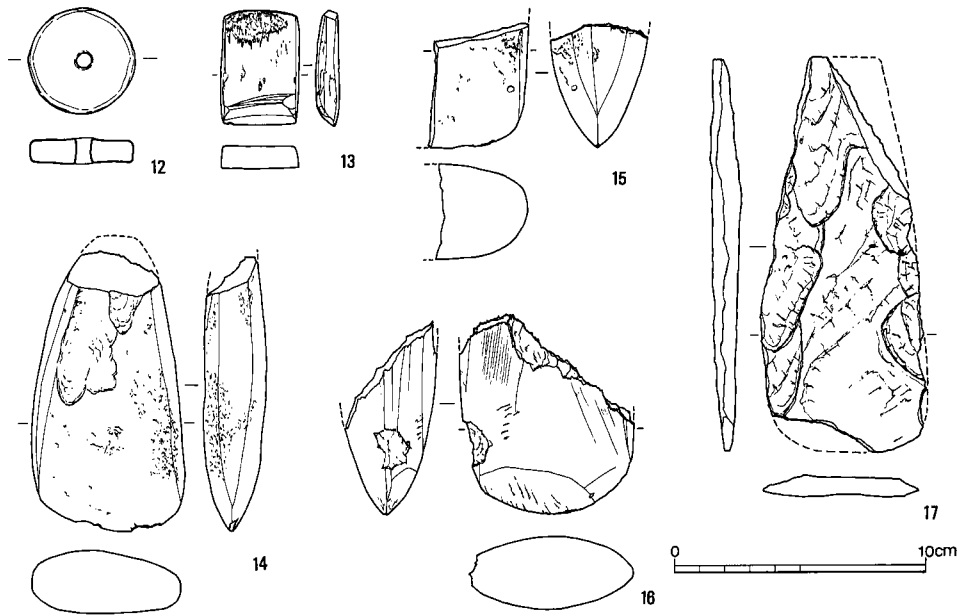
出土遺物（第82・83図） 遺物は意外に少なくパンケース1箱程度であるが、それもほとんどは上部の第1～5層までで、それより下位では極くわずかの遺物しか出土がなかった。1は復原口径約17cmで、頸部と胴部の境には鋭い断面三角形の突帯が貼り付けられている。口縁端部は凹線状に窪み、外面には粗い研磨が施される。2は復原口径約28cm、3は復原口径約32cm、器高33.3cm、4は復原口径約23cm、5は復原口径約25cmの甕である。2～5には外面に器面調整としてのハケ目が観察され、また口縁部の下4～5cmのところには1本の沈線文が引かれる。6～8・11は壺の底部で、6は径8.1cm、7は径7.7cm、8は径7.7cm、11は7.3cm。6・7の外面には丁寧な研磨が施



第 81 図 4号溝陸橋部実測図 (1/60)



第 82 图 4号溝出土土器实测图 (1/4)



第 83 図 4号溝出土土製品・石器実測図 (1/3)

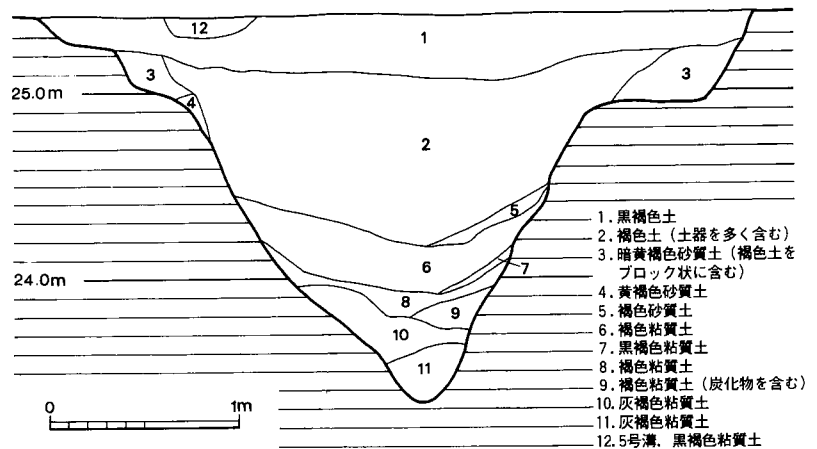
される。8・11にはハケ目が観察される。9・10は甕の底部で、9は径7.1cm、10は径9.0cmを測り、いずれも上げ底になる。12は有孔土製円盤で、径4.1cm、厚さ0.9cm、孔径0.5cm、重量22.6gを測る。13は頁岩質の扁平片刃石斧で、長さ4.5cm、幅3.1cm、厚さ0.9cm。14は安山岩質の両刃石斧で、残存長11.1cm、幅6.1cm、厚さ2.3cm。15は蛇紋岩製の両刃石斧で厚さは4.0cm。16は安山岩質の両刃石斧で、幅6.8cm、厚さ2.8cm。刃部の使用痕の観察から、この石斧は直柄縦斧として使用されていたと考えられる。17は結晶片岩製の打製石斧で、長さ15.8cm、幅6.2cm、厚さ0.9cm。

5号溝 (付図)

5号溝は調査区中央部西寄り、6号溝が埋没した後に掘削される。幅60cm、深さ20cmで、弥生土器片が少量含まれる。

6号溝 (図版 59 第84図)

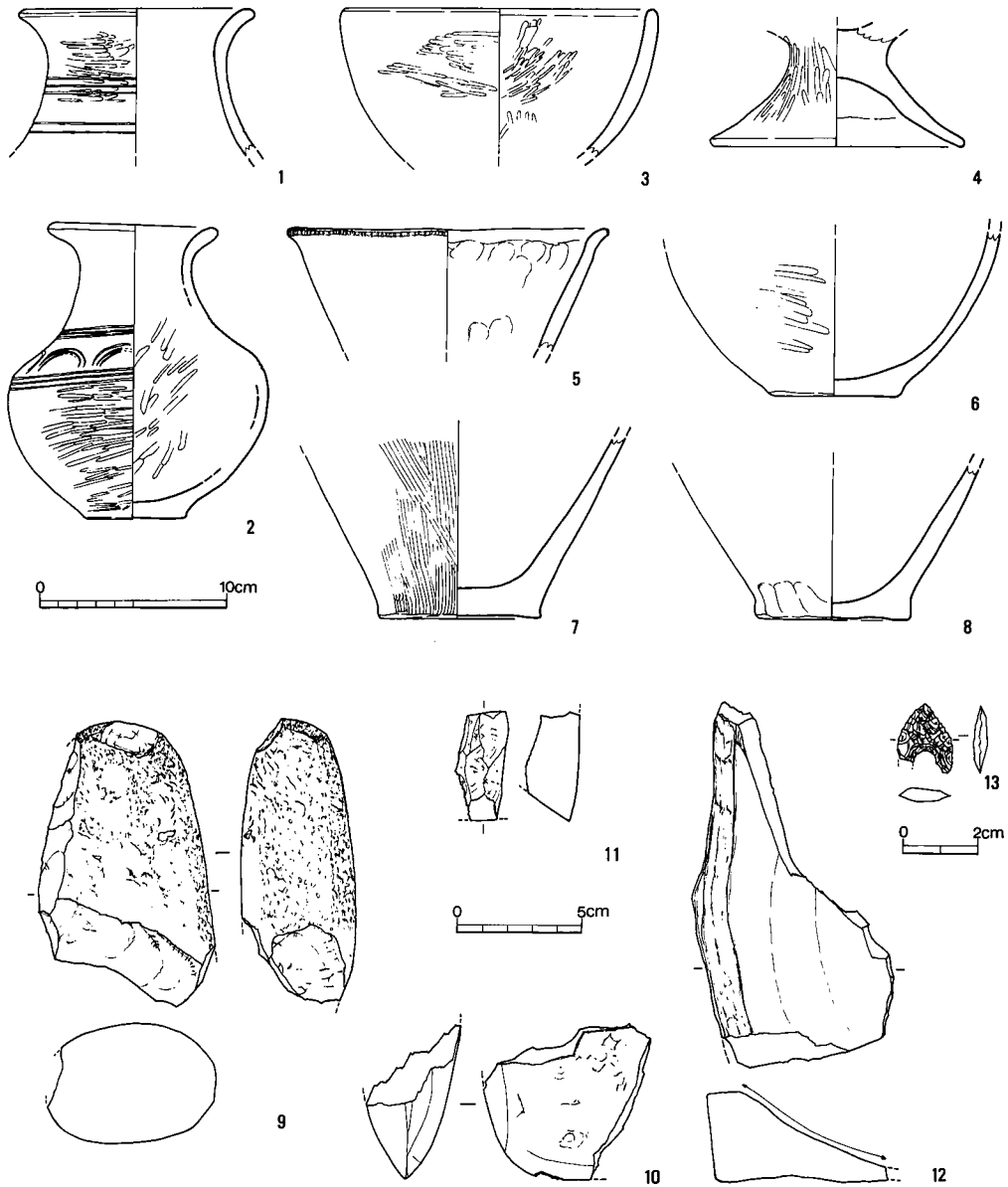
6号溝は調査区中



第 84 図 6号溝土層断面実測図 (1/40)

- 1. 黒褐色土
- 2. 褐色土 (土器を多く含む)
- 3. 暗黄褐色砂質土 (褐色土をブロック状に含む)
- 4. 黄褐色砂質土
- 5. 褐色砂質土
- 6. 褐色粘質土
- 7. 黒褐色粘質土
- 8. 褐色粘質土
- 9. 褐色粘質土 (炭化物を含む)
- 10. 灰褐色粘質土
- 11. 灰褐色粘質土
- 12. 5号溝, 黒褐色粘質土

央部やや西寄り、細長い調査区を直交するように北北東—南南西方向に走る。最上部付近では両側にテラスが作られるが、溝の断面形態自体は急峻なV字形を呈する。最大幅3.8m、深さ2.1mで、最下部では4号溝と同じように細く深くなる。検出した部分についてはほぼ直線的に延びるため、どの溝と繋がって環濠を形成するのかわ不明である。遺物は決して多くないが、



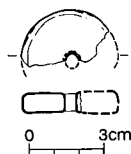
第 85 図 6号溝出土土器・石器実測図 (1~8は1/4 9~12は1/3 13は1/2)

そのほとんどは土層断面図上半部の第1～6層に集中する。

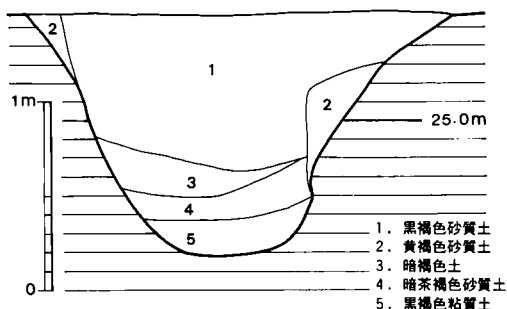
出土遺物 (第85図) 1は復原口径約12cmの壺で、頸部中央に3本の、頸部と胴部の境には2本の沈線文が引かれる。口縁部は若干肥厚し、外面には細かい研磨が観察される。2は口径9.0cm、最大腹径14.1cm、器高15.7cmの小型壺で、頸部と胴部の境に3本、最大腹径部にも3本の沈線文が引かれ、その間に3本単位の重弧状沈線文が充填される。外面には細くて丁寧な研磨が、内面には太くて粗い研磨が施される。3は復原口径約17cmの鉢で、内外面とも細かくて丁寧な研磨が施される。この鉢にはあるいは4のような脚が付いて、高坏のようになるのかもしれない。4は高坏の脚で、裾の復原径は約13cm。外面には研磨が施されるが、内面はナデのみ。5は復原口径約17cmの小型の甕で、口縁端部は刻まれる。6は壺の胴下半部で、外面に粗い研磨が観察される。7・8は甕の底部で、7の径は8.7cm、8の径は8.3cmを測る。9は玄武岩質の両刃石斧基部で、厚さは4.7cm。10は砂岩質の両刃石斧。11は頁岩質の柱状片刃石斧であろう。12は片岩質の砥石状の台石。13は重量0.6gの黒曜石製の石鏃であるが、腰岳産系ではなく、姫島産系に近い。

7号溝 (図版59 第86図)

7号溝は調査区西側で、北東—南西方向に直線的に走る。確認したのは全長30mほどだが、削平されており実際はもっと延びていたと考えられる。最大幅1.1m、深さ0.6mで、底面は比較的平坦なため断面形態はU字形を呈する。遺物は弥生土器小片ばかりで少ないが、1点だけ図示できた。



第87図 7号溝出土製品実測図 (1/3)



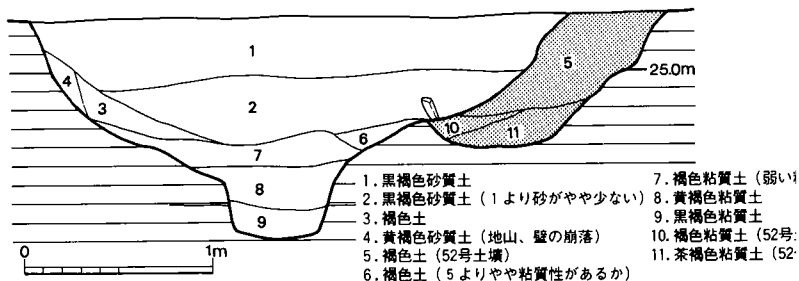
第86図 7号溝土層断面実測図 (1/20)

- 1. 黒褐色砂質土
- 2. 黄褐色砂質土
- 3. 暗褐色土
- 4. 暗茶褐色砂質土
- 5. 黒褐色粘質土

出土遺物 (第87図) 半分以上が欠損する有孔土製円盤で、復原径約4cm、厚さ0.7cm、孔径0.5cmを測る。

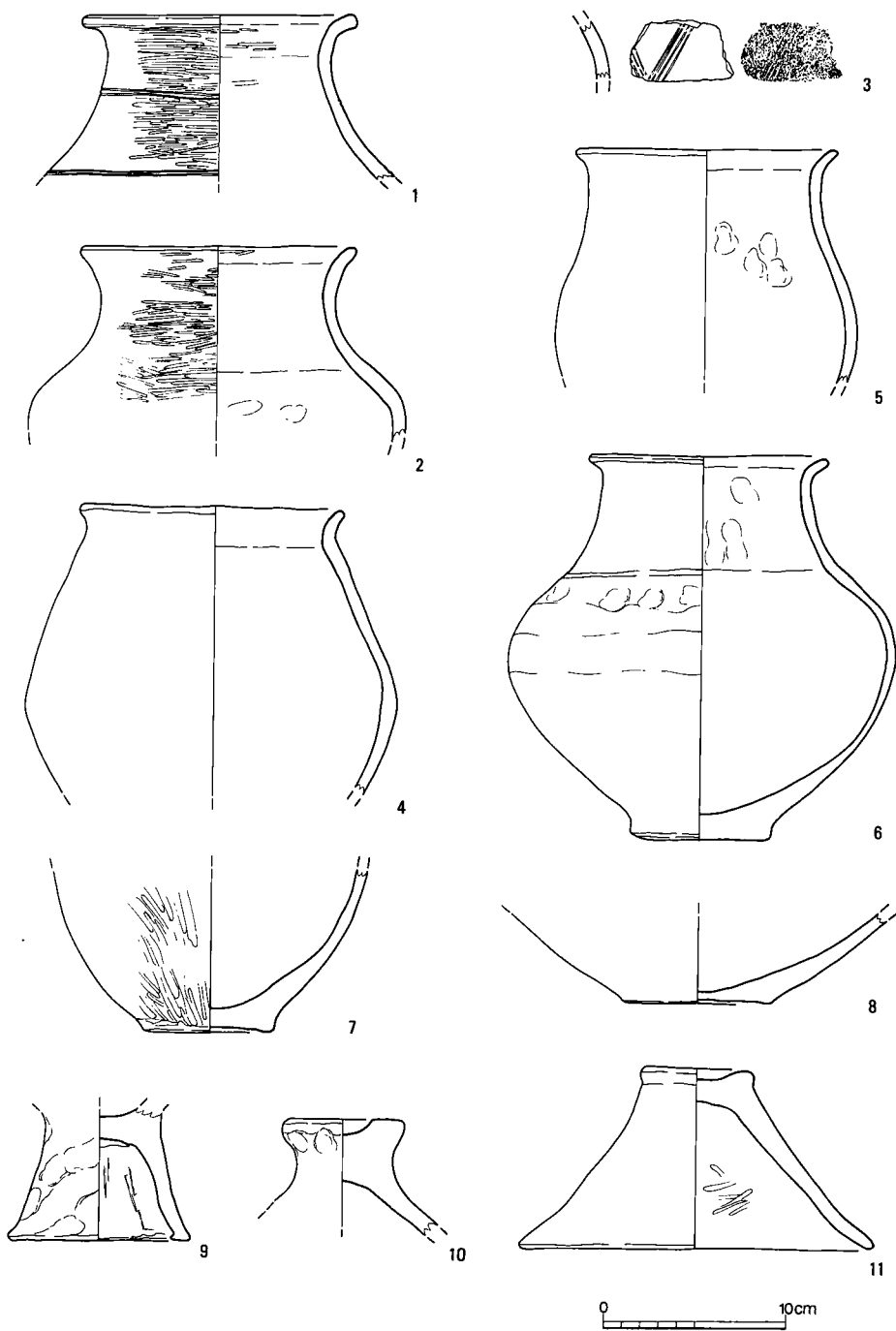
8号溝 (図版61 第88図)

8号溝は調査区の西側に位置し、やはりほぼ南北方向に緩やかに弧を描きながら流れる。この溝も削平されてはいるが、北端は谷部に流れ込んでいるようである。最大幅2.9m、深さ1.2m。断面形態は実に緩やかに開くU字形だが、中央部は幅60cm、深さ30cmで深く直線的に下

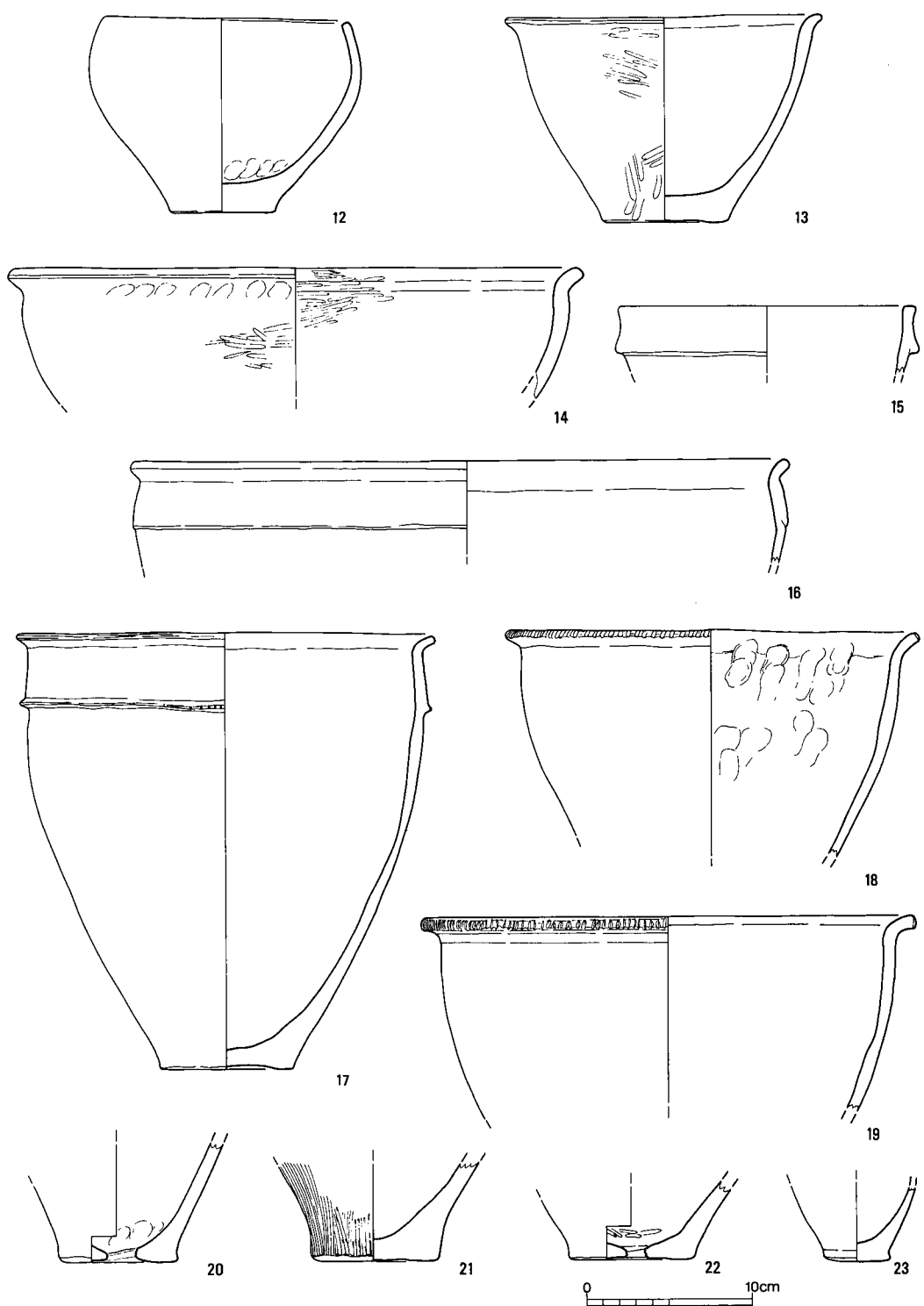


第88図 8号溝および52号土壌土層断面実測図 (1/40)

- 1. 黒褐色砂質土
- 2. 黒褐色砂質土 (1より砂がやや少ない)
- 3. 褐色土
- 4. 黄褐色砂質土 (地山、壁の崩落)
- 5. 褐色土 (52号土壌)
- 6. 褐色土 (5よりやや粘質性があるか)
- 7. 褐色粘質土 (弱い)
- 8. 黄褐色粘質土
- 9. 黒褐色粘質土
- 10. 褐色粘質土 (52号)
- 11. 茶褐色粘質土 (52)



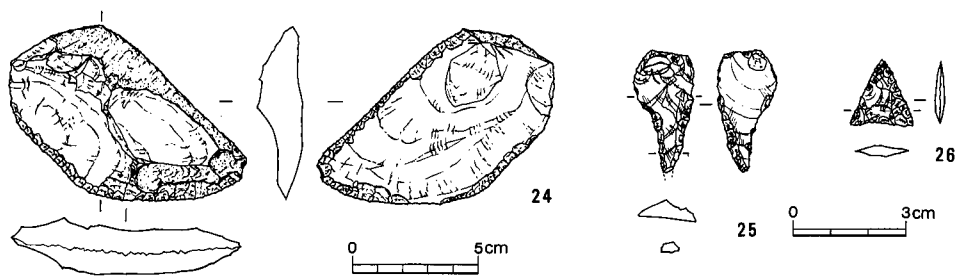
第 89 图 8号溝出土土器实测图. 1 (1/4)



第 90 图 8号溝出土土器実測図. 2 (1/4)

がる。出土土器の年代と溝の走行方向から判断して、3号溝もしくは6号溝との関連性が想定される。遺物は比較的多く纏まって出土したが、その大部分は溝の上半部（土層断面図第1～7層）に包含され、下半部からの出土はごくわずかであった。

出土遺物（第89～91図） 1は復原口径約15cmの壺で、口縁部と頸部の境、頸部と胴部の境にそれぞれ2本の沈線文が引かれている。内外面とも研磨が施されるが、外面は特に密で細かい。2は復原口径約14cmの壺で外面には細かい研磨が施されるが、段や文様は存在しない。3は壺の胴上半部の破片で、4本単位の平行斜線文が山形状に施される。4は復原口径約15cmの頸部が短い壺である。摩滅により調整は不明。5は復原口径約15cmの胴部があまり張らない壺で、摩滅により調整は不明。6は口径13.0cm、最大腹径21.0cm、器高20.8cmの壺。頸部と胴部の境には屈曲によってわずかに段状のものが作出され、その3mmほど上に細い沈線文が1本施される。摩滅して器面調整ははっきりとしないが、内外面ともに指頭圧痕の痕跡が目立つ。7は壺の胴下半部で、底径は7.2cm。外面に比較的粗い研磨が施される。8は壺の底部で、径は8.1cm。9は鉢の脚台であろう。径は9.9cm、残存器高は7.0cmで、外面には粗いナデ、内面にはハケの工具痕が窺える。10・11は頂部が窪む蓋。11は復原口径約19cm、器高10.0cmで、内面には研磨がわずかに窺える。12は口径14.9cm、器高11.7cmの鉢。形態的には壺の胴部に酷似しており、おそらく壺の頸部を作る直前でやめて、鉢にしたのであろう。13は口径19.2cm、器高12.4cmの鉢で、外面には粗いながらも研磨が施されている。14は復原口径約35cmの浅くて口の広い鉢。内外面共に研磨が施されるが、外面の口縁部には指頭圧痕が残る。15は復原口径約18cmの小型の甕、16は復原口径約40cmの甕で、いずれも成形時における粘土紐の接合により突帯文状の隆起を作出する。17は口径25.4cm、器高26.5cmの甕で強く外反した口縁部の端部は刻まれ、また口縁部の下4cmほどのところには刻み目突帯文が貼り付けられている。18は復原口径約25cmの甕で、口縁端部は刻まれ、内面には指頭圧痕が明瞭に残る。19は復原口径約30cmの甕で、強く外反した口縁端部は刻まれる。20～22は甕の底部で、21の外面には器面調整のハケ目が明瞭に観察される。20・22の穿孔は焼成前のものである。23はミニチュア土器の底部で径は3.1cm。おそらく器形は、甕か鉢のようなものになるであろう。24はサヌカイト製のスクレイパーで、刃部の反



第 91 図 8号溝出土石器実測図（24は1/3 25・26は1/2）

対側には自然面が残る。25の石錐と26の石鏃はいずれも腰岳産黒曜石製である。26は重量0.7g。

9号溝 (付図)

9号溝は調査区の西端部に群集する39～41号土壌の西側を、南東―北西方向に走る。確認できた長さは8mで、幅60cm、深さ20cmの浅い溝である。遺物は弥生土器片が数点出土しただけである。

10号溝 (付図)

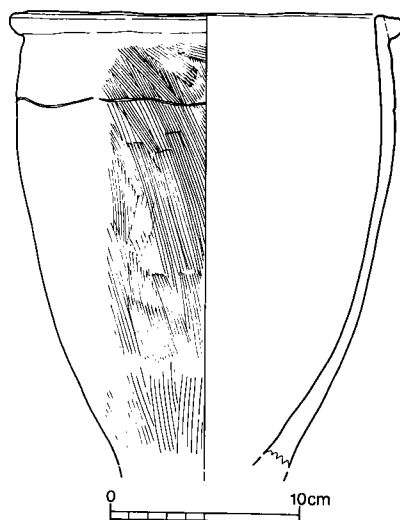
10号溝は調査区西端部で11号溝を切る。幅70cm、深さ30cmで南西から北東方向へ谷部に向かって約6m走る。遺物は弥生土器小片が少量。

11号溝 (付図)

11号溝は調査区西端部で10号溝には切られるが、58号土壌を切る。幅60cm、深さ30cmでやはり南西から北西へ谷部に向かって約11m走る。遺物は弥生土器小片が少量。

V) ピット出土の遺物 (第92図)

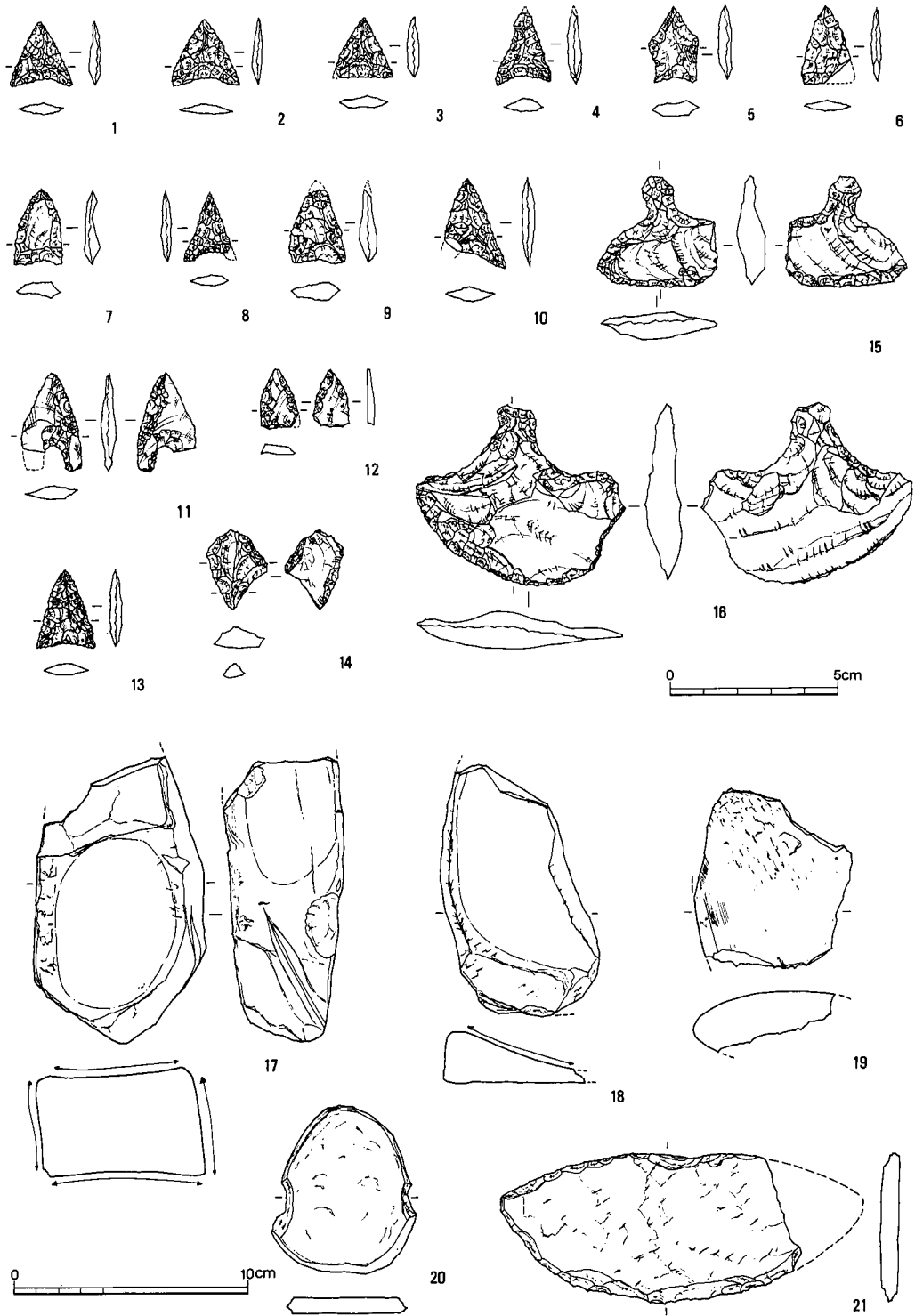
この弥生土器は調査区北西端に存在する24号ピットから出土した。復原口径約21cm、残存器高23.5cm、口縁端部外面には粘土紐を貼り付けるが、刻みなどは施さない。外面にはハケ目が明瞭に残り、口縁部の下5cmほどのところには、細い沈線文が1本引かれる。



第92図 ピット出土土器実測図(1/4)

VI) 包含層出土および表採の石器 (第93図)

ここでは古墳時代以降の遺構に包含されたり、表土や排土の中から採集された石器を一括して説明する。したがって、対象になる年代は縄文時代以降のすべてである。1～10はサヌカイト製の石鏃。9は厚さ6mmとやや肉厚で形態的にも整っておらず、未製品であろう。5の五角形鏃は弥生時代独特のものである。11～13は腰岳産黒曜石製の石鏃。11・12については主要剥離面を大きく残す剥片鏃であるが、鈴桶技法のような剥片剥離技法は窺えない。14はサヌカイト製の石錐で、先端部は使用によりかなり摩滅している。15・16はサヌカイト製の石匙。17は頁岩質の砥石で4面が使用されるだけでなく、溝状に使用された部分もある。18は片岩質の砥石で自然面を残す。19は頁岩質的な両刃石斧の破片。20は短軸部に抉りを入れる扁平な石錘で、重量は51.1g。21の打製石庖丁は結晶片岩製。石鏃の重量は、1が⁰0.8g、2が¹1.0g、3が¹1.0g、4が¹1.0g、5が¹1.4g、6が⁰0.9g、7が¹1.5g、8が⁰0.5g、9が²2.5g、10が¹1.0g、11が¹1.2g、12が⁰0.7g、13が¹1.0gである。



第 93 図 包含層出土および表採の石器実測図 (1~16は1/2 17~21は1/3)

5. 古墳時代以降の遺構と遺物

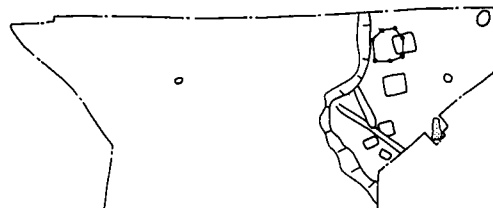
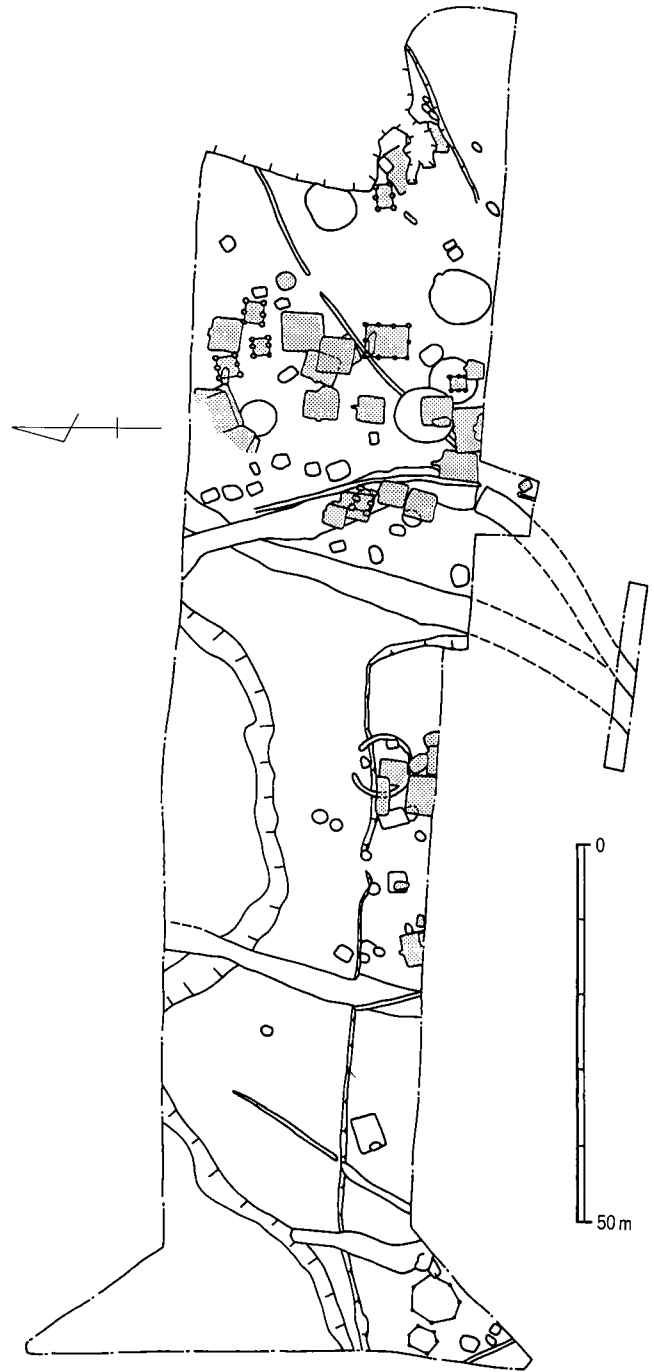
大碓遺跡における古墳時代以降の遺構は、調査区中央部から東側に限られ分布する。その理由は明確でないが、調査区の西側については弥生時代の遺構も著しい削平により遺存状況が東側に比べて悪いので、或いは本来は西側にも古墳時代以降の遺構が存在していたが、削平により遺存していないという可能性もあながち否定できない。

さて、ここでは「古墳時代以降の遺構と遺物」として主に古墳時代後期（7世紀後半）、中世（13世紀代）を纏めて扱っているが、これは古墳時代以降の遺構ではあるが、出土遺物が少ないため細かい年代特定ができない遺構が少なくないことによる。主な遺構としては、竪穴住居跡29軒、掘立柱建物跡7棟、土壇8基、井戸1基等が上げられる。以下ではその説明を行ないたい。

I) 竪穴住居跡

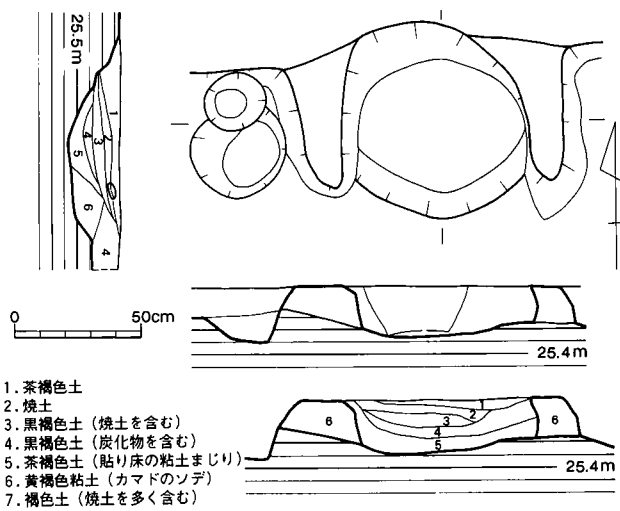
3号竪穴住居跡 (図版65 第95・96図)

3号竪穴住居跡は調査区東側の中でも中央南端に位置し、4・22号竪穴住居跡を切り、5号竪穴住居跡とは北東に20cmの距離で近接する。調査区外に住居跡の南側半分が入り込むためその全容は不明だが、東西には5.9m、南北には4.0m以上の規模を有する正方形に近いプランと考えられる。壁高は10



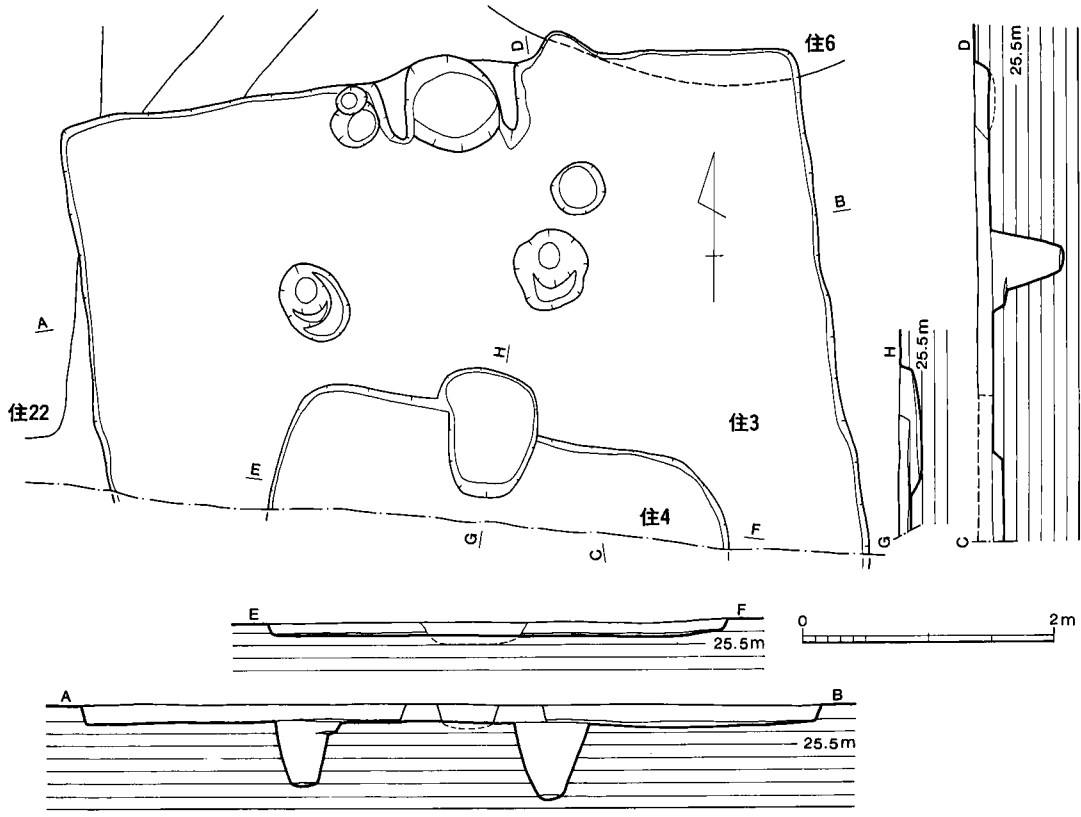
第 94 図 古墳時代以降の遺構配置図(1/1,000)

には4.0m以上の規模を有する正方形に近いプランと考えられる。壁高は10cmほどしか残らず、遺物も少ない。径40cm、深さ60cmの北側の2基の主柱穴だけを検出したが、主柱穴間は1.5mと住居跡の規模に反して狭い。カマドの残りも必ずしも良くないが、第95図のようにソデに相当する黄褐色の粘土が薄いながらも明瞭に残っている。火床に当たる第2層は本住居跡検出面下数cmのところであり、遺存状態の悪さを物語っている。カマド自体は住居跡の外へわずかに突出している。なお、



1. 茶褐色土
2. 焼土
3. 黒褐色土 (焼土を含む)
4. 黒褐色土 (炭化物を含む)
5. 茶褐色土 (貼り床の粘土まじり)
6. 黄褐色粘土 (カマドのソデ)
7. 褐色土 (焼土を多く含む)

第 95 図 3号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

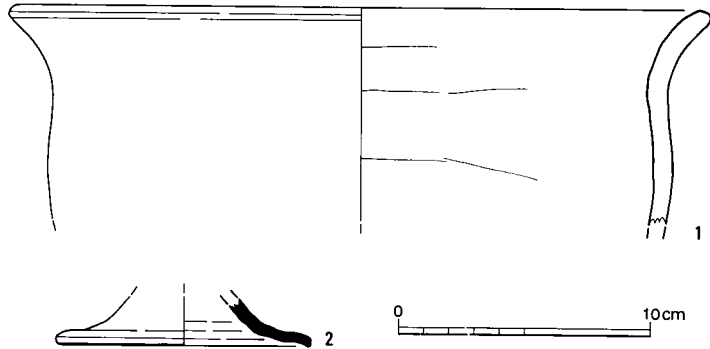


第 96 図 3・4号竪穴住居跡実測図 (1/60)

4号竪穴住居跡は本住居跡を完全に掘りあげた段階で、その床面下から検出されたものである。

出土遺物（第97図）

1は復原口径約28cmの甕で、内面の頸部以下にはケズリがわずかに観察される。



第 97 図 3・4号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

4号竪穴住居跡（図版

65 第96図）

4号竪穴住居跡は3号竪穴住居跡を完全に掘りあげた段階で、その床面下から検出された。大部分が調査区外に埋もれているため、東西には2.6m、南北にはカマド周辺がわずかに1.0mほど確認されただけである。規模自体は比較的小さく、おそらく方形のプランを呈していたのであろう。したがって、主柱穴は未確認で、壁高も8cm程度しか残らない。北壁中央には1.0×0.7mの範囲でカマドの痕跡と考えられる浅い落ち込みを検出したが、これは壁の外へ40cmばかり突出している。

出土遺物（第97図） 2の須恵器は復原径約10cmの高坏の脚部で、7世紀後半に比定されよう。

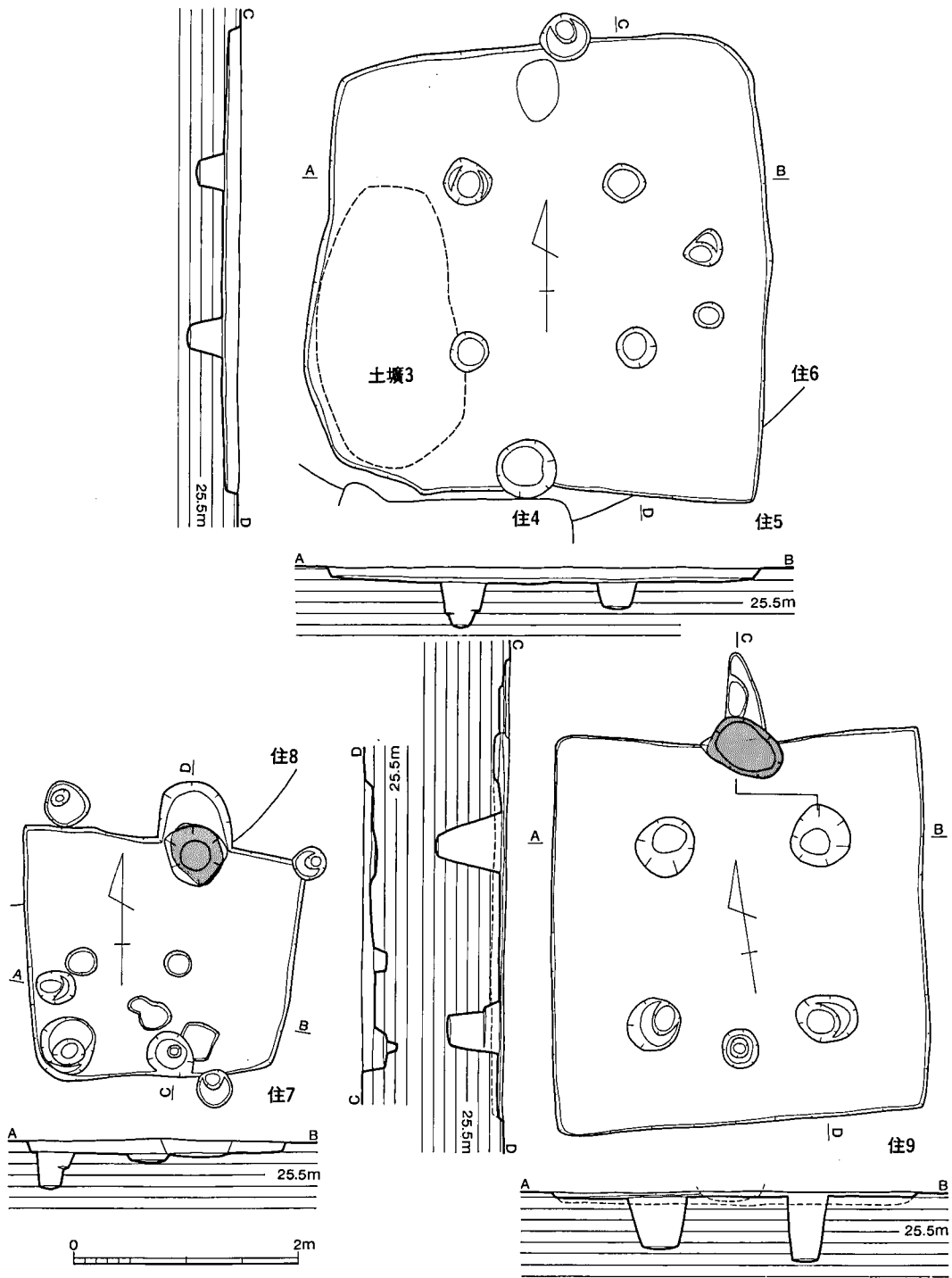
5号竪穴住居跡（図版66 第98図）

5号竪穴住居跡は調査区東側でも中央南寄りに位置し、3号土壇に切られ、また4号竪穴住居跡にその南西部において20cmの距離で近接する。4.1×4.0mの正方形を呈し、幅約30cm、深さ約40cmの主柱穴を4本持つ。壁高が10cm程度と遺存状態が悪いためか、カマドは北壁中央部に50×30cmの範囲でわずかに焼土が残るだけである。遺物は少なく、図示できないほどの須恵器や土師器の小破片ばかりである。

7号竪穴住居跡（図版66 第98図）

7号竪穴住居跡は調査区東側でも中央部南端に位置し、弥生時代の8号竪穴住居跡を切り、1号掘立柱建物跡とはその北西部で接する。2.4×2.2mという規模は本遺跡の古墳時代以降の住居跡においては最も小さく、壁高も10cmほどしか残らない。床面においていくつかのピットを検出したがその位置関係や規模はまちまちで、どのピットがこの住居跡の主柱穴になるのか特定できなかった。北壁中央部において50cmの突出部と60×40cmの焼土の広がり確認され、ここがカマドに相当することが判明したが、ソデ等は全く残っていなかった。この住居跡に関してはほとんど遺物が出土していない。

9号竪穴住居跡（図版67 第98図）

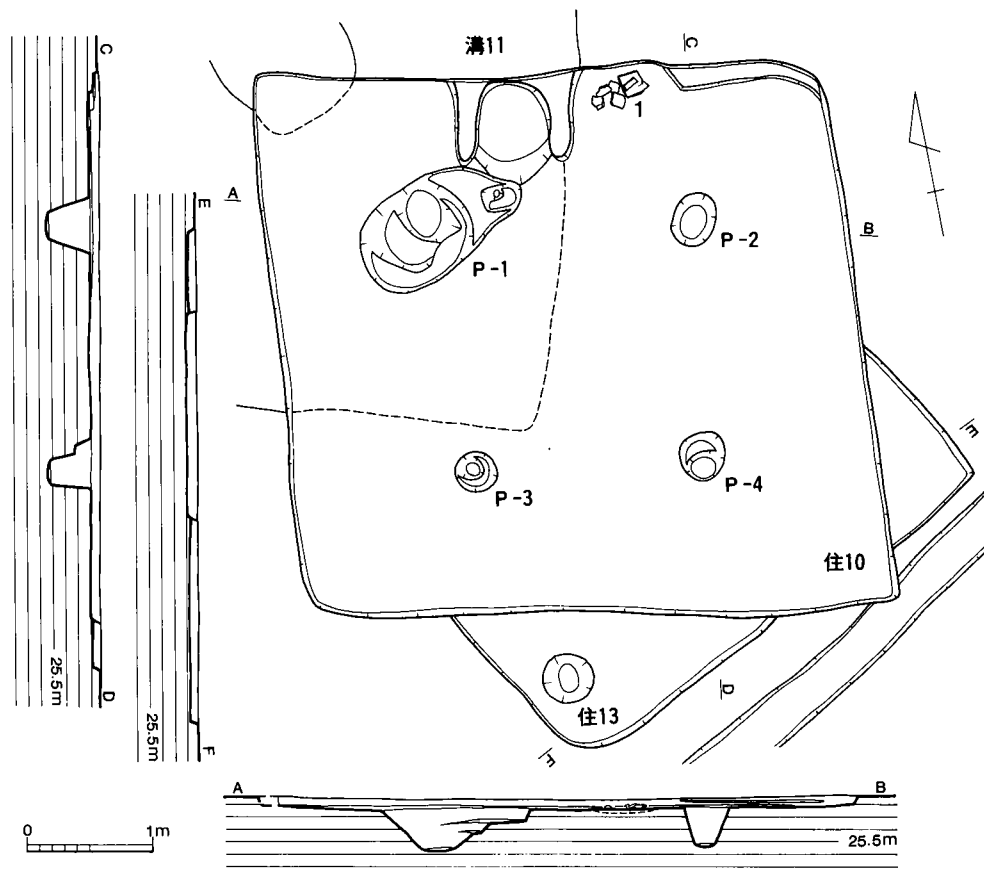


第 98 图 5·7·9号竖穴住居跡実測图 (1/60)

9号竪穴住居跡は調査区東側の中央部に位置し、14号竪穴住居跡の南3mにある。方形プランの規模は3.5×3.3mで、厚さ8cmほどの貼り床が明瞭に確認された。主柱穴は4本で、径は50cm、深さは40～60cm。北壁中央付近では60×40cmの範囲でカマドの火床となる焼土の広がり、そこから北方向へ90cm分の煙道跡が検出された。遺物は数点で、図示できないほどの土師器の小破片ばかりである。

10号竪穴住居跡 (図版67・68 第99・100図)

10号竪穴住居跡は調査区東側でもその中央に位置し、11～13号竪穴住居跡をすべて切る。規模は4.5×4.4mだが、プランは菱形状に若干歪んだ正方形である。主柱穴は4本で深さは40cm程度になるが、主柱穴P-1については11号竪穴住居跡の主柱穴-4と切り合っているためその形態を確実に把握することができなかった。カマドは北壁中央部にあり、第100図に示したように火床となる焼土やソデに当たる黄褐色粘土を確認したが、カマドに伴う祭祀関連の遺物や痕



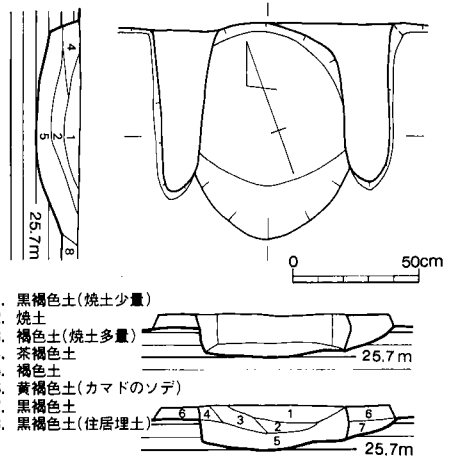
第 99 図 10・13号竪穴住居跡実測図 (1/60)

跡は全く窺えなかった。住居跡の遺存状態自体は壁高8cm程度で決して良くないが、遺物は比較的纏まり、カマドの東横には1個体分の壺が出土した。遺物から7世紀後半に比定されよう。

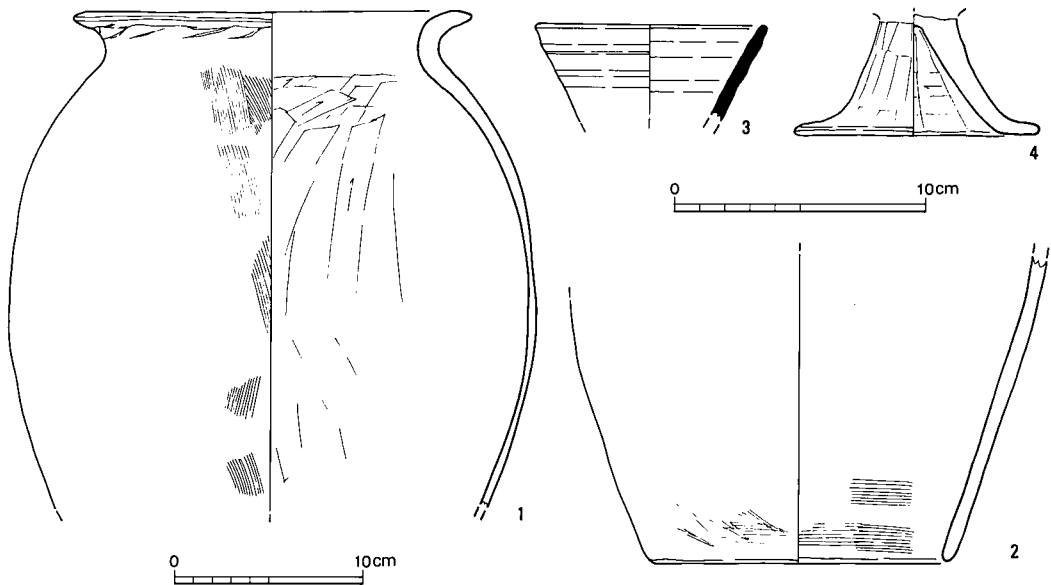
出土遺物 (第101図) 1はカマドの東横から出土した土師器の壺で、口径21.3cm、残存器高26.0cmを測る。外面にはハケ目と口縁部下にその工具痕が観察され、内面の頸部以下はかなり削られ器厚は3mmになる。2は甑で復原底部径約23cm、内外面ともにハケ目が窺える。3は須恵器の長頸壺の口縁部で、復原口径は約9cm。4は径9.6cmの高坏の脚部で、外面は縦方向に、内面は横方向に削られる。

11号竪穴住居跡 (図版67・69 第102・103図)

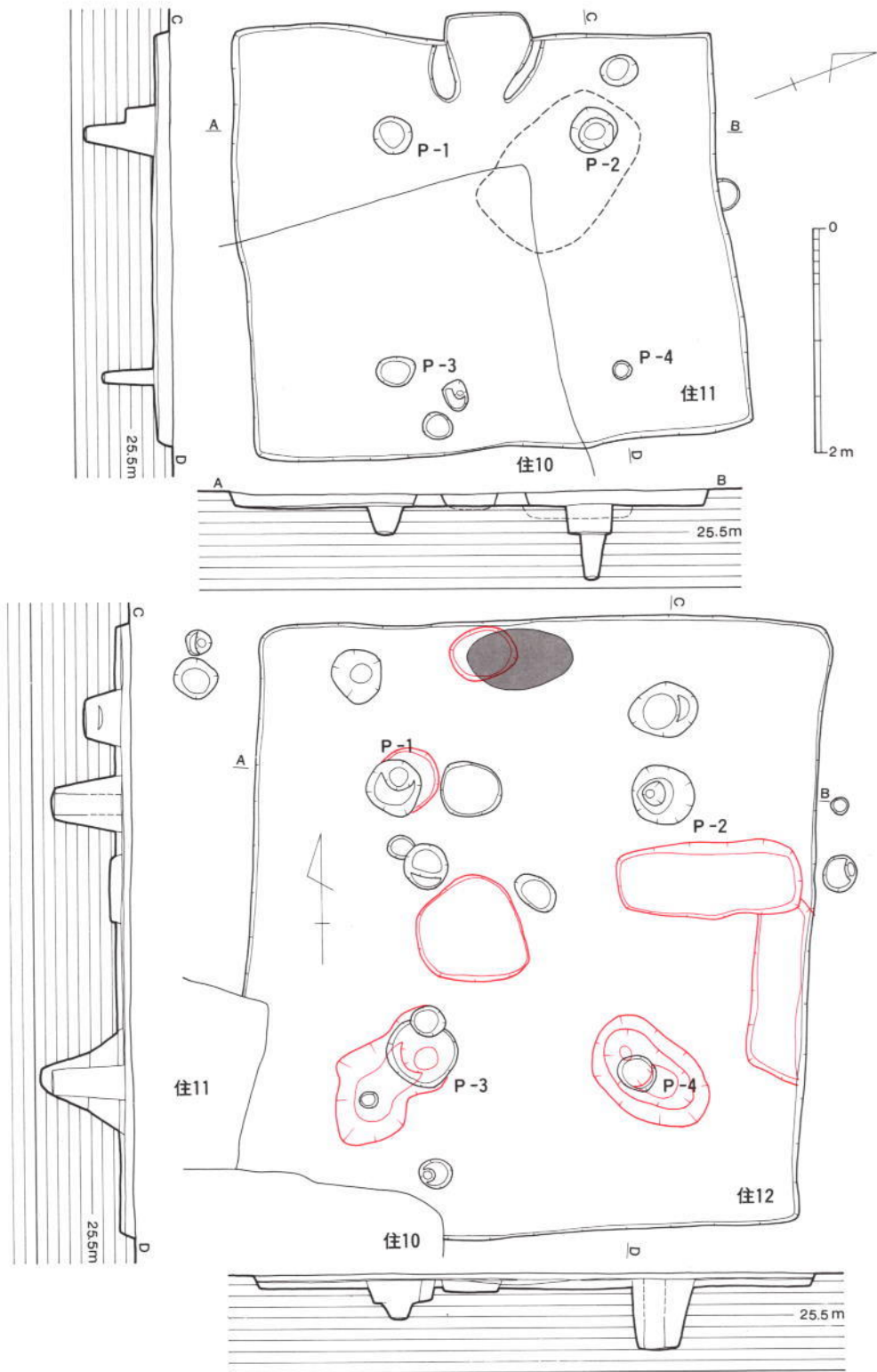
11号竪穴住居跡は調査区東側でもその中央部に位置し、10号竪穴住居跡に切られ、14号竪穴住居跡に極めて近接する。4.3×3.6mの長方形プランで、壁高15cmと残りは比較的良いほうである。主柱穴は4本で住居跡のプランに対応した位置に配置されているが、深さは40~70cmとバラツキがある。カマドは珍しく西壁中央に付設され、約20cmほど突出する。第103図に示したように明確な火床は確認できなかったが、ソデに当たる黄褐色粘土は良く残り、突出部を覆うようにソデが作られている様子が観察さ



第 100 図 10号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)



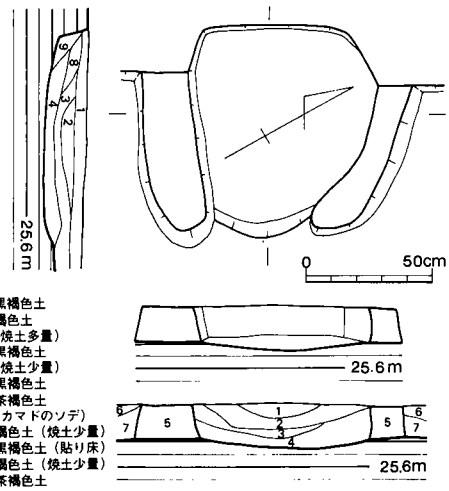
第 101 図 10号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



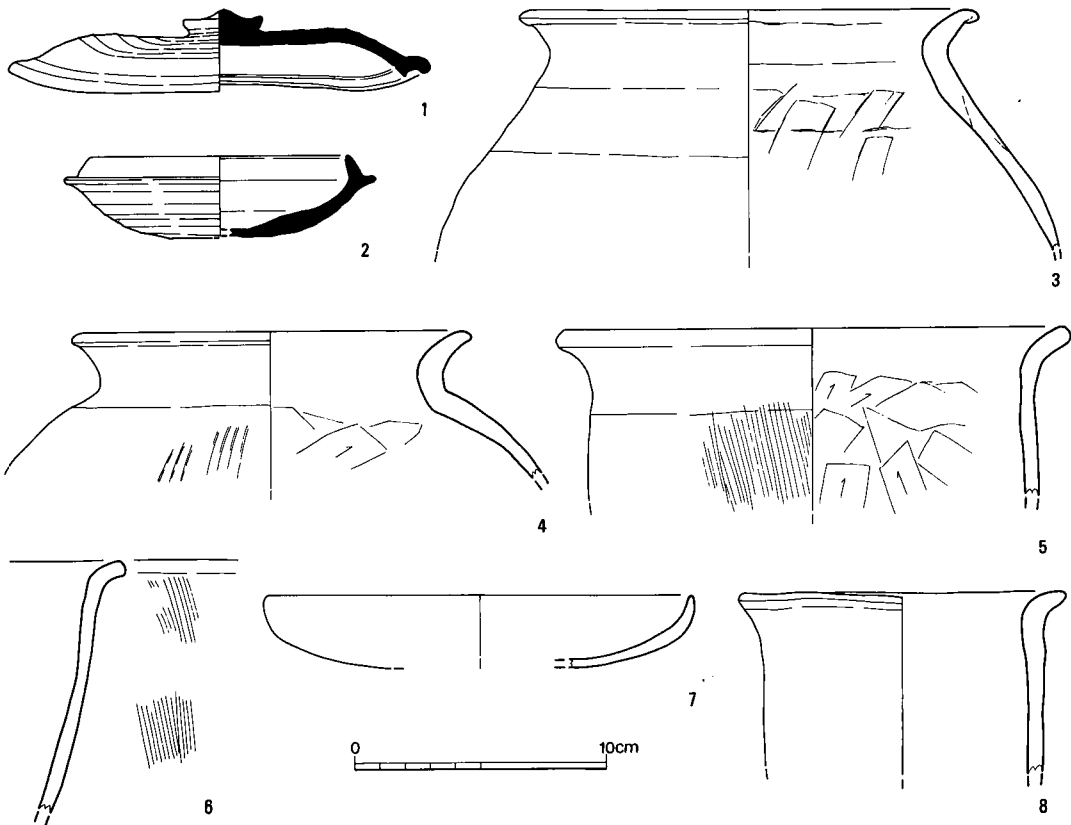
第 102 図 11・12号竪穴住居跡実測図 (1/60)

れた。なお、カマドからは3・4の土師器壺が、5は主柱穴P-3から出土し、2の須恵器は埋土上部に包含されていた。7世紀後半に比定されよう。

出土遺物 (第104図) 1・2は須恵器で、1の坏蓋は焼成の際にかなり歪んでいるが口径16.8cmを測る。天井部には回転ヘラケズリが、その内面にはナデが施される。床面出土。2は復原口径約10cmの坏身で埋土上部の出土。3は復原口径約18cmの土師器壺で、内面の頸部より下はケズリが窺える。4は復原口径約16cmの壺で、外面にはハケ目が、内面にはケズリが観察される。3・4はカマド内出土。5は復原口径約20cmの甕で、外面にはハケ調整が、内面にはケズリが施される。6の甕には外面にハケ目が窺える。



第 103 図 11号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)



第 104 図 11・12号竪穴住居跡出土土器実測図 (11号は1~6 12号は7・8 1/30)

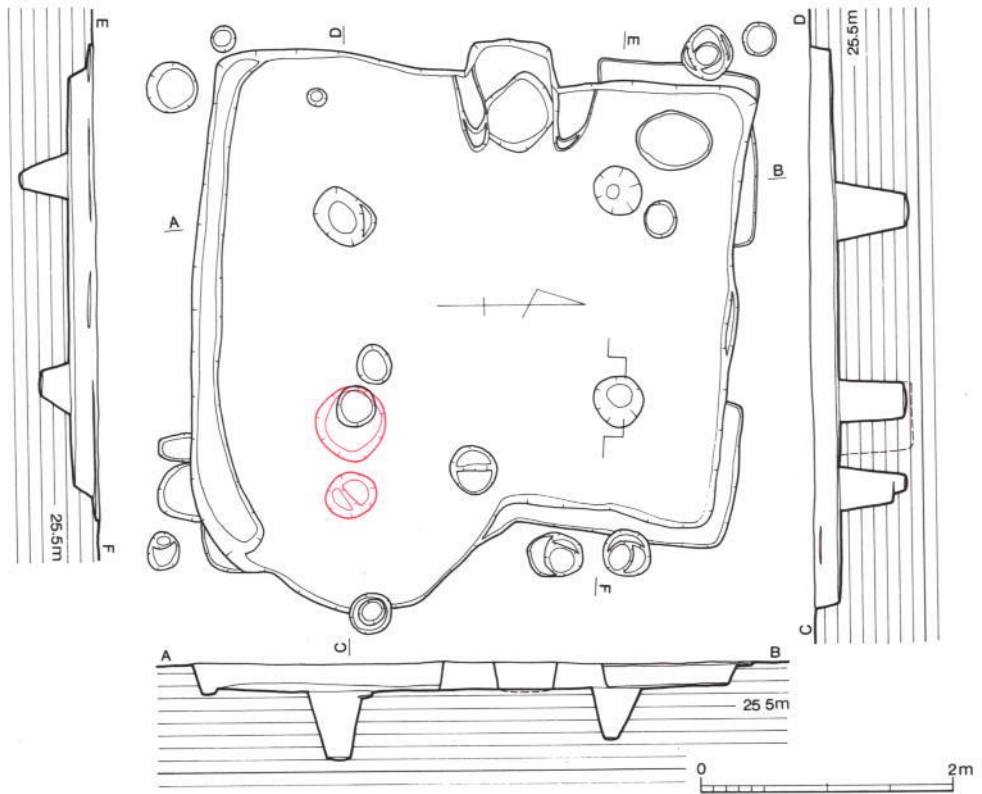
12号竪穴住居跡 (図版67・68 第102図)

12号竪穴住居跡は調査区東側でもほぼその中央部に位置し、10・11号竪穴住居跡に切られる。5.5×5.0mという規模は本遺跡の古墳時代以降の竪穴住居跡の中では最も大きいものであるが、壁高は10cm程度で残りは悪い。支柱穴は深さ60cmほどのもの4本からなるが、いずれも掘り直しが行なわれており、この住居跡自体もほぼ同じ場所に建て直されたものと考えられる。支柱穴P-2では径20cm弱の柱痕を確認した。北壁中央部にはカマドの火床跡と考えられる焼土を、0.9×0.5mの範囲で検出した。遺物は少なく、すべて土師器であった。図示した2点はいずれも焼土の周辺から出土した。

出土遺物 (第104図) 7は復原口径約17cm坏身だが、摩滅により器面調整は不明。8は復原口径約13cmの小型の甕で、加熱を受けている。

13号竪穴住居跡 (図版67 第99図)

13号竪穴住居跡は調査区東側でもほぼその中央部に位置し、10号竪穴住居跡に大きく切られる。したがって、その全体像はほとんどわからないが、およそ一辺が4m程度の方角プランであっ

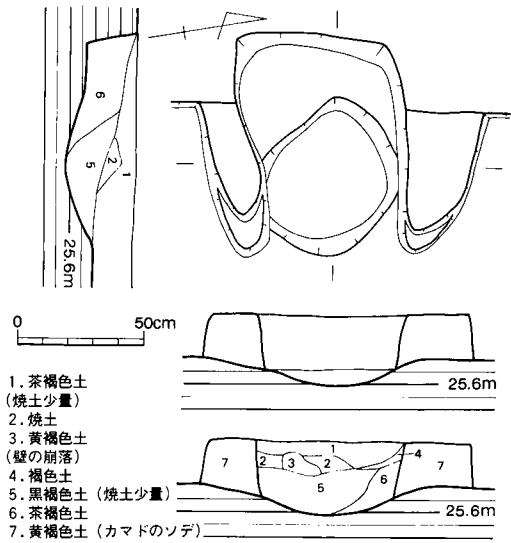


第 105 図 14号竪穴住居跡実測図 (1/60)

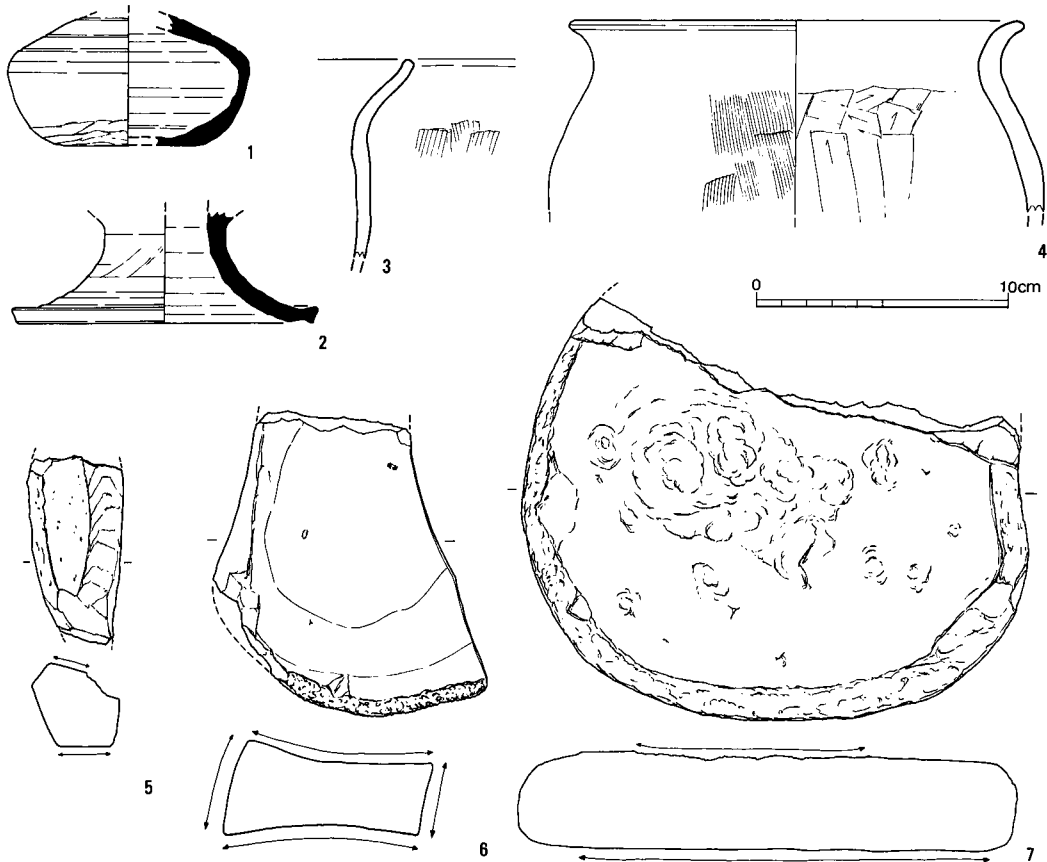
たとえられる。10号竪穴住居跡を掘り上げた段階で13号住居跡の主柱穴が検出されるはずであったが、意外にもそれらしき柱穴は全くなかった。遺物も全く出土していない。

14号竪穴住居跡 (図版67・70 第105・106図)

14号竪穴住居跡は調査区東側の中でもほぼその中央部に位置し、11号竪穴住居跡とその東壁において接するように近接する。4.4×3.8mの方形プランであるが、東壁南半分が70cmほど突出する。本住居跡のプラン検出時において、この突出部は他遺構と切り合った部分と考えていた。ところが床面まで掘り下げてみると、南壁に沿う側溝がこの突出部に



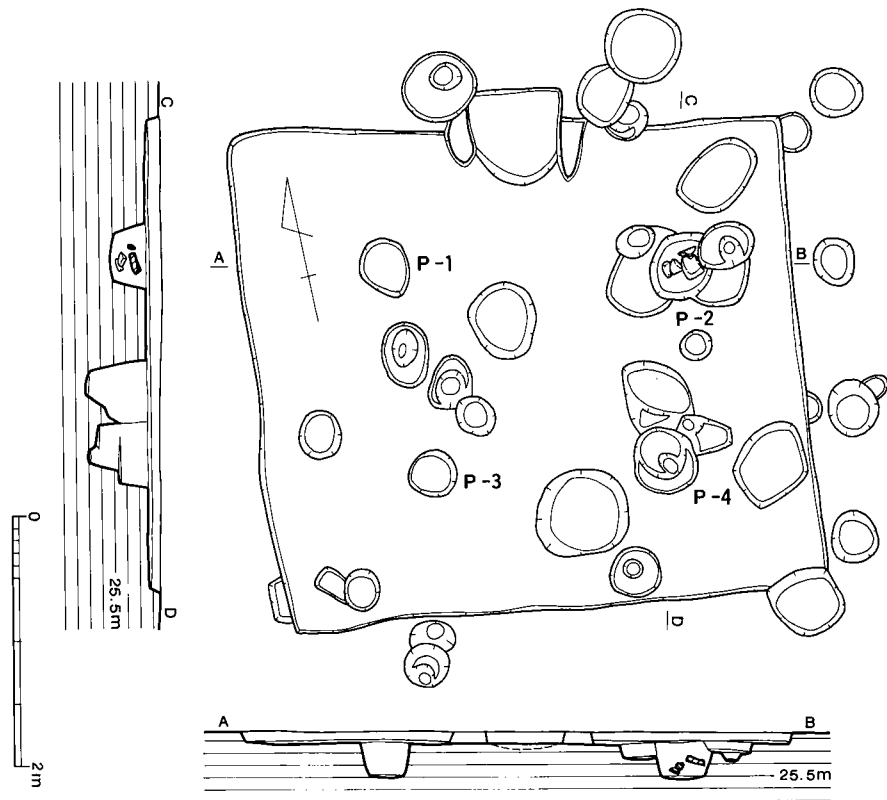
第 106 図 14号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第 107 図 14号竪穴住居跡出土土器・石器実測図 (1/3)

も続いていくことが確認されたため、突出部は本住居跡に入り口的機能を有して伴うものという判断に至った。住居跡の北東隅と北西隅には、「L」字状の幅20cmの段（テラス？）が付設される。性格不明の段ではあるが、この段を含めてはじめてこの住居跡はカマドを中心に左右対象の形態を呈することになるので、おそらくは住居の構造に関係したものと考えられる。カマドについては、西壁中央部に付設されること、また壁から方形状に約30cmほど突出することなど、11号竪穴住居跡のカマドと酷似している点が多い。火床に当たる焼土とソデに当たる黄褐色粘土はしっかりと残っていたが、遺物はほとんど出土しなかった。住居跡からは比較的多くの遺物が出土したが、これは壁高が20cm近く残っていることと少なからず関係しよう。図示した遺物はすべて床面出土である。7世紀後半に比定されよう。

出土遺物（第107図） 1・2は須恵器で、1は復原径約10cmの甕の胴部。底部には手持ちによるヘラケズリが施される。2は復原径約12cmの高坏の脚部。3の甕の外面にはハケ目が窺える。4は復原口径約18cmの甕で、外面にはハケ目が内面にはケズリが施される。5・6は砥石で、5は頁岩質、6は砂岩質。7は玄武岩質の台石で、中央部が敲打により若干窪んでいる。

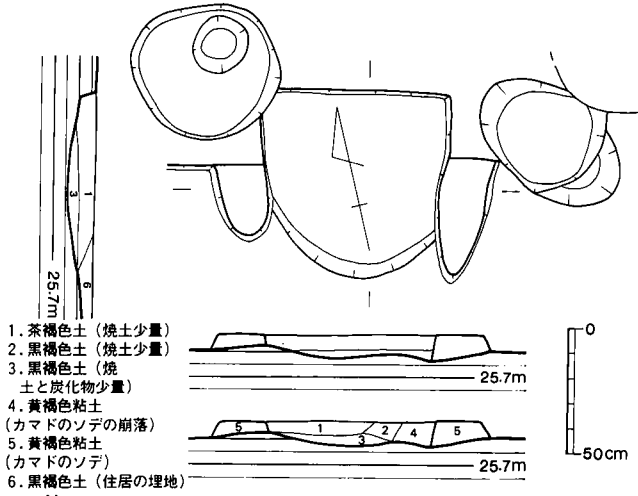


第 108 図 15号竪穴住居跡実測図 (1/60)

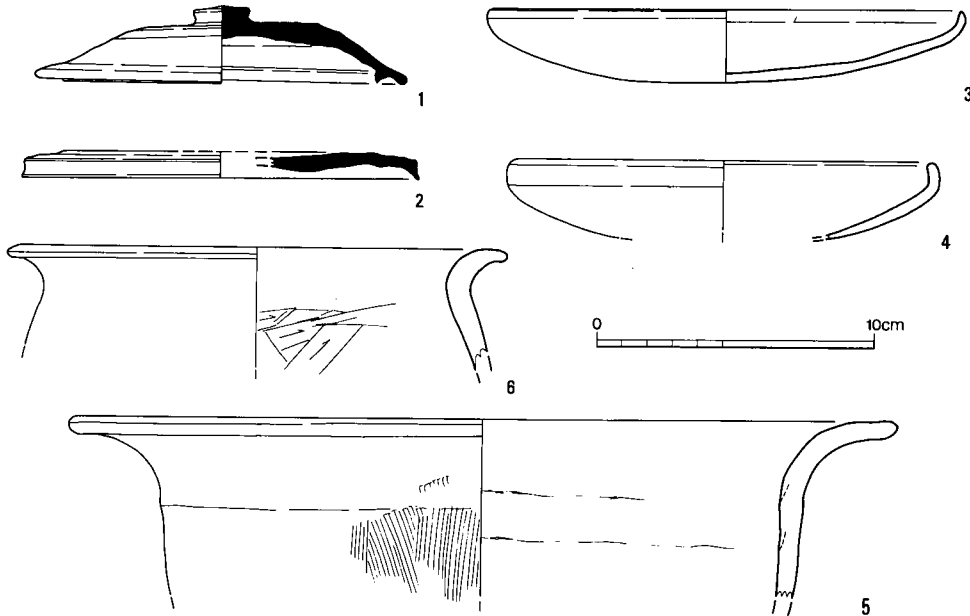
15号竪穴住居跡 (図版71 第108・109図)

15号竪穴住居跡は調査区東側の中でも中央部の北端に位置し、南東端では3号掘立柱建物跡に切られ、西壁は5号掘立柱建物と近接する。4.4×3.8mの方形プランで、壁高は10cmを測る。主柱穴は4本で、深さは30cm程度と比較的浅い。主柱穴P-2では柱の寝石に使ったと考えられる自然礫が詰まっていた。カマドは北壁中央部に付設されており、幅70cmに亘って約30cmほど方形に突出している。カマドは全体的に遺存状態が悪く、ソデについては黄褐色の粘土をわずかに検出することができたが、火床となる焼土はほとんど残っていなかった。遺物は少ないが、4点だけ図示できた。7世紀後半に位置づけられよう。

出土遺物 (第110図) 1は口径14.8cmの須恵器の坏蓋。天井部には回転ヘラケズリが、その内面にはナデが施される。2は復原口径約16cmのやはり須恵器の坏蓋。天井部には回転ヘラケズリが、その内面にはナデが施され、口縁端部



第 109 図 15号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第 110 図 15・16・19号竪穴住居跡出土土器実測図 (15号は1~4 16号は5 19号は6 1/3)

は嘴状に鋭く長く曲げている。3は復原口径約18cmの土師器の坏身。4は復原口径約16cmの坏身。3・4については摩滅が著しく器面調整不明。

16号竪穴住居跡 (図版72 第111図)

16号竪穴住居跡は調査区東側でもその中央部北端に位置し、17～20号竪穴住居跡と密集するが、これらすべての竪穴住居跡を切る。もっとも、この密集住居群はその北側が大きく削平され、全体像をとどめるものは存在しない。その中であって本住居跡は最も良く残っているほうで、東西長5.1m、南北の残存長は3.0mを測り、本来は方形に近いプランであったと考えられる。ただし、支柱穴と考えられるピットは確認されておらず課題を残すところである。遺物は少なく、図示できたのは1点だけである。

出土遺物 (第110図) 5は復原口径約35cmの甕で、外面にはハケ目を、内面にはケズリの痕跡を残す。

17号竪穴住居跡 (図版72 第111図)

17号竪穴住居跡は調査区東側でもその中央部北端に位置し、16・18～20号竪穴住居跡と密集する。18号竪穴住居跡は切るが、16・20号竪穴住居跡には切られるという切り合い関係を有する。北側が大きく削平されており、現存しているのは全体の1/4程度であろう。東西長2.5m、南北長2.1mまで測れ、プランは方形だったと考えられる。壁高は5cmほどしか残らず、支柱穴となるピットが見当たらない。遺物もほとんど出土していない。

18号竪穴住居跡 (図版72 第111図)

18号竪穴住居跡は調査区東側でもその中央部北端で16・17・19・20号竪穴住居跡と密集するが、17号竪穴住居跡に切られる。やはり大きく削平され、東西長1.9m、南北長0.6mを測るだけである。竪穴住居跡であるなら方形を呈するものと考えられるが、支柱穴も遺物もなく住居跡かどうか疑わしい。

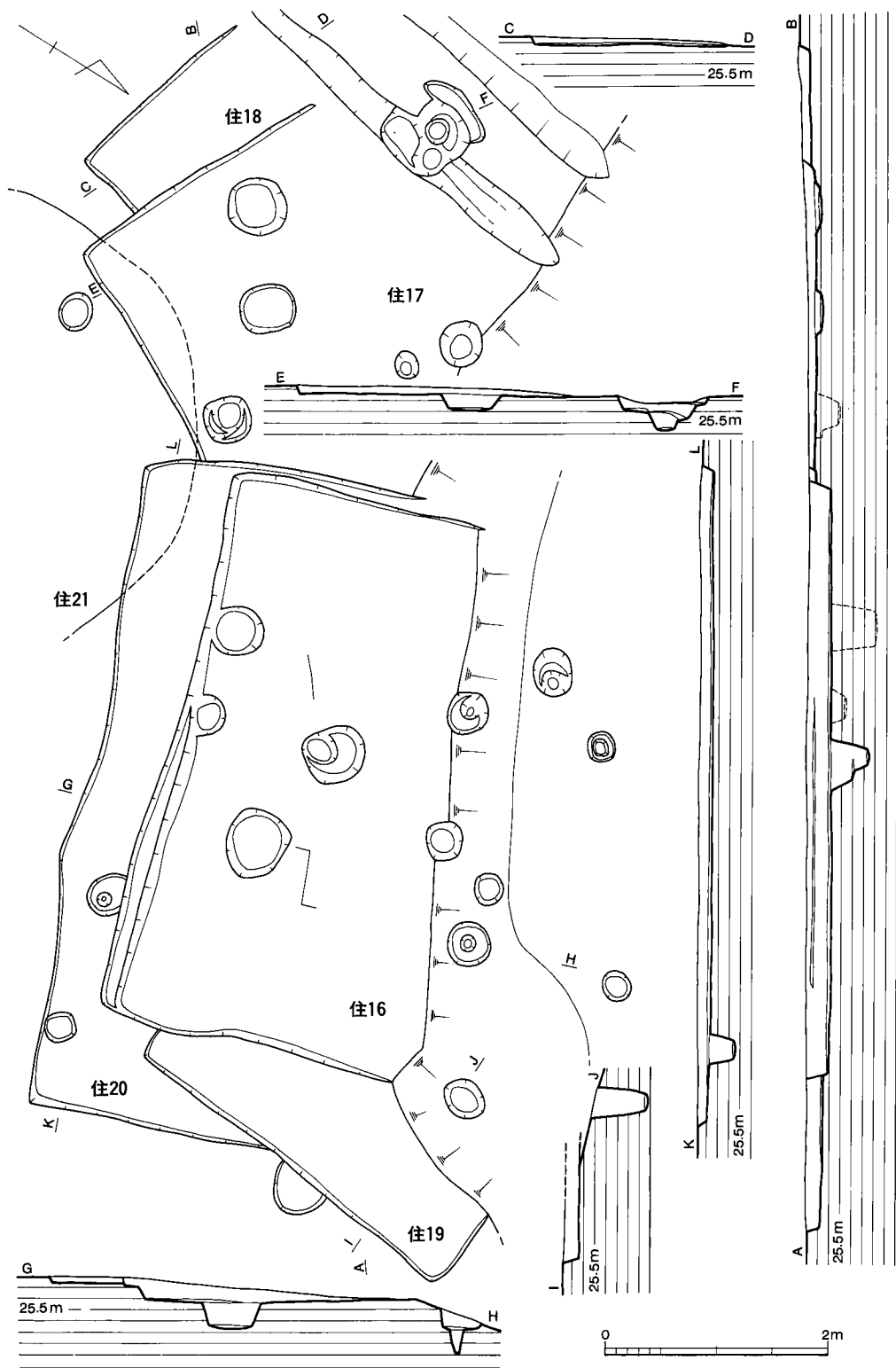
19号竪穴住居跡 (図版72 第111図)

19号竪穴住居跡は調査区東側でもその中央部北端において16～18・20号竪穴住居跡と密集し、20号竪穴住居跡は切るが、16号竪穴住居跡には切られるという先後関係を持つ。やはり北側が大きく削平されるが、一辺3.3m程度の方形プランを呈していたものと考えられる。壁高の残りは10cm程度で、支柱穴は見当たらない。遺物は数点だけだが、1点図示できた。

出土遺物 (第110図) 6は復原口径約20cmの甕で、内面の頸部下にはケズリの痕跡が明瞭に残る。口縁部を強く外反させるのが特徴的。

20号竪穴住居跡 (図版72 第111図)

20号竪穴住居跡は調査区東側でもその中央部北端で16～19号竪穴住居跡と密集し、17号竪穴住居跡は切るが、16・19号竪穴住居跡には切られる。この住居跡も全体像がはっきりとしないが、一辺5.8m程度の方形を呈していたものと考えられる。遺物の出土は少なく、支柱穴も認めら



第 111 图 16~20号竖穴住居跡実测图 (1/60)

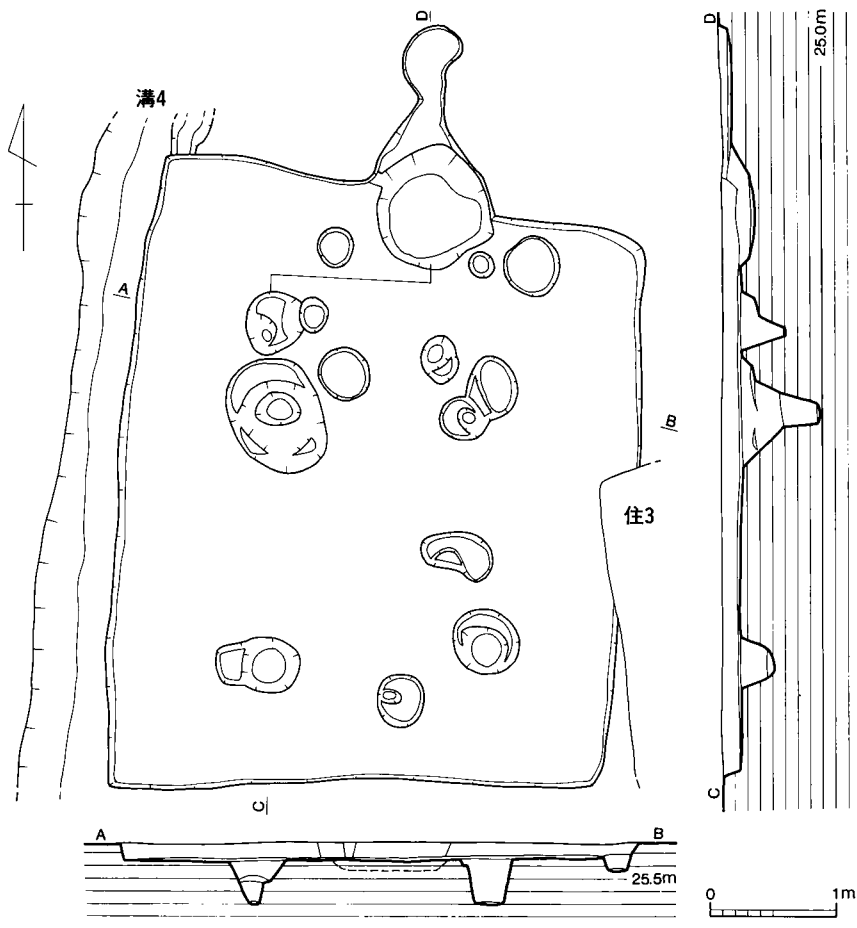
れない。

22号竪穴住居跡 (図版72 第112図)

22号竪穴住居跡は調査区東側でもその中央部南端に位置し、3号竪穴住居跡に切られる。プランは4.9×4.0mのやや歪んだ長方形を呈し、深さ30cmの比較的浅い主柱穴がこのプランの歪みに対応するように配置されている。北壁中央部には火床があったと考えられる90×80×25cmの浅い落ち込みと、煙道に相当する1.3mほどの突出部が存在するが、炭化物や焼土は全く検出されておらず、住居廃棄時にカマドは崩され掃除されたものと想定される。壁高は15cmほど残るが、出土した遺物は小破片の須恵器と土師器が少量で、図示できるものはなかった。

23号竪穴住居跡 (図版73 第113図)

23号竪穴住居跡は調査区東側でも中央部からやや西寄りに位置し、カマドの部分が24号竪穴住居跡に切られる。3.6×3.6mの正方形プランを呈し、主柱穴は4本で径・深さともほぼ50cmを



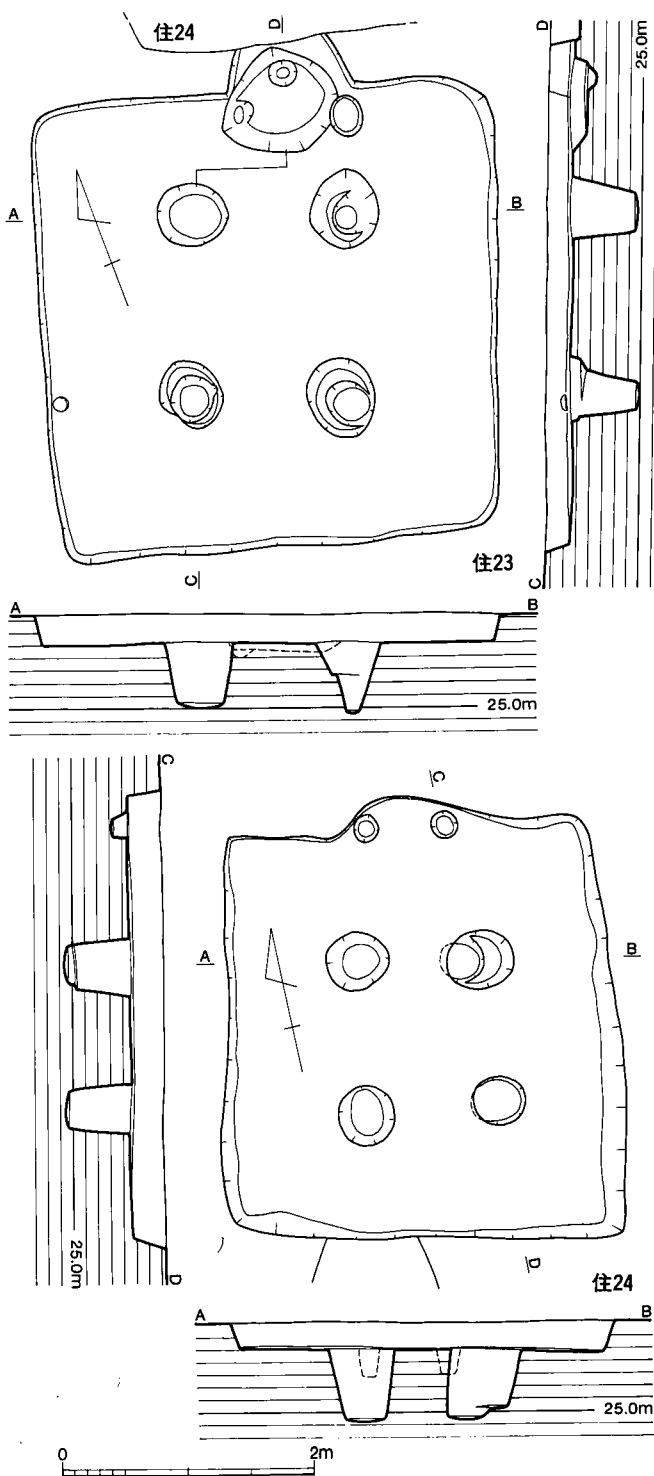
第 112 図 22号竪穴住居跡実測図 (1/60)

測る。北壁中央部には90×80×20cmの浅い落ち込みがあり、ここがカマドの火床になったのであろう。また、この部分は幅90cmに亘って突出しているが30cmほど延びたところで24号竪穴住居跡に切られている。壁高は25cmで比較的良好に残りカマドも当然残っているはずだが、焼土も炭化物も全く検出されなかった。したがって住居廃絶時にカマドも崩され掃除されたものと考えられる。西壁際の床面直上から土師器の坏身が完全な形で出土した。この坏身は6世紀後半に位置づけられる。

出土遺物 (第114図) 1は口径10.4cm、器高4.4cmの土師器の坏身で、外面底部には手持ちによるケズリが施され、内面には何らかの工具が当たった痕跡が残る。

24号竪穴住居跡 (図版73 第113図)

24号竪穴住居跡は調査区東側でも中央部からやや西寄りに位置し、南壁が23号竪穴住居跡のカマドを切る。3.2×3.1mの正方形を呈し、4本の主柱穴は径40cm、深さ60cmと安定している。北壁中央部には幅1.2m、長さ30cmに亘って丸く緩やかに突出しており、またこの突出部には60cmの間隔で小ピットが2基ある。つまり、この部分がカマドでピットはソデ石の



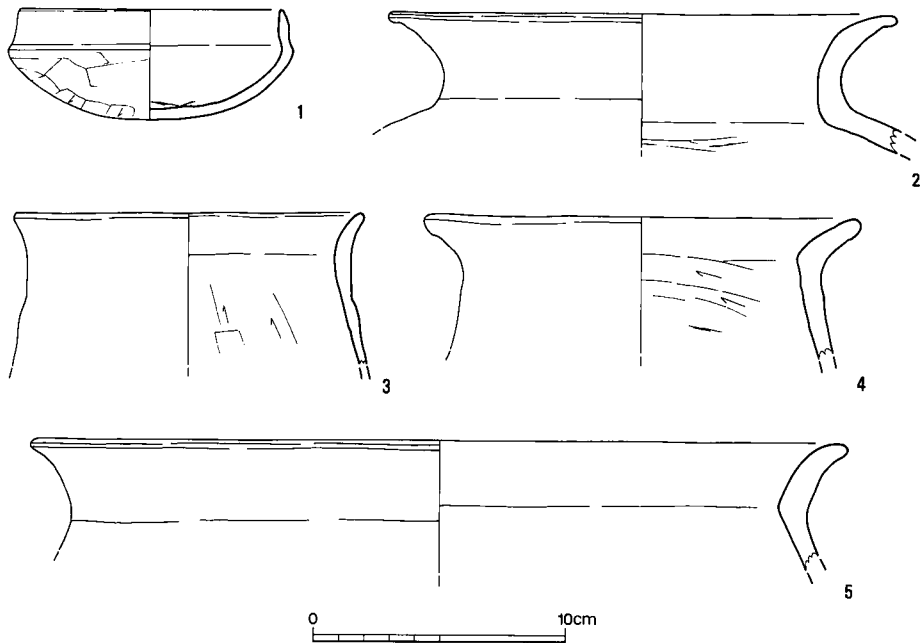
第113図 23・24号竪穴住居跡実測図 (1/60)

痕跡になろうが、壁高が30cmもあるにもかかわらずソデはもちろん炭化物や焼土も全く検出されていない。おそらくこの住居でも、廃絶時にカマドが崩され掃除されたものと考えられる。このことは、住居の床面も掃除されて遺物が残らず、埋土中にのみ少量の土師器小片が包含されていたことから追証される。

25号竪穴住居跡 (図版74 第115図)

25号竪穴住居跡は調査区東側でも中央部からやや西寄りに位置し、26号竪穴住居跡を切る。当初、若干歪んではいるものの3.9×3.6mの方形プランを検出したが、掘り進めるとすぐに南西隅で地山が顔を出した。その部分を残してさらに他を掘り進めたが、結局主柱穴はおろかまともなピットさえ検出できなかった。北壁中央部には幅60cm、長さ30cmの突出部があり、またその前には60×40×10cmの浅い落ち込みが存在する。これらはおそらくカマドに関連したものであろうが、カマドのソデはもちろん炭化物や焼土も全く残っていない。壁高は25cmほどあるから本来ならカマドもそれなりに残っているはずである。このような状況を考慮に入れるなら、この住居においても廃絶時にカマドが崩され掃除されたことが想定されよう。やはり遺物は少なく、特に床面にはほとんど何もなかった。

出土遺物 (第114図) 2は復原口径約20cmの壺で、内面の頸部より下にはケズリの後にナデが施されている。口縁部が強く外反するのが特徴的。



第 114 図 23・25・26号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

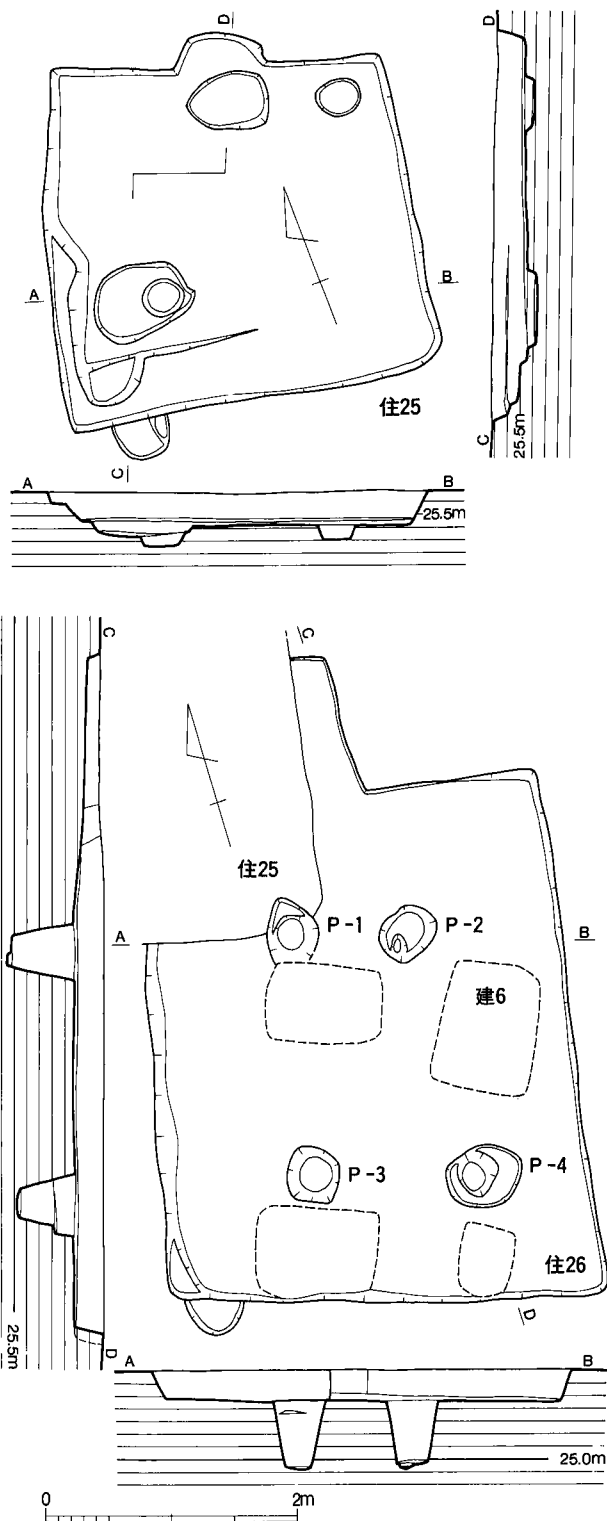
26号竪穴住居跡 (図版74 第115図)

26号竪穴住居跡は調査区東側でも中央部からやや西寄りに位置し、その北西部を25号竪穴住居跡に、南東部を6号掘立柱建物跡に切られる。4.1×3.3mの長方形プランで、壁高は25cmほど残る。4本の支柱穴はいずれも深さ約50cmを測るが、支柱穴P-1と2の間隔は60cmしかなく異常に詰まっている。北壁中央部には1.2mに亘る突出部があるが、これはカマドの煙道に相当しよう。本住居跡においても、この煙道以外にカマドに関連する痕跡は全く窺えなかった。やはり、住居廃絶時において撤去されたのであろう。遺物は少ないながらも3点図示したが、これらはいずれも埋土中に包含されたものである。

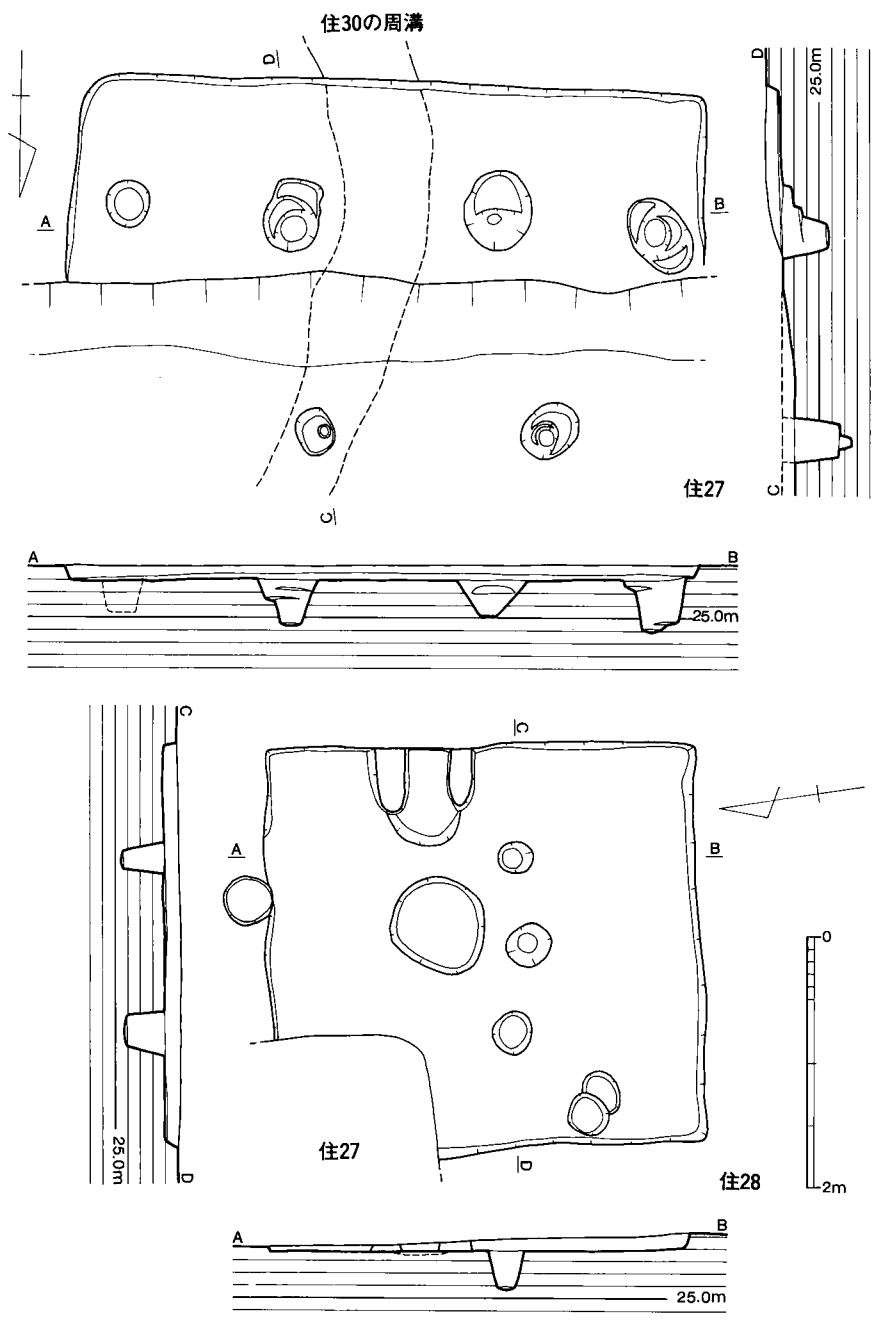
出土遺物 (第114図) 3～5はすべて甕で、摩滅が著しい。3は復原口径約14cm、4は復原口径約17cm、5は復原口径約32cmで、いずれも胴部内面にはケズリが施される。

27号竪穴住居跡 (図版75 第116図)

27号竪穴住居跡は調査区ほぼ中央部南端に位置し、28・30・32号竪穴住居跡を切る。北側2/3は大きく削平されているが、支柱穴だけ



第 115 図 25・26号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第 116 図 27・28号竪穴住居跡実測図 (1/60)

は4本とも残る。東西長4.9m、南北長もおそらく5mほどの方形プランを呈していたものと考えられる。遺物は数点だが、1点だけ実測できた。7世紀後半に属する。

出土遺物（第117図） 1は復原口径約15cmの坏蓋で、焼成時に幾分歪んだようである。天井部には回転ヘラケズリが、その内面にはナデが施される。

28号竪穴住居跡（図版75 第116図）

28号竪穴住居跡は調査区ほぼ中央部南端に位置し、北西隅を27号竪穴住居跡に切られる。規模は小さく3.3×3.2mで、プランは正方形。カマドは東壁の中央やや北寄りに付設されるが、この方向のカマドは大碇遺跡では36号竪穴住居跡に例を見るだけである。床面よりいくつかのピットが検出されたが、支柱穴となりそうな配置のものは見当たらない。遺物は少なく、図示できた1点はカマドの南横から出土した。

出土遺物（第117図） 2は口径13.3cmの甕で胴部がやや膨らみ、外面にはハケ目が、内面にはケズリが明瞭に窺える。

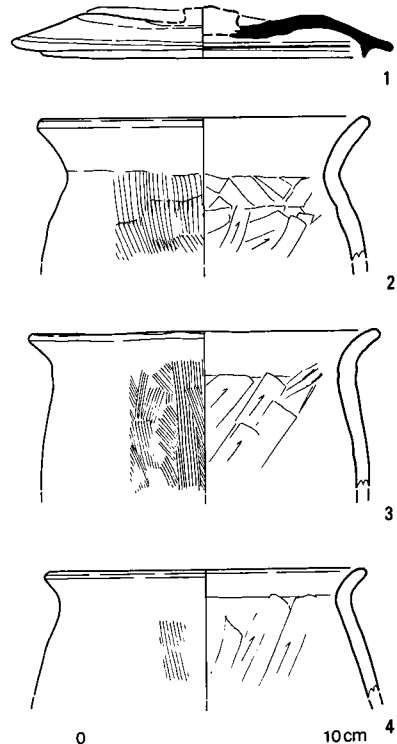
29号竪穴住居跡（図版76 第118図）

29号竪穴住居跡は調査区ほぼ中央部南端に位置し、南側1/4は調査区外に入る。東西長は5.1m、南北の現存長は3.5mで、正方形を呈していると考えられる。支柱穴は4本で径はいずれも40cm程度と揃っているが、深さは40～70cmとバラツキがある。北壁中央部付近には若干の焼土と炭化物が検出され、この場所にカマドが存在していたことが窺われる。また、ここから幅15cm、長さ90cmに亘って細長い突出部が伸びるが、これはカマドの煙道に当たる。全体的に遺物は少ないが、カマド周辺では比較的纏まった出土をみた。なお、北西隅と北壁中央部から北東隅にかけて約15cmほど落ち込むが、これは住居を掘削した時のもので、その後貼り床が敷かれている。

出土遺物（第117図） 3は復原口径約13cmの甕で、住居跡北東隅の落ち込みから出土した。外面のハケ目と内面のケズリは明瞭に残る。4は復原口径約13cmの甕で胴部は比較的強く膨らみ、外面にはハケ目が、内面にはケズリが施される。

31号竪穴住居跡（図版76 第119・121図）

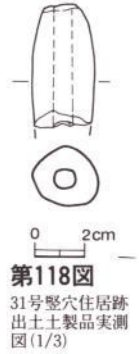
31号竪穴住居跡は調査区ほぼ中央部南端に位置し、26・27号土塋を切る。南側3/4は調査区外へ伸びており、



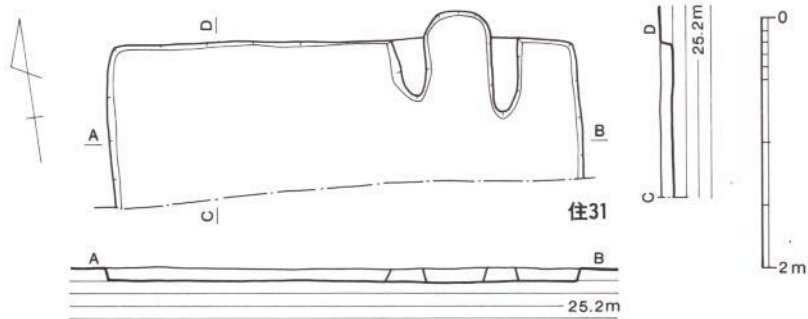
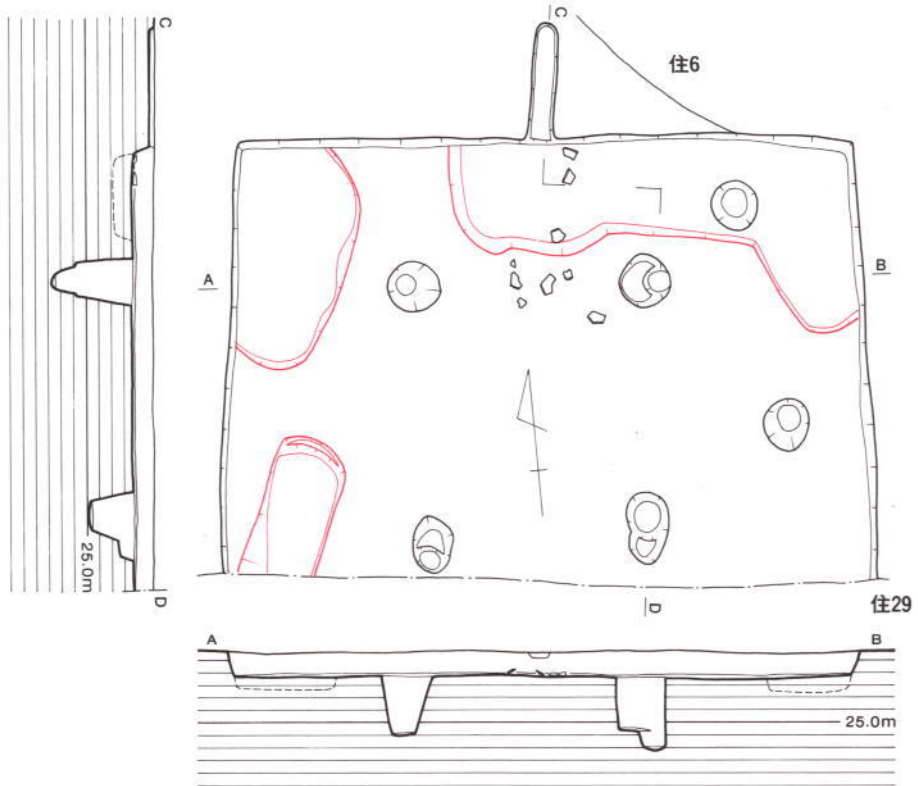
第117図 27～29号竪穴住居跡出土土器実測図（27号は1 28号は22 29号は3・4 1/3）

主柱穴は1本も検出できなかった。東西長は3.7mで、恐らく一辺4m程度の方形プランを呈していると考えられる。カマド（第121図）は北壁の東側に大きくズレており、幅50cm、長さ20cmほどが丸く突出している。平面的に検出した時点で、火床と黄褐色粘土のソデを確認しており、この住居跡自体がかなり削平されている様子がわかる。遺物は少なく、図示できたのは土錘1点だけである。

出土遺物（第118図） この土錘は残存長4.8cm、最大径2.6cm、孔径0.7cmを測る。



第118図
31号竪穴住居跡
出土土製品実測
図(1/3)



第 119 図 29・31号竪穴住居跡実測図 (1/60)

34号竪穴住居跡 (図版

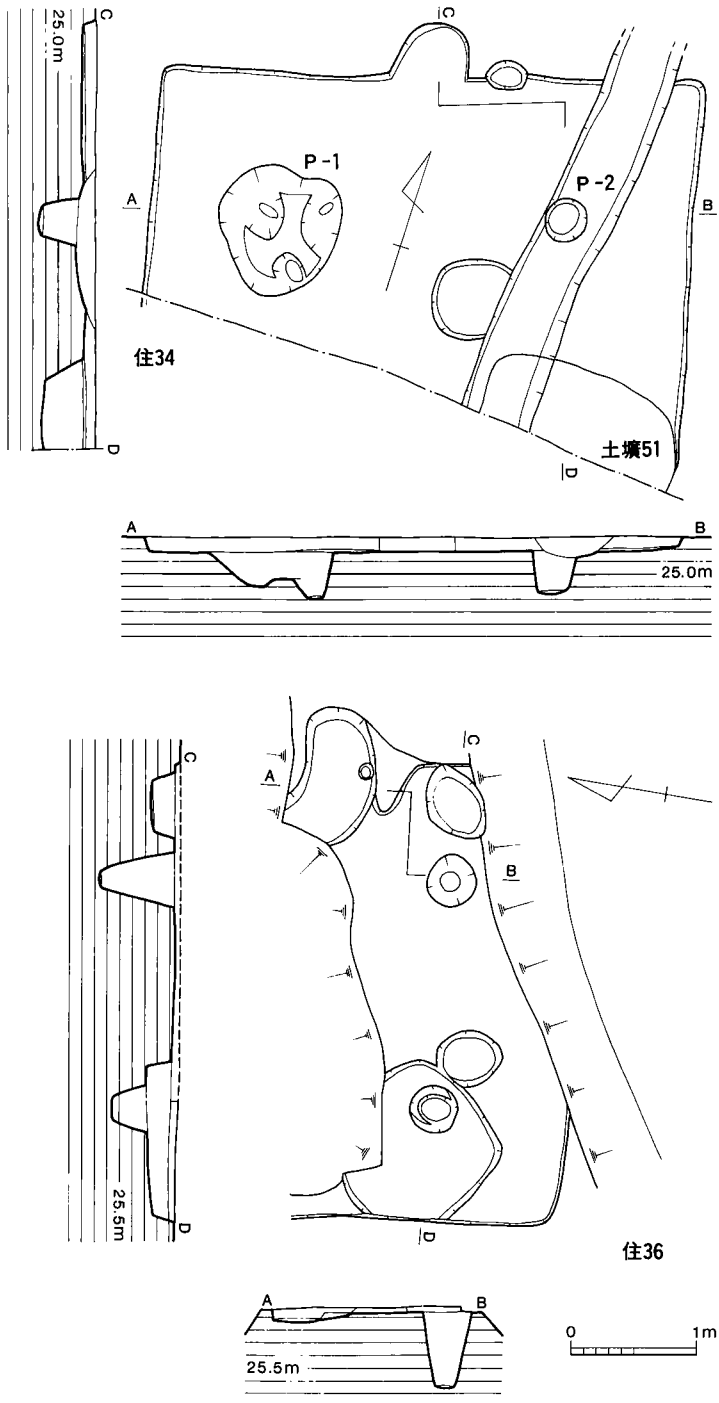
77 第120図)

34号竪穴住居跡は調査区中央部でもやや西寄りの南端に位置するが、大碓遺跡の古墳時代以降の遺構としては最も西にあたる。一部現代の溝に切られ、また住居跡の南側半分は調査区外へ伸びていく。主柱穴が確認できたのは北側の2本だけで、深さは30cmと浅い。主柱穴P-1については掘り直しが行なわれているが、主柱穴P-2についてはそのような痕跡はなかった。北壁中央部は50×50cmの範囲で丸く突出するが、ここにはカマドがあったものと考えられる。なお、この北壁中央部では焼土や炭化物は残っていない。遺物は小さな土師器片ばかりで、図示できるものはない。

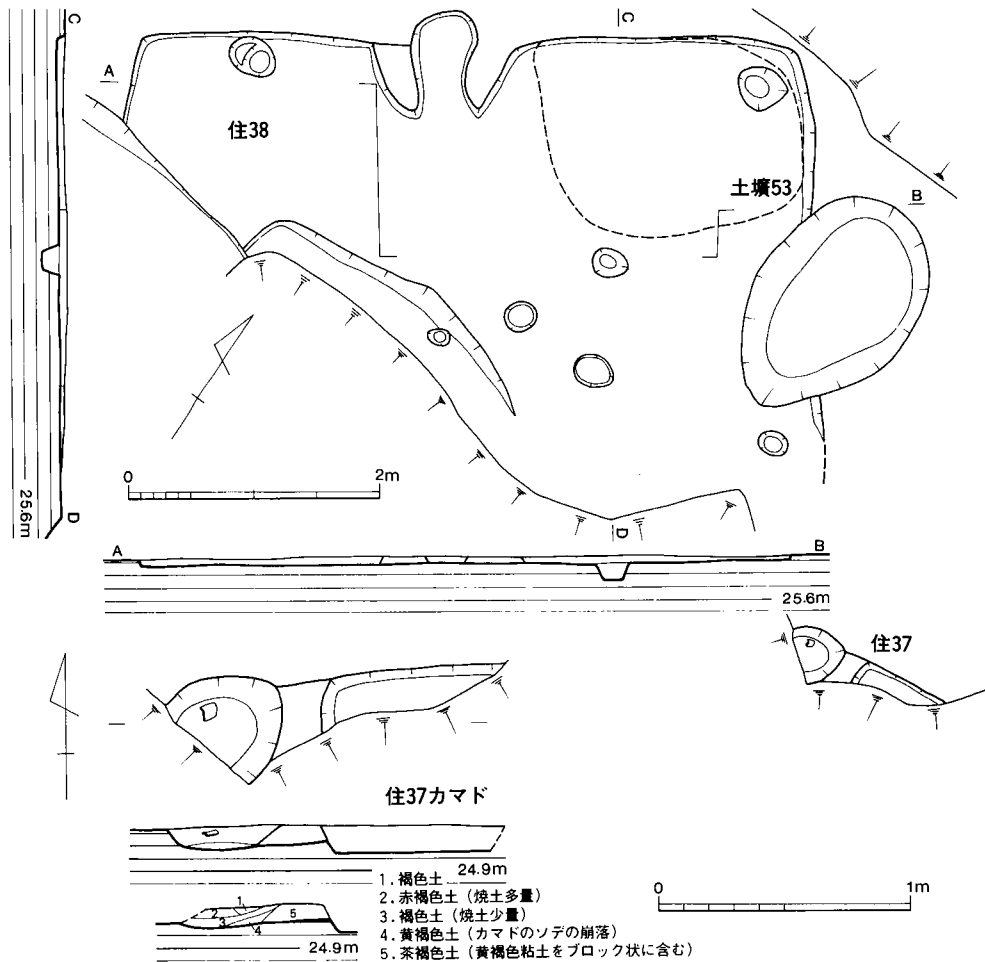
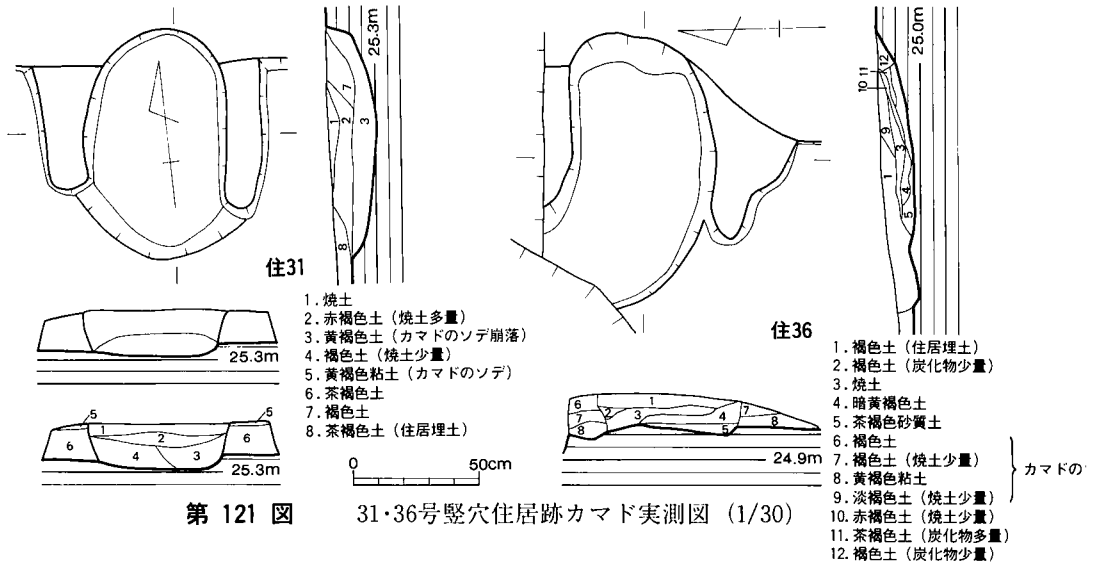
36号竪穴住居跡 (図版

78 第120・121図)

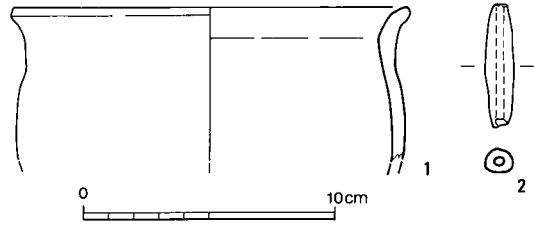
36号竪穴住居跡は調査区の東端部で甕棺墓群に近接する。位置的に37号竪穴住居跡とも切り合っていたと考えられるが、



第 120 図 34・36号竪穴住居跡実測図 (1/60)



現時点では不明。住居跡の南東端と北側半分は現代の墓地によって大きく削平され、原形をほとんどとどめない。東西長は3.7mで、おそらく一辺4m程度の方形を呈していたと考えられる。支柱穴は南側の2基だけ確認したが、いずれも70cmと深く、その西側のものについては掘り直しの可能性がある。



第 123 図 37号竪穴住居跡出土土器・土製品実測図(1/3)

ある。大きな削平に反してカマドの残りは比較的良く、第121図に示したようにソデとなる黄褐色粘土や火床の焼土を検出できた。このカマドは東壁に付設され、50cmほど突出する。遺物は小片の須恵器と土師器が少量で、図示できるものはなかった。

37号竪穴住居跡 (図版79 第122図)

37号竪穴住居跡は調査区東端部に位置するが、その大部分は削平されカマドがわずかに残るだけである。位置的に36・38号竪穴住居跡とも切り合っていたはずだが、それも今となっては不明。カマドは北壁に付設されており、10cmほど突出する。火床やソデもかろうじて確認できた。遺物は2点だけ出土した。

出土遺物 (第123図) 1は復原口径約16cmの甕で胴部はほとんど膨らまず、内面に削りが窺える。加熱の痕跡はない。2の土錘は残存長5.0cm、最大径1.2cm、孔径0.4cmでこれも焼けてない。

38号竪穴住居跡 (図版79 第122図)

38号竪穴住居跡は調査区東端に位置する。南西側ほぼ半分は現代の墓地によって大きく削平され、位置的に37号竪穴住居跡とも切り合うはずだが現時点では不明になっている。東西長は5.2mで、およそ5m程度の方形を呈していたものと考えられる。確実に支柱穴といえるピットは検出できていない。カマドについては北壁中央部に設置され、ソデと突出部がわずかに確認されただけである。壁高は最高で4cmほどで、遺物は全く出土していない。なお、この住居跡の床面を剥がした段階で、弥生前期後半の53号土壌が検出された。

II) 掘立柱建物跡

大碓遺跡では調査区の東側で7棟の掘立柱建物跡を検出した。出土遺物が少なく時期の決定に苦慮したが、他の遺構との切り合い関係等から、その多くは古墳時代後期以降に位置づけられると想定され、「古墳時代以降の遺構と遺物」で説明することにした。

1号掘立柱建物跡 (図版81 第124図)

1号掘立柱建物跡は調査区東側でもその中央部南端に位置し、弥生時代前期後半の8号竪穴住居跡を切る。1×2間の建物跡で、梁行1.9m、桁行2.0mの規模を有するが、プランは南北に若干歪む長方形である。柱穴はいずれも径40cm、深さ40~50cmで2段掘りになる。遺物は土師器の小

が数点出土しただけであるが、古墳時代以降に位置づけられよう。

2号掘立柱建物跡 (図版81 第125図)

2号掘立柱建物跡は調査区東側の中央付近で検出された2×3間の建物跡である。4号土壌と切り合うが、出土遺物からこの建物跡が後出すると考えられる。梁行4.4m、桁行5.6mの規模を有する。柱穴は径30~40cm、深さ40~50cmを測り、P-3・5では径15cmの柱痕を確認した。P-8からは糸切りの土師皿が出土していることから、この建物跡は中世13世紀後半のものであると考えられる。

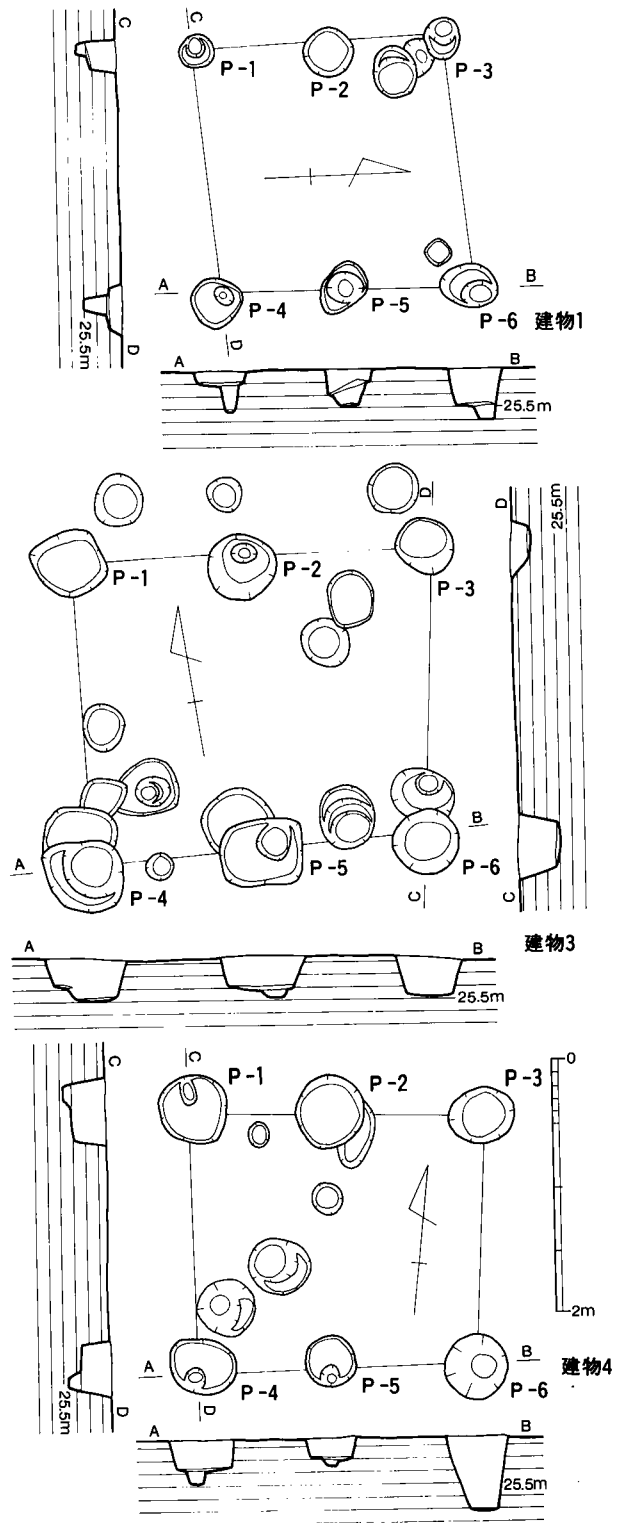
出土遺物 (第126図) 1は口径8.0cm、底径5.6cm、器高1.2cmの土師皿で、内底部にはナデを施し底部には糸切り痕が観察される。

3号掘立柱建物跡 (図版82 第124図)

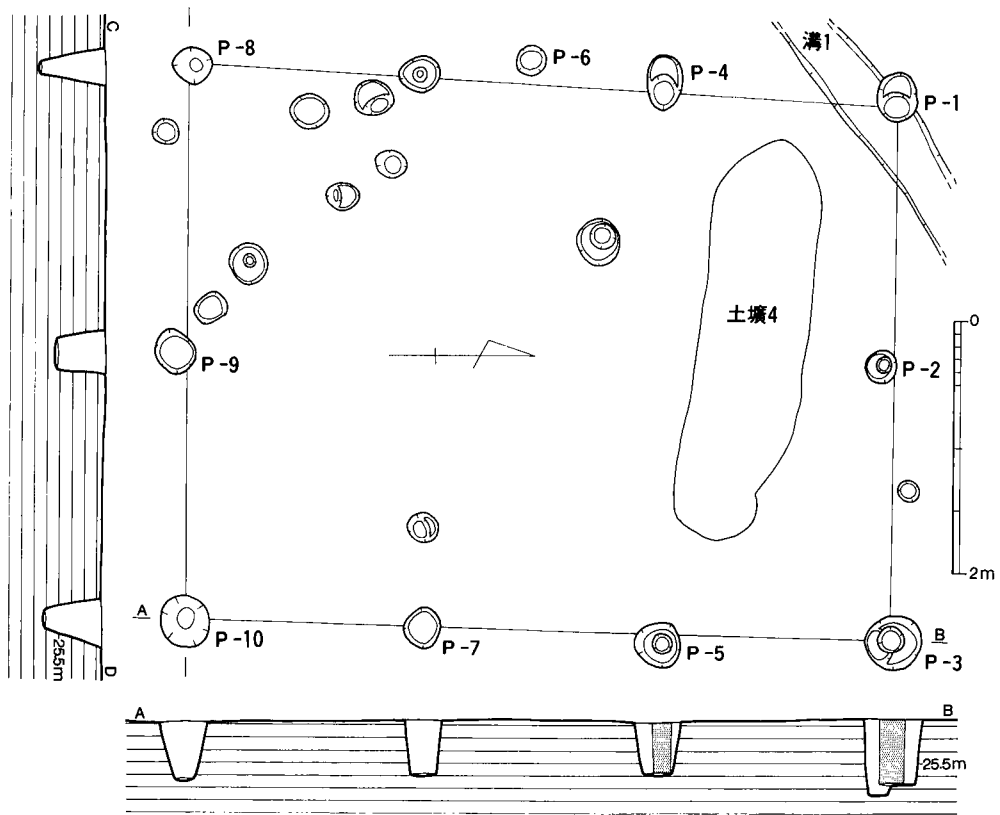
3号掘立柱建物跡は調査区東側でも中央部北端で4号掘立柱建物跡の東2mに位置し、15号竪穴住居跡を切る。1×2間の建物跡で、梁行2.4m、桁行2.7mの規模を有する。柱穴は径50~60cm、深さ30cmを測り、径の割には浅い。出土遺物はほとんどなかったが、切り合いから古墳時代以降に属するものであろう。

4号掘立柱建物跡 (図版82 第124図)

4号掘立柱建物跡は調査区東側でも中央部北端に位置し、3号掘立柱建物跡の西2m、5号掘立柱建物跡の南3mに位置する。1×2間の建物跡で、梁行



第124図 1・3・4号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

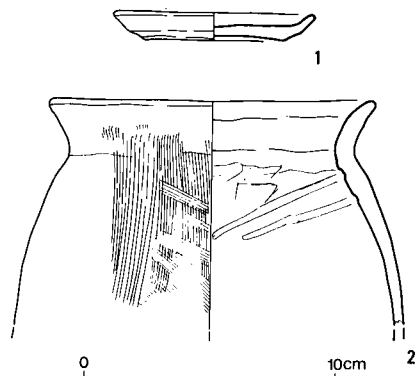


第 125 図 2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

2.3m、桁行2.4mの規模を有する。柱穴はP-6だけ60cmと深いが、その他は径40~50cm、深さ30cmを測り、径の割には浅い。出土遺物は土師器小片が数点出土しただけであるが、とりあえず古墳時代以降に属するものであろう。

5号掘立柱建物跡 (図版83 第127図)

5号掘立柱建物跡は調査区東側でも中央部北端に位置し、4号掘立柱建物跡の北3mにある。古墳時代後期(7世紀後半)の12号土壌を切る1×2間の建物跡で、梁行2.7m、桁行2.9mの規模を有する。柱穴は径40~70cm、深さ20~60cmとバラツキがあるが、配置は整然としている。2段掘りになっているものが多い。出土



第 126 図 2・6号掘立柱建物跡出土土器実測図 (2号は1/6号は2/3)

遺物は土師器小片が数点出土しただけであるが、12号土壌との切り合い関係から古墳時代後期

以降に属するものであろう。

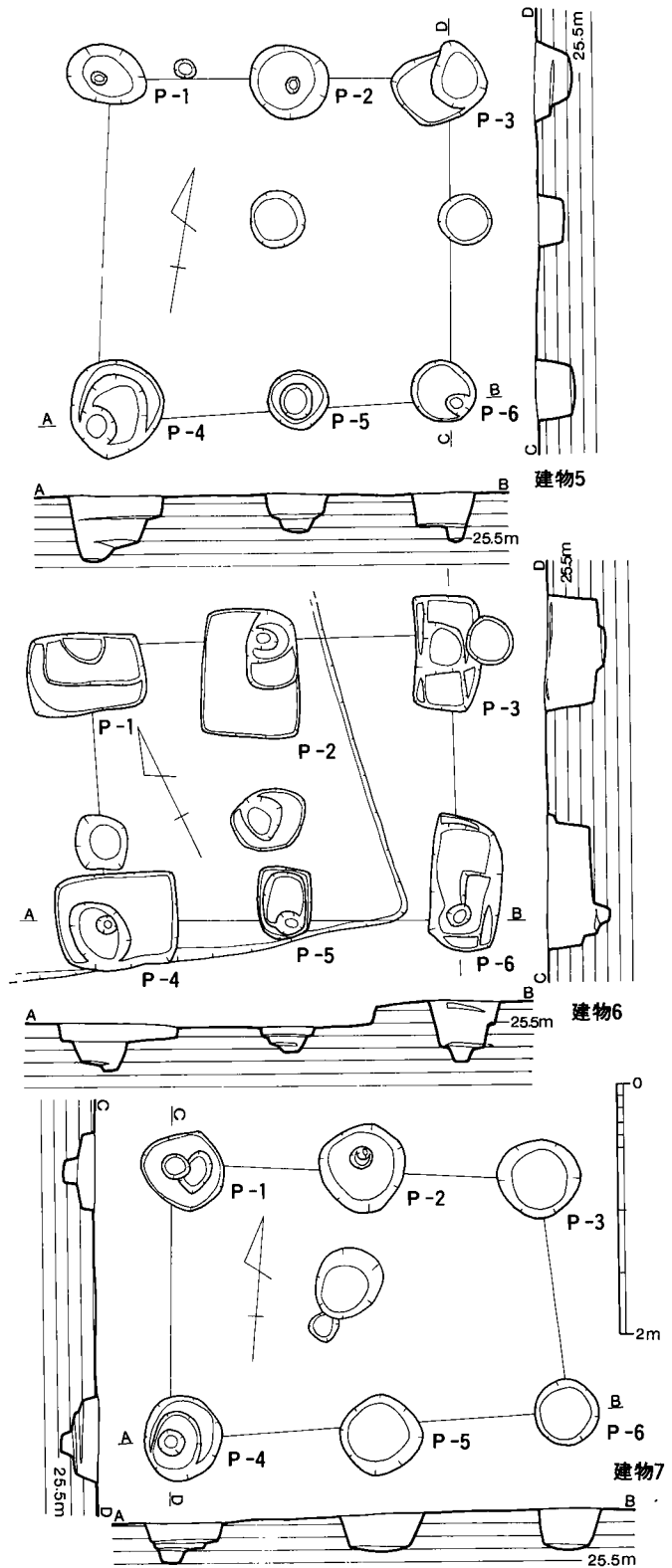
6号掘立柱建物跡 (図版83 第127図)

6号掘立柱建物跡は調査区の中央部に位置し、古墳時代後期の26号竪穴住居跡を確実に切る。1×2間の建物跡で、梁行2.2m、桁行2.9mを測る。柱穴のプランはおよそ90×60cmの長方形で、40cmほど下がったところで径30cm程度の円形となる。長方形のプランの軸については、P-1・4が東西方向、P-2・3・5・6が南北方向と異なる。P-1・2・4・5については26号竪穴住居跡を多少掘り下げた時点でその存在に気づいたが、前述したようにこの建物跡は確実にそれを切るものである。遺物は少ないがP-6から甕が出土した。7世紀後半に位置づけられようか。

出土遺物 (第126図) 2は復原口径約13cmの甕で、胴部はわずかに膨らむ。外面にはハケ目が、内面には粗く強いケズリが施される。

7号掘立柱建物跡 (図版84 第127図)

7号掘立柱建物跡は調査区東端で、弥生前期後半の2号竪穴住居跡の南3mに位置し、カマドを有する38号竪穴住居跡に近接する。1×2間の建物跡で、梁行2.2m、桁行3.0mを測る。柱穴は径60cm、



第127図 5～7号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

深さ30cmでおよそ統一されるが、2段掘りになるものもある。遺物は全く出土していないので、時期の推定に苦しむ。

Ⅲ) 土 壙

大碇遺跡では古墳時代以降に属する土壙が8基検出された。これらは局部的に集中することなく調査区全域に亘って分布し、東側に片寄って分布する同時期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡とは異なった様相を示す。また、多くの場合、長楕円形のプランで壁は緩やかに傾斜し、断面形態が船底状を呈するのが特徴的である。

1号土壙 (図版84 第128図)

1号土壙は調査区の東端中央部に位置し、7号掘立柱建物跡の西南1.5mに近接する。1.9×0.5×0.6mの長方形プランで、西側に3段、東側に2段のテラスを作り、底面は50×35cmの小さな長方形を呈する。中でも、東側の1段目のテラスは5cmの幅でこの土壙の東側半分を巡るのが特徴的である。当初、土壙墓もしくは木棺墓の可能性を想定して調査を進めたが、埋土は自然堆積であったことと特異な断面形態から、墓としての可能性は低いという認識に至り土壙として扱った。なお、遺物は全く出土していない。

3号土壙 (図版85 第129図)

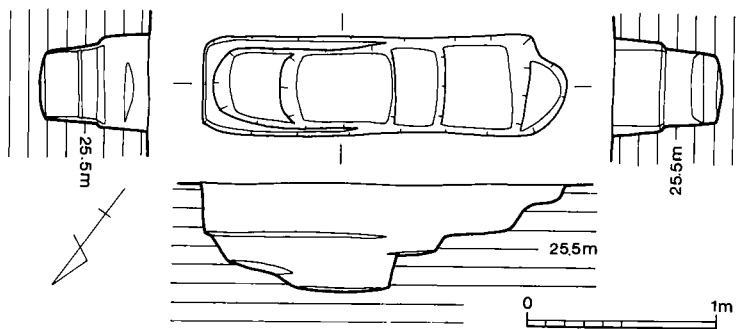
3号土壙は調査区東側でもその中央部南寄りに位置し、カマドを有する5号竪穴住居跡や弥生前期後半の6号竪穴住居跡を切る。2.5×1.3×0.3mの楕円形で、長軸両端部には幅20cm程度の狭いテラスを作る。壁は緩やかに傾斜して、1.4×0.9mのやはり楕円形を呈する底面に至る。遺物には少量の須恵器や土師器の小片があるが、年代の決め手になるものはない。

4号土壙 (第129図)

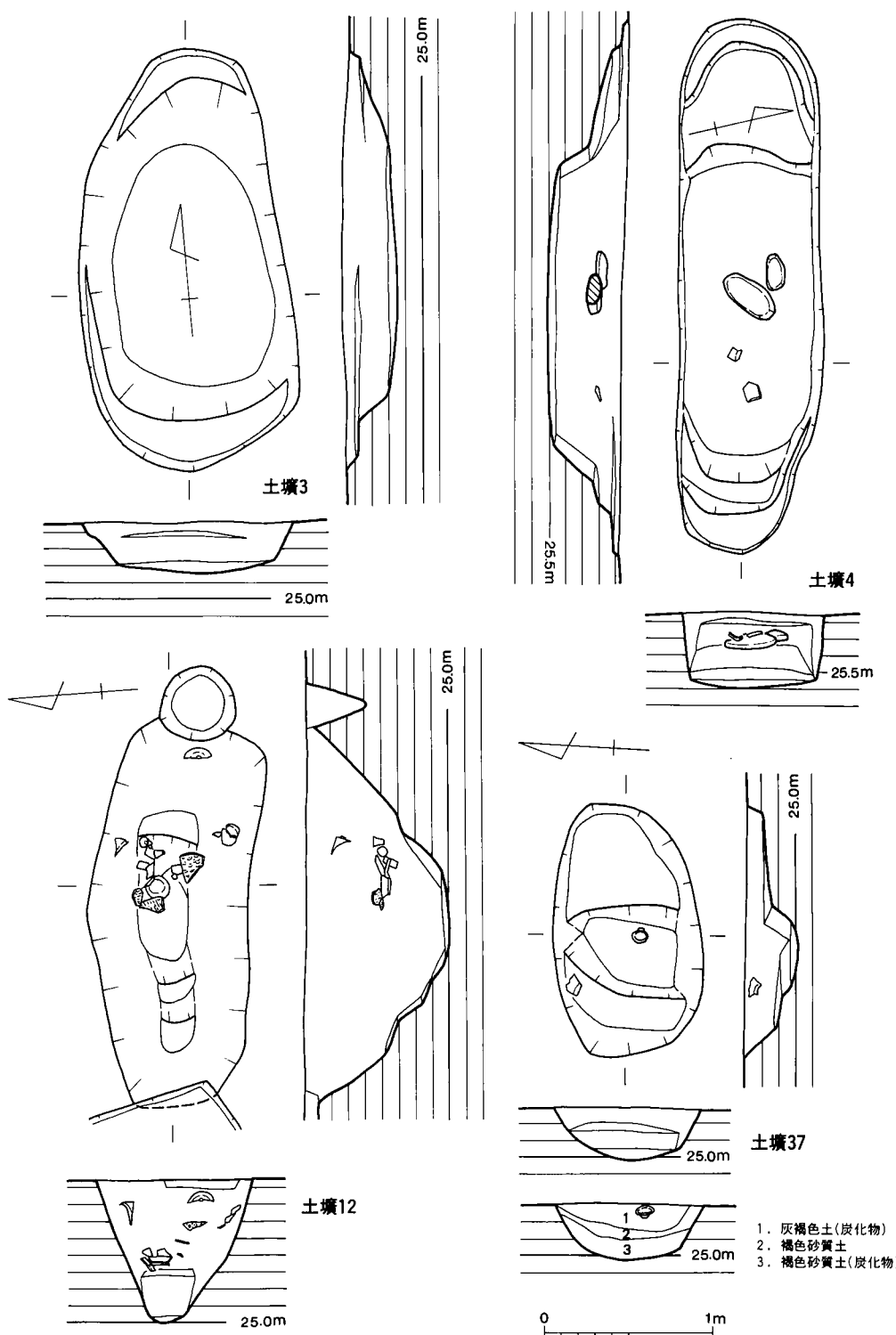
4号土壙は調査区東側の中央付近に位置する。2号掘立柱建物跡と切り合うが、出土遺物からこの土壙が先行するものと考えられる。3.2×0.8×0.5mの長楕円形で、長軸両端部にはそれぞれ2段のテラスを作り、壁は緩やかに傾斜して1.7×0.6mの底面に至る。遺物は上面から15cm付近のところに集中しているが、量的には少ない。土師器を中心に内面に青海波のタタキ当て具痕の残る須恵器片がある。

12号土壙 (図版85 第129図)

12号土壙は調査区東側でも中央部北端に位置



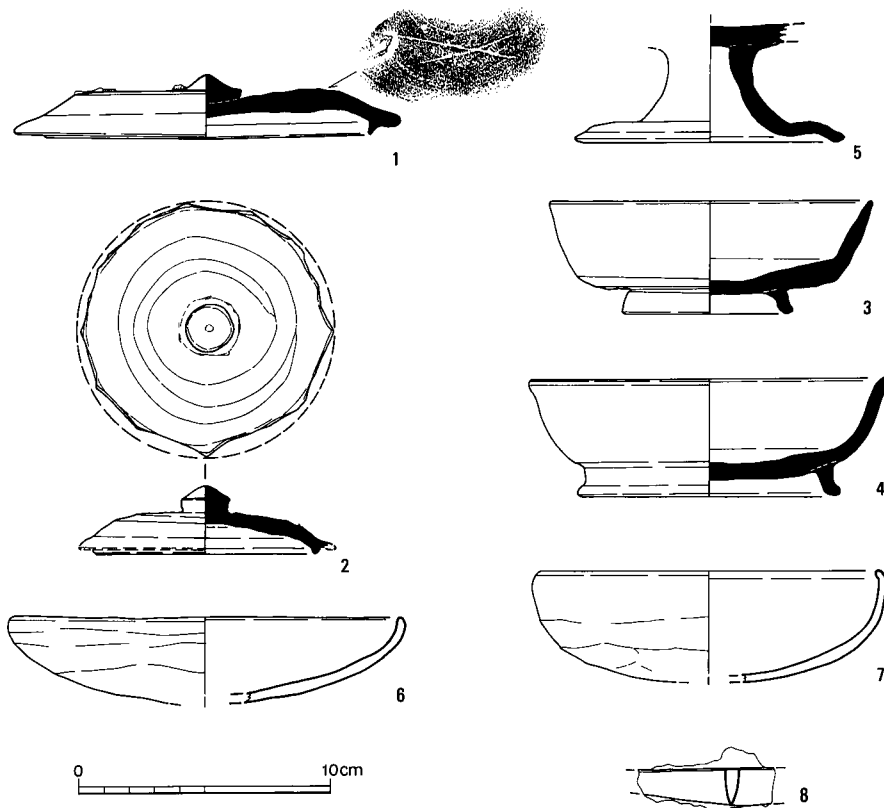
第 128 図 1号土壙実測図 (1/40)



第 129 图 3·4·12·37号土壙实测图 (1/40)

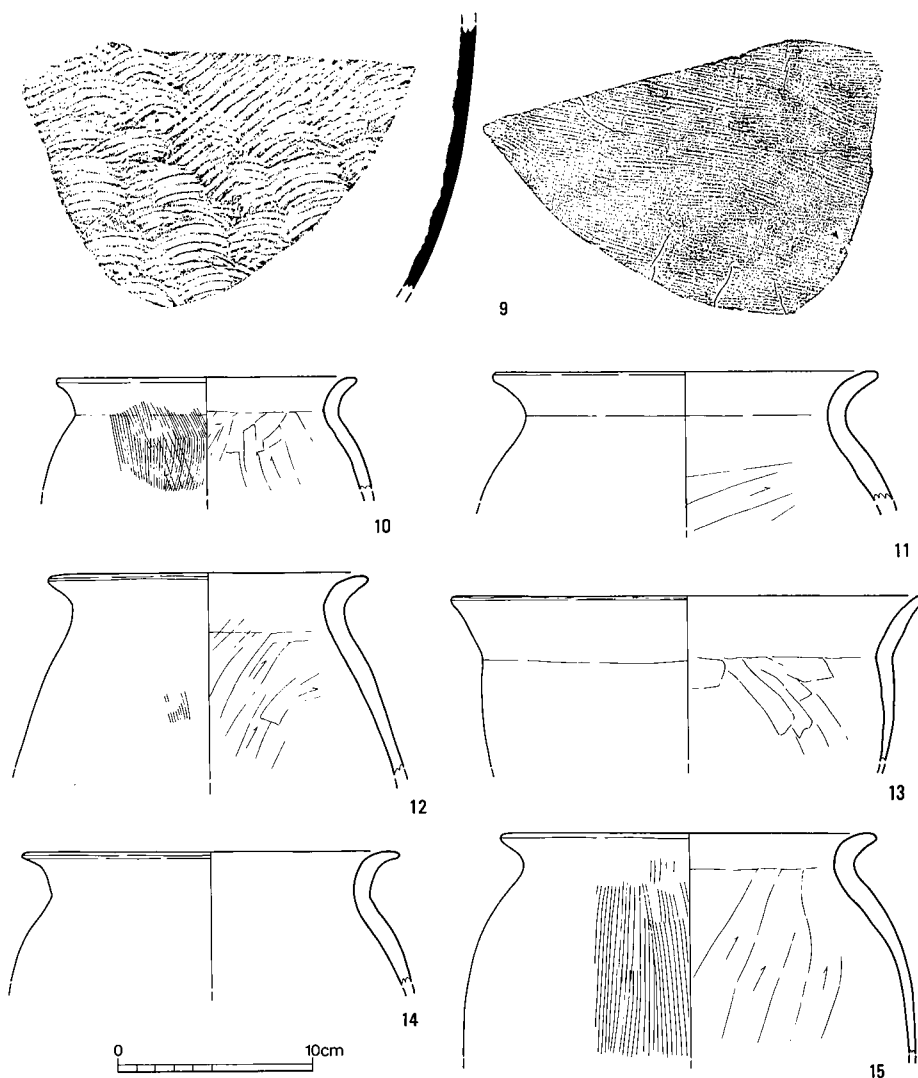
し、5号掘立柱建物跡や20号竪穴住居跡に切られる。2.4×1.0×0.8mの長楕円形を呈し壁は比較的急な傾斜で降りていくが、上面から50cmほどのところで長軸両端部に段を作り、0.7×0.3mの細長い底面に至る。遺物は上面から40cmまでの上半部に集中するが、これらは東方向から投棄もしくは流れ込んだような状態で出土した。パンケース2箱分と量的に多く、鉄器も1点含まれる。年代的には7世紀後半に比定されよう。

出土遺物（第131・132図） 1～5・9は須恵器、8は鉄器で、その他は土師器。1は口径15.5cmの坏蓋で、回転ヘラケズリが施される天井部には「×」字状のヘラ記号が描かれる。また、焼成時による他の土器片（おそらく坏身の高台）の付着が窺える。2は復原口径約9cmの淡い赤褐色を呈する坏蓋で、天井部外面には回転ヘラケズリが、その内面にはナデが施される。また、口縁端部が全周に亘って打ち欠かれる。3は復原口径約14cm、底径11.0cm、器高4.7cmの高台付坏身で、底部の外面には回転ヘラケズリ、内面にはナデが施される。4は口径12.2cm、底径6.4cm、器高4.5cmの高台付坏身で、底部の外面には回転ヘラケズリ、内面にはナデが施される。5は径9.9cmの高坏脚部で、坏部にはそのまま接合され内外面にはその際のしぼり痕が残る。9は甕の



第130図 12号土壙出土土器. 1・鉄器実測図 (1/3)

胴部破片で、外面には平行タタキ、内面には青海波が観察される。6は復原口径約15cmの坏身で、底部には手持ちによるケズリが窺える。7は復原口径約13cmの坏身で、底部にはやはり手持ちによるケズリが窺える。10～15の甕の復原口径は、10が16cm、11が20cm、12が17cm、13が25cm、14が20cm、15が20cmをそれぞれ測る。いずれも胴部外面にハケを、内面にケズリを施すが、摩滅により十分に観察できないものもある。器形的には胴部が比較的強く膨らむのが特徴であるが、13については直線的になる。8は鉄鎌で、両端部が欠損しているため長さはわからないが、幅1.5cm、厚さ5mmを測る。



第 131 図 12号土壙出土土器実測図. 2 (1/3)

26号土壙 (図版86
第132図)

26号土壙は調査区中央部の南端に位置し、カマドを有する31号竪穴住居跡に切られる。また、その大部分が調査区外に伸びているため全体像は不明。現存する

規模は東西・南北ともに2m程度で、隅丸方形のプランになろうか。北側にテラスとピットがあり、深さは最高で12cm。遺物には加熱を受けた甕や轆の羽口があるが、鉄滓や焼土や炭化物は含まれなかった。

出土遺物 (第133図) 1は復原口径約15cmの甕で、外面は加熱により表面が剥落・変色する。内面はナデ

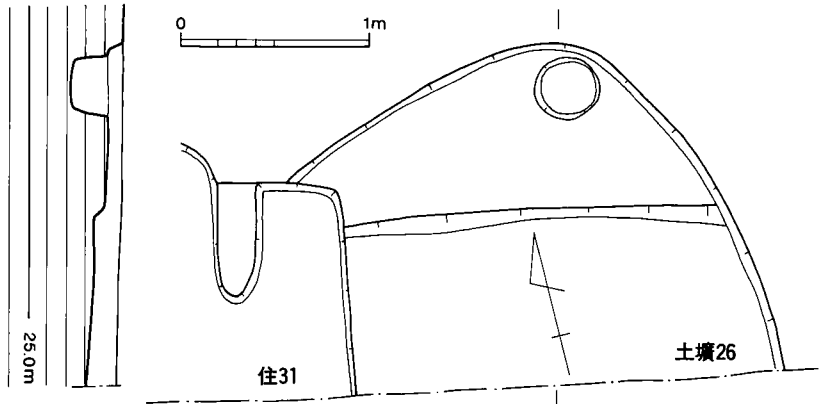
が強く施されるため凹凸が著しく、器厚も9mm前後と厚い。2は轆の羽口で残存長5.8cm、最大径5.9cm、孔径2.1cmを測る。外面全体に鉄滓附着し、また赤く変色する。

27号土壙 (図版86 第135図)

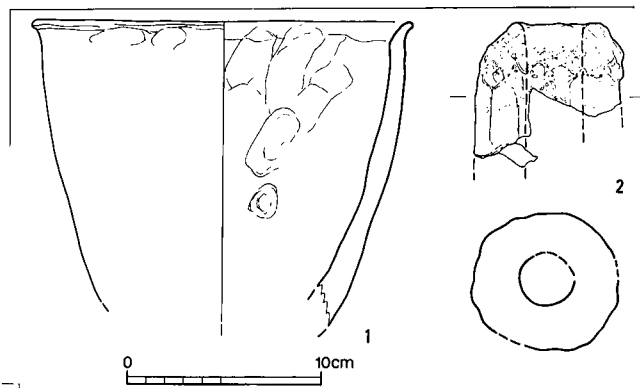
27号土壙は調査区中央部の南端に位置し、カマドを有する31号竪穴住居跡に切られる。2.8×2.1×0.6mの楕円形を呈し、西側にはテラスとピットを作る。遺物は7世紀後半代のものが比較的纏まって出土した。

出土遺物 (第136図) 1~3は須恵器。4は土師器。1は復原底径約11cmの高台付坏身で、内外面ともにナデ。外面には中心から放射状にヘラ記号が施される。2は復原口径

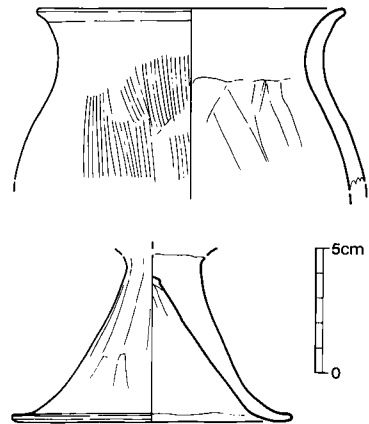
約13cm、復原底径約4cm、器高3.8cmの高台付坏身で、外面には回転ヘラケズリの後にナデが、内面にはナデが施される。3は復原底径約11cmの高台付坏身で、器面調整はヨコナデ。4は復原



第 132 図 26号土壙実測図 (1/40)



第 133 図 26号土壙出土土器実測図 (1/3)



第 134 図 27号土壙出土土器実測図 (1/3)

口径約15cmの坏身で、底部外面には手持ちによるヘラケズリが施される。5〜7は土錘で、5は残存長4.0cm、最大径1.9cm、孔径7mm、6は残存長5.7cm、最大径1.9cm、孔径8mm、7は残存長4.9cm、最大径2.2cm、孔径6mmをそれぞれ測る。

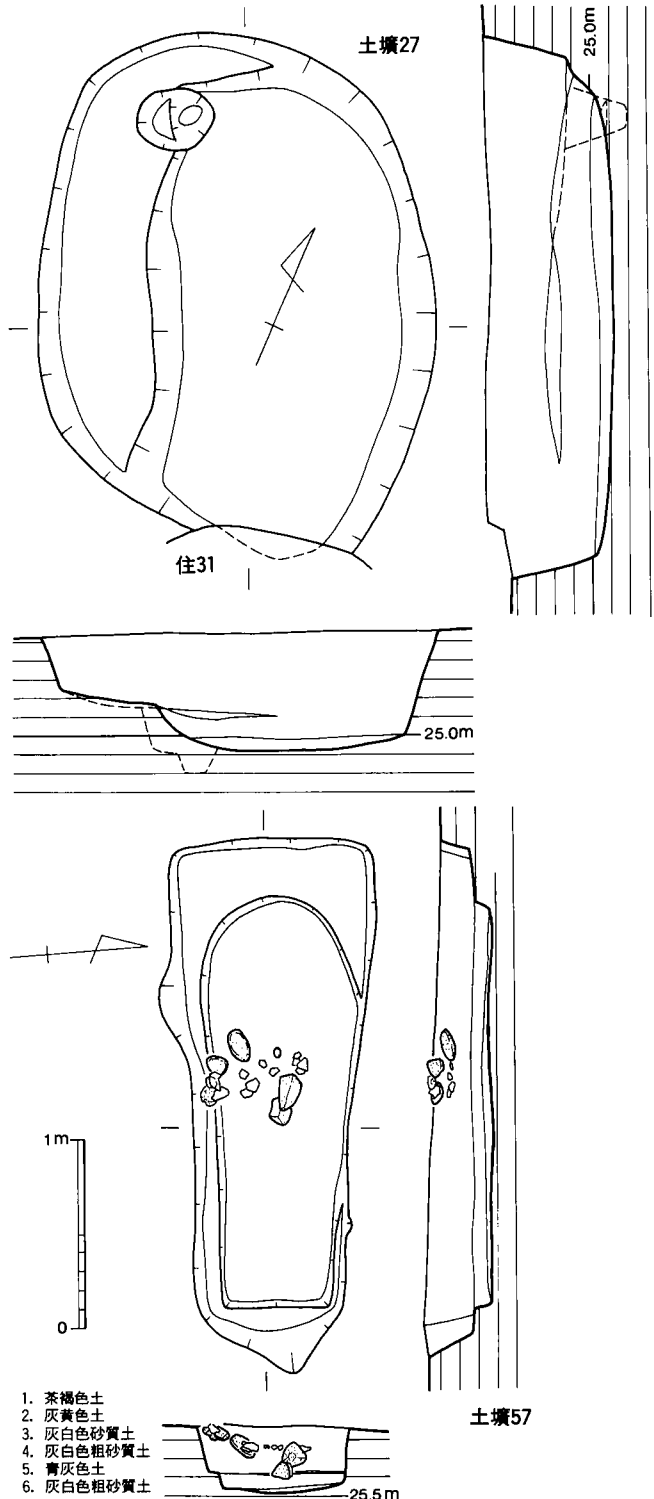
37号土壙 (図版87 第129図)

37号土壙は調査区中央部よりやや西寄りの南端に位置し、カマドを有する34号竪穴住居跡に近接する。1.5×0.9×0.3mの楕円形を呈し、長軸両端部には比較的広いテラスを作る。横断面形態は緩やかに開くU字状になり、底面は50×30cmと狭い。遺物は上部から大きめの土師器2点が出土しただけで、その他は小さな土師器片が少量であった。

出土遺物 (第134図) 1は復原口径約13cmの胴部がやや膨らむ甕で、外面にはハケ目が、内面にはケズリが観察される。2は口径11.2cmの土師器高坏脚部で、外面には縦方向の、内面には横方向のケズリが施される。

57号土壙 (図版87 第135図)

57号土壙は調査区西端部に位置するが、周辺の遺構はすべて弥生時代に属する。2.8×0.8〜0.4mの細長い台形状のプランで、西側へ緩やかに開いて



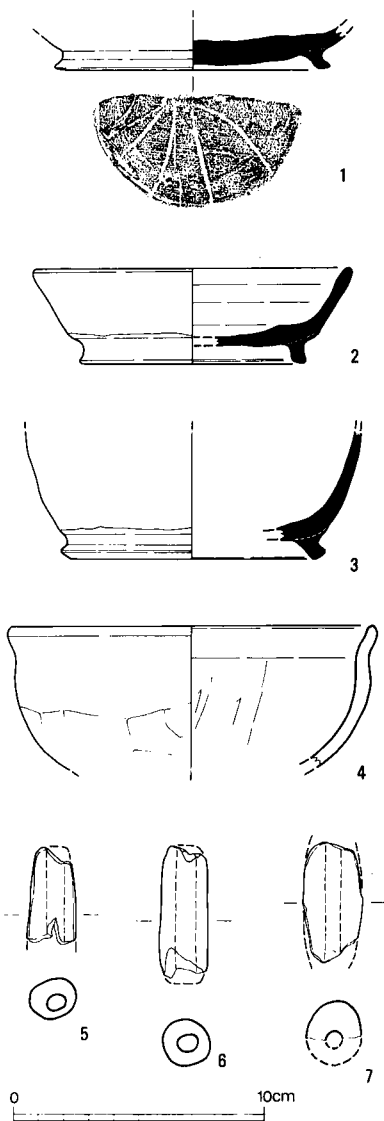
第135図 27・57号土壙実測図 (1/40)

いく。壁はほぼ垂直に立ち上がり、幅10～30cmのテラスが壁際に巡る。遺物は本土壙が埋没する過程で、中央部南方向より投棄あるいは流れ込んだような状態で出土した。礫が多く、また大きな破片は弥生土器ばかりで、小破片の須恵器や土師器が若干混っていた。

IV) 溝

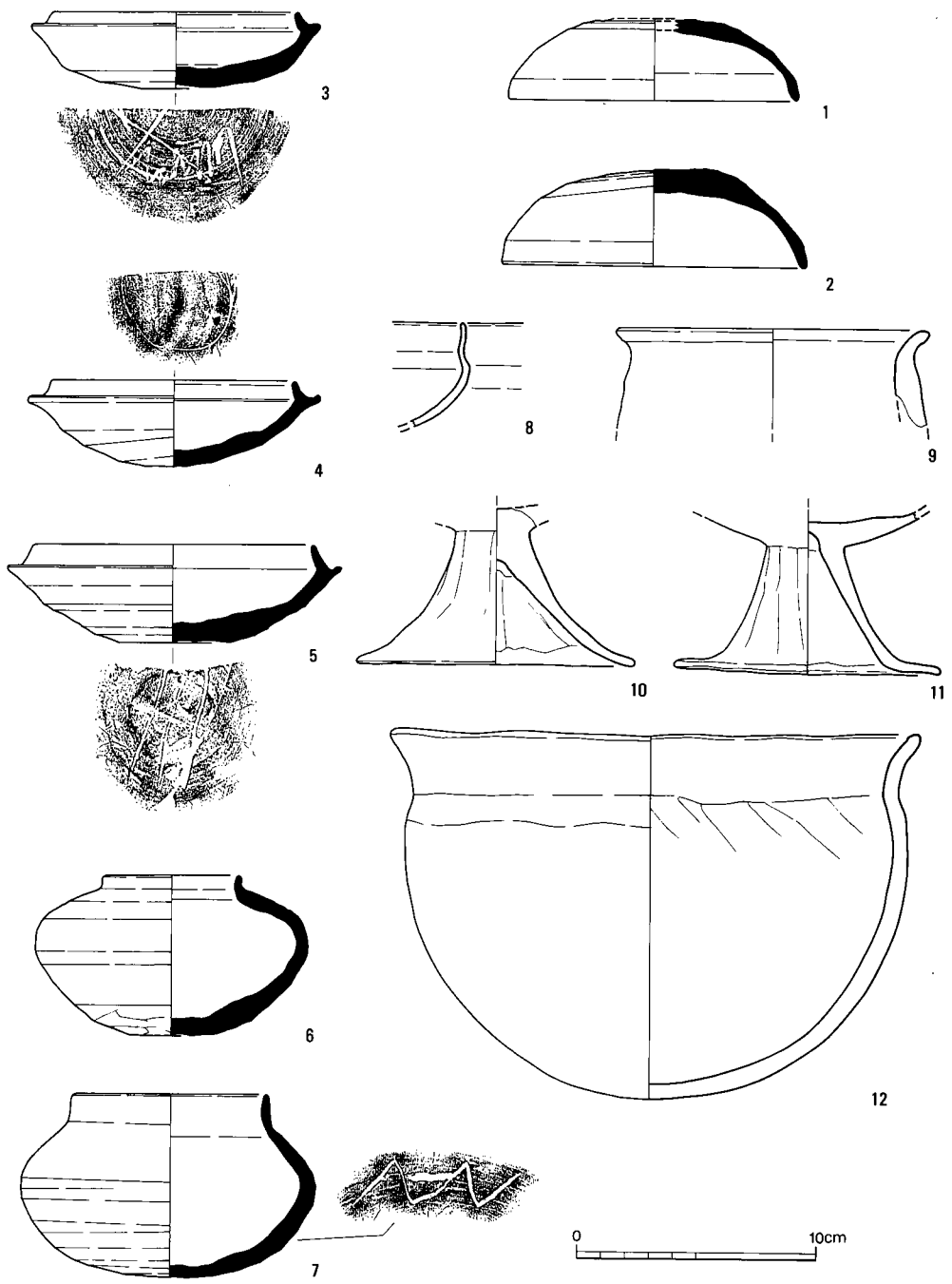
大碕遺跡では古墳時代遺構に属する溝は検出されなかったが、弥生時代前期後半の3号溝南端の最上部において、6世紀後半の遺物が纏まって出土した。この遺構は遺物の出土状況や土層断面の観察から溝として掘削されたものではなく、落ち込み状の浅い窪みに遺物が投棄もしくは流れ込んだものと考えられた。しかし、その場所は明らかに3号溝(第76図)の上部に相当し、したがって3号溝上層出土土器として取り扱うことにした。

出土遺物(第137図) 1～7は須恵器、6～12は土師器である。1は復原口径約12cmの坏蓋で、天井部には回転ヘラケズリが施される。2は口径12.8cm、器高4.1cmの坏蓋で、天井部には回転ヘラケズリが施される。3は口径10.2cm、器高3.2cmの坏身で、底部には回転ヘラケズリの後に「×」字状のヘラ記号が施される。4は口径10.2cm、器高3.6cmの坏身で、底部には回転ヘラケズリが施される。内面にはナデの後にヘラ記号が付けられる。5は復原口径約12cm、器高4.1cmの坏身で、底部には回転ヘラケズリの後に3本の平行なヘラ記号が施される。6は口径5.8cm、器高6.7cmの短頸壺で、底部には回転ヘラケズリ



第136図 27号土壙出土土器実測図(1/3)

の後のナデが観察される。7は口径8.3cm、器高7.7cmの短頸壺で、底部には回転ヘラケズリが施される。また最大腹径部のやや下には、山形のヘラ記号が施される。8の坏身は摩滅が著しく調整不明。9は復原口径約13cmの胴部がほとんど張らない甕で、摩滅により器面調整不明。10は復原底径約12cm、11は復原底径約11cmの高坏脚部で、外面には縦方向の、内面には横方向のケズリが施される。坏部との接合はソケットのように嵌め込む方式である。12は復原口径約23cm、器高15.1cmの胴部がほとんど膨らまない鉢で、内面は削られる。外面には炭化物が広く附着し、底部は加熱により赤褐色に変色する。



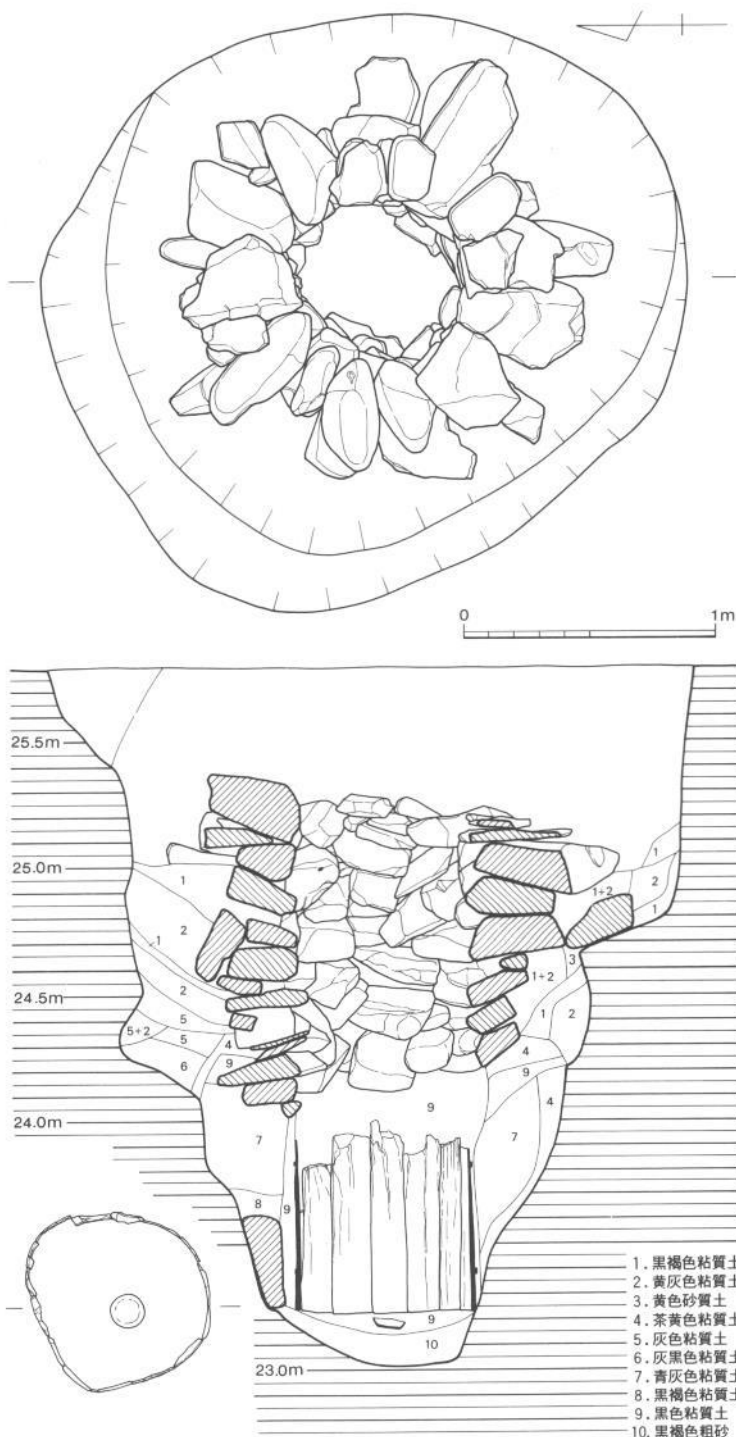
第 137 图 3号溝上層出土土器実測図 (1/3)

V) 井戸 (図版 89・90
第138・139図)

大碇遺跡で確認された井戸はこの1基だけで、調査区東端中央部に位置する。掘りかたの規模は大きく、平面プランは2.6×2.3mの円形で、湧水の著しい灰褐色の粗砂層まで2.8m掘削される。底径は0.9×0.8mの円形を呈する。最下部には桶が設置され、これは長さ60～70cm、幅15～20cm、厚さ3～4cmの板19枚を径60×70cmの円形に組み、下から20cm、上からも20cmのところ、幅3cm、厚さ1cmの竹のような植物質の枠でこれを補強する。この桶と掘りかたの間には、浦込めとして礫が詰め込まれる。桶より上の部分では、径2m程度に掘りか



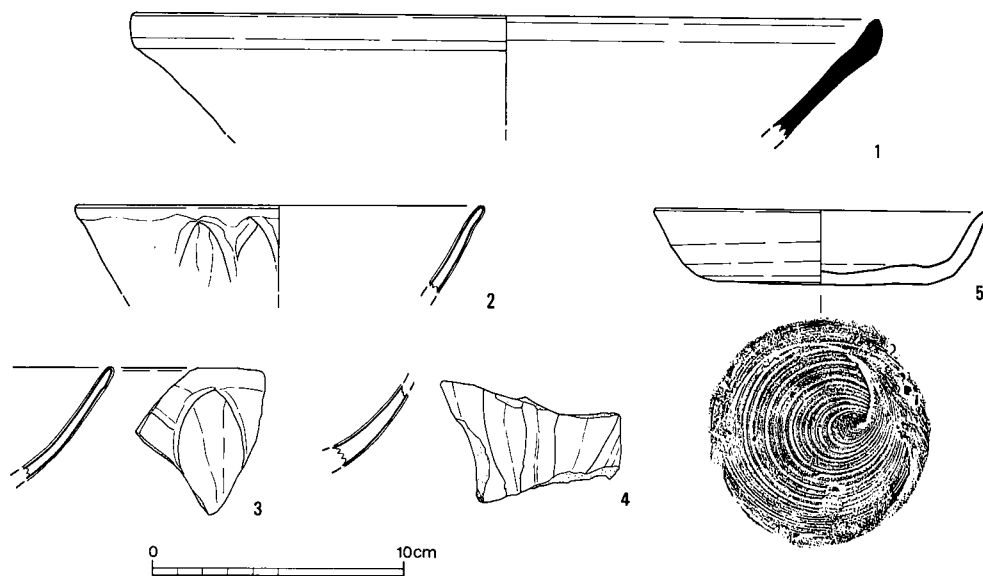
第138図 井戸発掘風景



第139図 井戸実測図 (1/30)

たを広げ、桶の直上に20~40cmの比較的扁平な礫を60cmほどの空間を保ちながら円筒状に整然と積み上げていく。この石組みは井戸検出面下60cmのところから1.3mほど下へ組まれているが、石組み内には多量の同じ大きさの礫が詰まっており、したがって、本来は最上部まで組まれていたものが、井戸の廃絶時に崩れ投棄されたものと考えられる。石組みの浦込めには、粘土が版築状に敷かれている。桶の底面中央からは全く摩滅や使用の痕跡のない完形の土師皿の他に焼けた骨の小片が見られ、井戸廃絶時の祭祀に関連するものであろう。この他の龍泉窯系青磁・土師器等の大部分の遺物は石組みより上位から出土し、つまり井戸が埋没する過程で投棄もしくは混入したものと考えられる。横田賢次郎氏の井戸の分類に従えば IVB-a 類（横田賢次郎「大宰府検出の井戸—とくに形態分類を中心に—」『九州歴史資料館研究論集』3 1977）に相当し、13世紀以降に普及するタイプとされる。

出土遺物（第140図） 1は復原口径約30cmの須恵質鉢で、口縁部がやや小さ目の玉縁状に肥厚される。外面と口縁部内面にはヨコナデが施され、灰白色を呈する。2~4は龍泉窯系青磁で、胎土は粗く黒色粒子が混入する。2は復原口径約16cmで淡青白色の釉を厚くかける。3は外面に鎬連弁を削り出し、貫入のあるガラス質の釉をかける。4の釉は貫入のない透明釉である。5は口径13.4cm、底径8.7cm、器高3.0cmの土師皿で、底部外面には明瞭な糸切りの痕跡が窺える。内外面ともヨコナデであるが、底部内面はナデ。全く摩滅しておらず、祭祀のみに使用されたものであろう。13世紀後半に比定される。



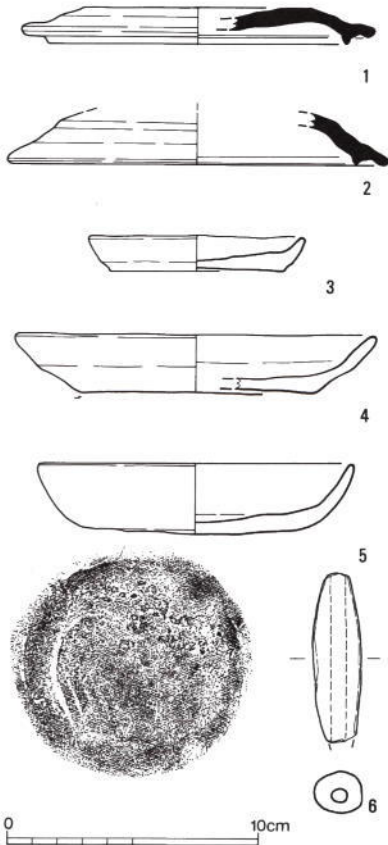
第 140 図 井戸出土土器実測図 (1/3)

Ⅵ) ピット出土の遺物 (第141図)

ここではピット出土の遺物について説明する。1は復原口径約12cmのツマミのつく須恵器坏蓋で、天井部には回転ヘラケズリが施される。2は復原口径約15cmの須恵器坏蓋で、残存する範囲に回転ヘラケズリは窺えない。3は復原口径約9cm、復原底径約7cm、器高1.4cmの土師皿で、底部には回転糸切り痕が残る。4は復原口径約14cm、復原底径約9cm、器高2.3cmの土師皿で、底部にはやはり回転糸切り痕が残る。5は復原口径約13cm、底径8.6cm、器高2.8cmの土師皿で、内面はナデられ底部には板圧痕が残る。6の土錘は長さ6.7cm、最大径1.9cm、孔径0.6cmを測る。

6. 大碓遺跡東部別区の調査 (図版91 第142図)

大碓遺跡東部別区は大碓遺跡本体調査区から東100mに位置する。調査面積は400m²。大碓遺跡の東側は本体調査区の谷部の延長線上に相当し、概して遺構や遺物は全く存在しないが、この地点でのみ遺物(古式土師器)の出土をみた。標高25m程度。第142図に示したように、調査区の東から西方向へ

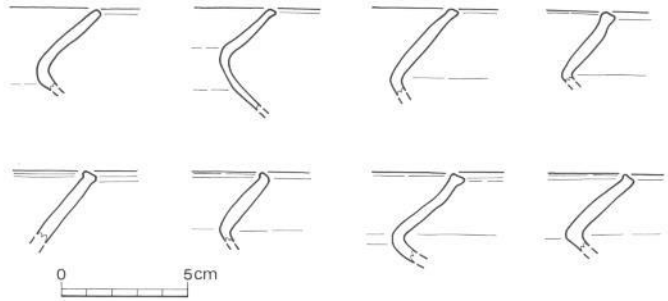


第 141 図 ピット出土土器・土製品実測図(1/3)



第 142 図 大碓遺跡東部別区調査範囲実測図 (1/300)

緩やかに傾斜するが、中央部ではやや急になって溝状にごく浅く落ち込む。落ち込むといってもあくまで自然的なもので、この部分に流れ込んできたと考えられる摩滅の著しい小破片の土器が10×3mの範囲で集中していた。



第 143 図 大碇遺跡東部別区出土土器実測図 (1/3)

出土遺物 (第144図) 出土した土器は意外と多くパンケース1箱分にも及ぶが、最高4×4cm程度の小破片ばかりであった。摩滅は特に著しく、器面調整が観察できるものは全くない。口縁部の破片を第144図に8点図示したが、確実に底部といえる破片は確認できなかったので、恐らく底部は丸底であったと考えられる。口縁部の形態には直線的なものと、ごく緩やかに内弯するものがあり、また端部も丸く仕上げるものと、内側へ摘み上げるものがある。布留式の古い段階のものであろう。



第 144 図 調査風景

7. ま と め

I) 大碇遺跡の概要

大碇遺跡は大きく縄文・弥生・古墳・中世の4期に分れる複合遺跡である。8,800㎡という調査区域からは随所で様々な遺構が検出されたが、削平により遺構の遺存状態は悪く、また調査区域自体が幅約38m、長さ約300mと極めて細長い為、遺跡の全体的な広がりや遺構どうしの関係についての十分な検討は困難であった。以下では、各期の概要について纏めてみたい。

縄文時代に属する遺構は全く検出できなかったが、6点の縄文土器が弥生時代や古墳時代の遺構の埋土から出土した。いずれも摩滅が著しく小破片ばかりである。縄文前期の埴畑式土器や後・晩期の土器からなる。

弥生時代の遺構には竪穴住居跡14軒、土壇50基、溝11本、甕棺5基と多数のピットがある。まず、竪穴住居跡については大きく2つのタイプに分かれよう。1つは径がおよそ6～8mの円形プランで、中央に炉跡を有し、6本ないし7本の主柱穴からなるタイプである(1・2・6・8・21・30・39・40・43号竪穴住居跡)。2号竪穴住居跡のように、壁際の床面下を1段(10cm程度)掘り下げてそこに土を埋めてから貼り床をするものや、30号竪穴住居跡のように周溝を巡らすものもある。8号竪穴住居跡の炉跡からは、硬質部が突帯文状に隆起(残存)してそこに刻みを施す自然礫や加熱を受けた碧玉製管玉が敲き石や石鏃と共に出土しており、祭祀的性格が想定される遺構である。竪穴住居跡のもう1つのタイプは、1辺が2～4mの小さな正方形もしくは長方形を呈するプランで、炉跡はなく柱穴も中央部に1基だけしか存在しない(32・33・35・41・42号竪穴住居跡)。分布は調査区の西側に偏るが、必ずしも密集という状況ではない。炉跡が存在しないことや規模の小ささから人間が日常的に生活する場とは考え難く、かといって同時期の貯蔵穴が多数周辺に存在するだけに、貯蔵庫(倉庫)と考えるほどの積極的な根拠にも乏しい。筑後川中流域では類例が散見されるが、その性格付けは今後の課題としたい。

土壇は50基検出されたが、その大半は貯蔵穴である。サイズやプランは多岐に亘るが、ほとんどの場合壁は直線的に立ち上がり、所謂袋状となるものは意外と少なく5基しかない。遺物は全体的に少ないが、これは貯蔵穴としての使用が終わった段階で必要な土器類は穴の中から取り上げたためと考えられる。稀に土壇の中位以上から多くの遺物が出土することもあるが、これらは投棄もしくは流れ込みによるもので、完形品に復原できるものはほとんど存在しない。ただし、50・56号土壇については多くの完全な形の土器が底面付近から出土しており、貯蔵穴としての使用中で埋没した可能性が高い。貯蔵穴の分布は調査区全体に散在しており、部分的に集中する傾向は積極的には窺えない。したがって、竪穴住居跡との関係も不明である。

11本検出された溝の中で、6本は小溝、1本は中溝、4本が大溝である。大溝は断面形態から大きく2つに分類される。4・6・8号溝のように断面形態がV字状で、底付近ではさらに細く深く

掘り込まれるタイプと、3号溝のようにU字状に近い断面形態のタイプのものとである。いずれも幅・深さとも2～3mの大きな規模を有する環濠となろうが、細長い調査区を南北にはほぼ直交しているため、竪穴住居跡や貯蔵穴との関係については判然としない。また、出土土器の様相も年代的に微妙に異なり（6号溝・Ⅰ期→3号溝・Ⅱ期→8号溝・Ⅲ期→4号溝・Ⅴ期）、どの溝とどの溝が繋がっているのか、また仮に繋がらなくともどの溝とどの溝とが年代的に共存していたのかは不明と言わざるをえない。3号溝の陸橋は注目に値するが、これに伴う遺構（門など）は検出されなかった。

甕棺墓は調査区東端部で5基検出された。この地域は特に削平が著しく掘りかたも大きく削平されているが、甕棺自体は土圧で潰れていたため意外と残りは良好であった。2号甕棺墓は削平と抜き取りのため甕棺の胴部破片がわずかに残るだけであったが、大型棺と考えられる。1号も大型棺であるが、3～5号棺は小型棺で5号棺の上甕は壺の転用品である。これら5基の甕棺墓は少ないながらも軸を揃えて列状に並んでおり、当該期甕棺墓の特徴を備えている。なお、甕棺墓はいずれも中期前半代に属するもので、竪穴住居跡や貯蔵穴や溝とは年代的に後出するものである。

遺物は貯蔵穴や溝から比較的纏まった出土をみた。弥生土器については特に注目すべき必要性を感じるので後で詳述するが、石器についてはここで纏めておきたい。打製石鏃の石材はサヌカイトと黒曜石からなるが、その多くはサヌカイトで占められる。いずれも装着部が抉れるもので、サイズ自体は比較的小さく纏まっている。縄文土器も出土しているだけに、また石匙の存在からも縄文時代に属する石鏃も当然含まれると考えられるが、縄文時代の石器だけをここで抜き出すことは難しい。磨製石鏃も3点出土しているが、いずれも粘板岩製である。本来は柳葉形の細長くシャープなものであったと考えられるが、研ぎ直しの結果このような寸詰まりになったのであろう。打製石斧は1点だけ採集されたが、これは縄文時代のものであろう。この地域では弥生前期後半まで打製石斧は残りそうにない。8号竪穴住居跡からは拳大の石英塊や剥片が多く出土した。これらは本遺跡に持ち込まれたものである。石英で作られた石器は全く存在しないので、土器の混和材として使用されたものであろうか。

古墳時代の遺構はその大部分が7世紀後半代に属する。竪穴住居跡は29軒、掘立柱建物跡は6軒、土壙は8基が検出された。竪穴住居跡はいずれも4本柱でカマドを有し、ほぼ正方形に近い平面プランを呈する。カマドの多くは北壁の中央部に付設されるが、東壁に付設される住居跡が2軒（27・36号）、西壁に付設される住居跡が1軒（14号）ある。その付設方法については、住居跡内に付設されるものと住居跡から若干突出するものとの2タイプからなるが、出土遺物からこれらに年代的な差は窺えない。また、祭祀を行なった遺物の出土や痕跡もなく、カマドの火床に相当する焼土のみがわずかに残ることから住居廃絶時に壊され掃除されたと考えられるものも少なくはない。14号竪穴住居跡のように入口的な突出部が作出される珍しいケースもあ

る。古墳時代の竪穴住居跡も弥生時代のものと同様に、多くの場合著しい削平のためすでに貼り床が剥き出しになっており、遺物の出土は極く少量でしかなかった。

掘立柱建物跡は出土遺物が極めて少ないため年代の決定に苦慮したが、切り合い関係からその多くが古墳時代以降に属すると考えられる。土壌はいずれも長楕円形の平面プランで、壁が緩やかに傾斜していくのが特徴である。遺物は12号土壌を除いて全体的に少なく、またその多くは流れ込みか投棄された状態の出土で、土壌の性格は判然としない。なお、弥生時代の3号溝の南端上部からは比較的纏まった遺物が出土したが、これらは溝に伴うものではなく、たまたま溝の上部にできた浅い落ち込み状の窪みに投棄もしくは流れ込んだものと考えられる。いずれも6世紀後半代に属するもので、この時期の遺構や遺物は3号溝上部を除いて全く存在しない。

中世の遺構は、13世紀後半代に位置づけられる井戸と2×3間の2号掘立柱建物跡だけである。井戸は桶の上に石が組まれるもので、底からは全く使用の痕跡のない土師皿や焼けて青白く変色した獣骨の細片が出土しており、廃絶時に祭祀が行なわれたと考えられる。

東部別区ではかなり摩滅した古式土師器の細片が低い部分に流れ込むように出土したが、大碓・堺町両遺跡ではこの時期の遺物は全く出土していない。これらの古式土師器は大碓遺跡本体に関連するものではなく、むしろこの東部別区の北東約100mに位置し、ほぼ同じ年代に属する3重周溝の生葉1号墳に関連するものと考えられる。

以上、大碓遺跡の概要について纏めてきたが、先述したように極めて細長い調査区であるため各時代の全体像については不明な点が多い。この中にあって注目されるのは、弥生時代前期後半～中期初頭に属する遺構と遺物である。この年代に属する遺跡は、筑後川中流域では散発的には見られるもののこれほど纏まった例は少なく、今後の基準資料になりうるものと考えられる。

Ⅱ) 大碓遺跡出土弥生土器について

1. はじめに

大碓遺跡では土壌（主に貯蔵穴）や大溝を中心に、弥生時代前期後半～中期初頭に属する土器が量的に纏まって出土した。これらは1つの遺構単位ではそれぞれに纏まった様相を示すものの、各遺構間で比較した場合はその様相が微妙に異なるという特徴を有する。これは年代差に通じるものであり、それらの変遷過程を追うことで大碓遺跡自体の変遷や性格の復原がある程度可能になるものと考えられる。

そもそも当該期は、板付系甕と亀ノ甲系甕との関係等から、福岡平野とその周辺地域における水稻農耕の受容の在り方が古くから問題にされてきた時期である。筑後川下流域およびその周辺部についていえば、片岡宏二（1984）により三国丘陵の、また藤尾慎一郎（1984・1990）により有明海沿岸部の当該期土器変遷が詳細に分析されており、その様相がかなり明確になっ

てきている。しかし、筑後川中流域では最近に至るまで当該期の良好な資料に恵まれず、その実体が判然としなかった。そうした中で、九州横断自動車道の建設や各種の開発に伴う発掘調査の急増により当該期の資料は着実に蓄積されており、今回の大碓遺跡の調査成果を踏まえた上で、筑後川中流域における当該期の状況把握をここで若干行なう次第である。

2. 周辺地域の状況と若干の研究史

先述したように、片岡宏二により三国丘陵を中心とした当該期の状況が的確に纏められている。それによると弥生前期後半を、甕の口縁部下に粘土帯接合による段が形成されることで前期Ⅱa期、甕の口縁部下突帯の増加と沈線文の出現をもって前期Ⅱb期、壺の頸部と胴部の境に突帯が出現することで前期Ⅱc期、といったように3期に細分する。甕の在り方については、板付Ⅱ式段階において亀ノ甲系の存在が認められながらも、基本的には板付系が量的に優位であるとしている。そして、上底甕の出現と口縁部下の沈線文の普遍化により中期への移行を特徴づけている。

藤尾慎一郎は所謂「亀ノ甲タイプ」の再検討から、各地における刻目突帯文土器の変遷過程（縄文晩期～弥生中期初頭）について詳細に論じている。それによると、甕を板付系・刻目突帯文系・折衷系に大きく分けた上で、有明海沿岸部は刻目突帯文系が優位な地域として位置づけるが、三国丘陵地域や筑後川中流域については特に触れられていない。

さて、問題の筑後川中流域については以前井上裕弘等（1978）により、亀ノ甲系甕の存在から、福岡・小郡地域とは若干異なり、八女地域との強い関係のもとで遠賀川地域や東九州との関係も窺える地域として位置づけられた。そして近年、朝倉町上の原遺跡で当該期の良好な資料を得た井上（1990）は再度この地域の状況を纏めている。それによれば、前期後半は板付系・亀ノ甲系・折衷系が共存し、また沈線文が出現する時期とし、口縁部の三角突帯文やその下の沈線文の普遍化をもって中期初頭を特徴づけている。中期初頭については、如意形や三角突帯文の口縁部とその下に沈線文のみが施される上底の甕が単独で出土する甘木市西原C遺跡（中間編1984）や城原遺跡（松尾編1993）の状況からも検証されるが、前期後半については未だ細かい変遷状況が纏められていない。そこで以上のような状況を踏まえた上で、次に大碓遺跡出土の弥生土器について考えてみたい。

3. 大碓遺跡出土の弥生土器について

大碓遺跡は土壌（主に貯蔵穴）や溝を中心に、前期後半～中期初頭の比較的纏まった土器が出土した。特に質・量ともに安定した一括資料として注目されるのは、56号土壌、3号溝、8号溝、50号土壌、52号土壌、4号溝である。以下では、これら各遺構ごとに得られた土器群の特徴を纏めながら、大碓遺跡における弥生前期後半～中期初頭の変遷について考えてみたい。

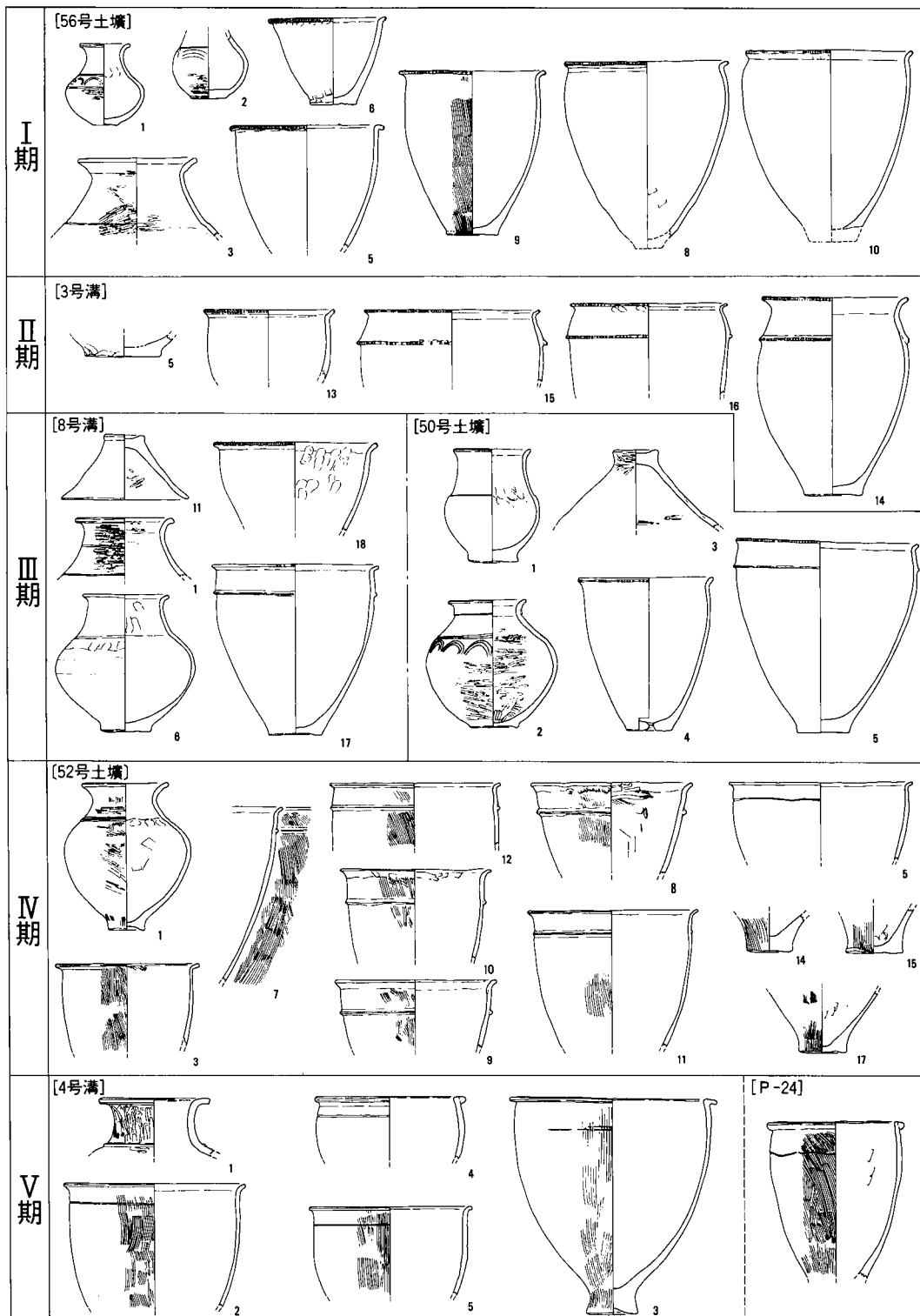
56号土壙の土器群は所謂「板付Ⅱa式」といわれるものである。壺の頸部と胴部の境には段の名残ともいえる沈線文が施され、しばしば重弧文等が施される。3の壺の口縁部は粘土帯を貼り付けることで肥厚され、頸部と胴部の境には削り出すことによって段を作出している。甕はいずれも如意形の口縁形態を呈し、その先端部に刻みを施す。5のように強く外反するものもあるが、これは例外的な存在と考えられる。この貯蔵穴からはパンケース4箱分の土器が出土したが、甕についてはすべて如意形口縁のもので、刻目突帯文系（亀ノ甲系）の甕は含まれない。本遺跡では最も古い段階の弥生土器である。

3号溝からは比較的多くの土器が出土したが、小破片がその大半を占め、図示できるものは意外と少なかった。壺についてはその特徴を知りうる資料がほとんど見当たらない。甕の口縁部は基本的に如意形を呈するが、大きく2つのタイプによって構成される。1つは直線的に立ち上がる器形で口縁部にのみ刻みを施すタイプ。もう1つは口縁部の下4～6cmのところに、成形時の粘土紐の接合によって突帯文状に段を作出しその上を刻むタイプで、器形的にはこの段で屈曲させて内傾する。量的には後者の方が圧倒的に多い。

8号溝と50号土壙はほぼ同じ様相を呈する土器群である。壺については56号土壙等と大差ないが、傾向的に頸部の立ち上がりやや直線的になるようである。甕はやはり大きく2つのタイプに分れるが、口縁部形態は基本的に如意形口縁である。1つは直線的に立ち上がり口縁部だけを刻むタイプ。もう1つは口縁部の下4～6cmに粘土紐を貼り付けそれを刻むタイプで、器形的にはほぼ直線的に立ち上がる。やはり、後者のタイプが量的には多い。8号溝や50号土壙からは、3号溝で出土したような段を有して内側へ屈曲する甕は含まれていない。

52号土壙は8号溝を切る遺構である。土器はパンケース3箱分が出土したが、器種としてはその大半が甕である。壺で特徴的なのは、頸部と胴部の境に削り出しによって突帯文が作出されることである。器面調整としての研磨はやや粗く、ハケ目が部分的に観察される。甕は大きく3タイプに分類されるが、いずれも直線的に立ち上がり、口縁部形態は如意形でその端部を刻むことは全くない。まず、1番目のタイプは何も文様を施さないタイプ。口縁部を強く長くが外反させるのが特徴的。2番目のタイプは、口縁部の下4～6cmのところに突帯文を貼り付けるタイプであるが、この突帯文を刻むことはない。突帯文上の強いナデにより、突帯文の上下1cm程度の範囲でハケ目が消される。3番目のタイプは、口縁部の下4～6cmのところに沈線文を1本施すもの。量的には2番目のタイプが圧倒的に多く、3番目のタイプについては図示した1点だけである。この遺構から出土する底部はすべて平底で、上底の甕底部は全く出土していない。

4号溝でもやはり甕の出土量が多い。壺については頸部と胴部の境に断面三角形の突帯文を貼り付けるのが特徴で、52号土壙の壺と同様に研磨が粗くなってハケ目が部分的に観察される。甕は口縁部の形態から如意形のタイプと断面三角形の粘土紐を口縁部に貼り付けるタイプとに分類されるが、いずれの甕においても口縁部の下3～5cmのところに1本ないし2本の沈線文が施



第 145 图 大碇遺跡 遺構別弥生土器編年图(1/10)

される。器形的には直線的に立ち上がるものと、胴部がやや膨らむものがある。また、底部には平底もあるが、多くはわずかに上底になったものである。4号溝出土土器は、概して甘木市城原遺跡の土器群とほぼ同じ様相を呈するもので、中期初頭期に属するものであろう。

以上のように各遺構出土弥生土器の特徴について纏めてきたが、56号土壙が板付Ⅱa式、4号溝が中期初頭期の一群、そして3号溝・8号溝・50号土壙・52号土壙が亀ノ甲タイプと呼ばれる刻目突帯文土器が甕の主体を占め、前二者の間に位置づけられるものである。したがって、このような年代的な位置や型式学的な推移を考慮に入れるなら、ここで上げた遺構の土器群は56号土壙→3号溝→8号溝・50号土壙→52号土壙→4号溝の順で変遷していくものと考えられ、それぞれ大碓遺跡の弥生前期後半～中期初頭を5期に細分するものとして認識することができよう。

大碓Ⅰ期 壺は頸部と胴部の境に沈線文を施すが、中には削り出すことによってそこに段を作出することもある。甕は外側に緩やかに開く器形で、口縁部には刻みを施す如意形口縁部に統一される。

大碓Ⅱ期 壺の様相は今一つ不明瞭だが、Ⅰ期やⅢ期の状況からそれらとは大差ないものと考えられる。甕はⅠ期とほとんど変わらないものもあるが、主流は成形時の粘土紐の接合により突帯文状に段を作出させ、そこに刻みを施すものである。器形的にはこの段で屈曲して、口縁部が内傾する。口縁部の形態は如意形である。

大碓Ⅲ期 壺はⅠ期以来大きな変化はないが、頸部がやや直線的に立ち上がる傾向にある。甕はすべて如意形口縁で、口縁部が刻まれるだけのタイプもⅠ期以来少量あるが、多くは口縁部下4～6cmに刻み目突帯文が貼り付けられるタイプである。器形は直線的に立ち上がる。

大碓Ⅳ期 壺の頸部と胴部の境には、削り出しによって突帯文が作出される。甕はすべて如意形口縁で、刻みは施されない。無文のタイプ、口縁部下4～6cmのところに突帯文が貼り付けられるタイプ、口縁部下4～6cmのところに沈線文が1本施されるタイプの3つに分れるが、その大半は突帯文が付く2番目のタイプである。

大碓Ⅴ期 壺の頸部と胴部の境には、突帯文が貼り付けられる。甕の口縁部下3～5cmのところには沈線文が1本（まれに2本）施される。口縁部は如意形のもの、強く外反させるもの、断面三角形の粘土紐を貼り付けるものの3タイプからなり、底部は上底が出現する。

4. おわりに

大碓遺跡における弥生前期後半～中期初頭の土器変遷を見てきたが、壺について最も特徴的なのは、削り出しの段→沈線文→削り出し突帯文→貼り付け突帯文という頸部と胴部の境における文様の作出方法の変遷である。甕については、一貫して如意形という口縁部形態を維持しながらも、口縁部下4～6cmのところに、無文→成形時による突帯文状の段の作出（刻みあり）→刻目突帯文の貼り付け→刻みのない突帯文の貼り付け→沈線文、という変遷を見ることがで

きる。Ⅱ期からⅤ期への変遷については型式学的にもスムーズなものではあるが、Ⅱ期の「成形時による突帯文状の段の作出（刻みあり）」という手法の出現は突発的で、Ⅰ期とは大きな隔りを有する。遺跡自体は連続しているだけに、この突発性をどう評価・認識するかが問題である。

こういった変遷を筑後川中流域の他の遺跡で見ることができないが、上の原遺跡ではほぼ同種の土器が出土しており、基本的には大碇遺跡と同様の変遷を辿ったものと考えられる。しかし、この地域では上の原遺跡以外に大碇遺跡と年代的に並行していた遺跡は今のところ確認されていないので、筑後川中流域において普遍的な変遷であるかどうかは今後の課題となろう。なお、上の原遺跡では壺の頸部に二枚貝腹縁による重弧文の押圧は窺えないが、大碇遺跡や浮羽郡田主丸町田主丸古墳群下層の当該期遺跡（栗原編1985）ではそれが存在する。筑後川を挟んだ北と南の違いは現在までのところこの程度である。いずれにせよ、今後資料の増加を待って、より深い検討を試みたい。

【参考文献】

- 井上裕弘編「前期末の地域性について」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第7集 福岡県教育委員会 1978
- 片岡宏二「板付Ⅱ式土器の細分と編年について—特に三国丘陵の資料を中心に—」宮小路賀宏編『三沢蓮ヶ浦遺跡』福岡県教育委員会 1984
- 藤尾慎一郎「弥生時代前期の刻目突帯文系土器—「亀ノ甲タイプ」の再検討—」『九州考古学』59号 九州考古学会 1984
- 中間研二編『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』第3集 福岡県教育委員会 1984
- 栗原和彦編『田主丸古墳群』田主丸町教育委員会 1985
- 井上裕弘編「貯蔵穴出土の土器群について」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』第18集 1990
- 藤尾慎一郎「西部九州の刻目突帯文土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第26集 国立歴史民俗博物館 1990
- 松尾宏編『城原遺跡』甘木市教育委員会 1993

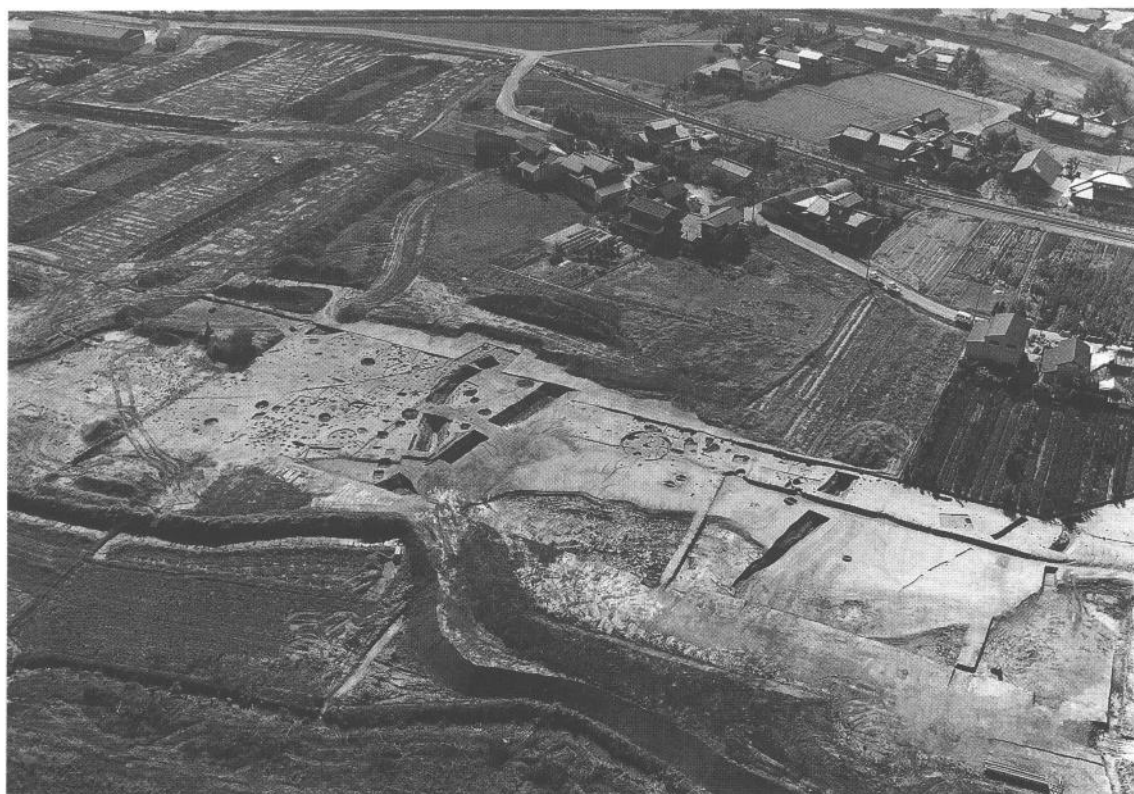
おおいかり
大碇遺跡
図版



(1) 大碓遺跡全景. 1 (北東から)



(2) 大碓遺跡全景. 2 (南東から)



(1) 大碓遺跡全景. 3 (北西から)



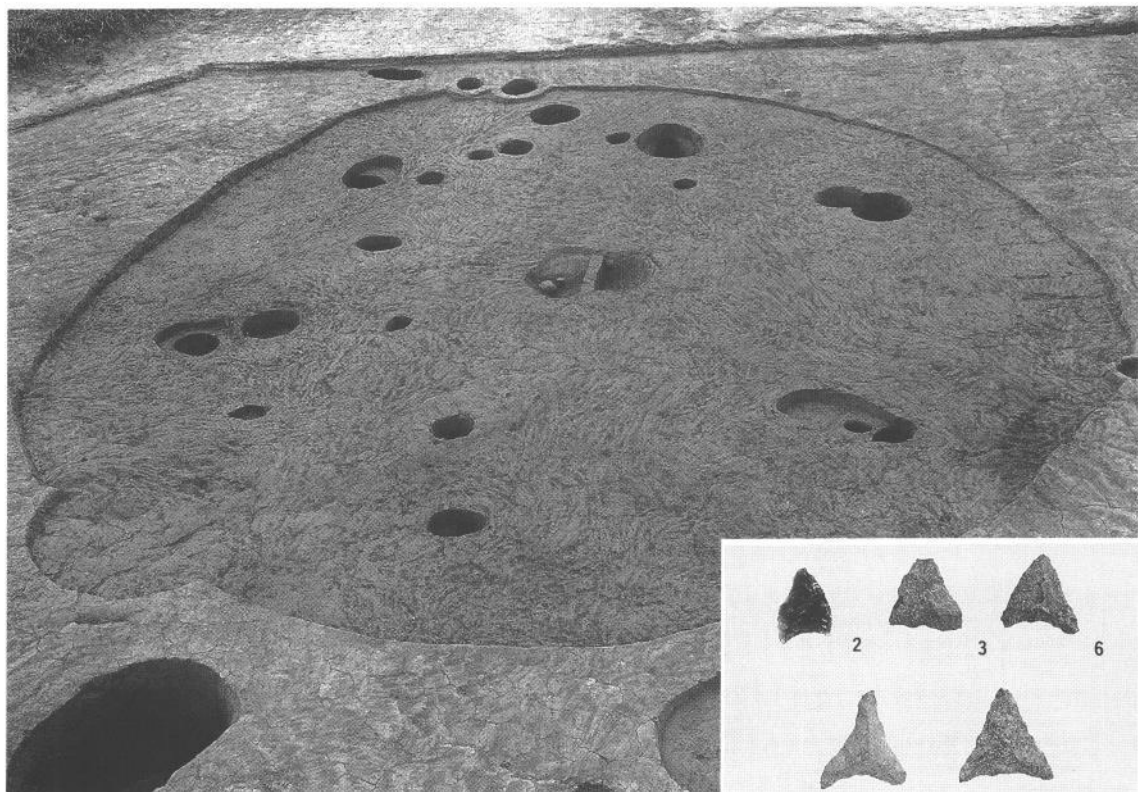
(2) 大碓遺跡全景. 4 (北から)



(1) 大碓遺跡西端部全景 (北西から、41~43号住居 55~60号土壙 10・11号溝)

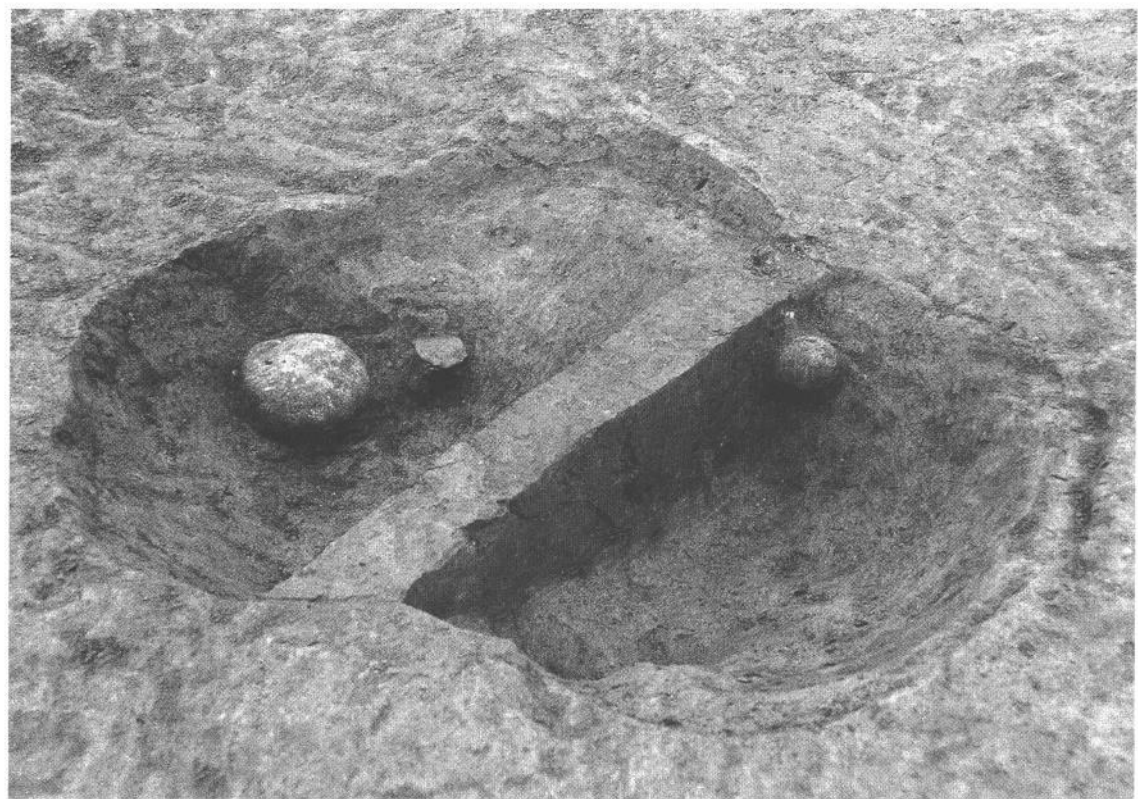


(2) 大碓遺跡西端部全景 (西から)

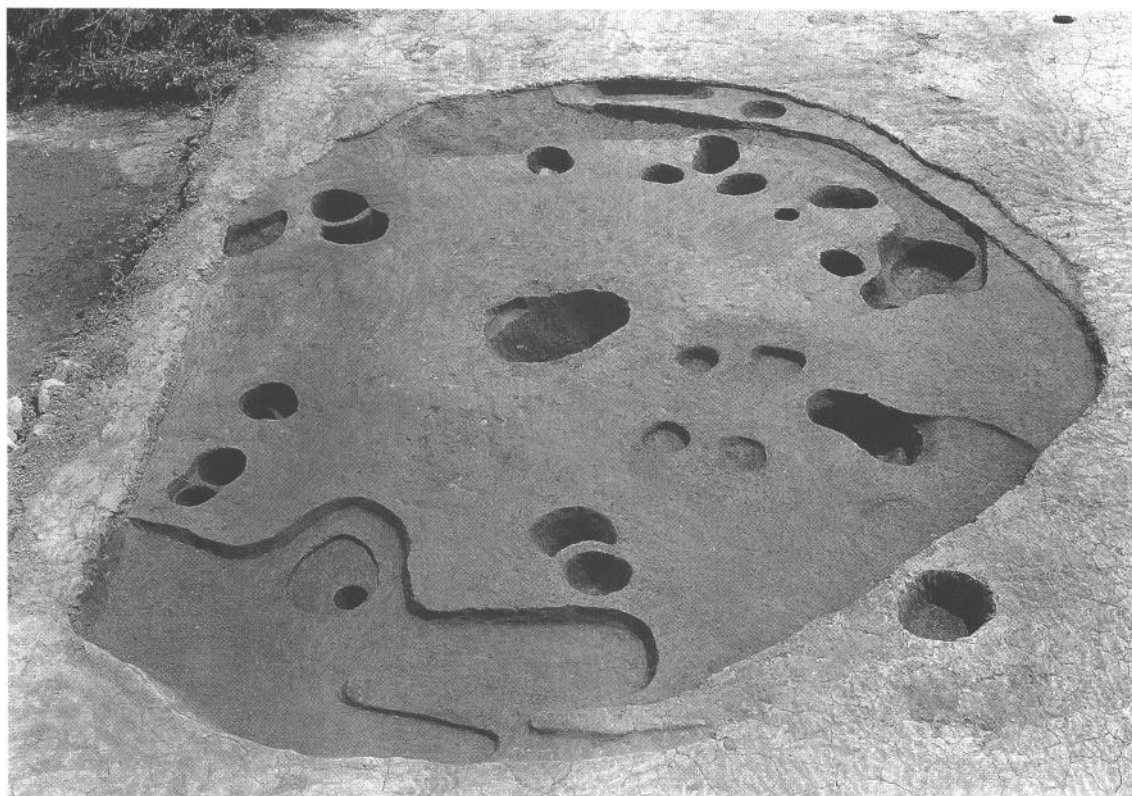


(1) 1号竖穴住居（北から）

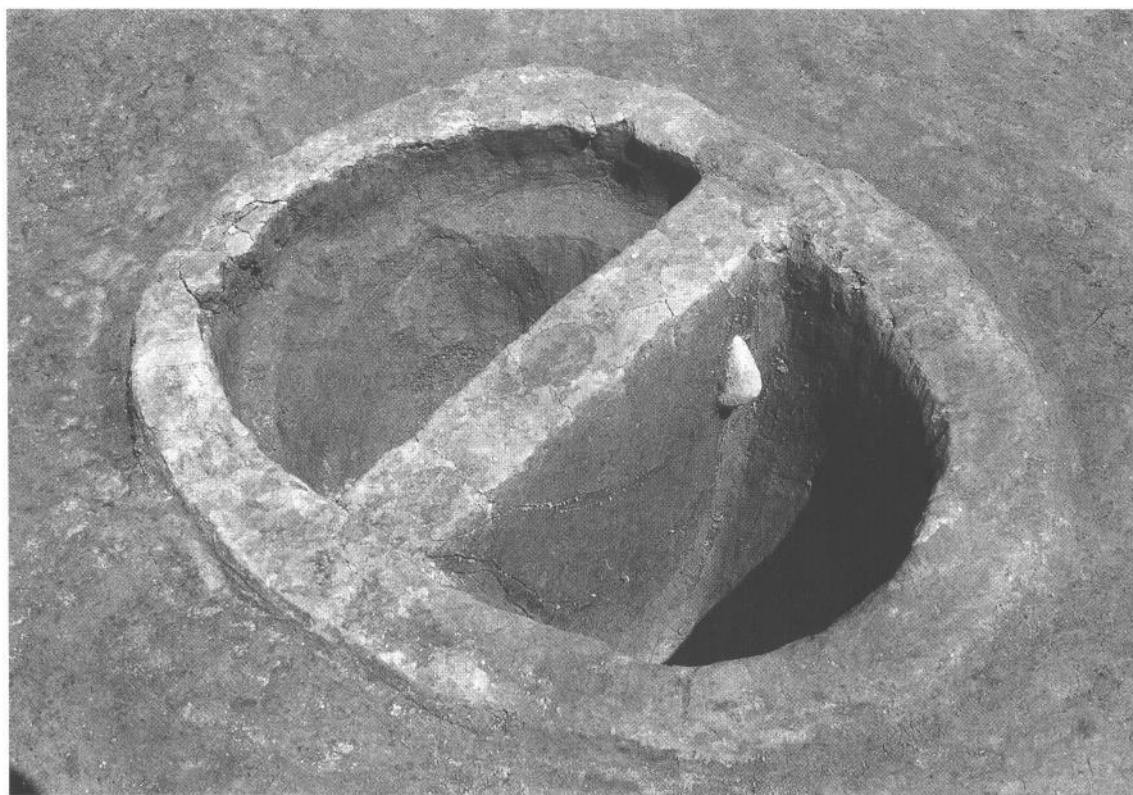
(3) 1号竖穴住居跡出土遺物



(2) 1号竖穴住居跡炉跡（北西から）



(1) 2号竪穴住居跡（北西から）



(2) 2号竪穴住居跡（南西から）



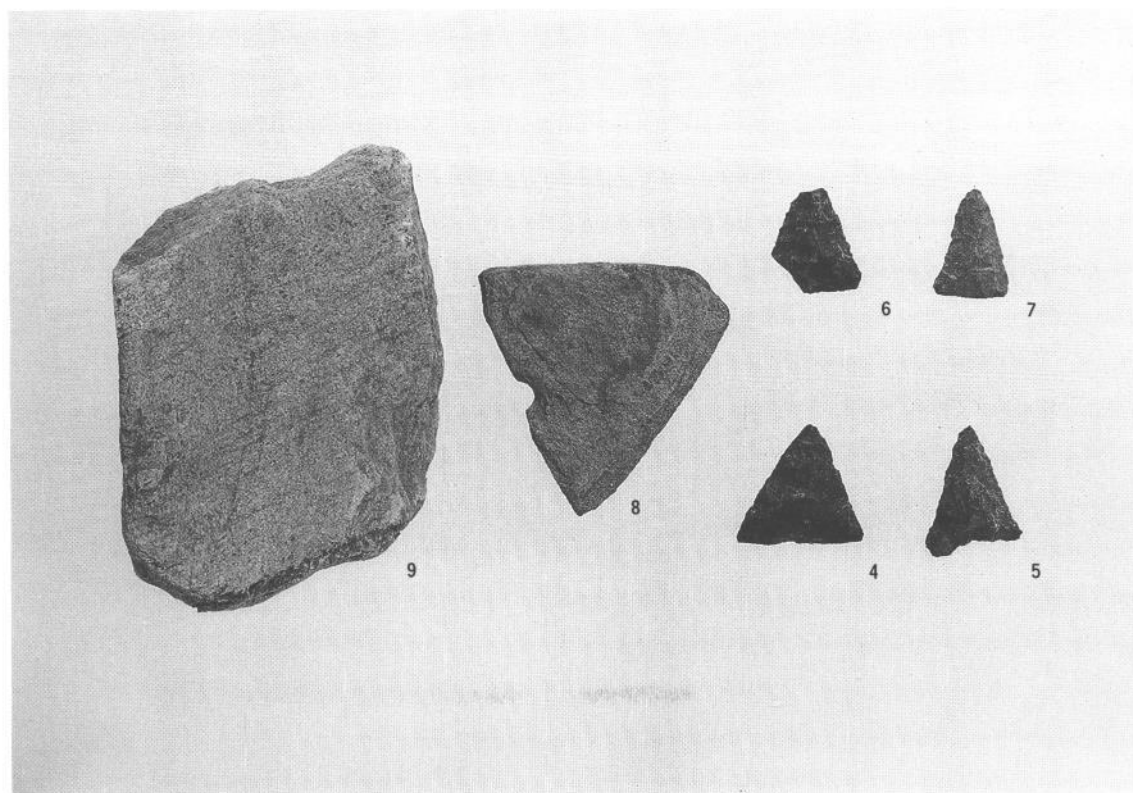
(1) 5・6・8号竪穴住居跡 (南西から)



(2) 6号竪穴住居跡 (南から)



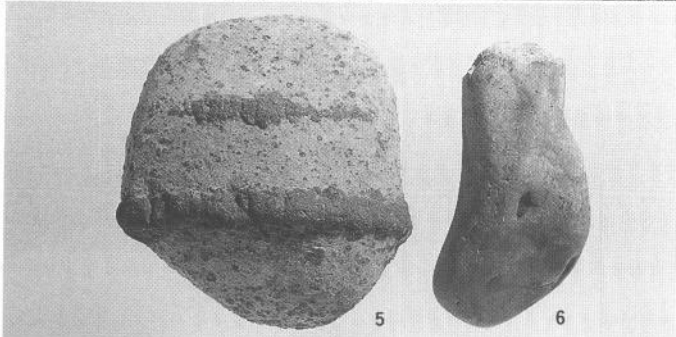
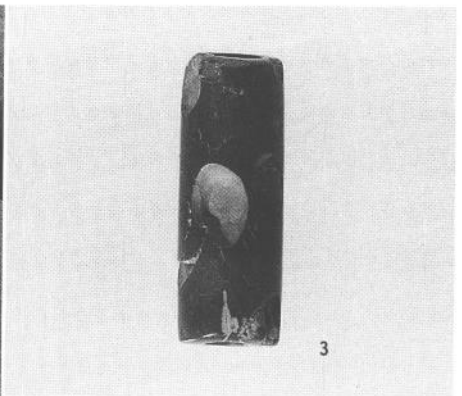
(1) 6号竖穴住居跡遺物 (2・3) 出土状態 (北東から)



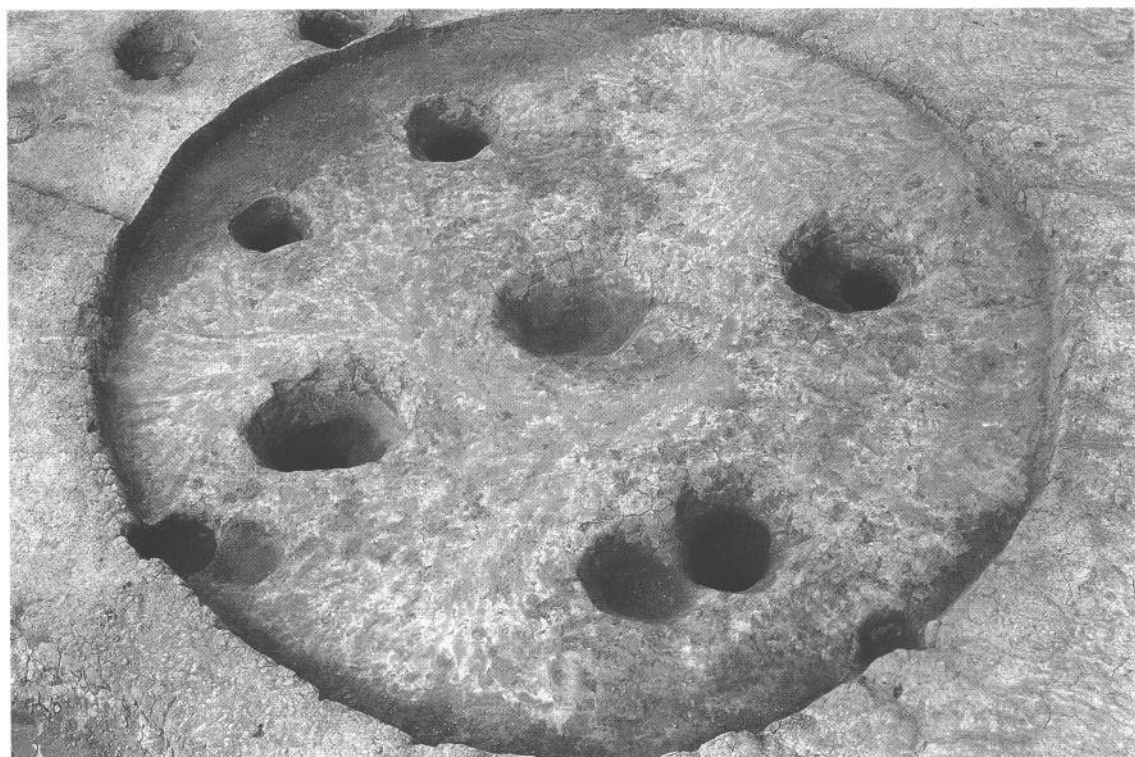
(2) 6号竖穴住居跡出土遺物



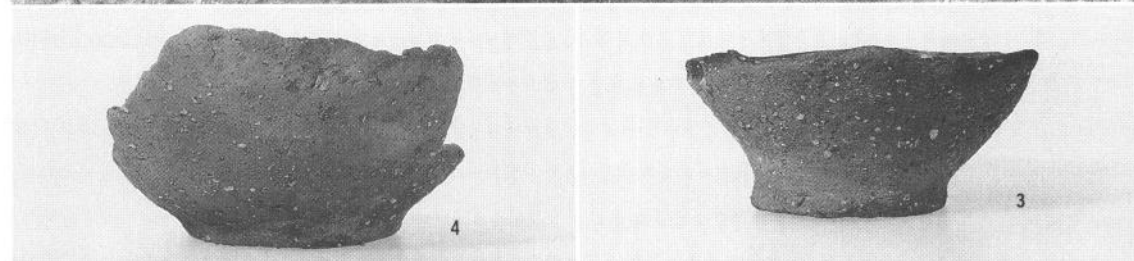
(1) 8号竪穴住居跡（南西から）



(2) 8号竪穴住居跡（北から）および出土遺物



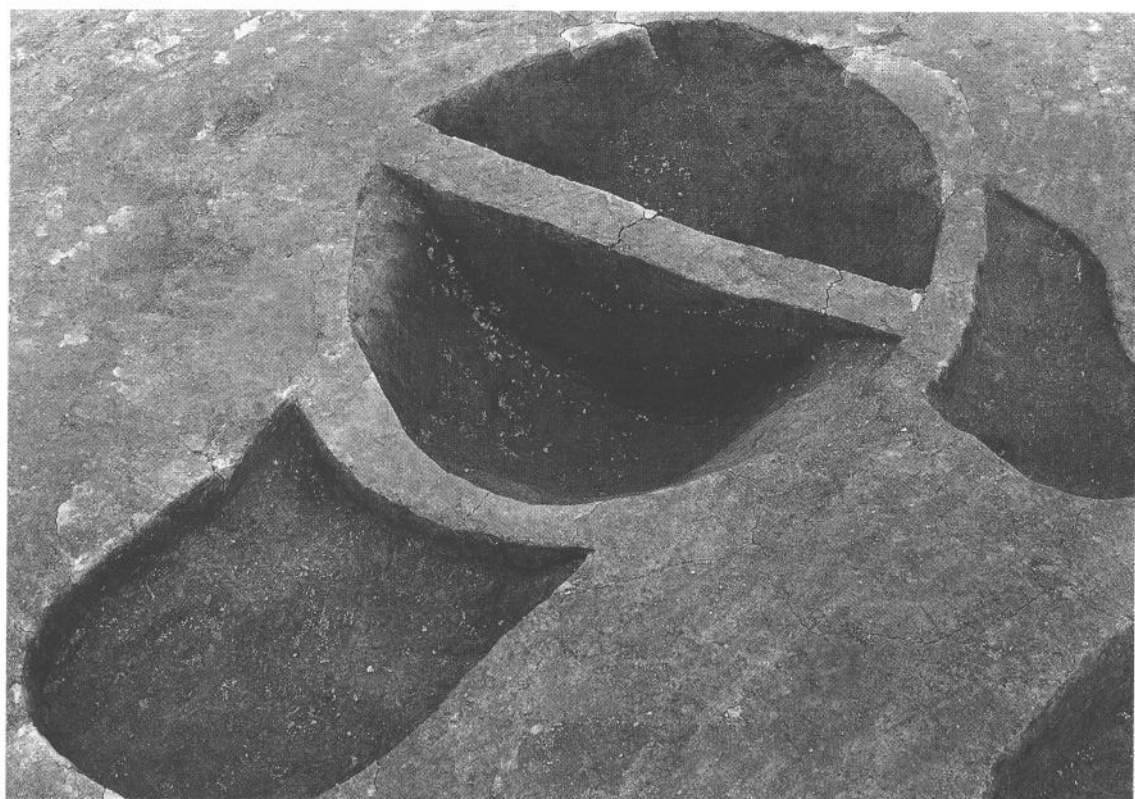
(1) 21号竪穴住居跡 (南から)



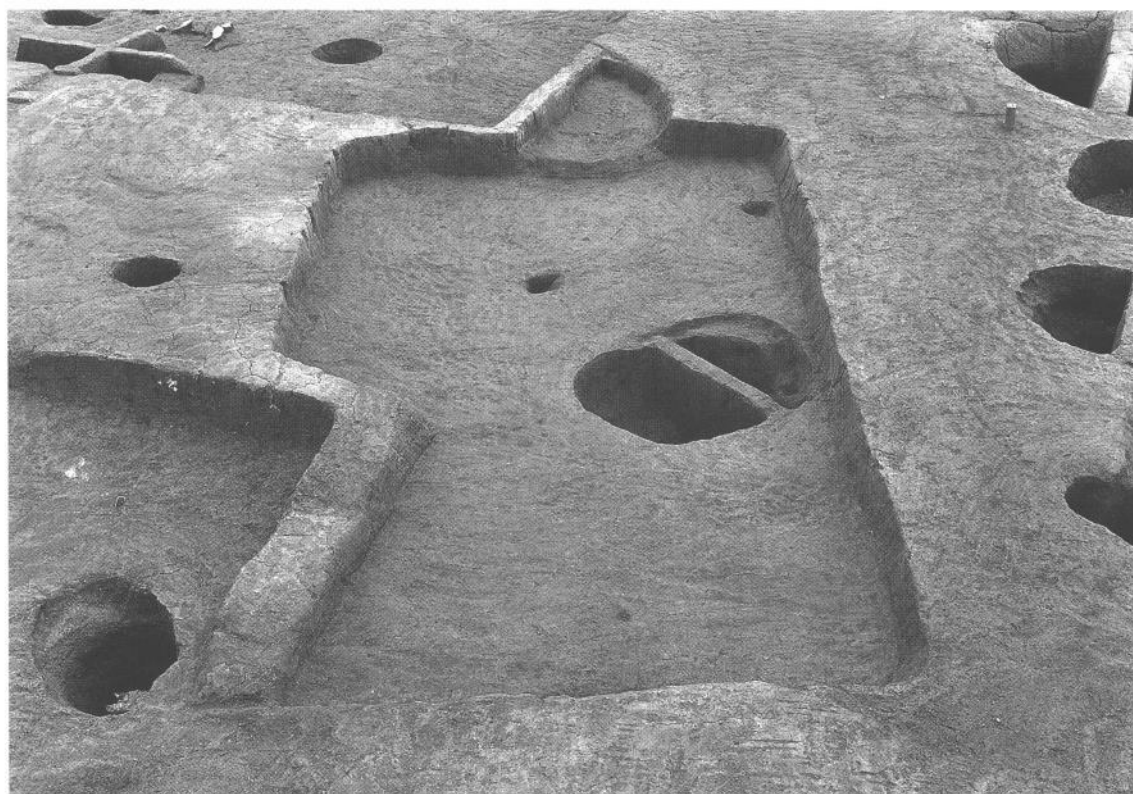
(2) 21号竪穴住居炉跡 (南東から) と出土土器



(1) 30号竪穴住居跡 (北から)



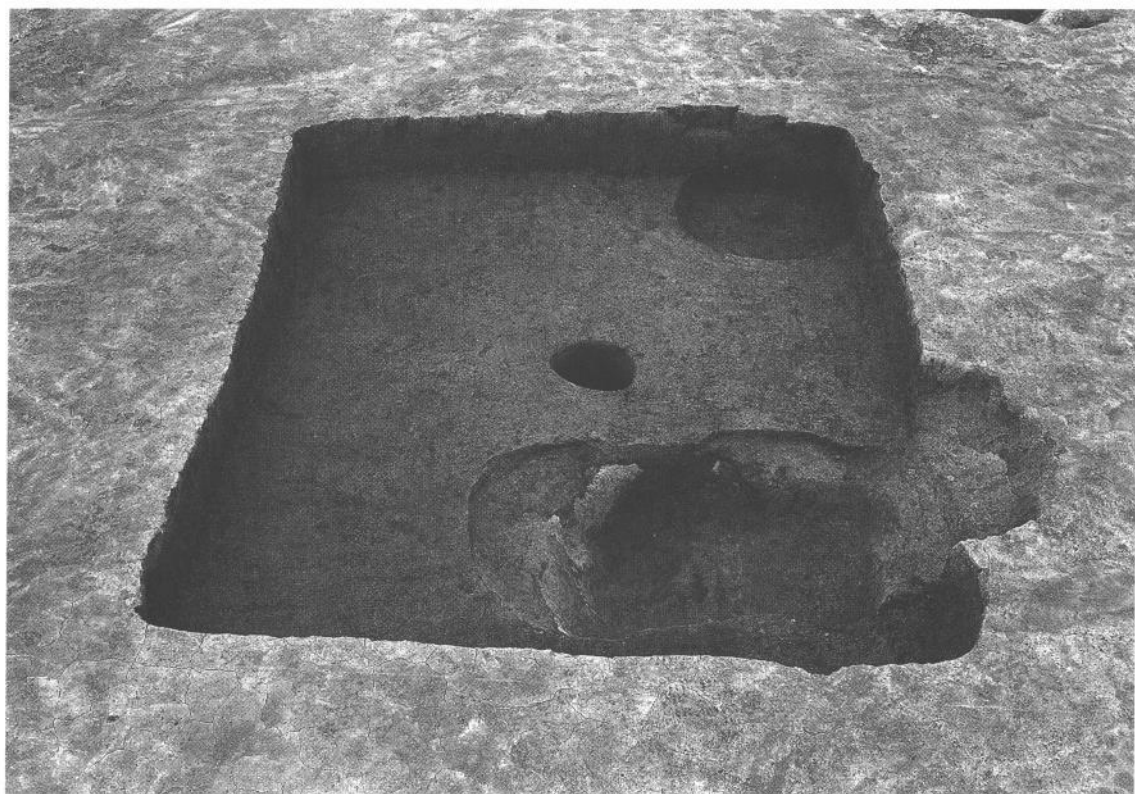
(2) 30号竪穴住居炉跡 (南西から)



(1) 32号竪穴住居跡（北西から）



(2) 32号竪穴住居炉跡（北東から）



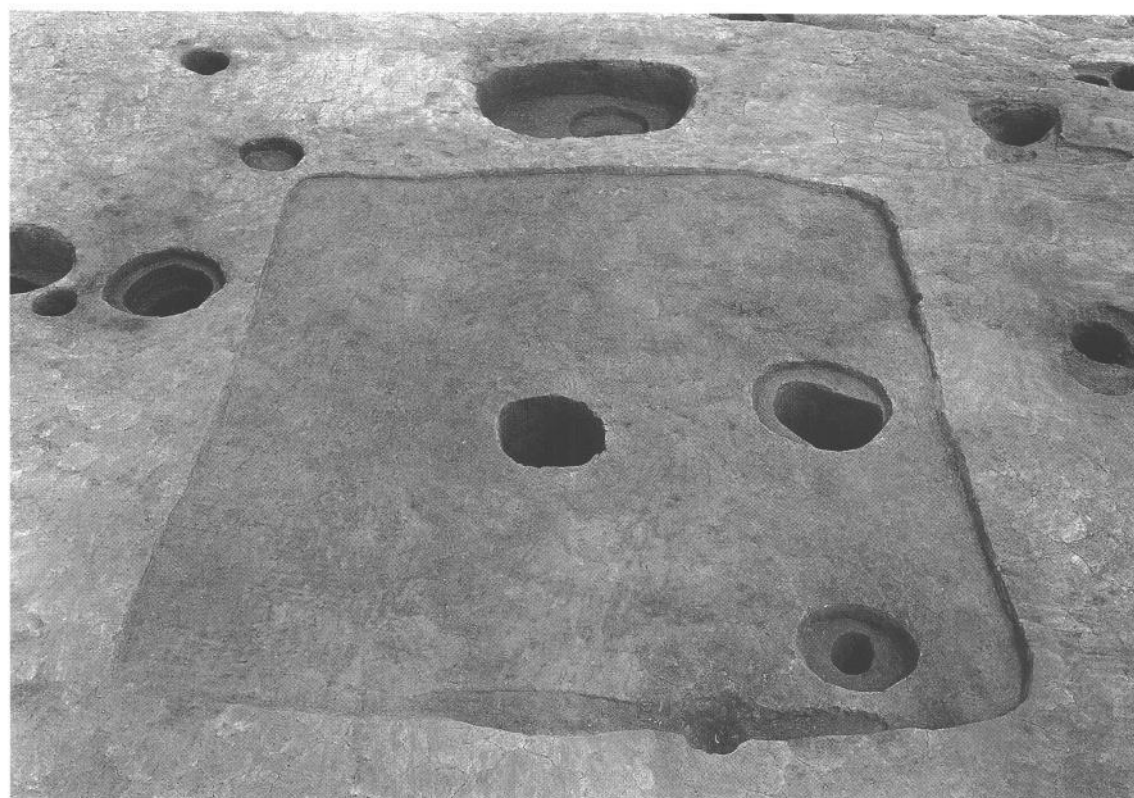
(1) 33号竪穴住居跡 (西から)



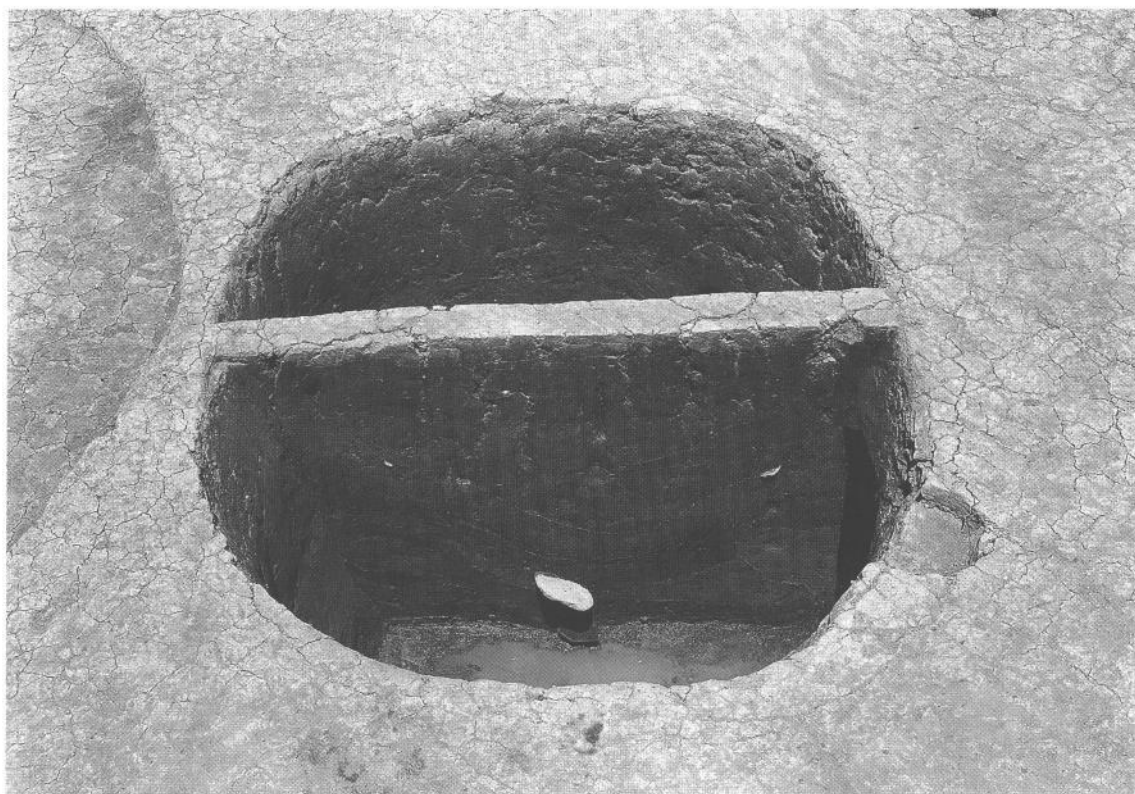
(2) 35号竪穴住居跡 (南から)



(1) 41号竖穴住居跡 (南西から)



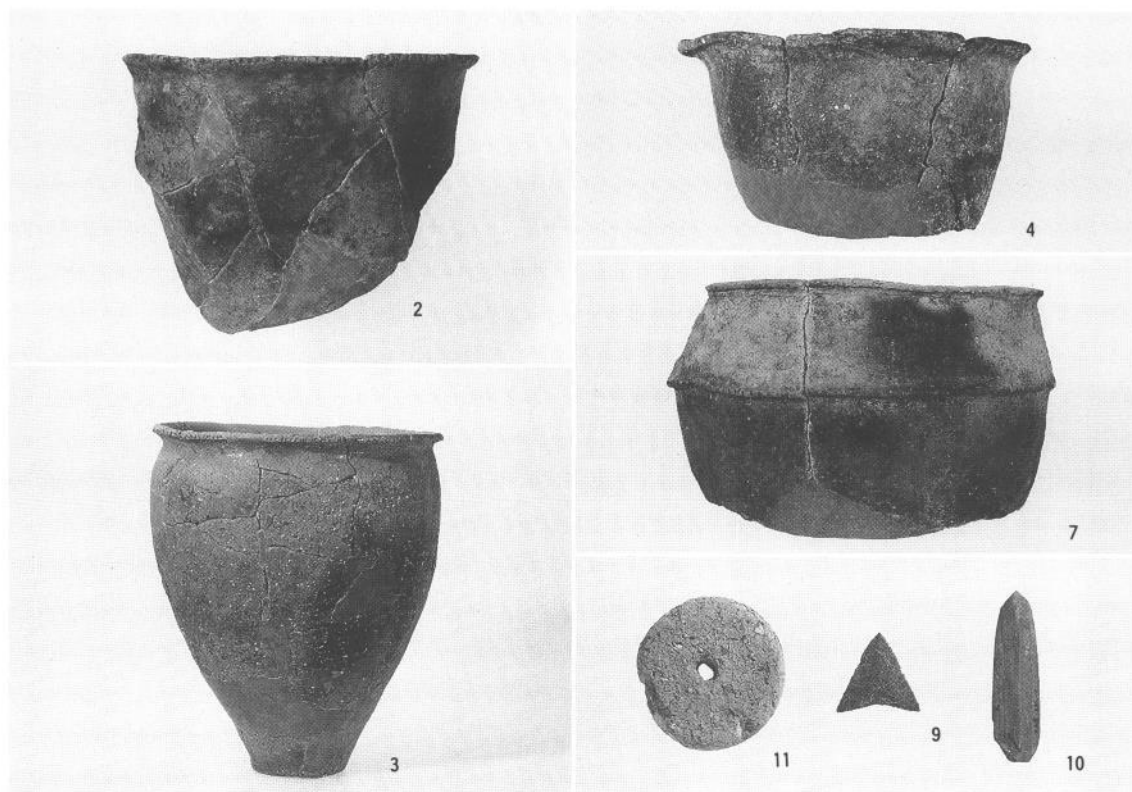
(2) 42・43号竖穴住居跡 (南西から)



(1) 2号土壇土層断面 (南から)



(2) 2号土壇 (西から)



(1) 2号土壙出土遺物



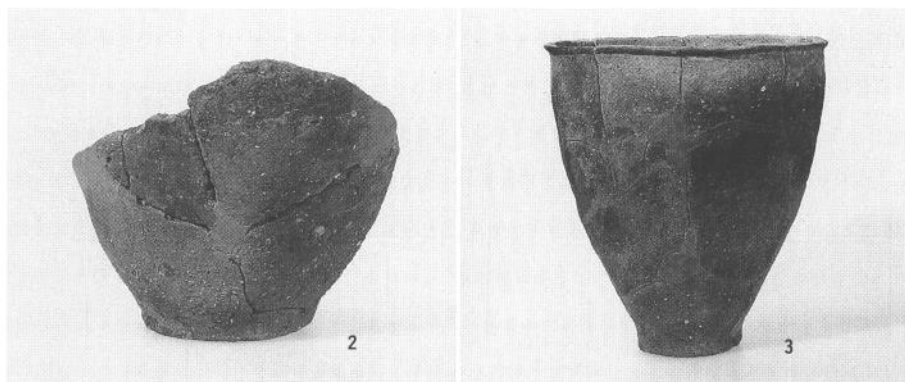
(2) 5・6号土壙 (南から)



(1) 7号土壙 (南から)



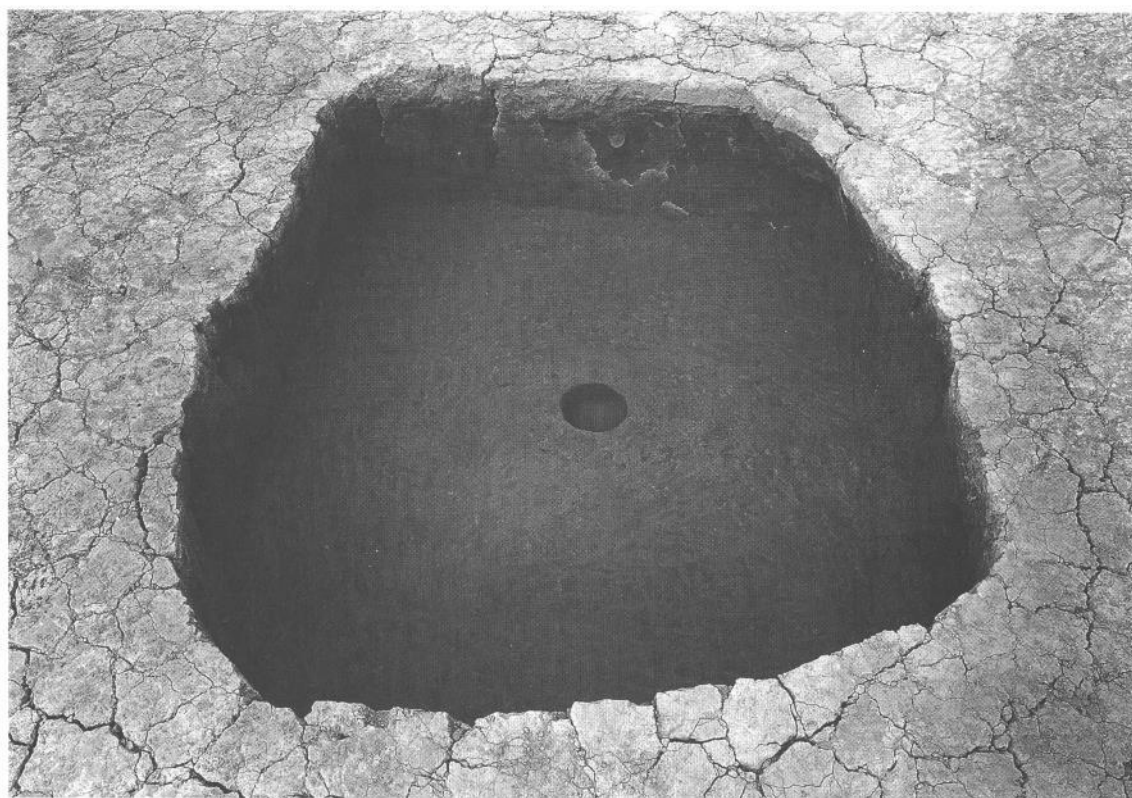
(2) 8号土壙 (西から)



(3) 8号土壙出土土器



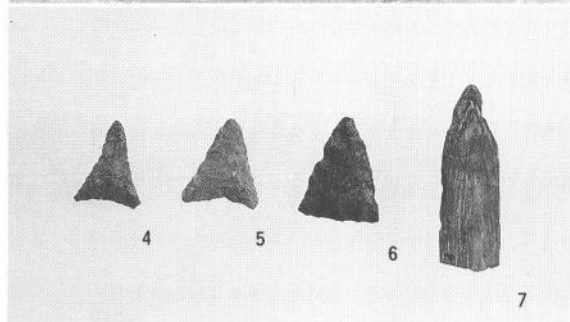
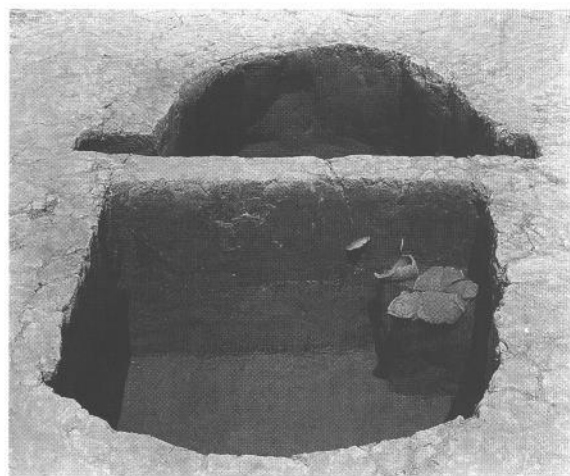
(1) 9号土坑土層断面（西から）



(2) 9号土坑（西から）



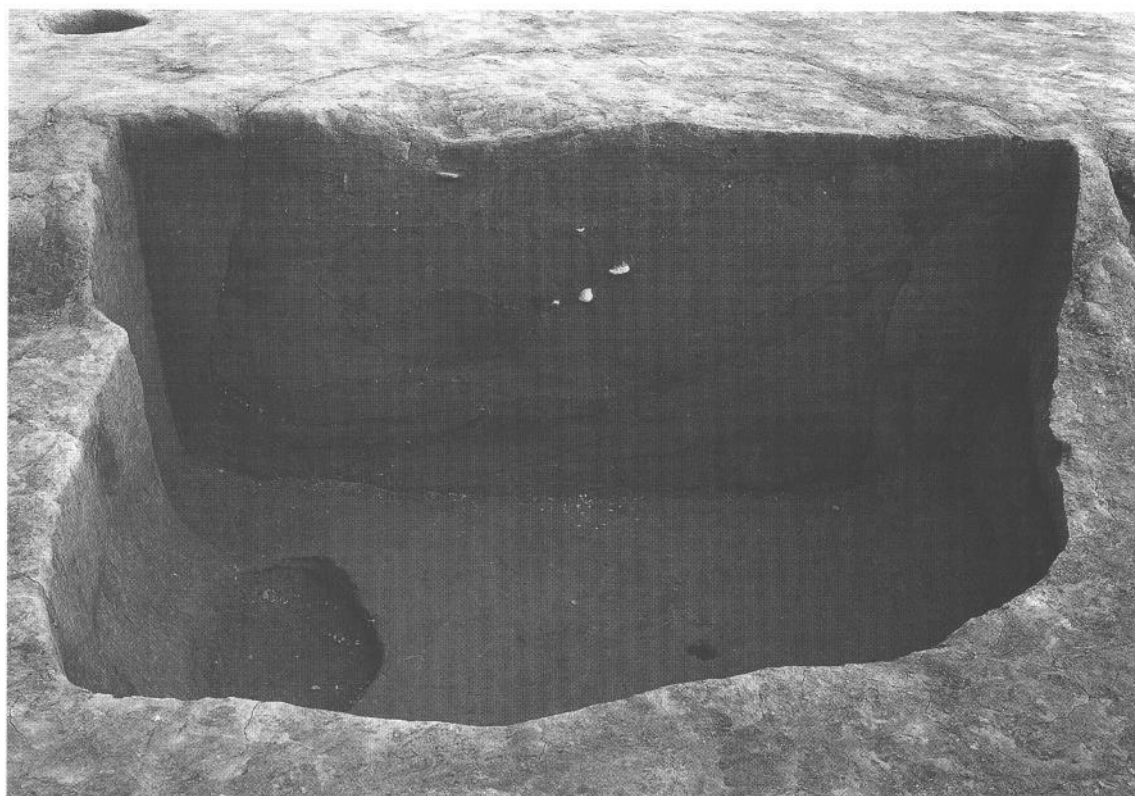
(1) 10号土坑 (南西から)



(2) 10号土坑土層断面 (南から) と出土遺物



(1) 11号土壙土層断面（東から）



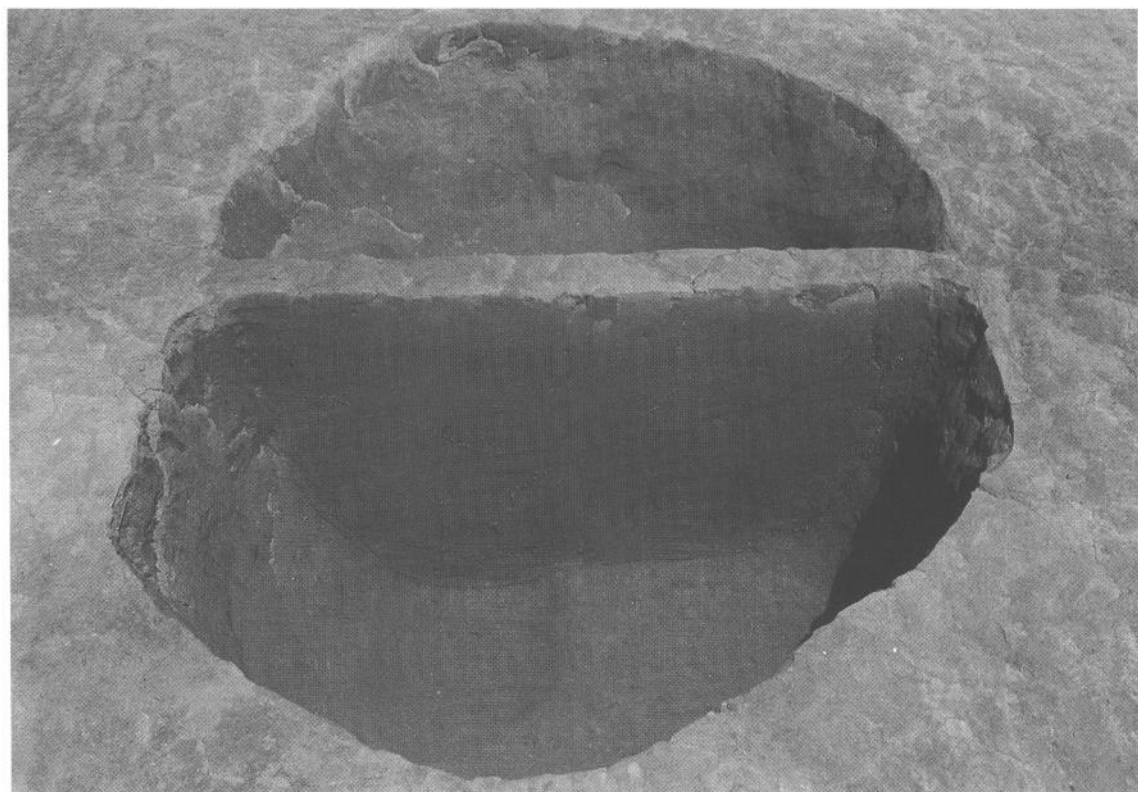
(2) 13号土壙土層断面（北から）



(1) 14号土壌土層断面 (北から)



(2) 15号土壌土層断面 (東から)



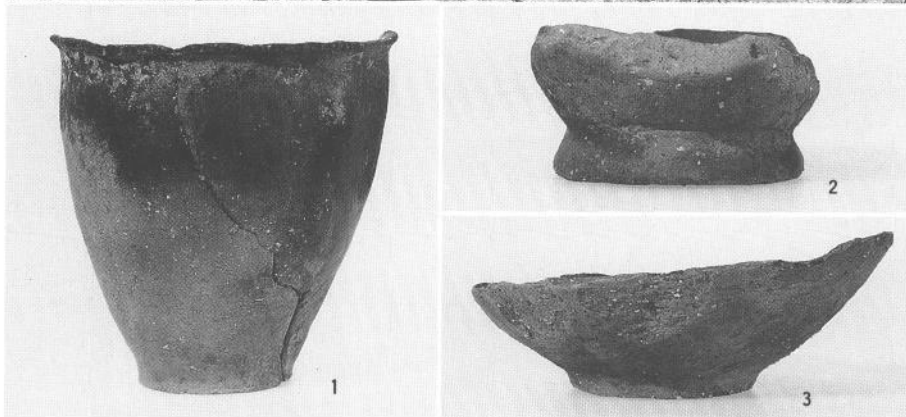
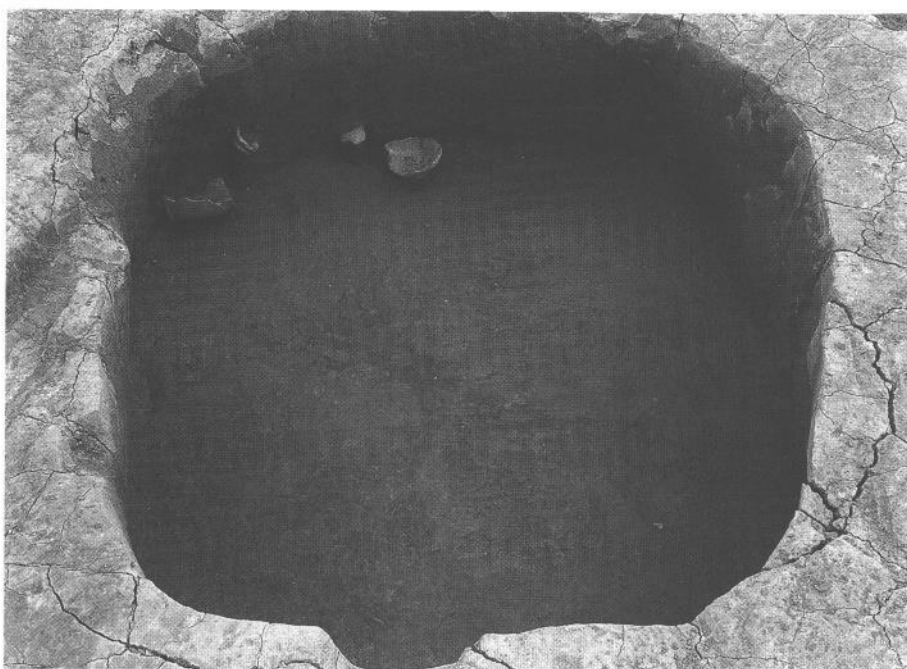
(1) 16号土壙土層断面 (南から)



(2) 16号土壙 (南から)



(1) 17号土壙 (北から)



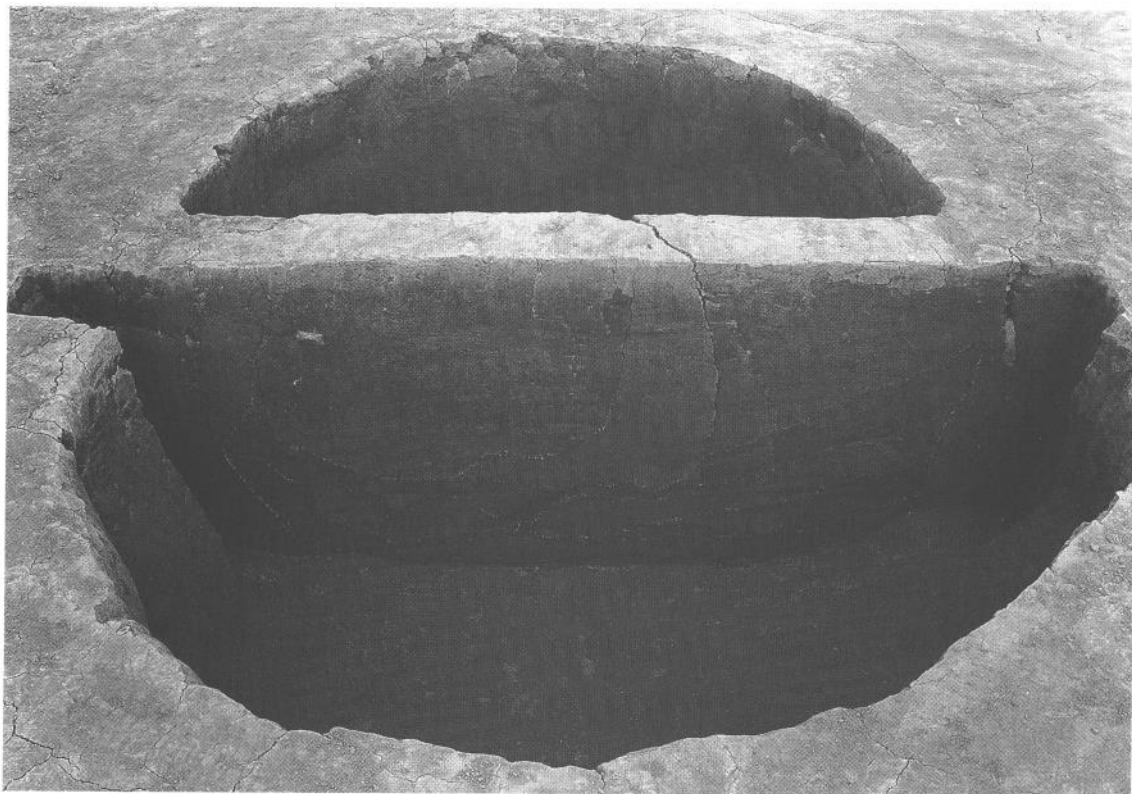
(1) 18号土壙 (北から) および出土土器



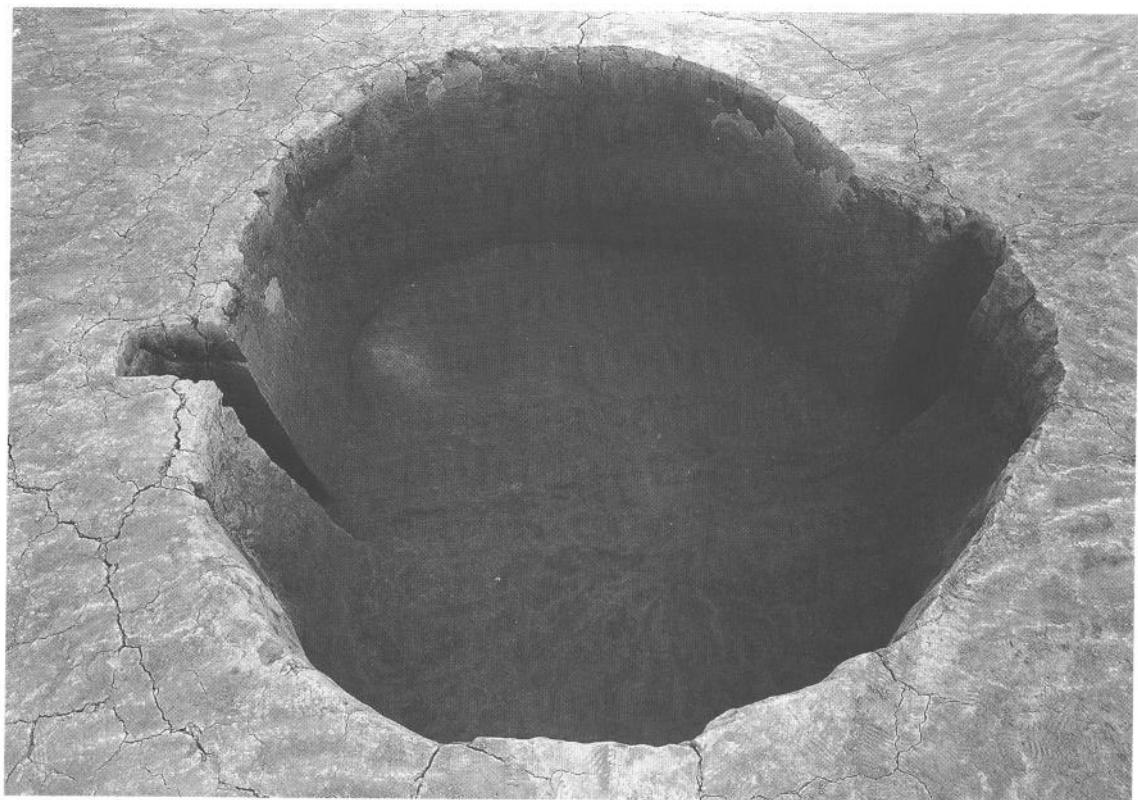
(1) 19号土壙土層断面 (南から)



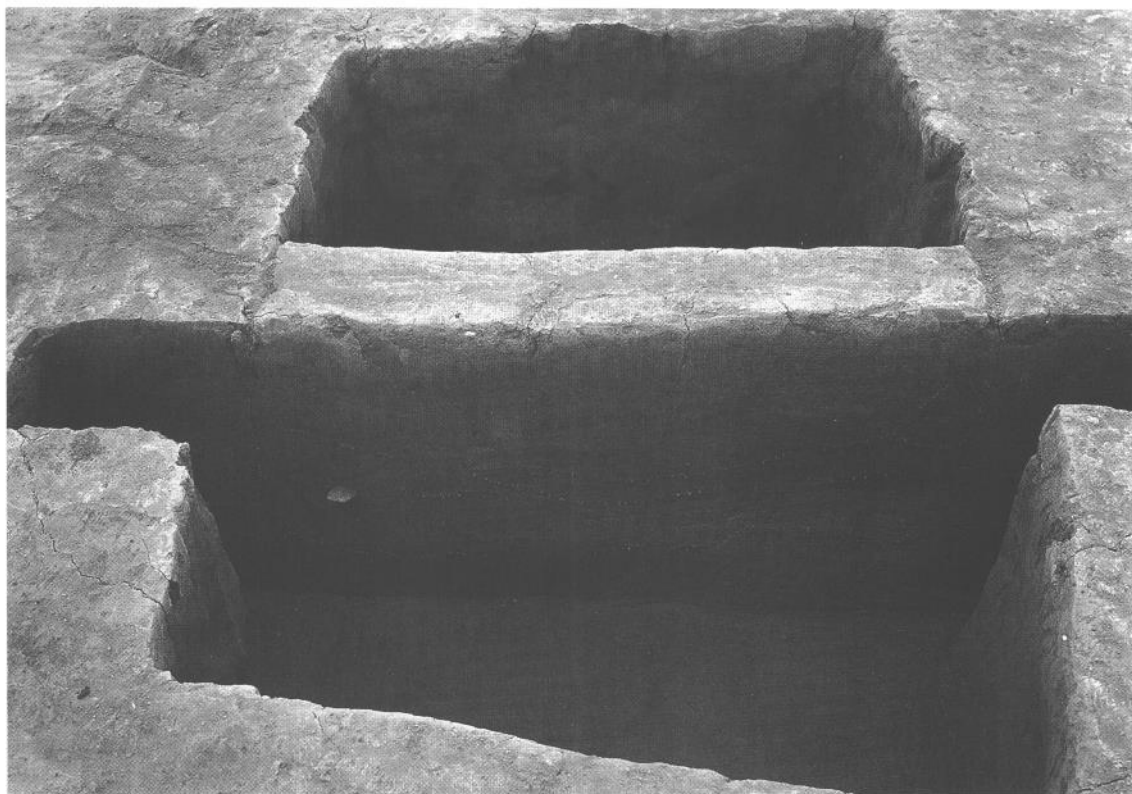
(2) 19号土壙 (西から)



(1) 20号土壙土層断面 (西から)



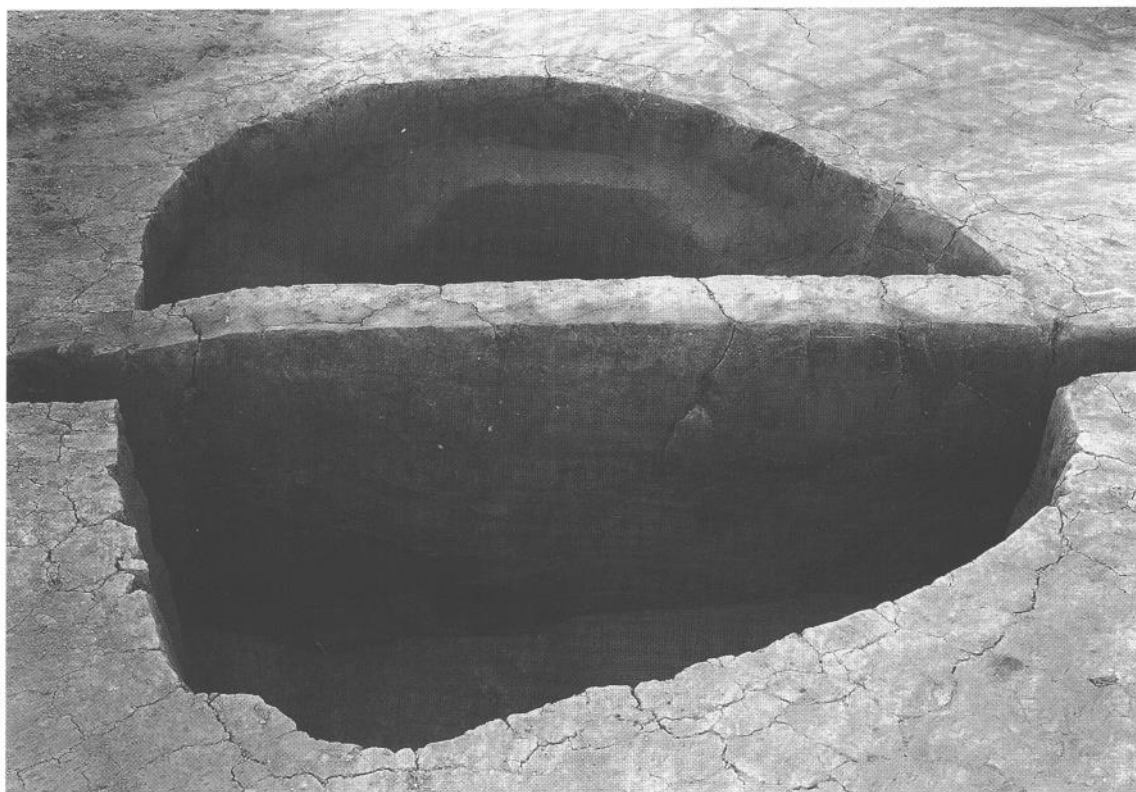
(2) 20号土壙 (西から)



(1) 21号土塙土層断面 (南から)



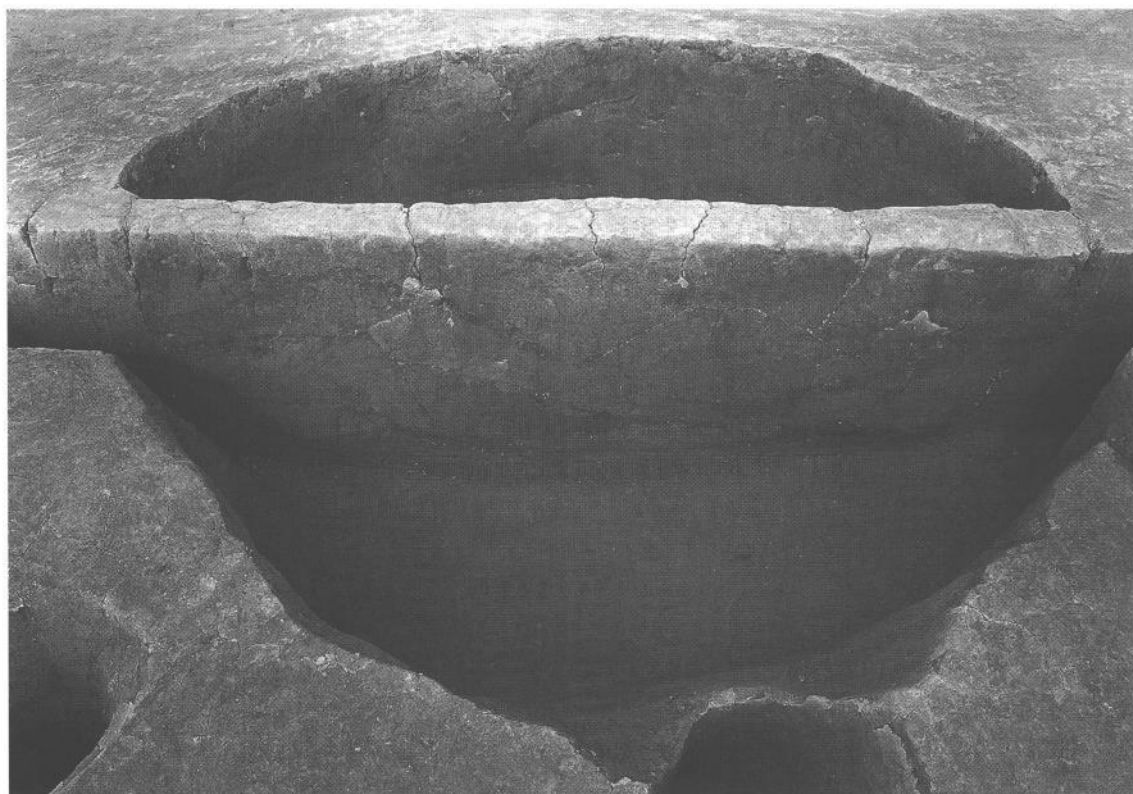
(2) 21号土塙 (南から)



(1) 22号土壙土層断面 (南から)



(2) 22号土壙 (南から)



(1) 23号土壙土層断面 (南東から)



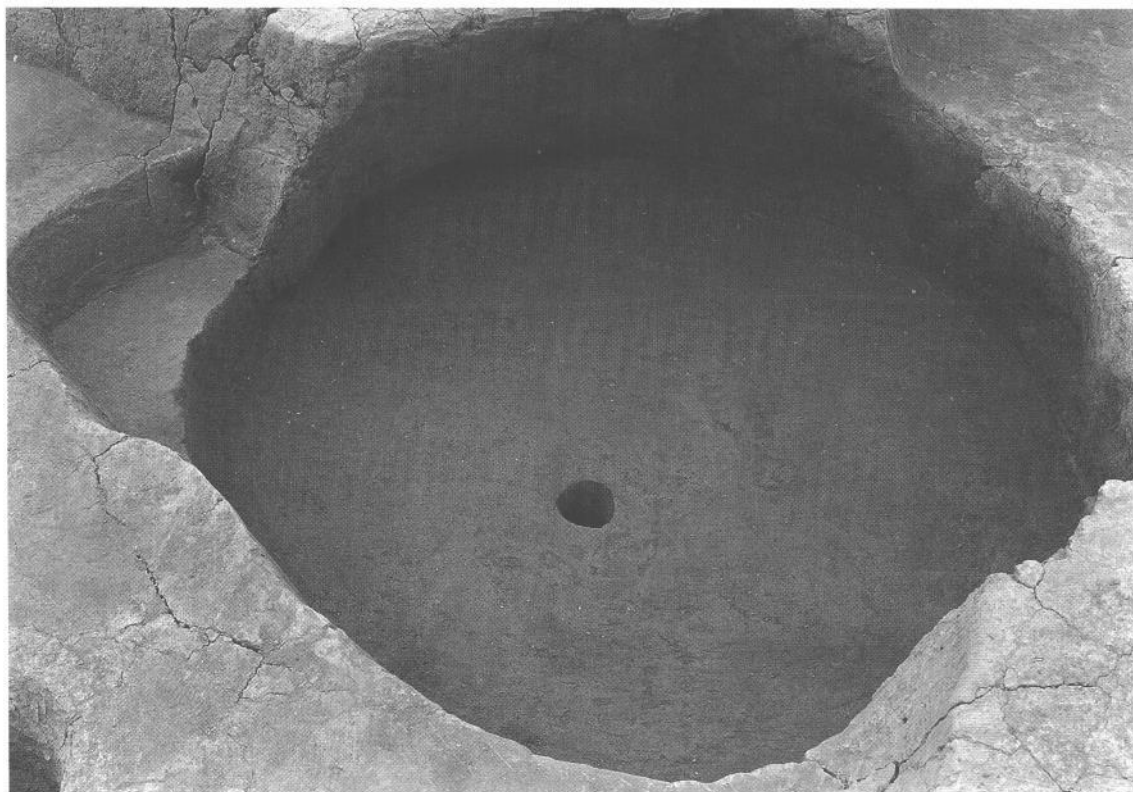
(2) 23号土壙 (南東から)



(1) 24号土層土層断面 (南から)



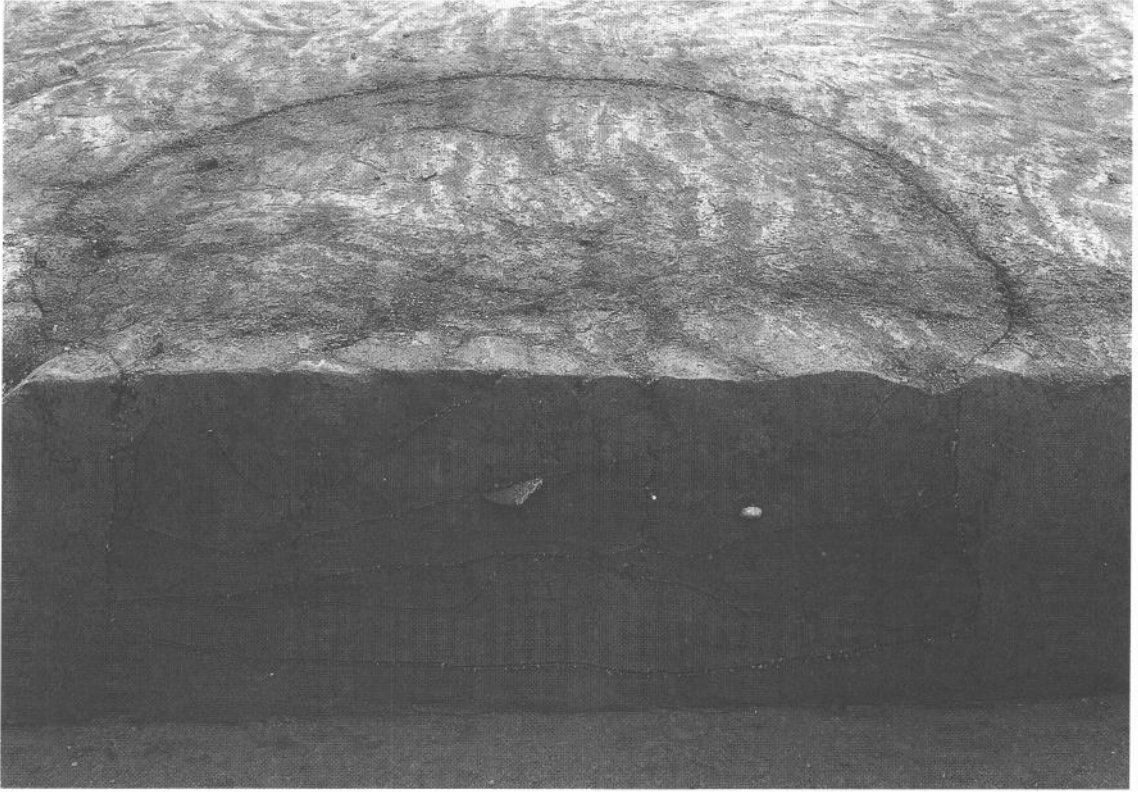
(2) 24号土層 (南から)



(1) 28号土坑 (南東から)



(2) 29号土坑 (南西から)



(1) 30号土壌土層断面（北から）



(2) 30号土壌（北から）



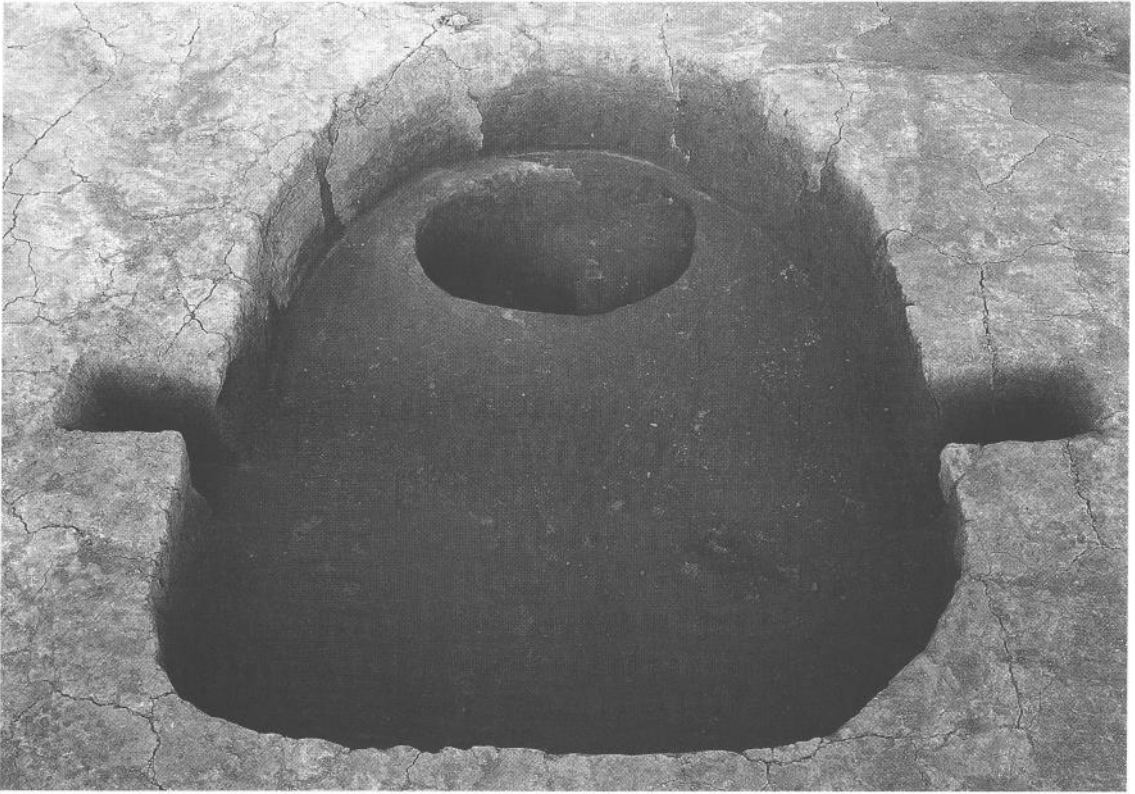
(1) 31・32号土坑（南から）



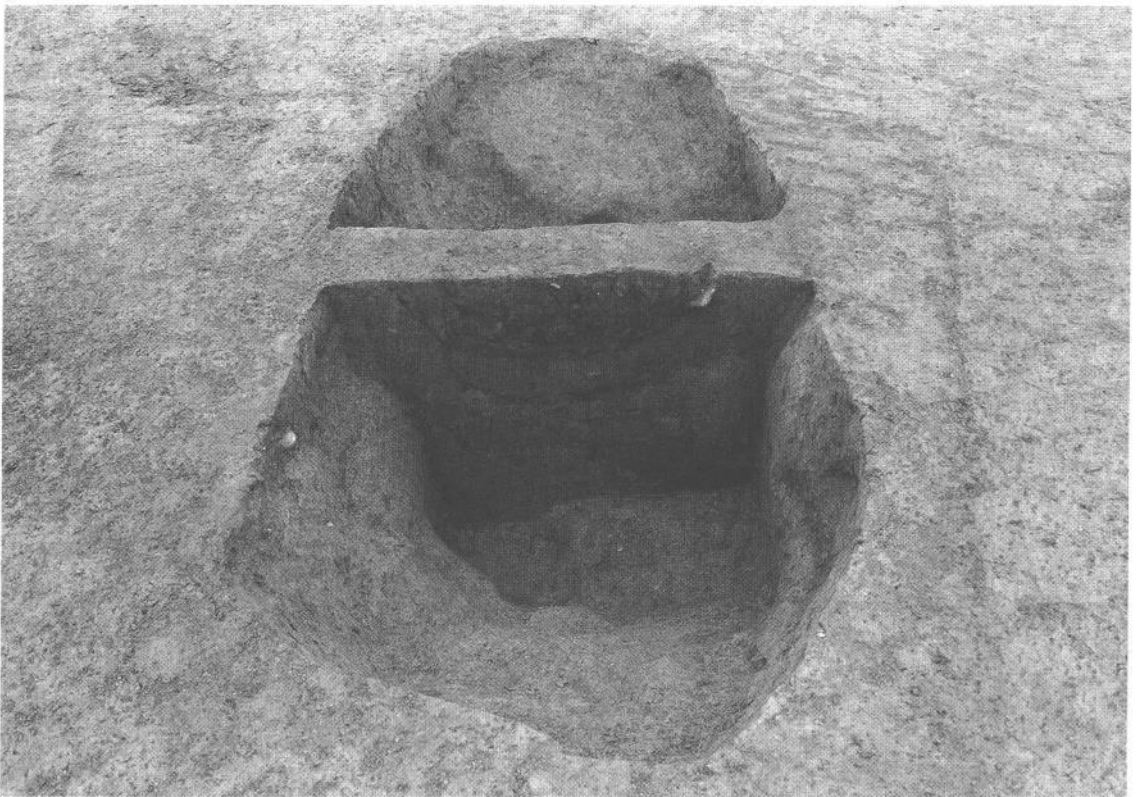
(2) 31号土坑土層断面（南から）



(3) 32号土坑土層断面（南から）



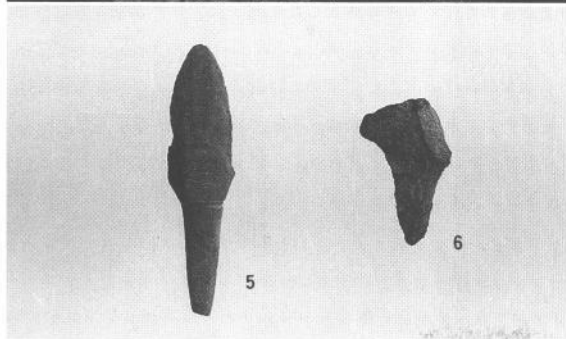
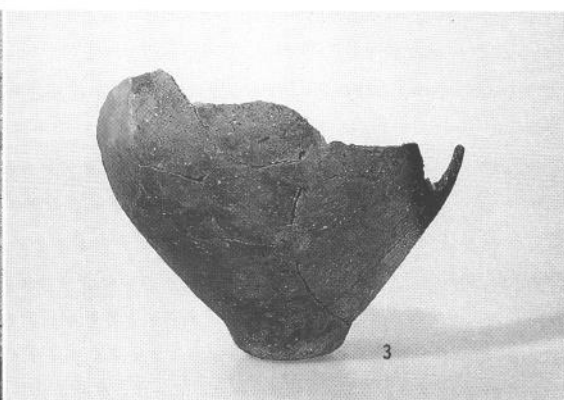
(1) 33号土壙 (西から)



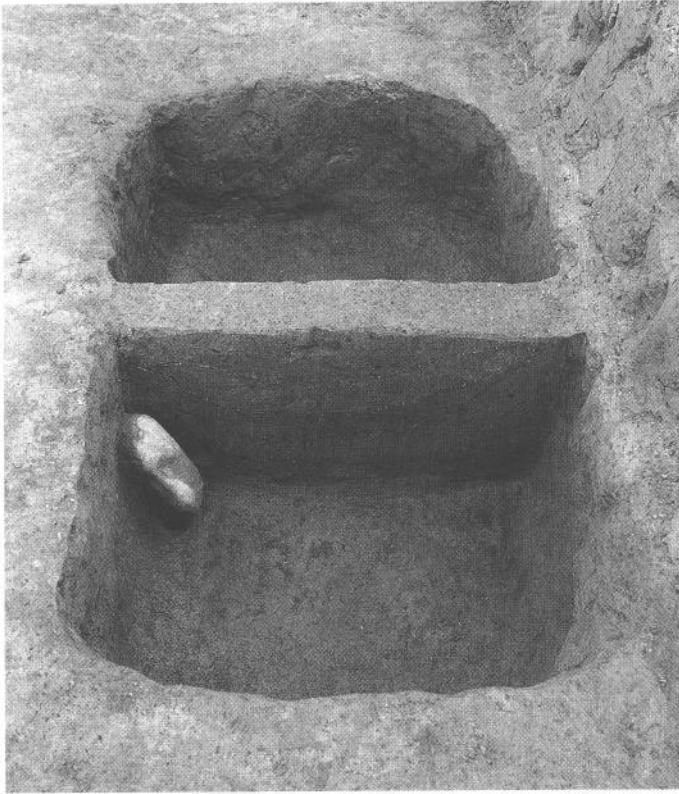
(2) 35号土壙土層断面 (北から)



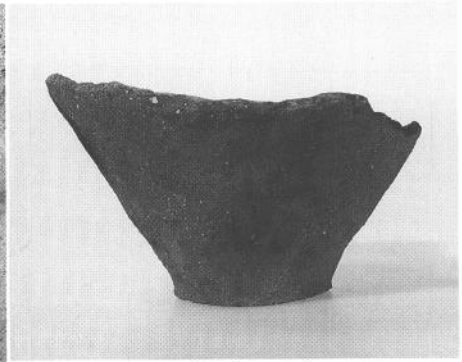
(1) 34号土壙 (北から)



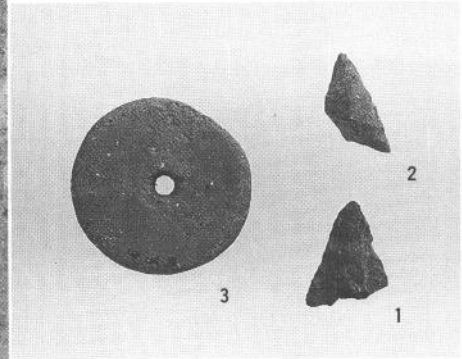
(2) 34号土壙遺物出土状態および出土遺物



(1) 36号土壙 (西から)



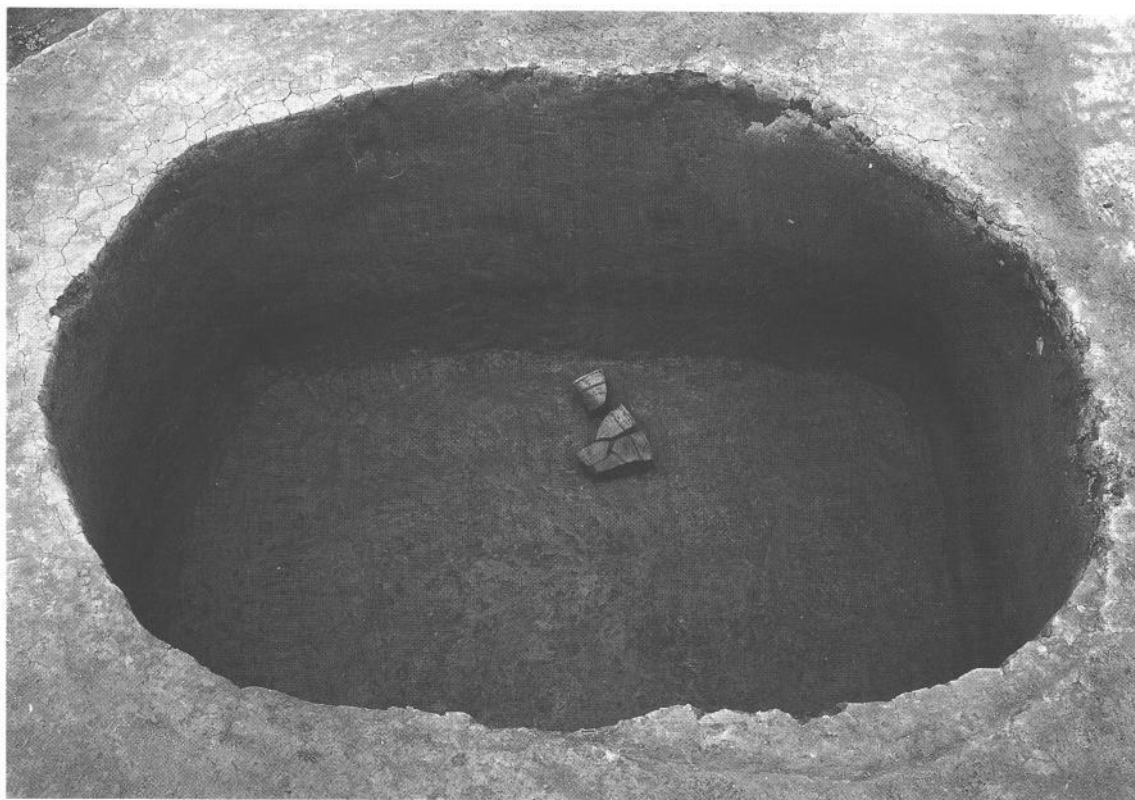
(2) 36号土壙出土遺物



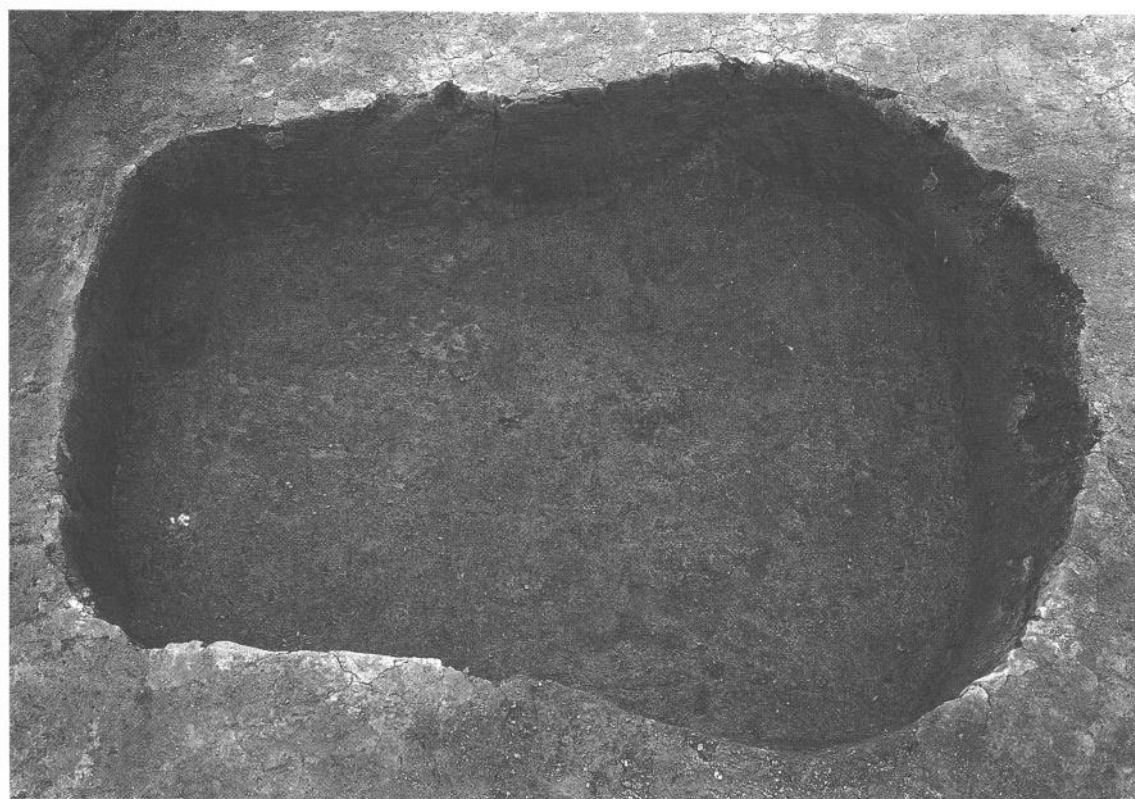
(3) 38号土壙出土遺物



(4) 38号土壙 (南東から)



(1) 39号土坑（北東から）



(2) 40号土坑（東から）



(1) 40・41号土壙出土遺物



(2) 41号土壙 (南から)



(1) 43号土坑 (東から)



(2) 44号土坑 (北東から)



(1) 47・49号土壙土層断面（北から）



(3) 49号土壙出土遺物



(2) 49号土壙（東西から）



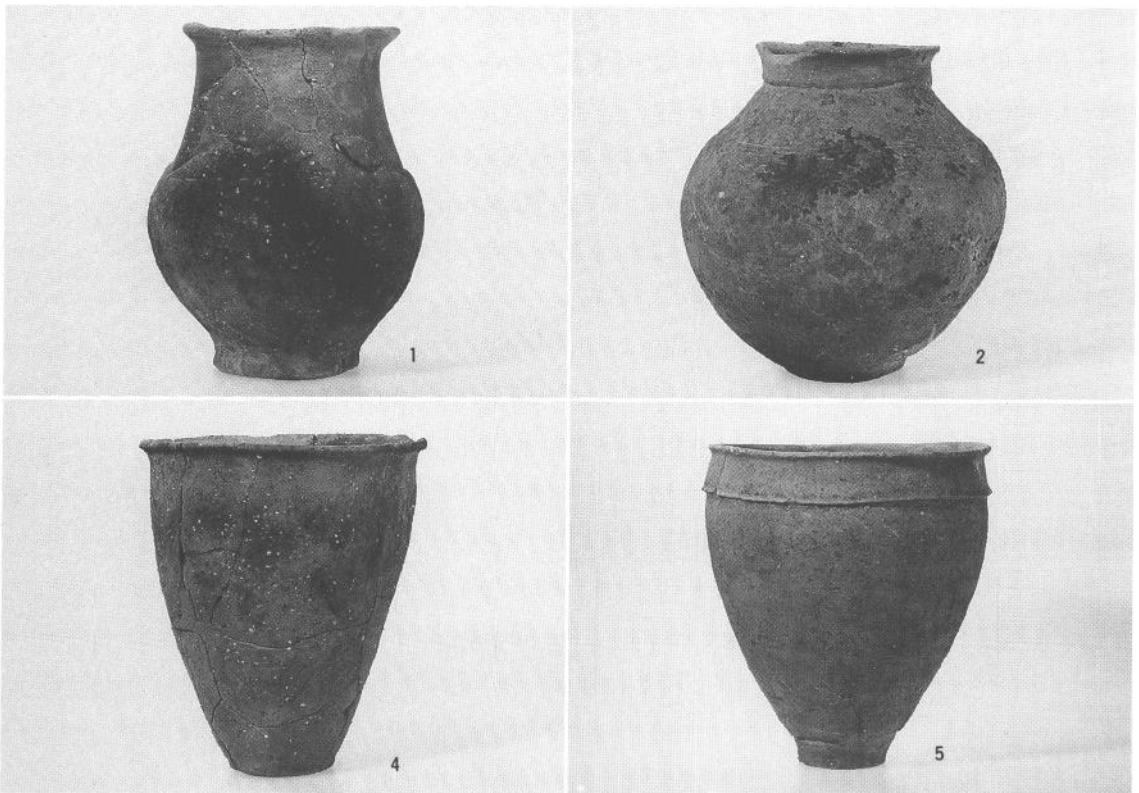
(1) 47号土壇 (北西から)



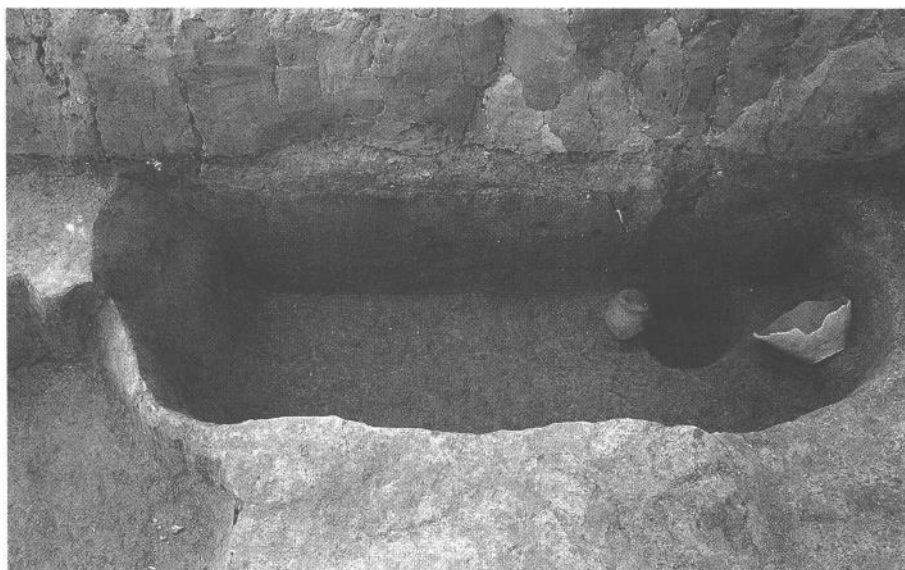
(2) 48号土壇 (南西から)



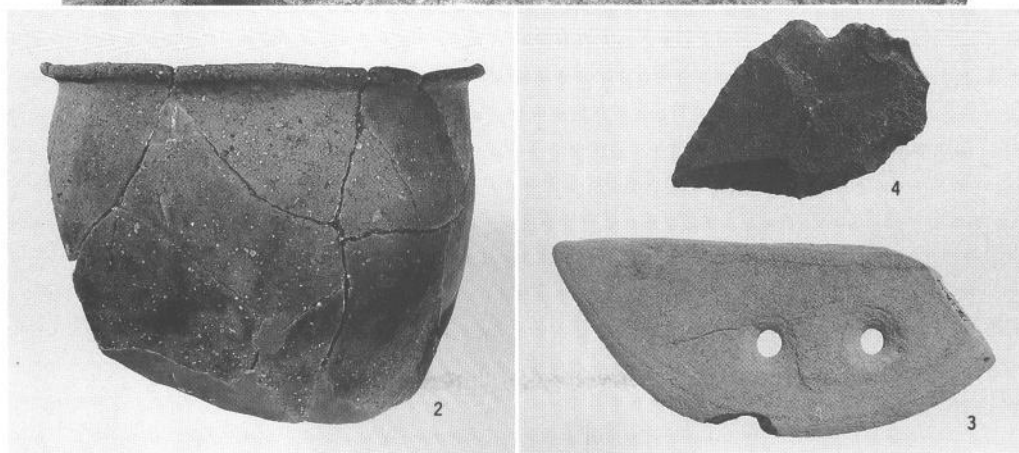
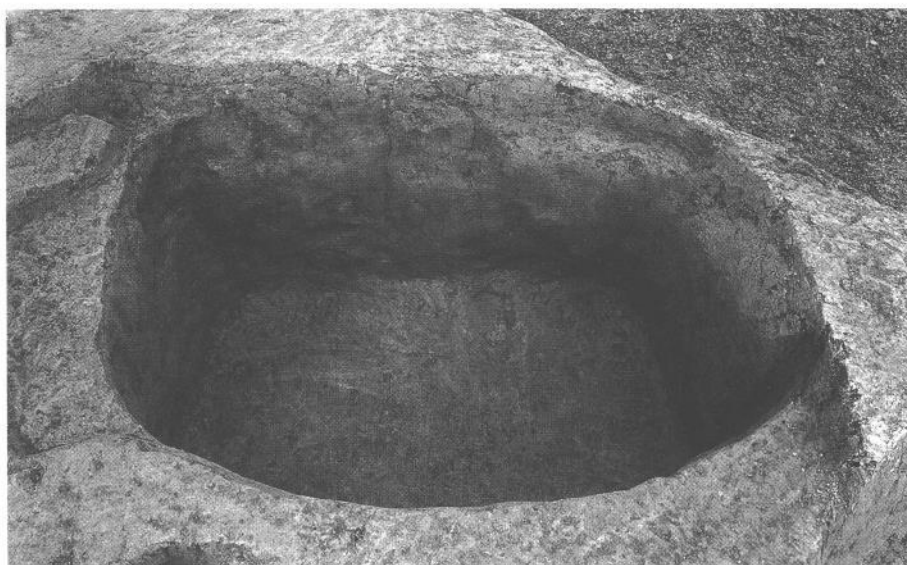
(1) 50号土壙（北西から）



(2) 50号土壙出土遺物



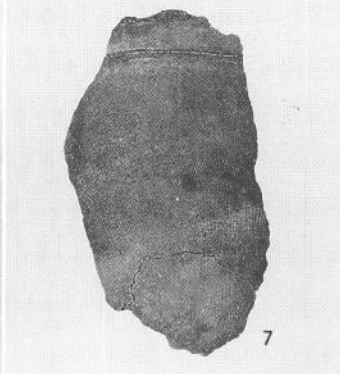
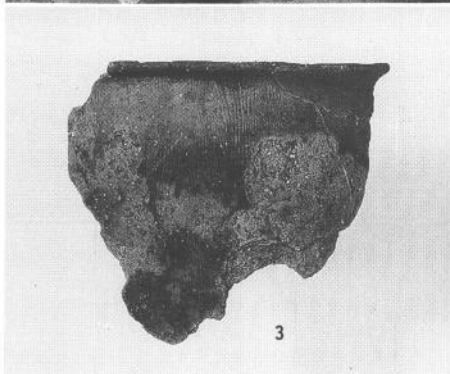
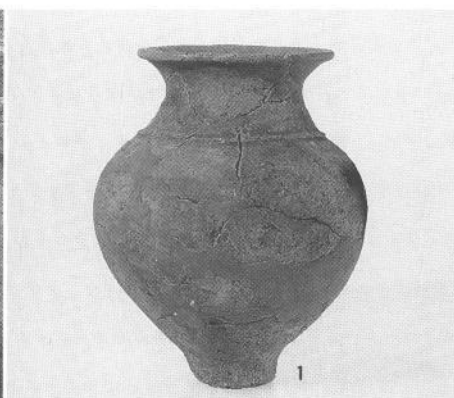
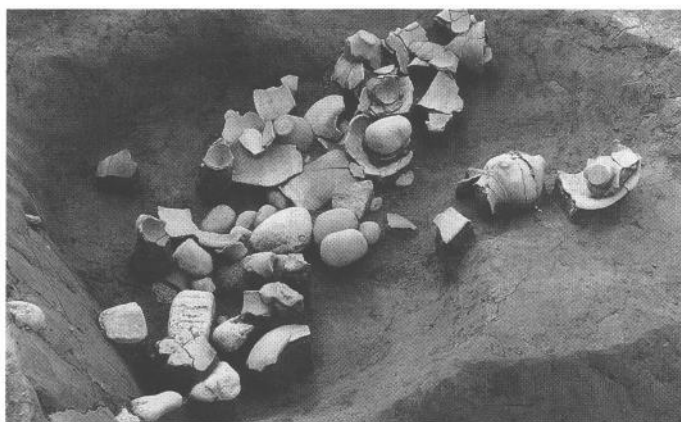
(1) 51号土壙（北から）



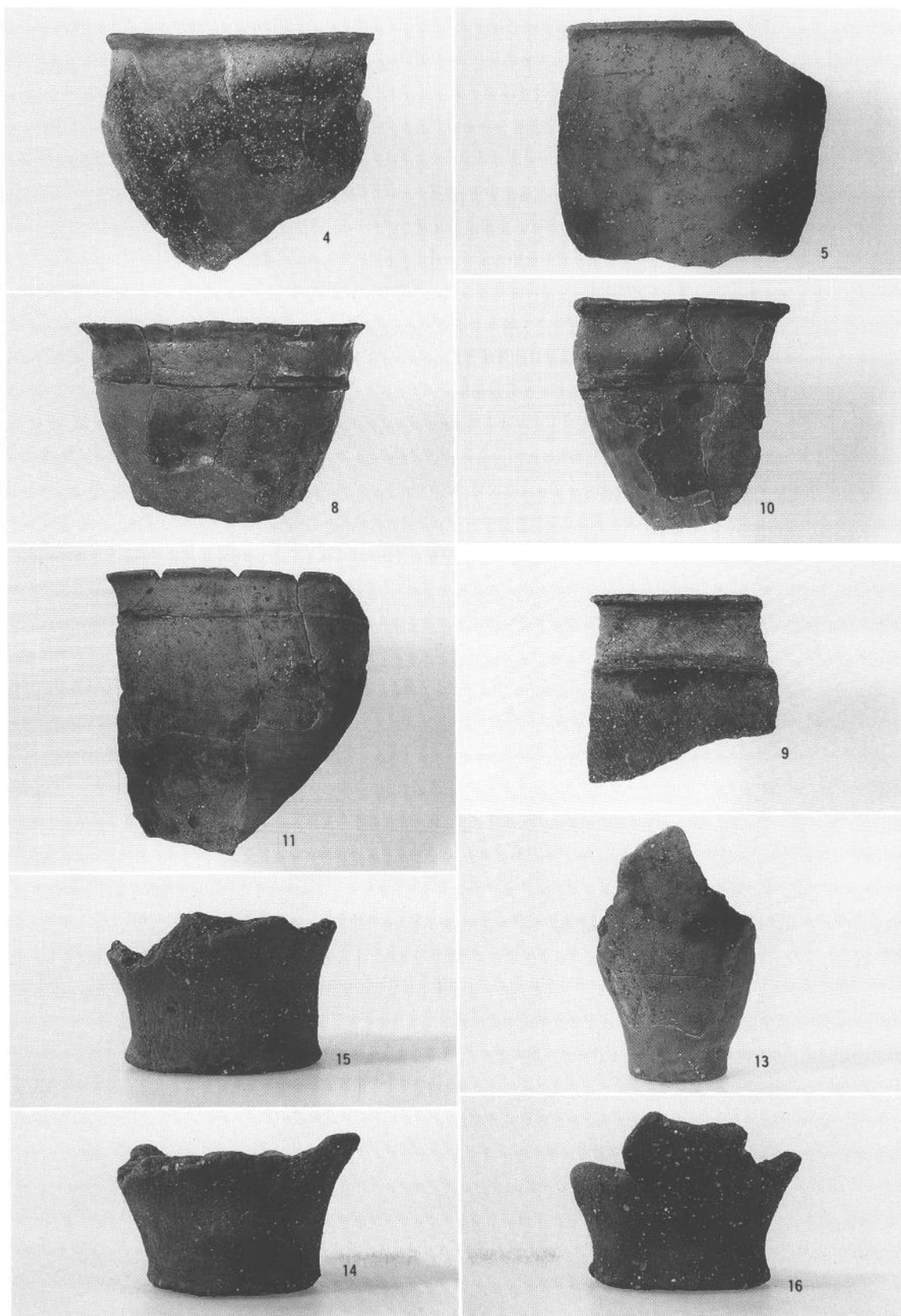
(2) 53号土壙（西から） および出土遺物



(1) 52号土壙（南東から）



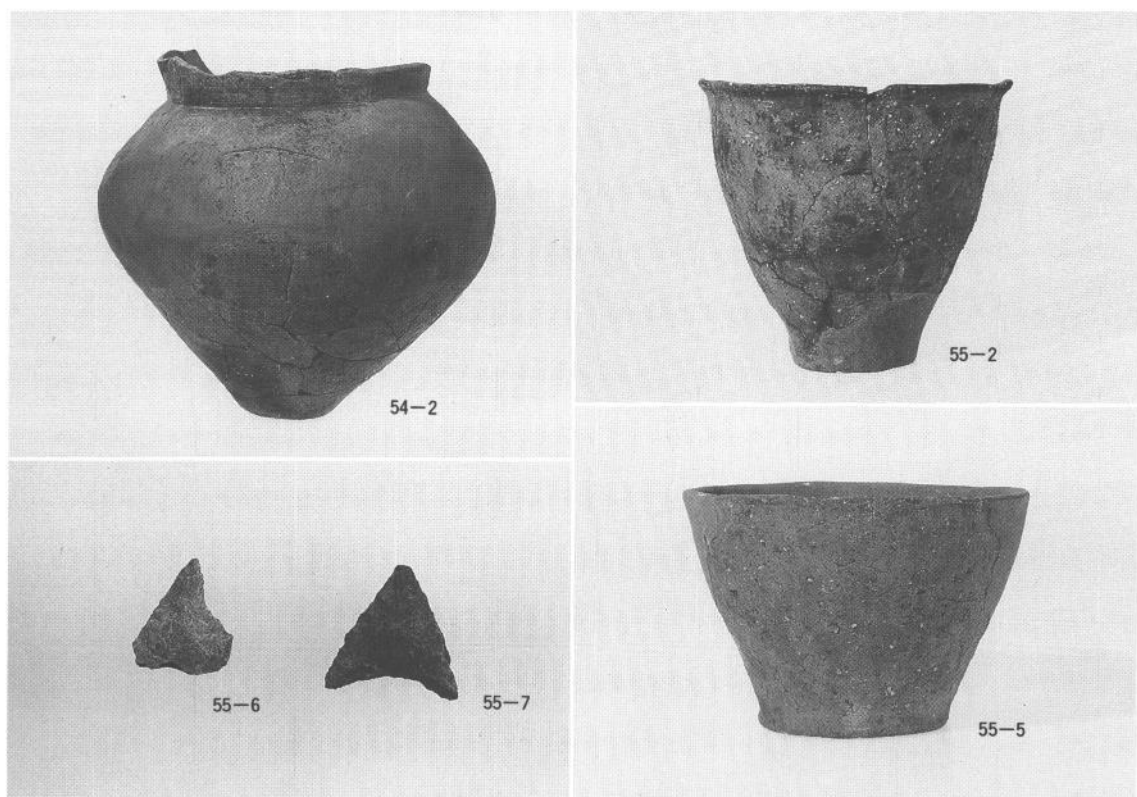
(2) 52号土壙（北から）および出土遺物



52号土坑出土遺物



(1) 54号土壙（西から）



(2) 54・55号土壙出土遺物



(1) 55号土壙 (北から)



(2) 56号土壙 (北西から)



(1) 56号土壙遺物出土状態 (北から)



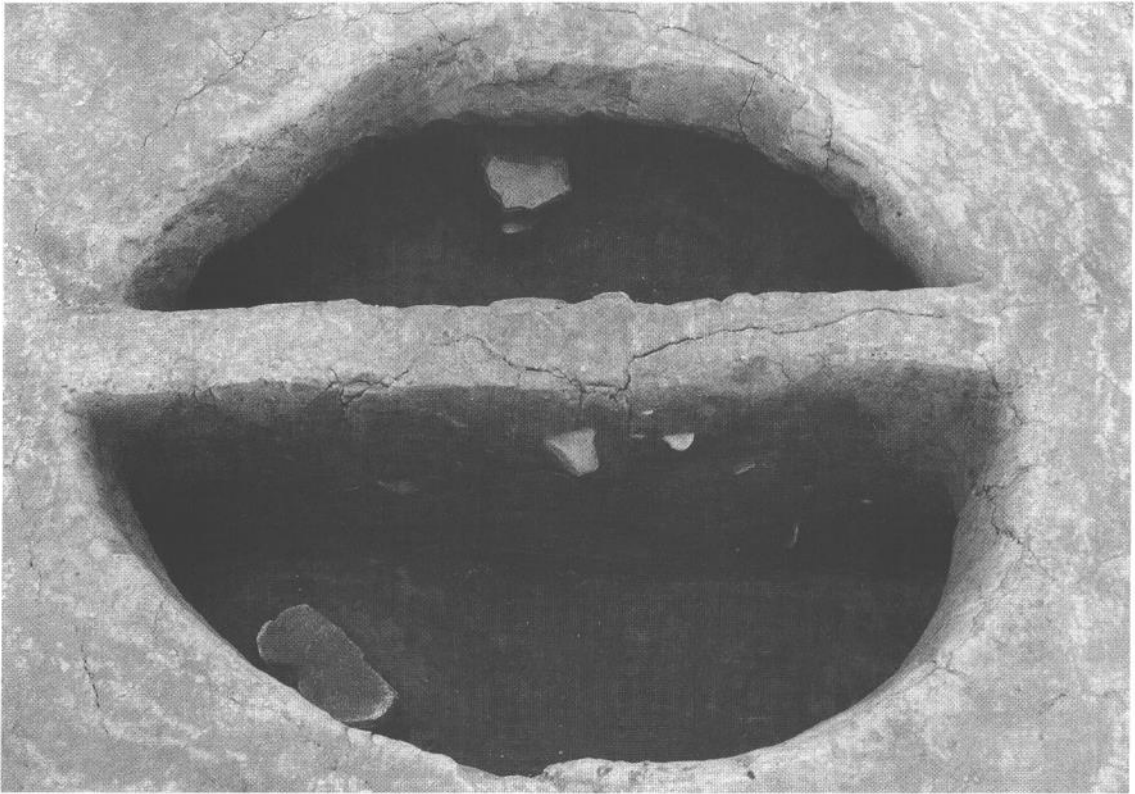
(2) 56号土壙出土遺物



(1) 58号土壌土層断面 (南から)



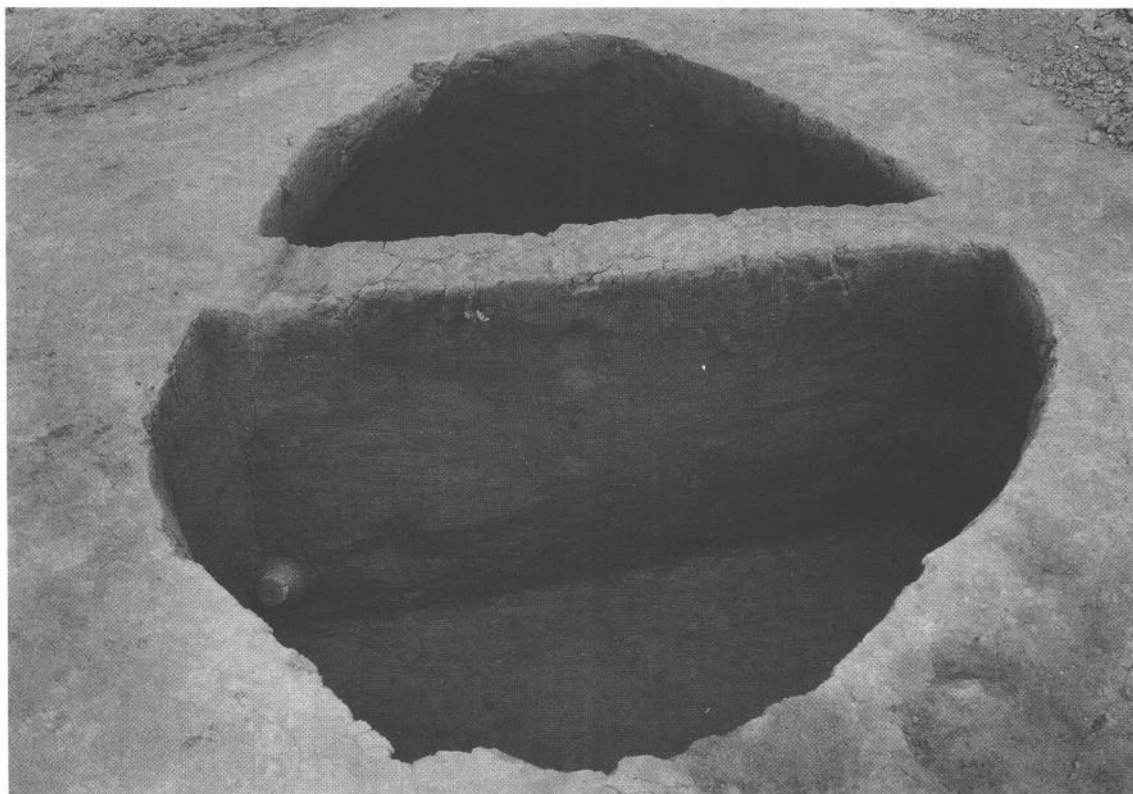
(2) 58号土壌 (南から)



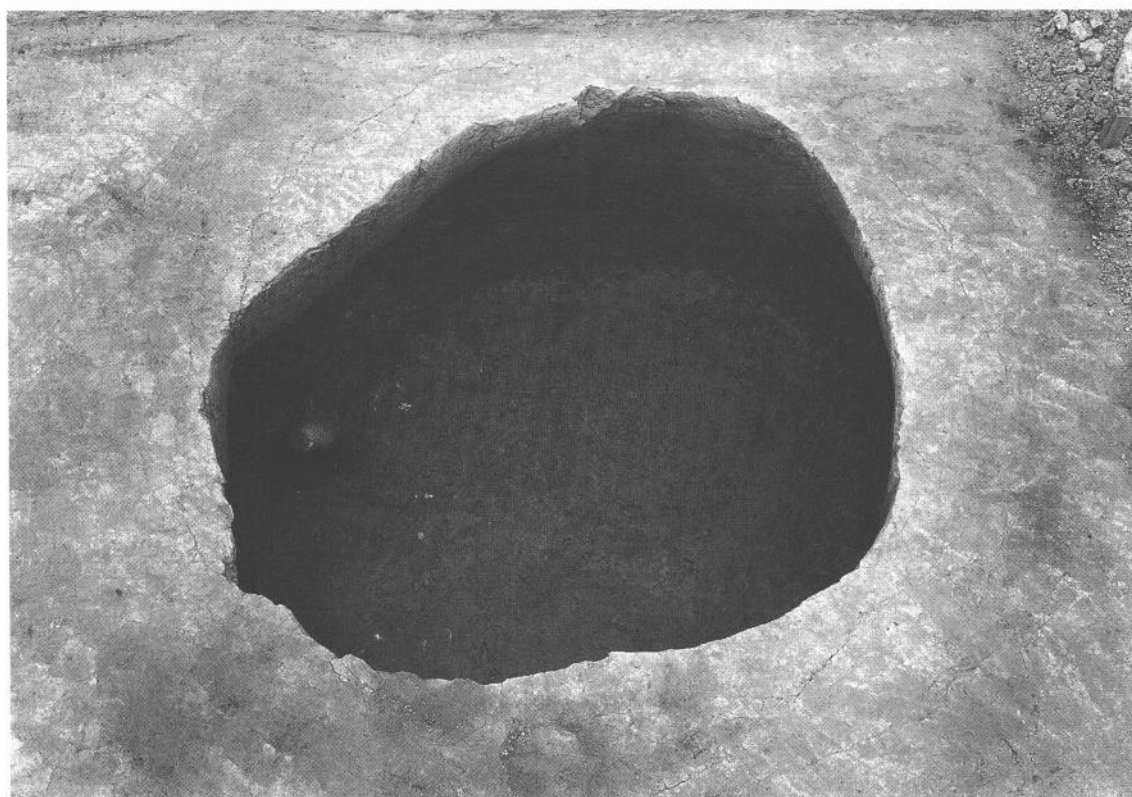
(1) 59号土壙土層断面 (南から)



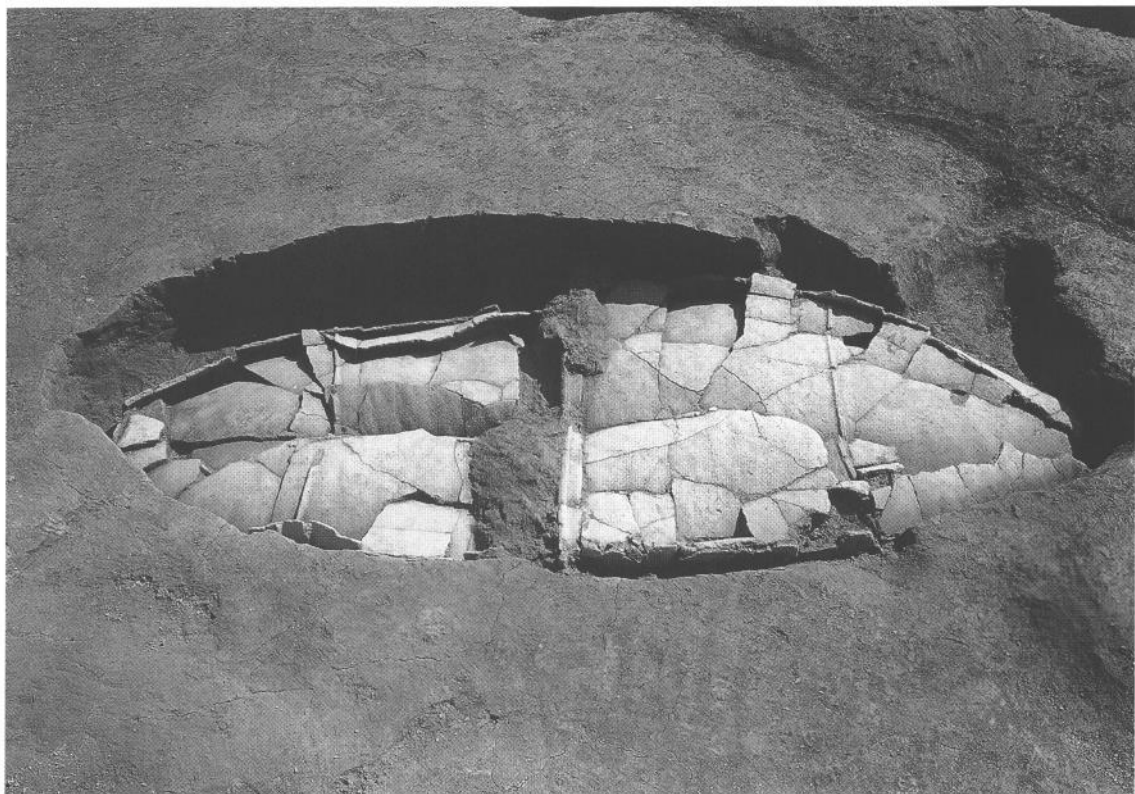
(2) 59号土壙 (東から)



(1) 60号土壙土層断面（北西から）



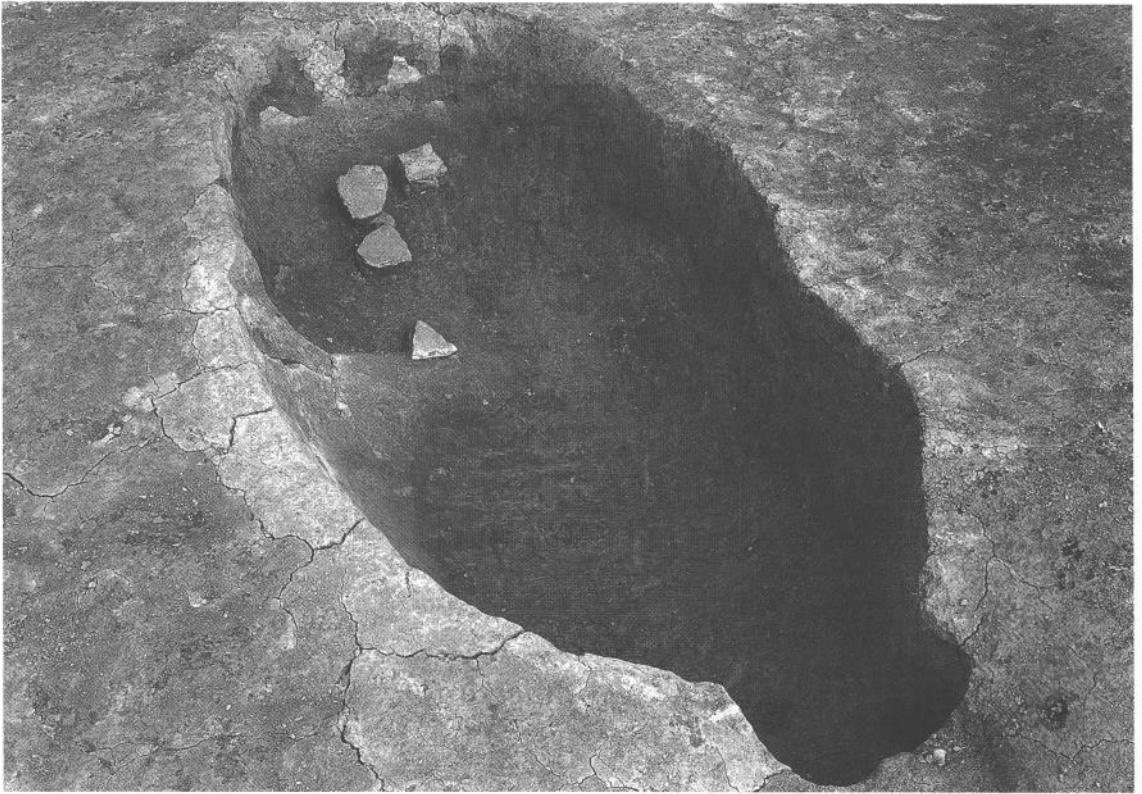
(2) 60号土壙（北西から）



(1) 1号甕棺墓 (北西から)



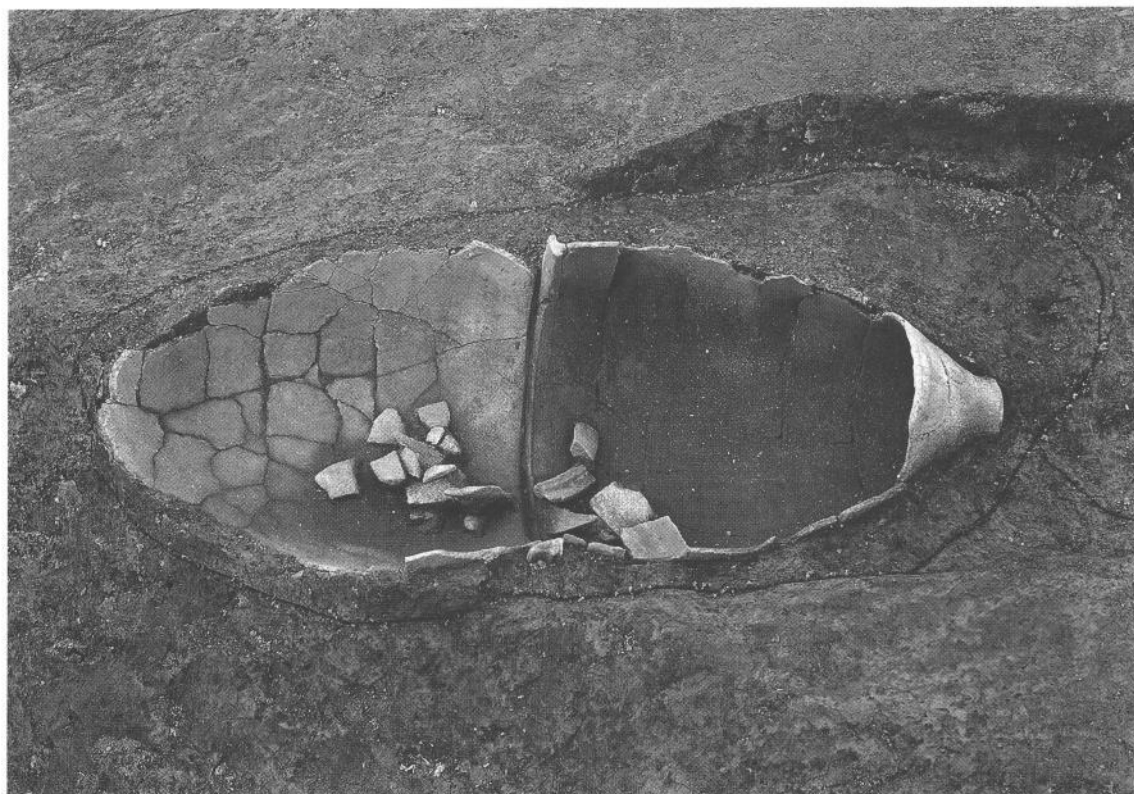
(2) 1号甕棺 (左が上甕、右が下甕)



(1) 2号甕棺墓 (北西から)



(2) 3～5号甕棺墓 (南東から)



(1) 3号甕棺墓 (南東から)



(2) 3号甕棺 (左が上甕、右が下甕)



(1) 4号甕棺墓 (南東から)



(2) 4号甕棺 (左が上甕、右が下甕)



(1) 5号甕棺墓 (南東から)



(2) 5号甕棺 (左が上甕、右が下甕)

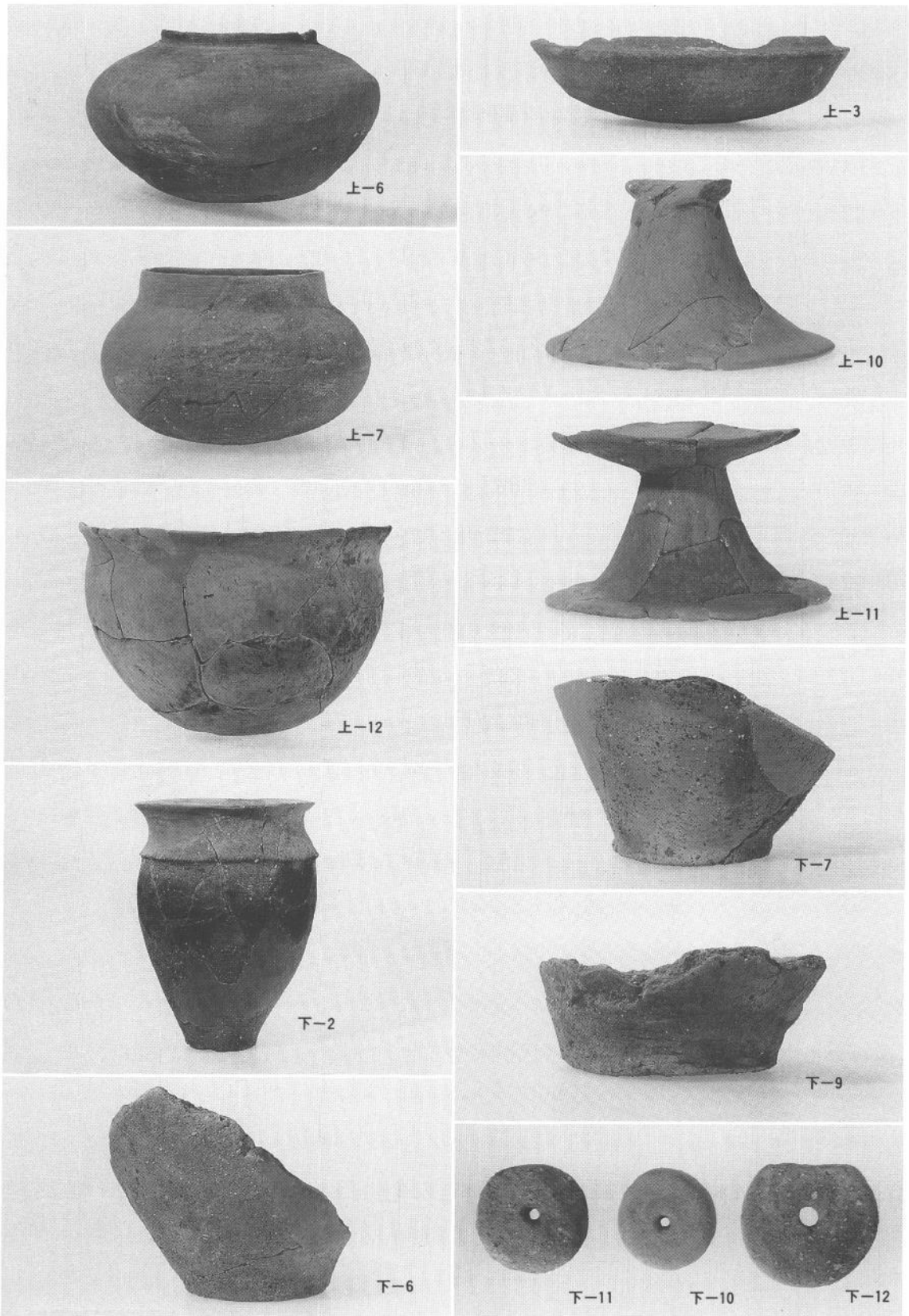




(1) 3号溝土層断面 (北から)



(2) 3号溝 (北から)



3号溝出土遺物



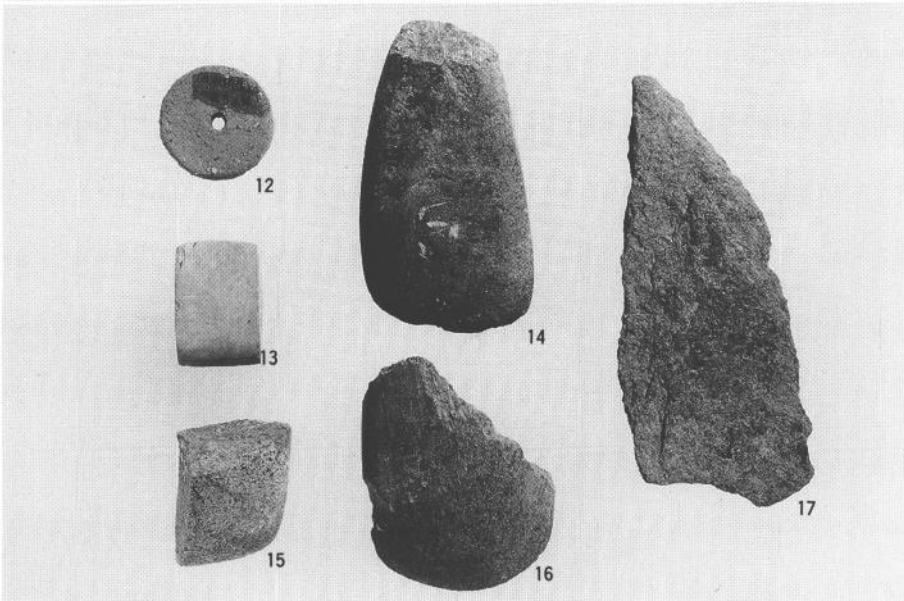
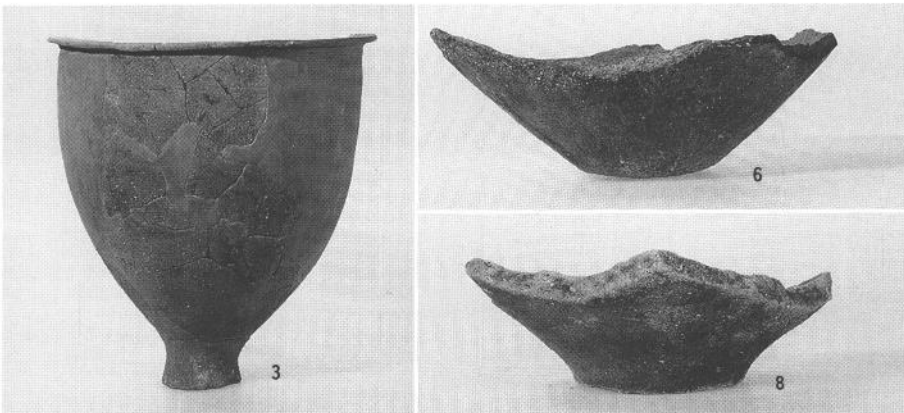
(1) 4号溝土層断面 (北から)



(2) 4号溝 (北から)



(1) 4号溝陸橋 (西から)



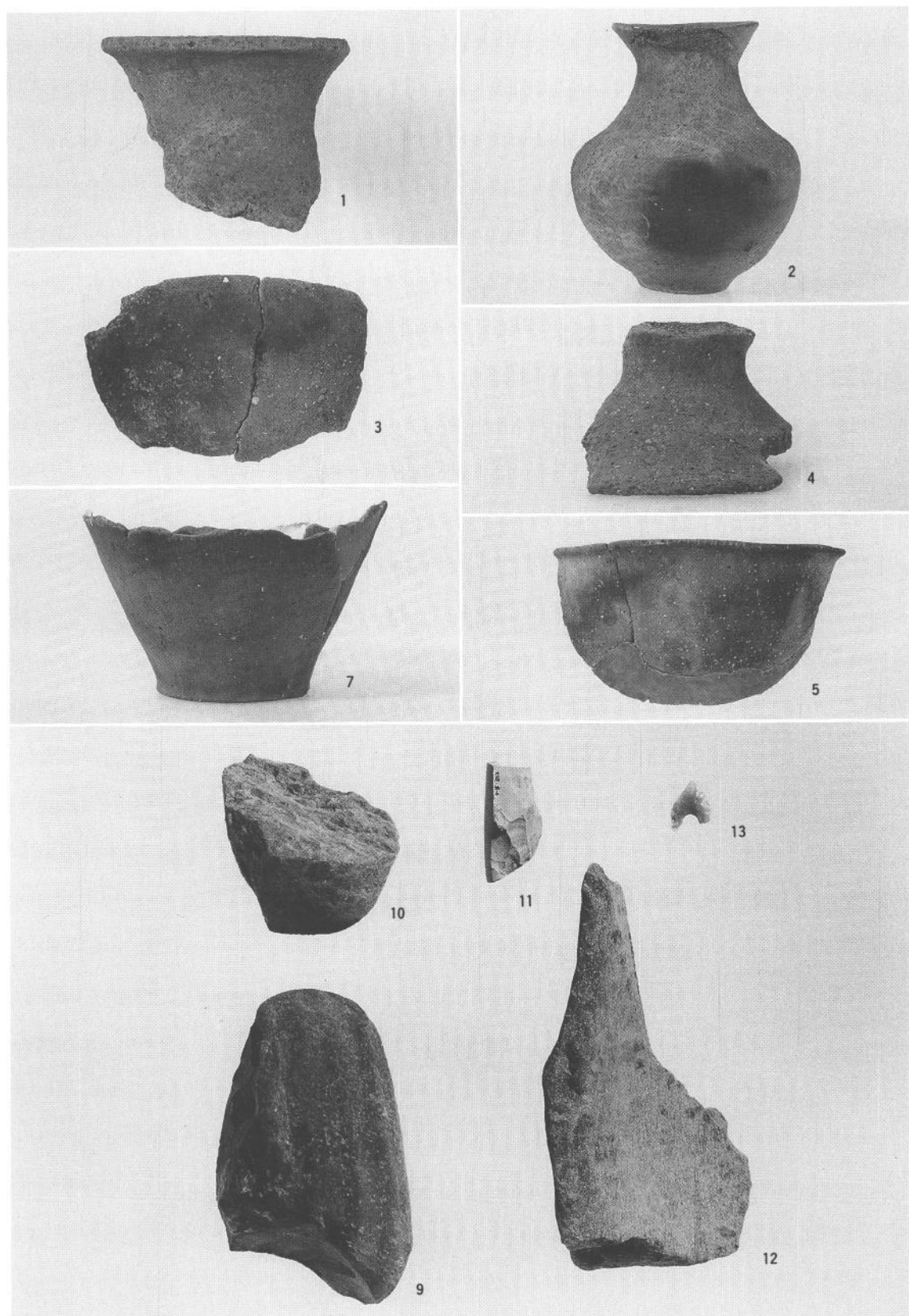
(2) 4号溝出土遺物



(1) 6号溝土層断面（北から）



(2) 7号溝（北から）



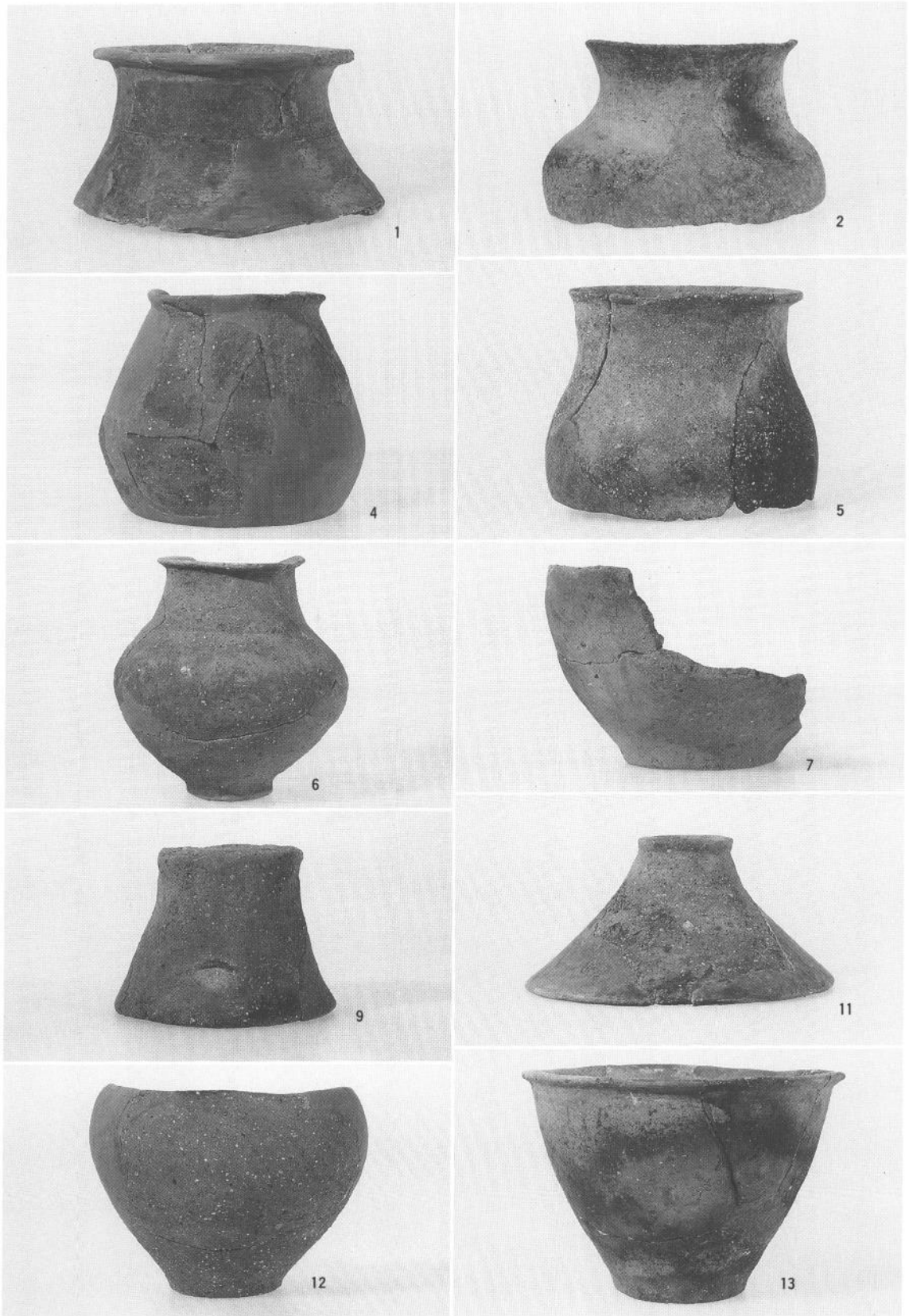
6号溝出土遺物



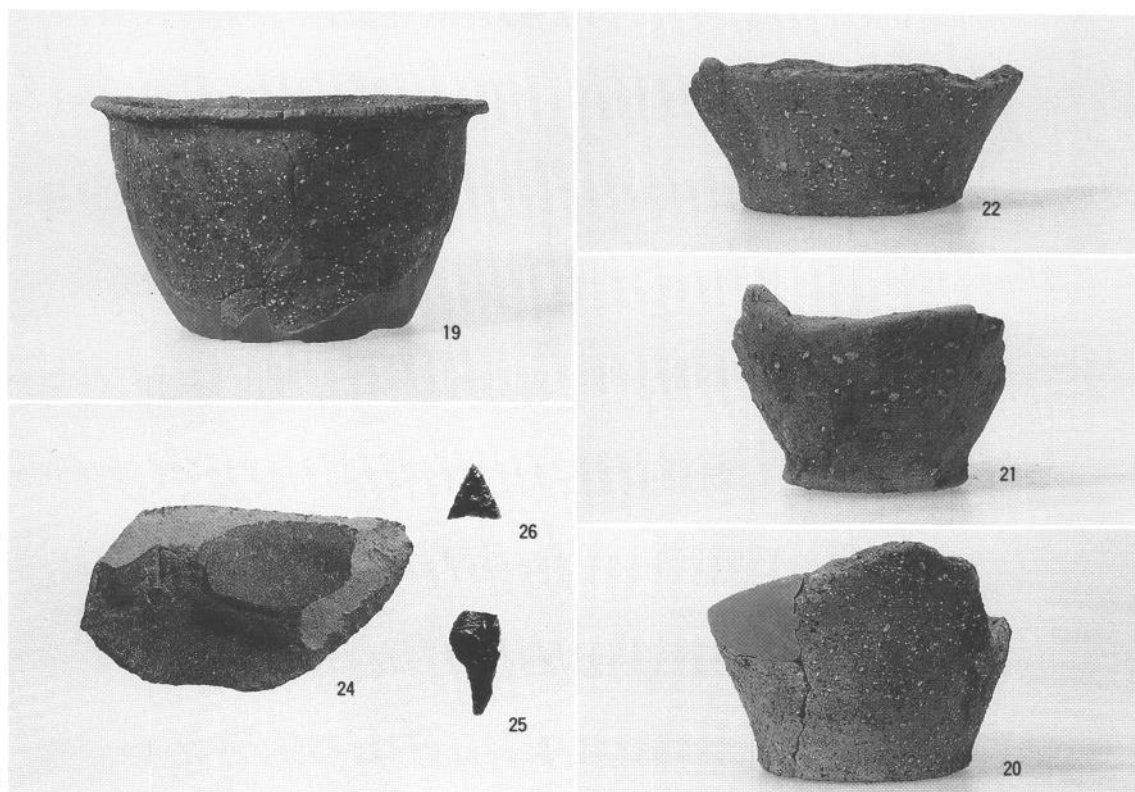
(1) 8号溝土層断面および52号土城（北西から）



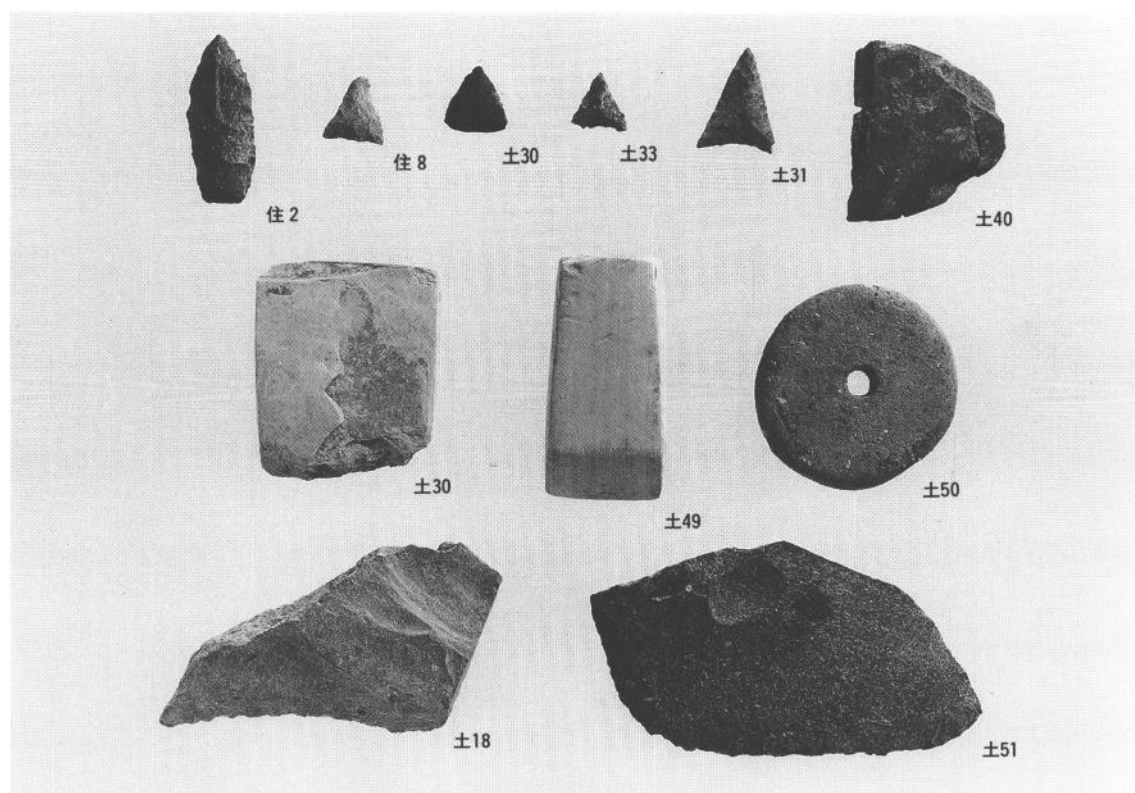
(2) 8号溝（北から）



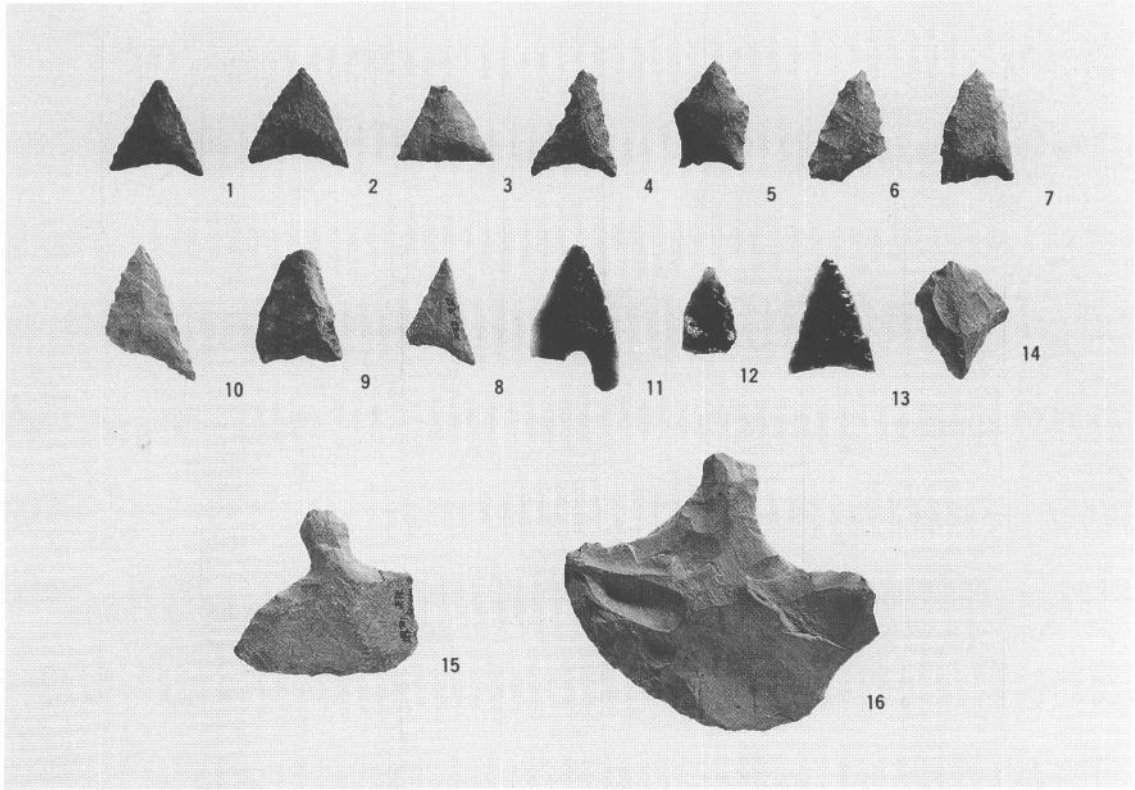
8号溝出土遺物. 1



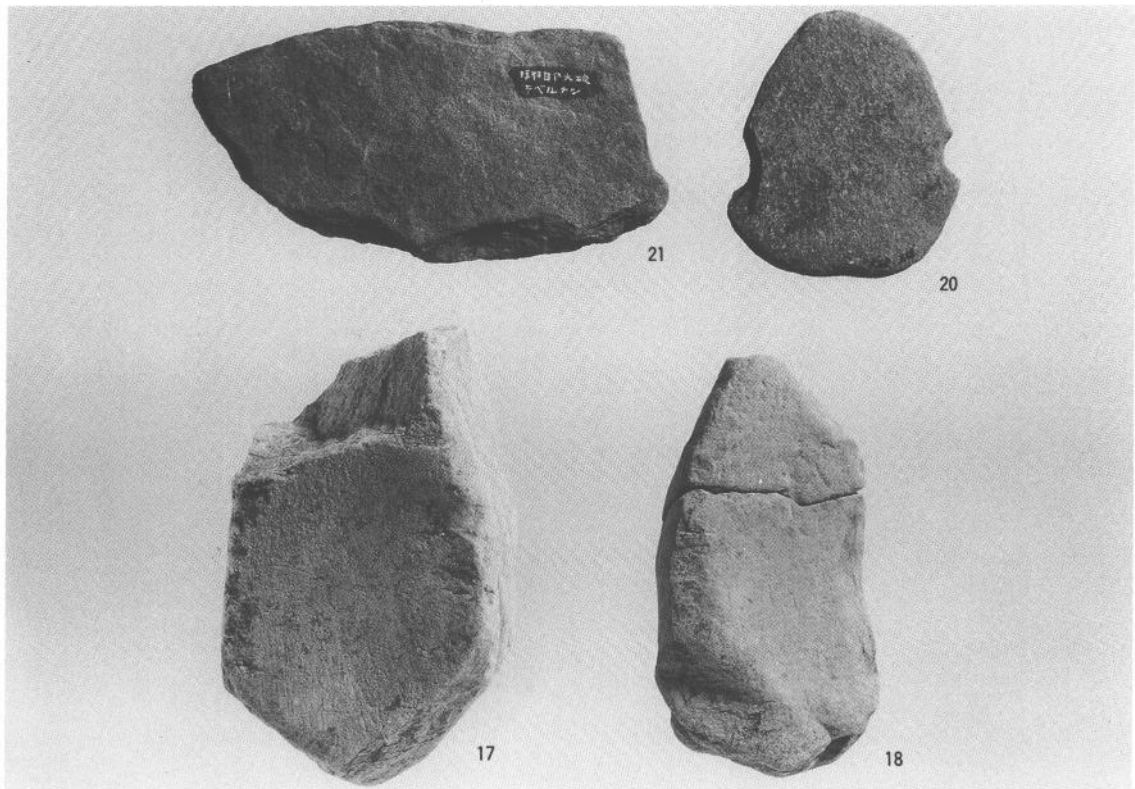
(1) 8号溝出土遺物. 2



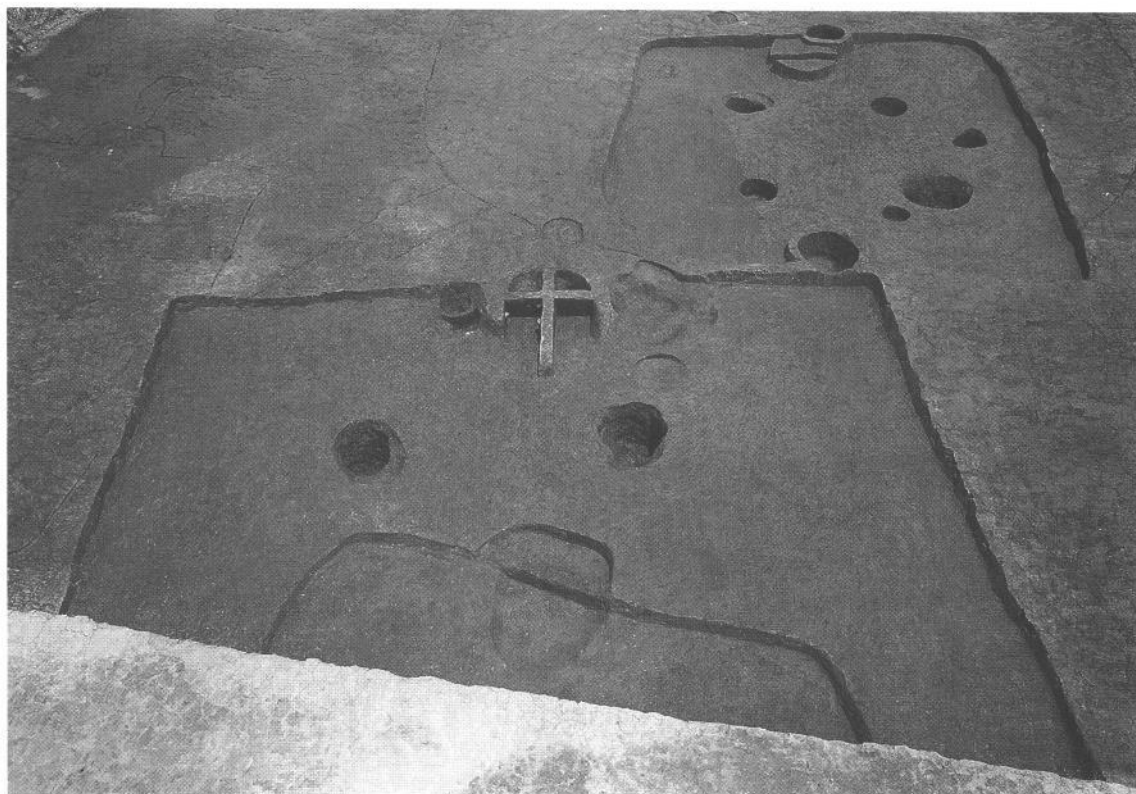
(2) 弥生時代竪穴住居跡・土壙出土遺物



(1) 包含層出土および表採の石器. 1



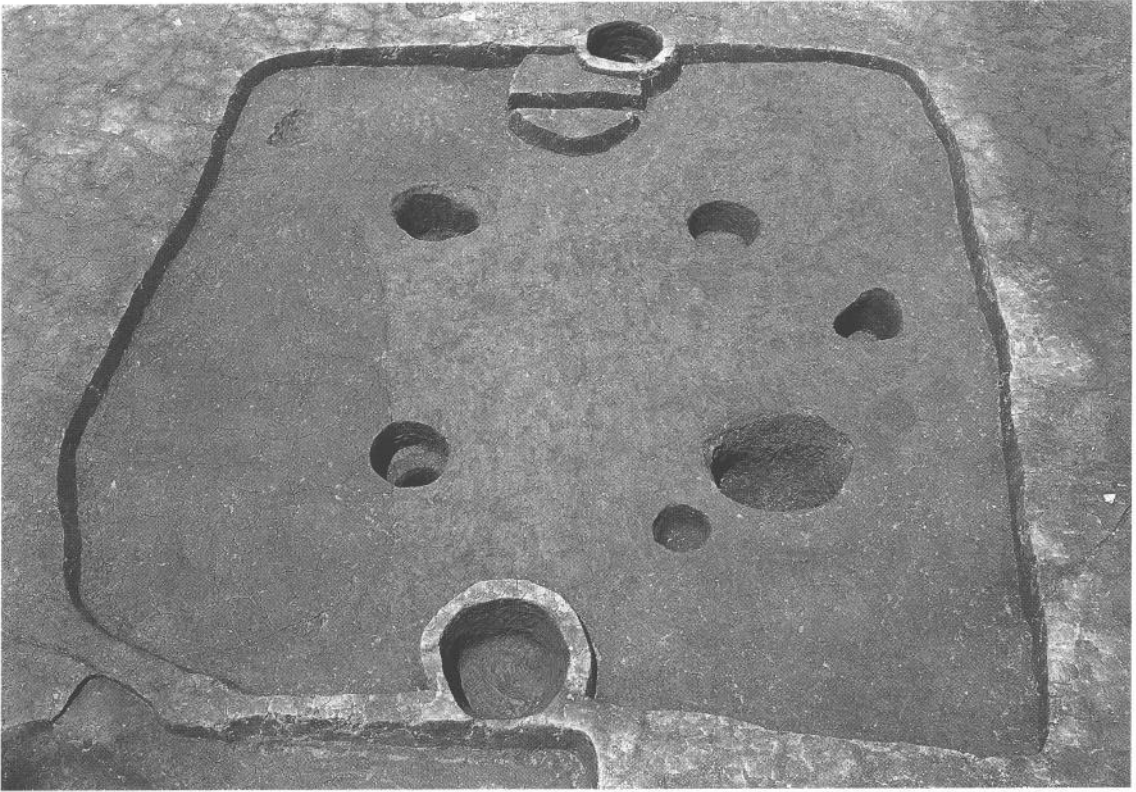
(2) 包含層出土および表採の石器. 2



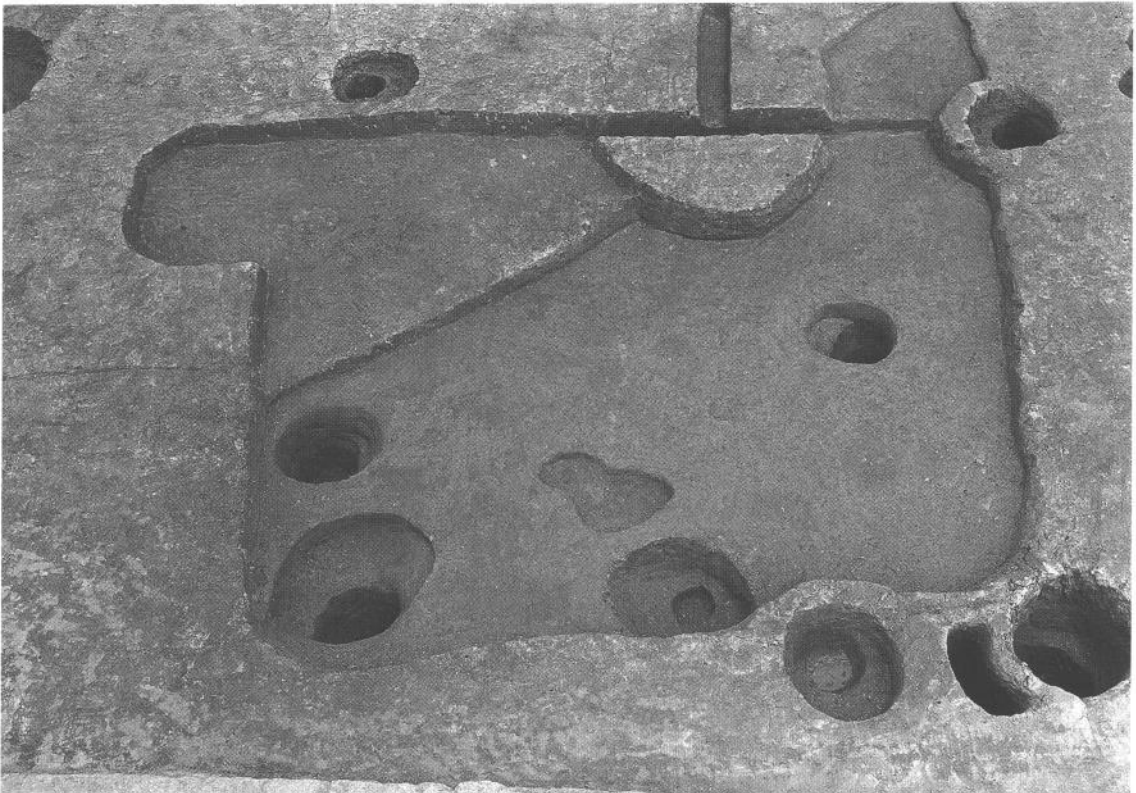
(1) 3～5号竪穴住居跡（南から）



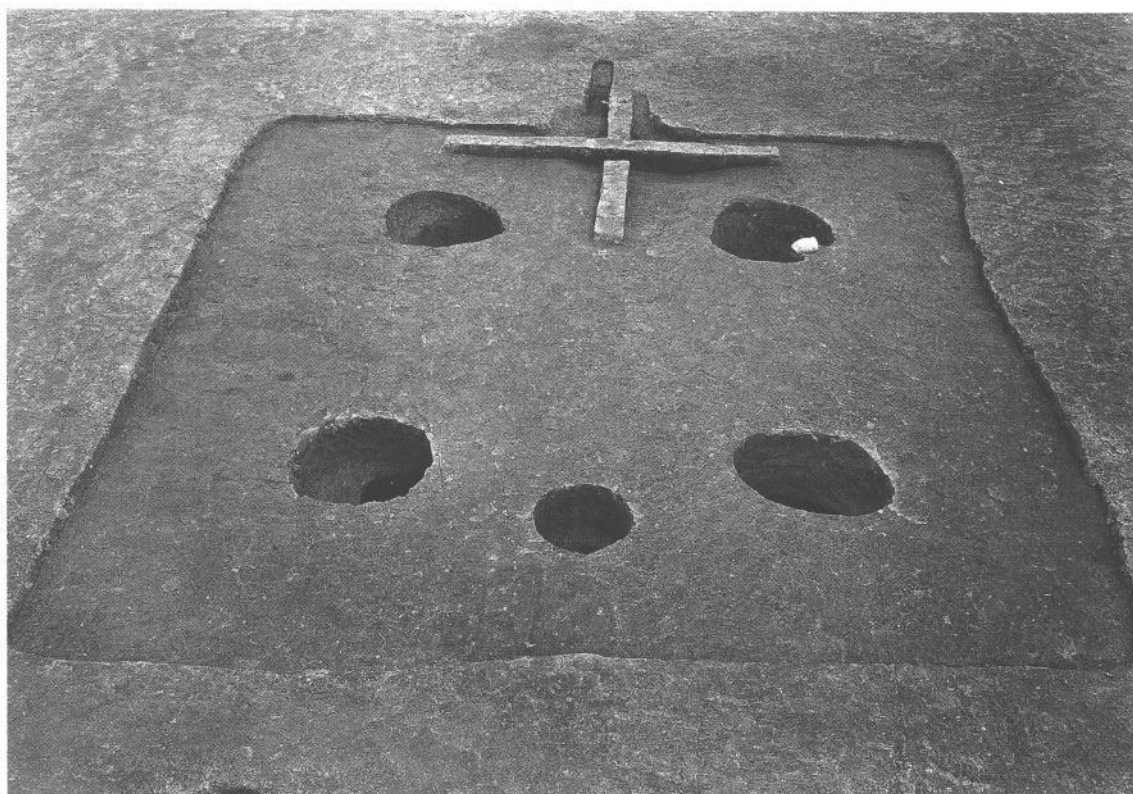
(2) 3号竪穴住居跡カマド（南から）



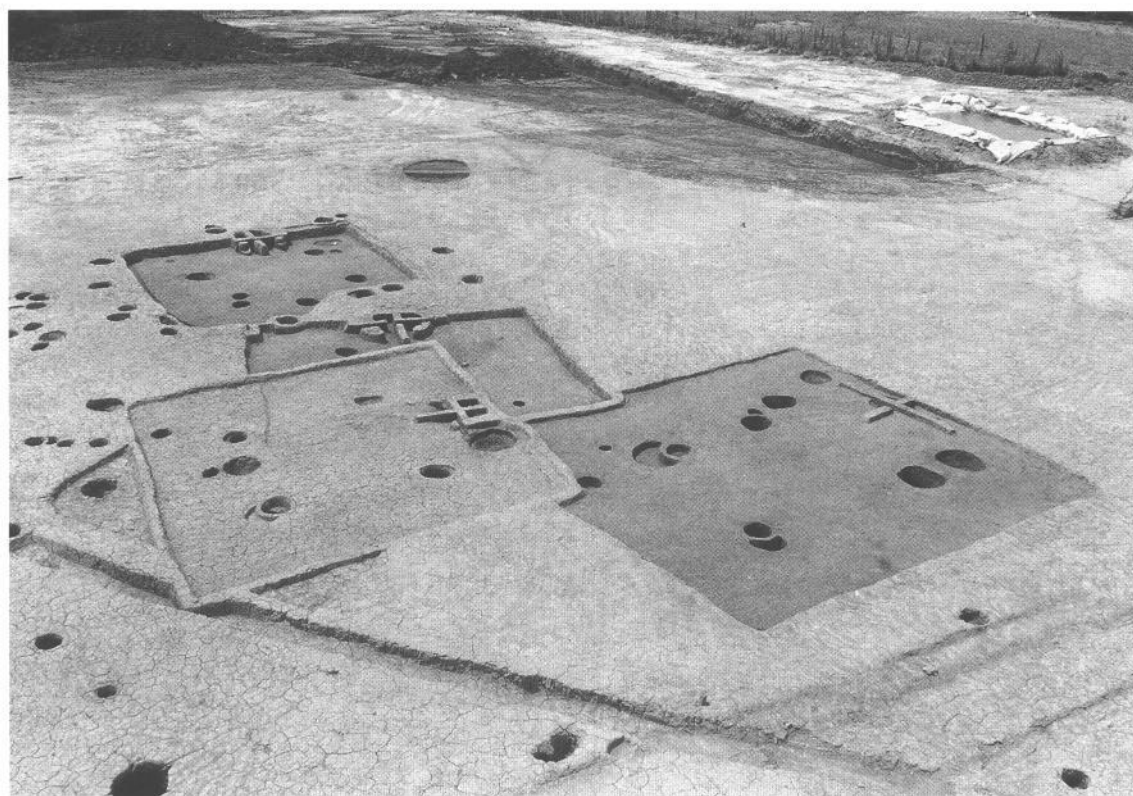
(1) 5号竪穴住居跡 (南から)



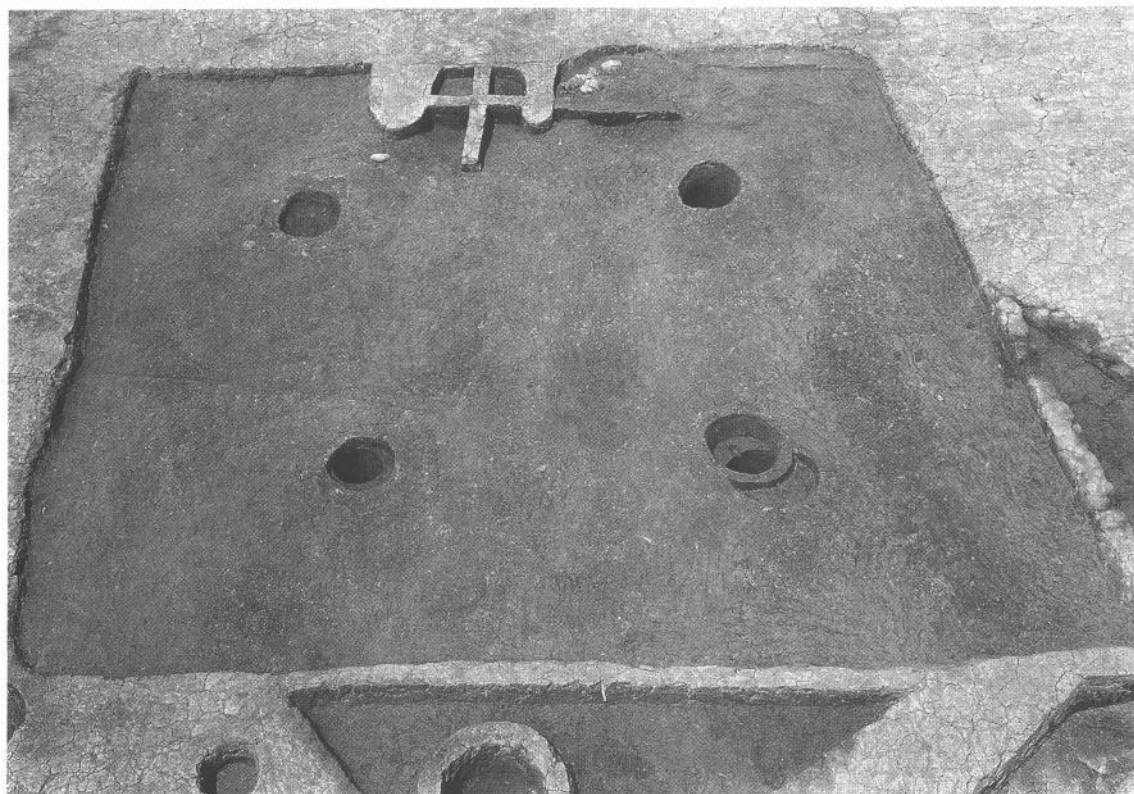
(2) 7号竪穴住居跡 (南から)



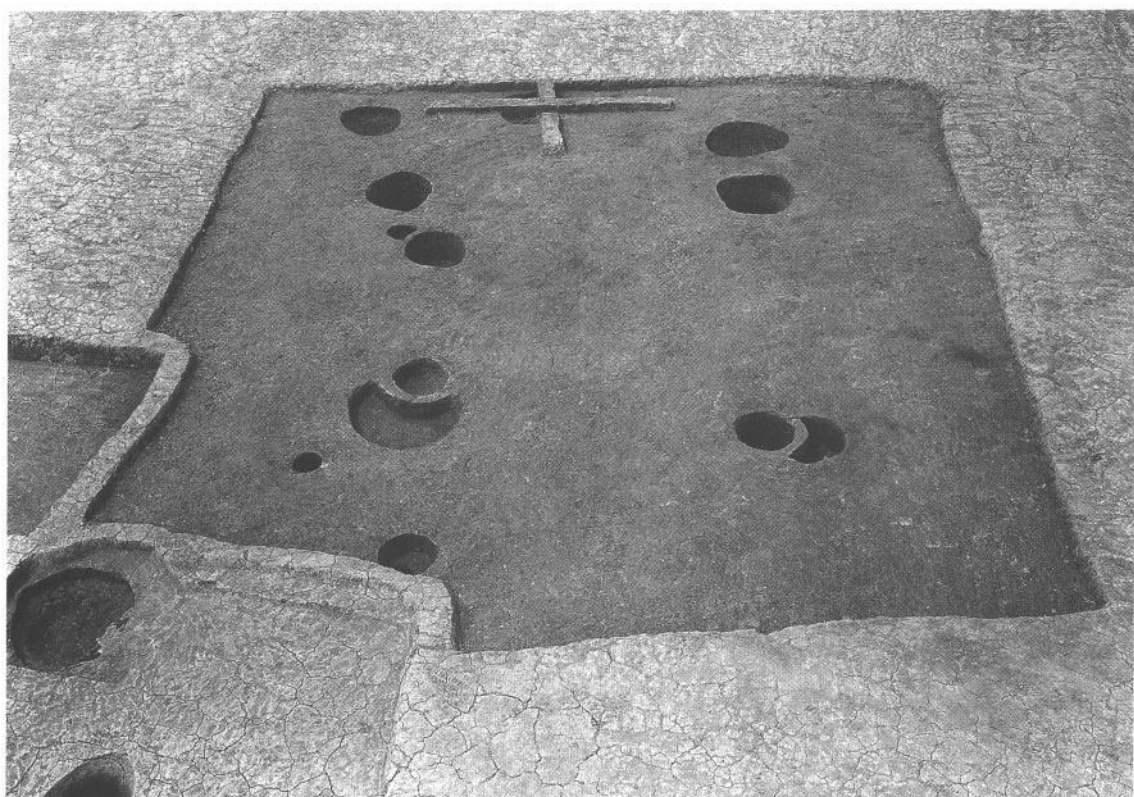
(1) 9号竖穴住居跡 (南から)



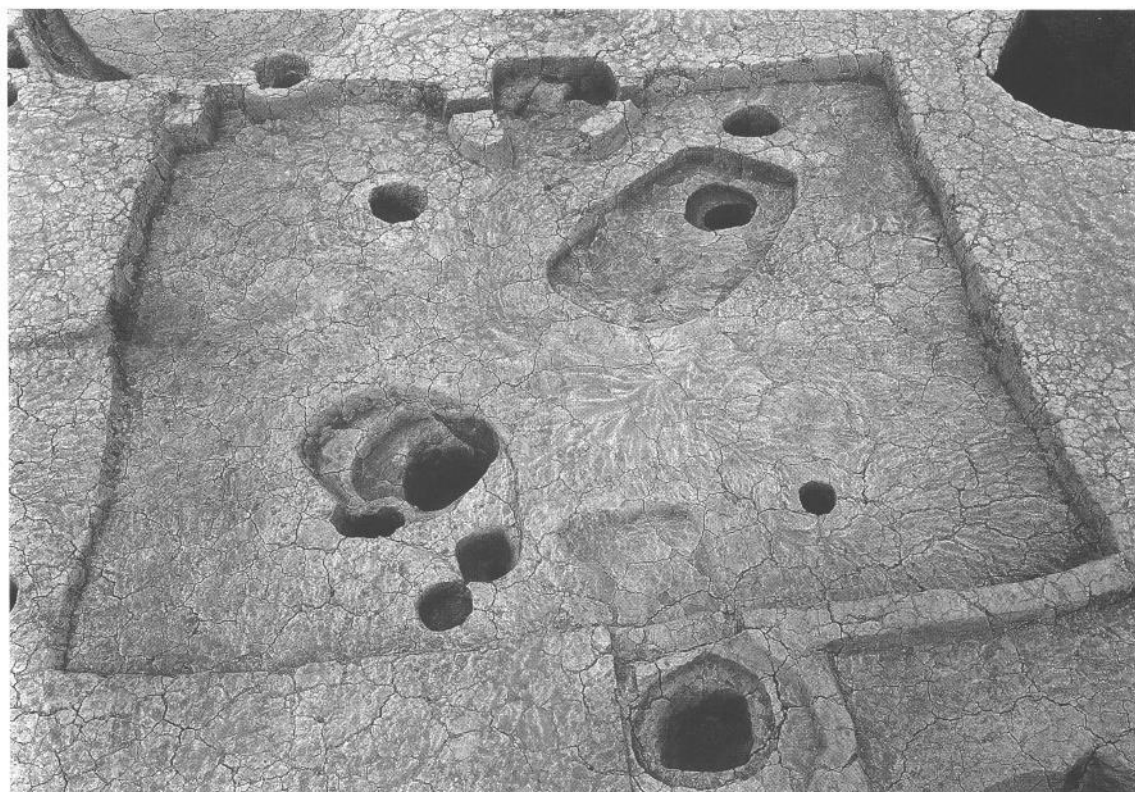
(2) 10~14号竖穴住居跡 (南東から)



(1) 10号竪穴住居跡 (南から)



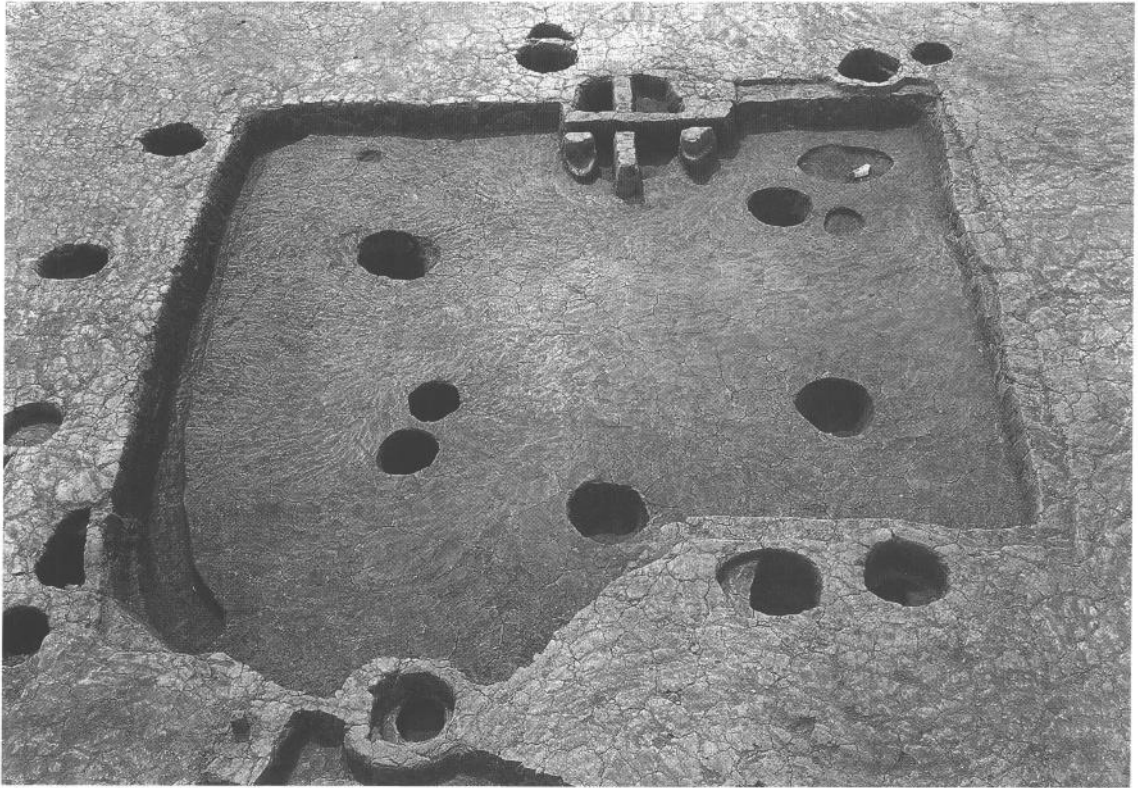
(2) 12号竪穴住居跡 (南から)



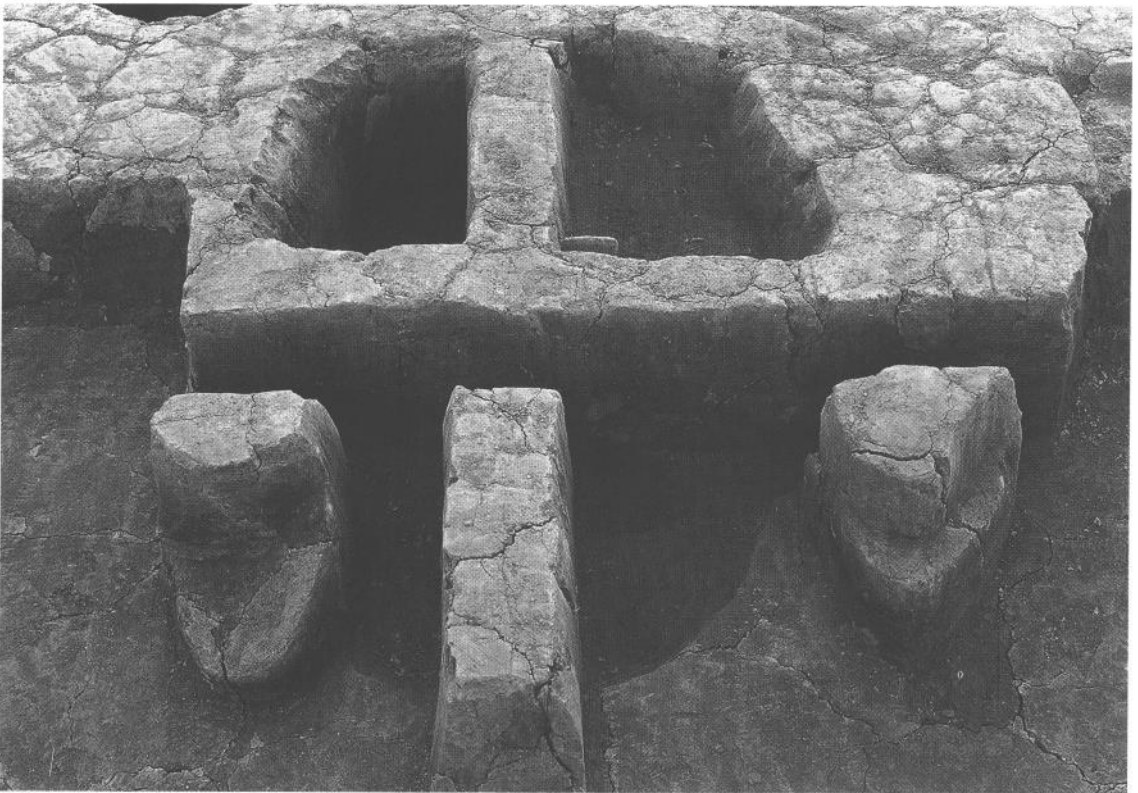
(1) 11号竪穴住居跡 (東から)



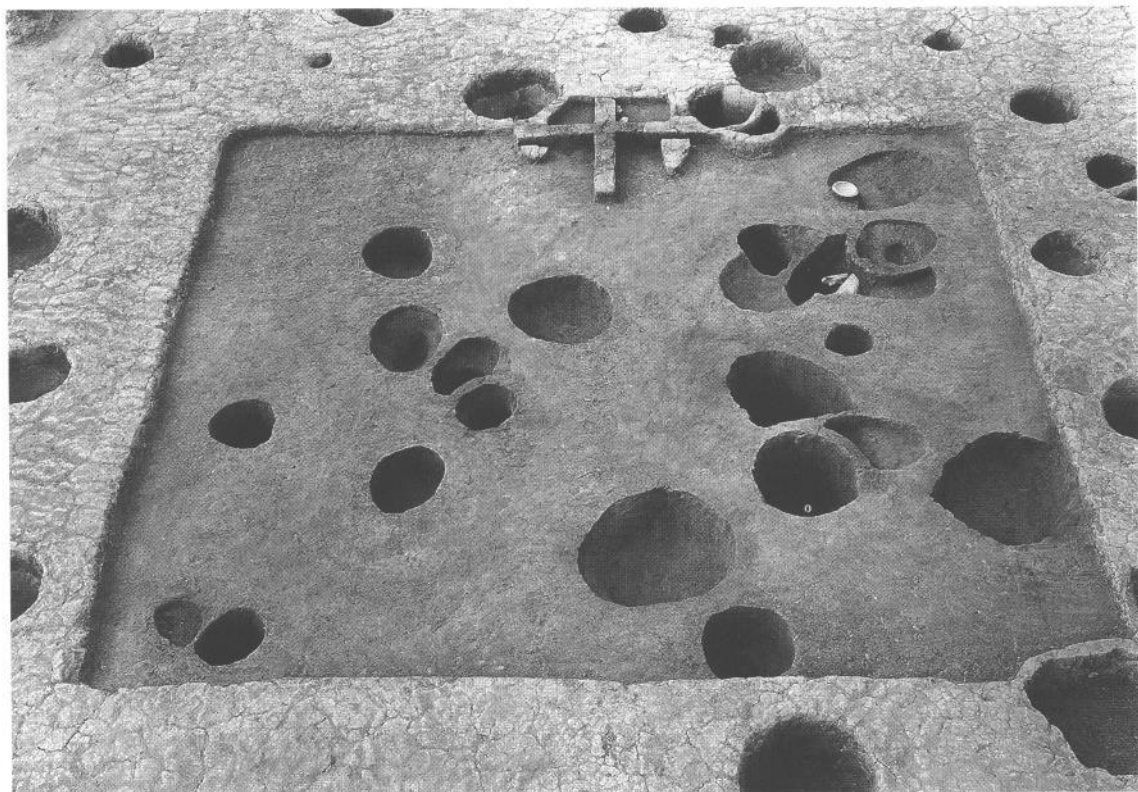
(2) 11号竪穴住居跡カマド (東から)



(1) 14号竪穴住居跡 (東から)



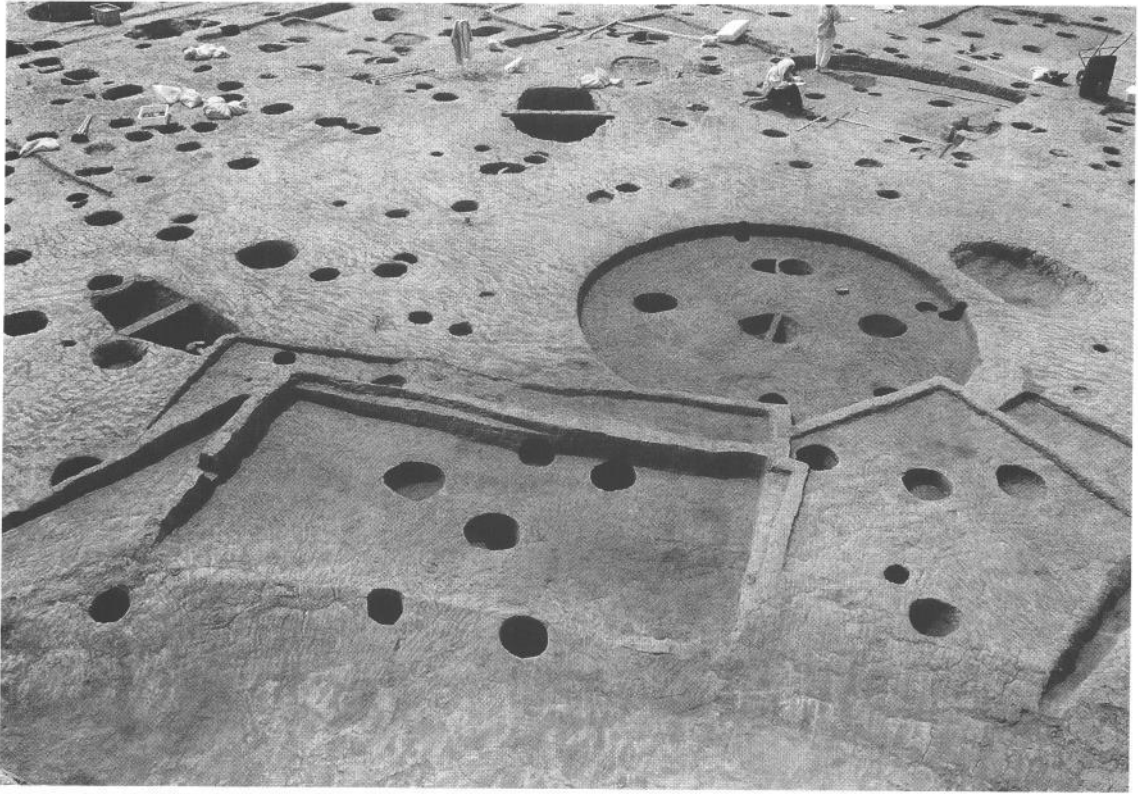
(2) 14号竪穴住居跡カマド (東から)



(1) 15号竪穴住居跡 (南から)



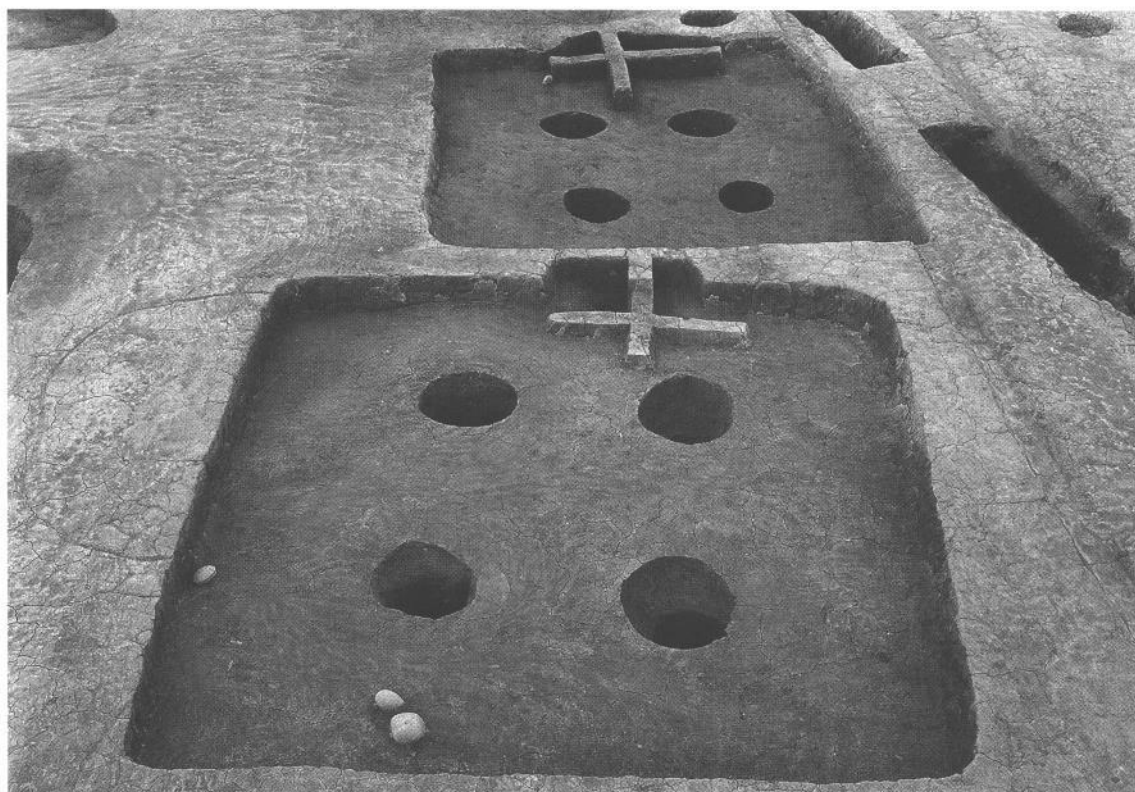
(2) 15号竪穴住居跡カマド (南から)



(1) 16~21号竪穴住居跡 (北西から)



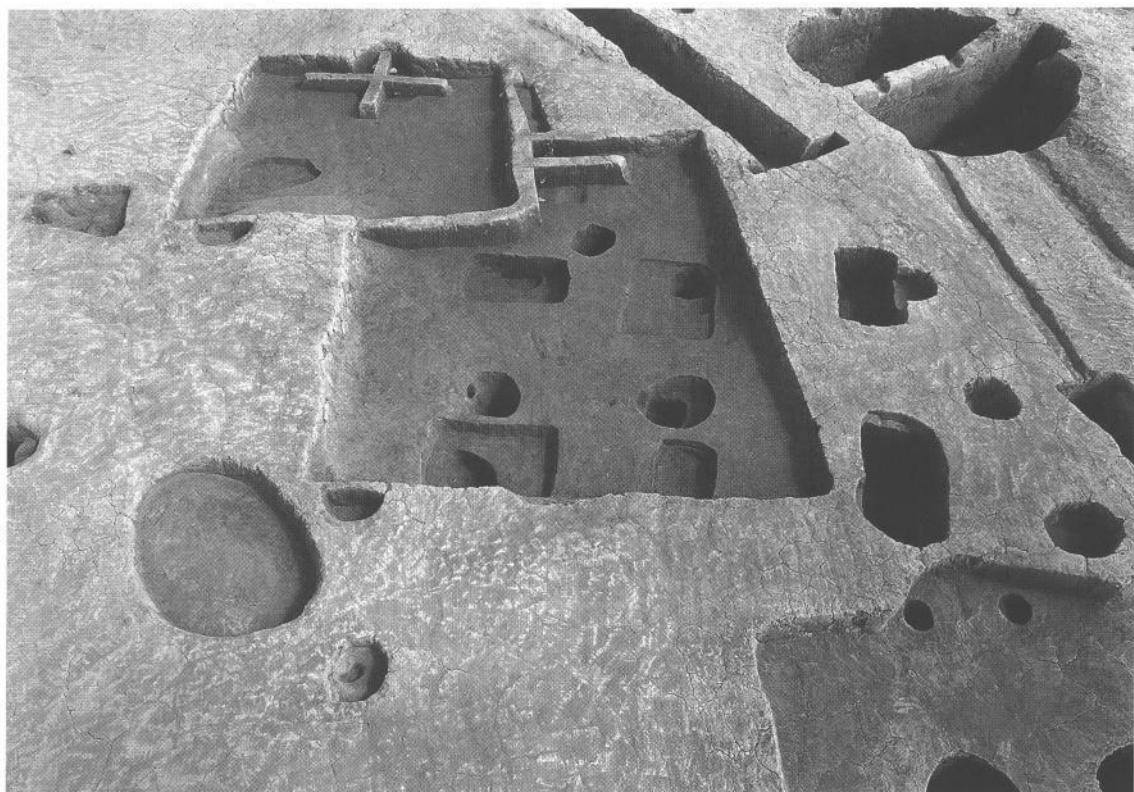
(2) 22号竪穴住居跡 (南から)



(1) 23・24号竪穴住居跡（南から）



(2) 24号竪穴住居跡（南から）



(1) 25・26号竖穴住居跡および6号掘立柱建物跡（南から）



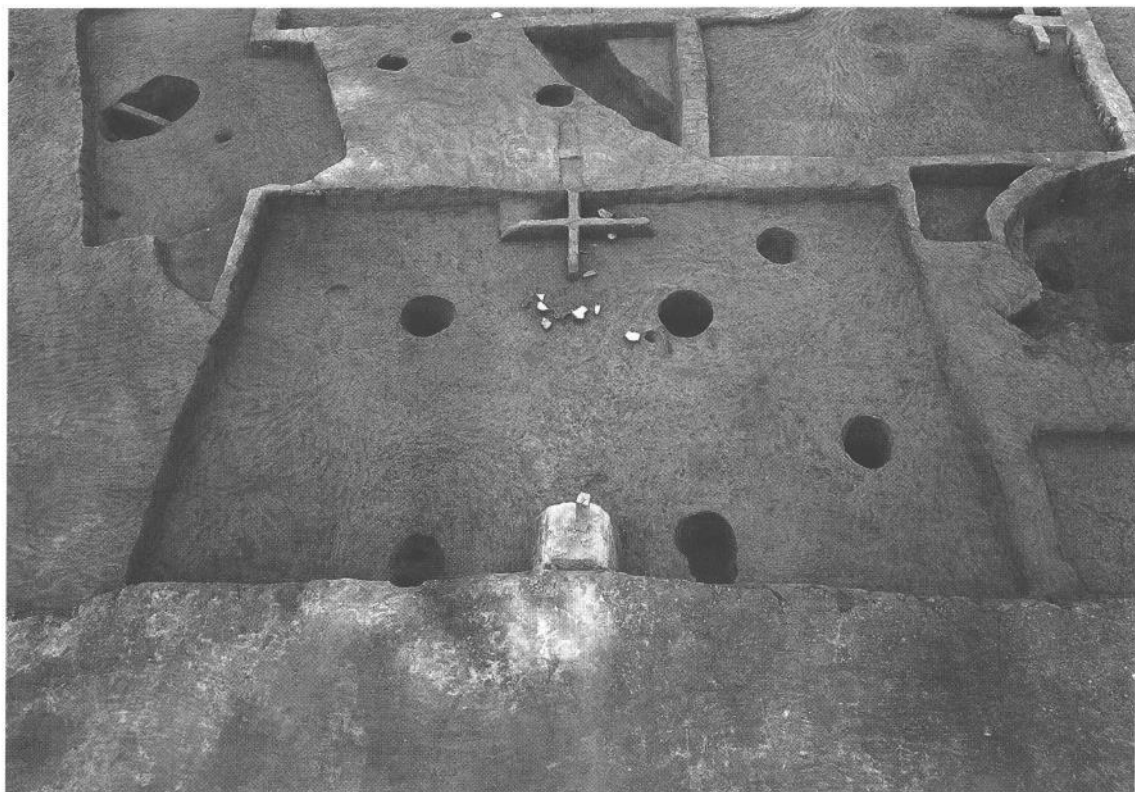
(2) 27～31号竖穴住居跡（北から）



(1) 27号竪穴住居跡 (北から)



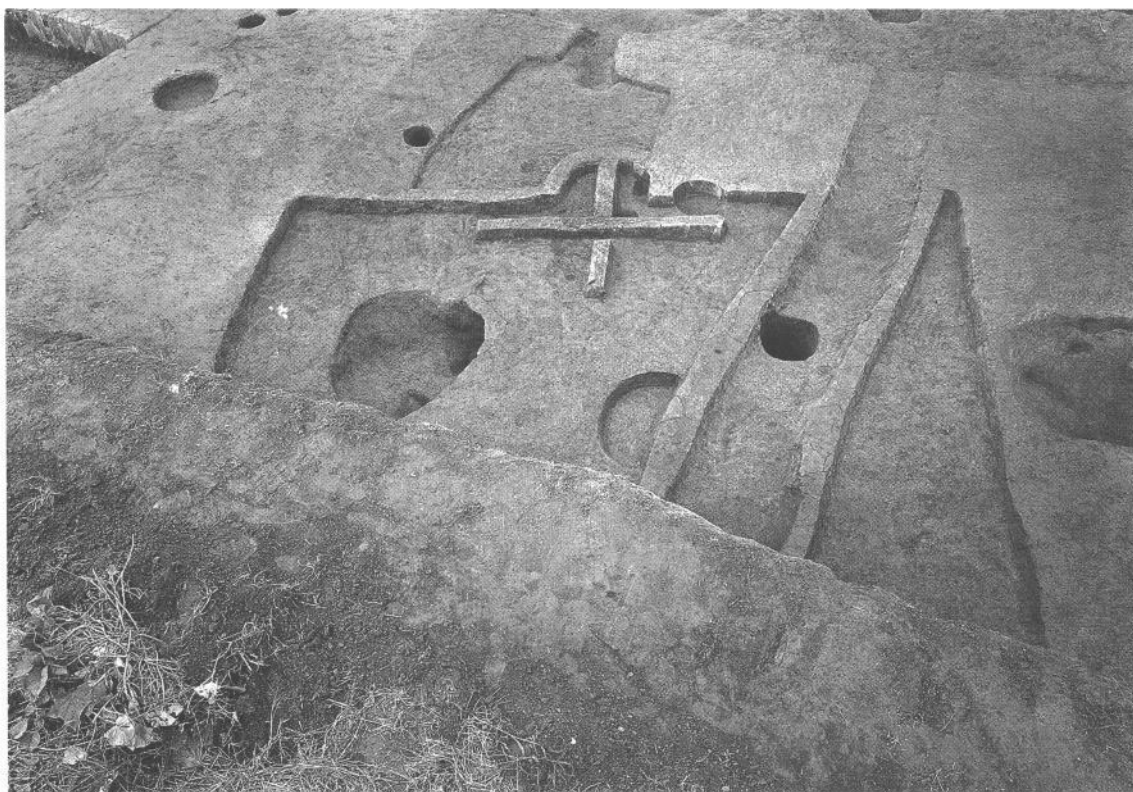
(2) 28号竪穴住居跡 (西から)



(1) 29号竖穴住居跡 (南から)



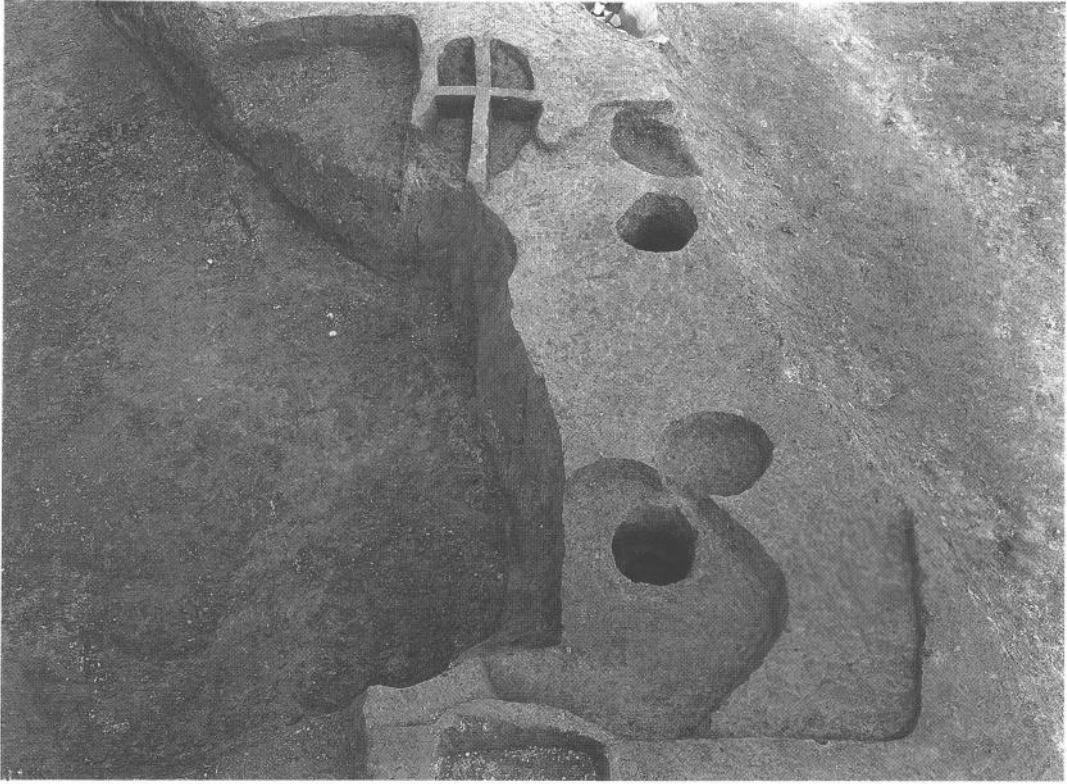
(2) 31号竖穴住居跡 (南から)



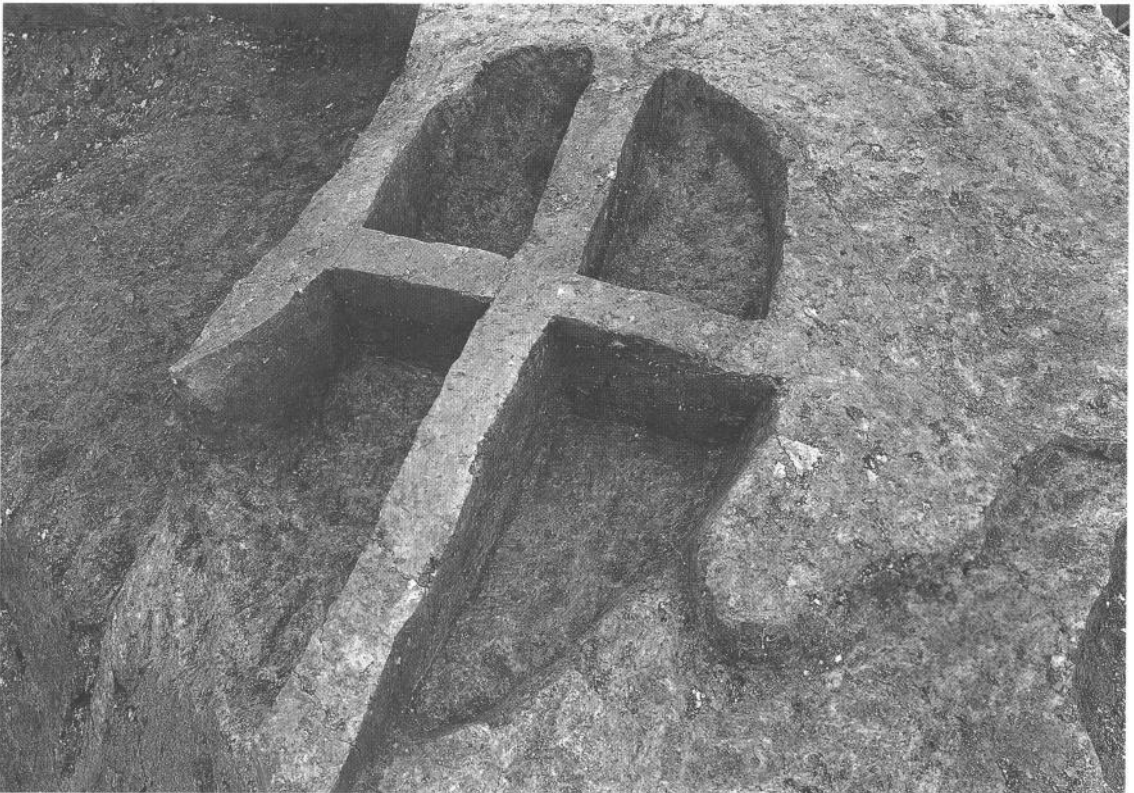
(1) 34号竖穴住居跡（南東から）



(2) 36～38号竖穴住居跡および2～5号甕棺墓（南東から）



(1) 36号竪穴住居跡（西から）



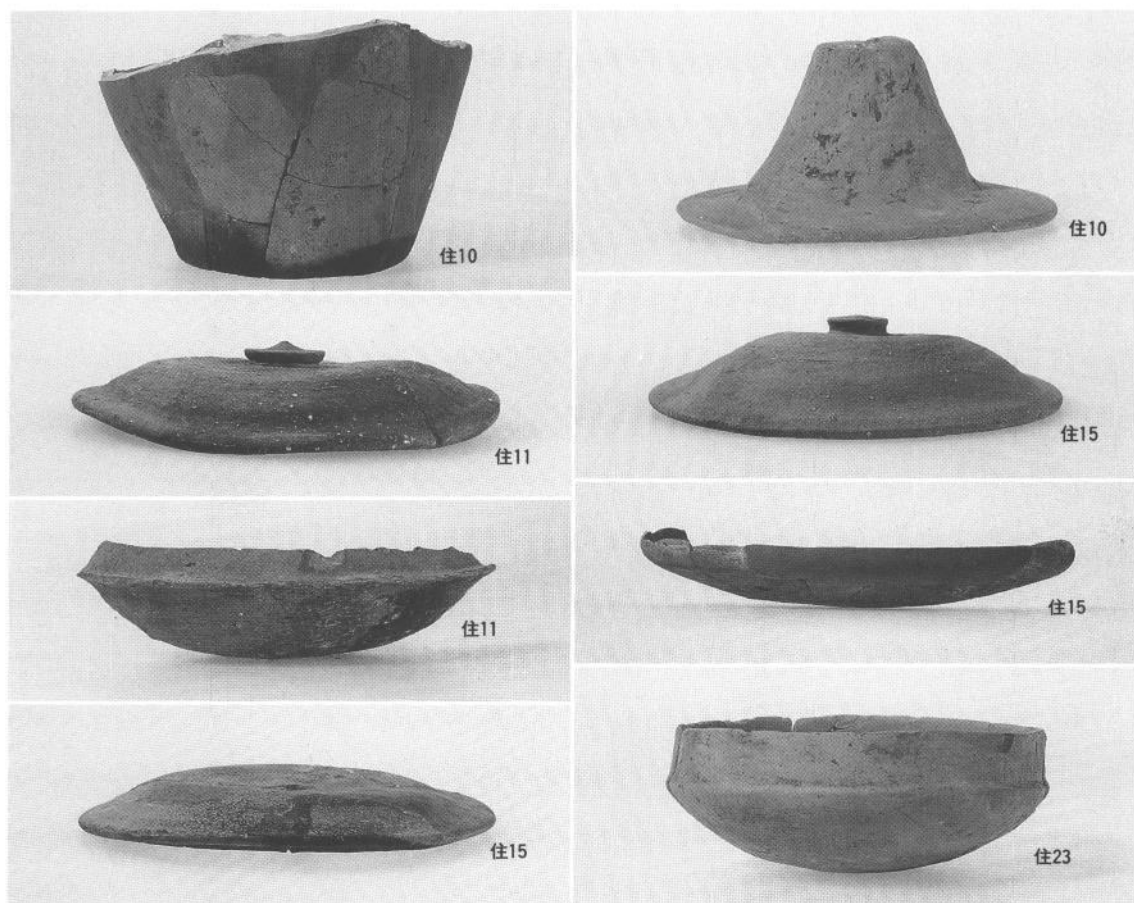
(2) 36号竪穴住居跡カマド（南西から）



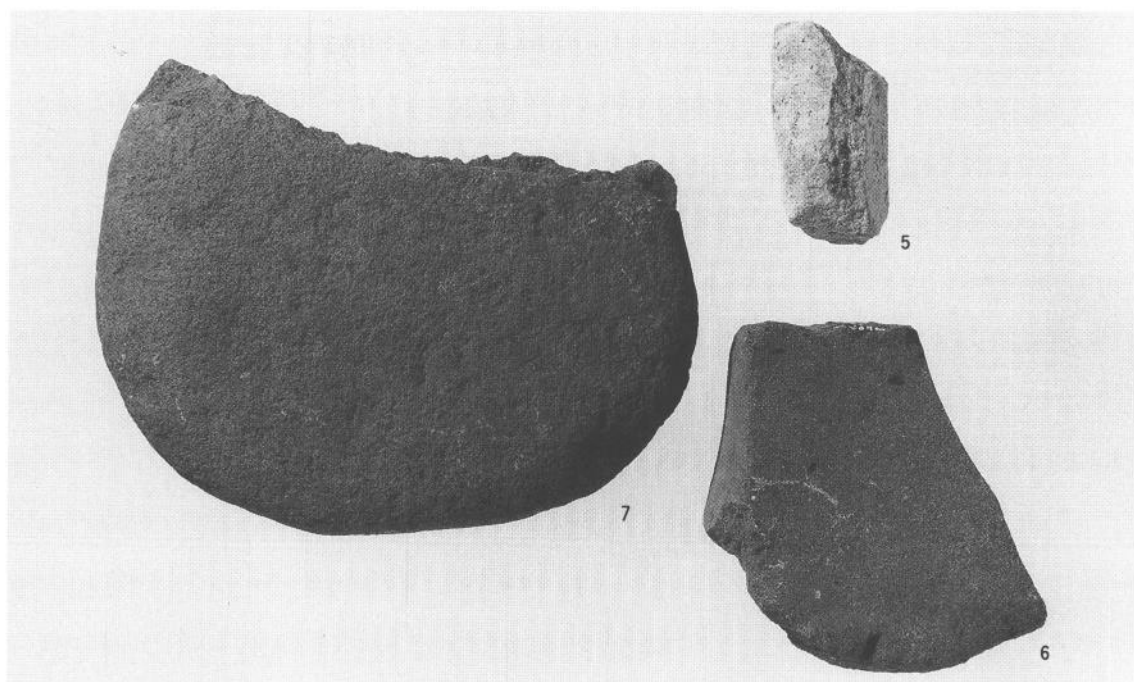
(1) 37号竪穴住居跡カマド (南から)



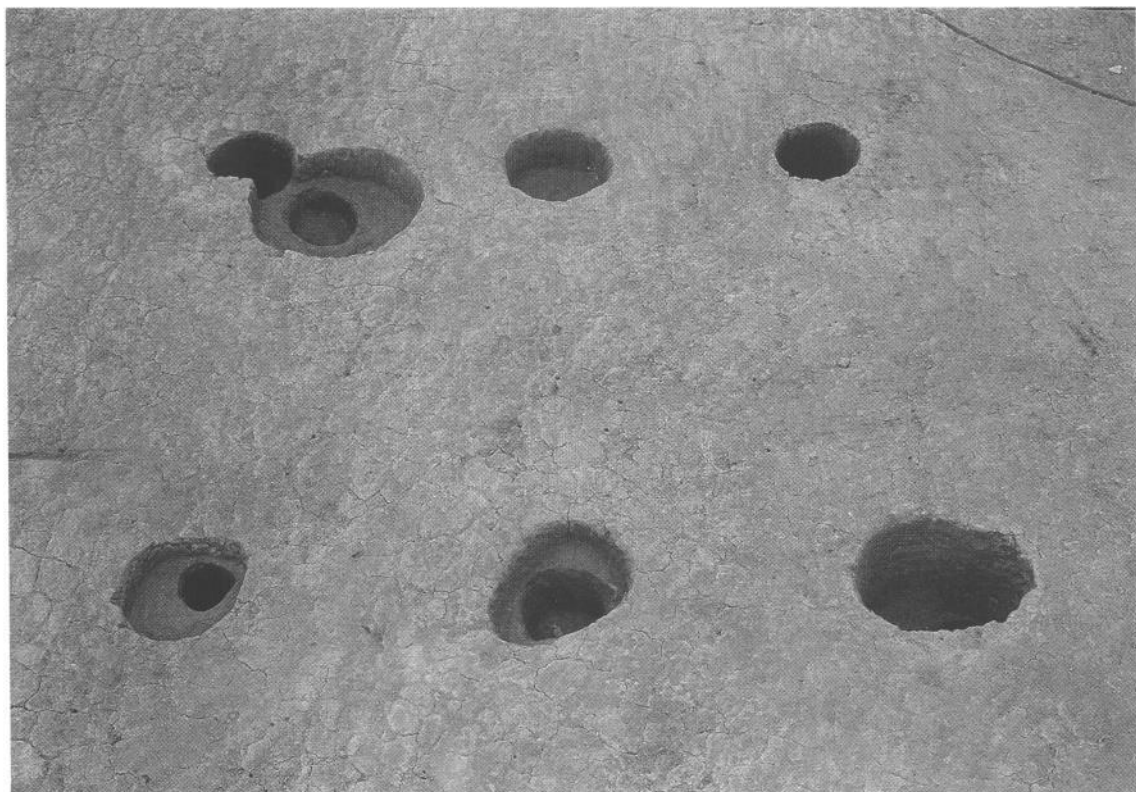
(2) 38号竪穴住居跡 (南東から)



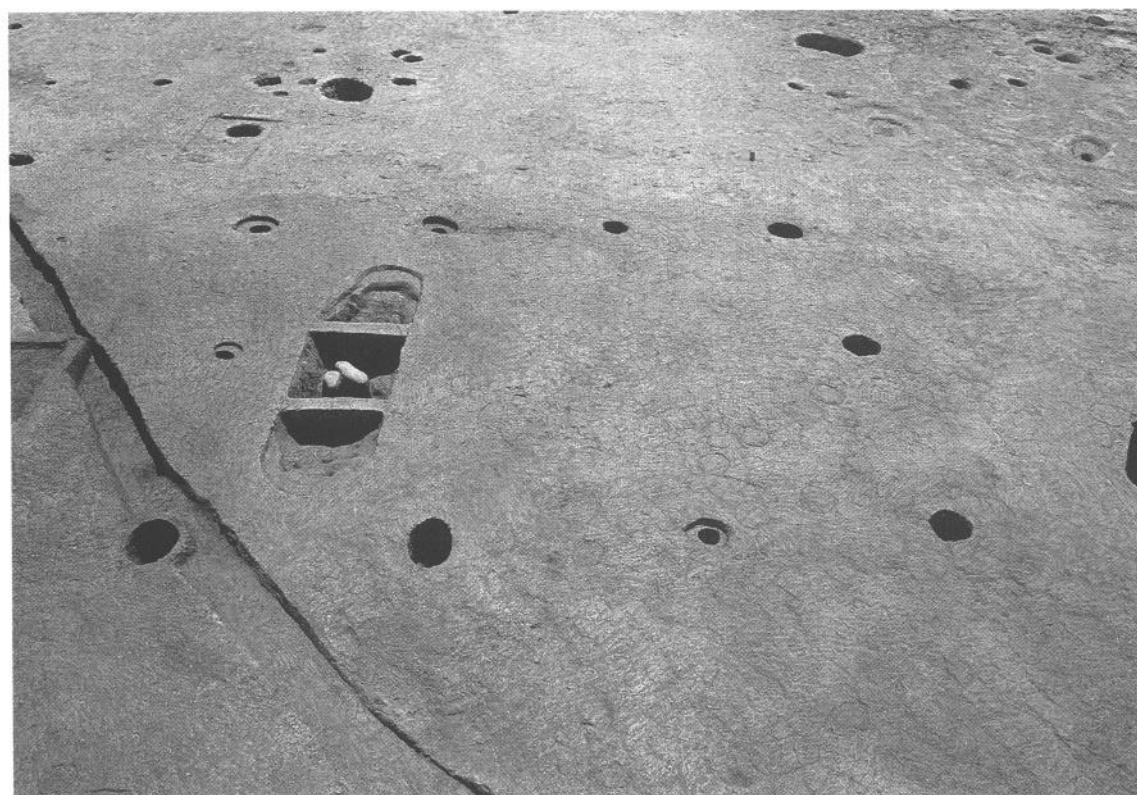
(1) 古墳時代竪穴住居跡出土遺物



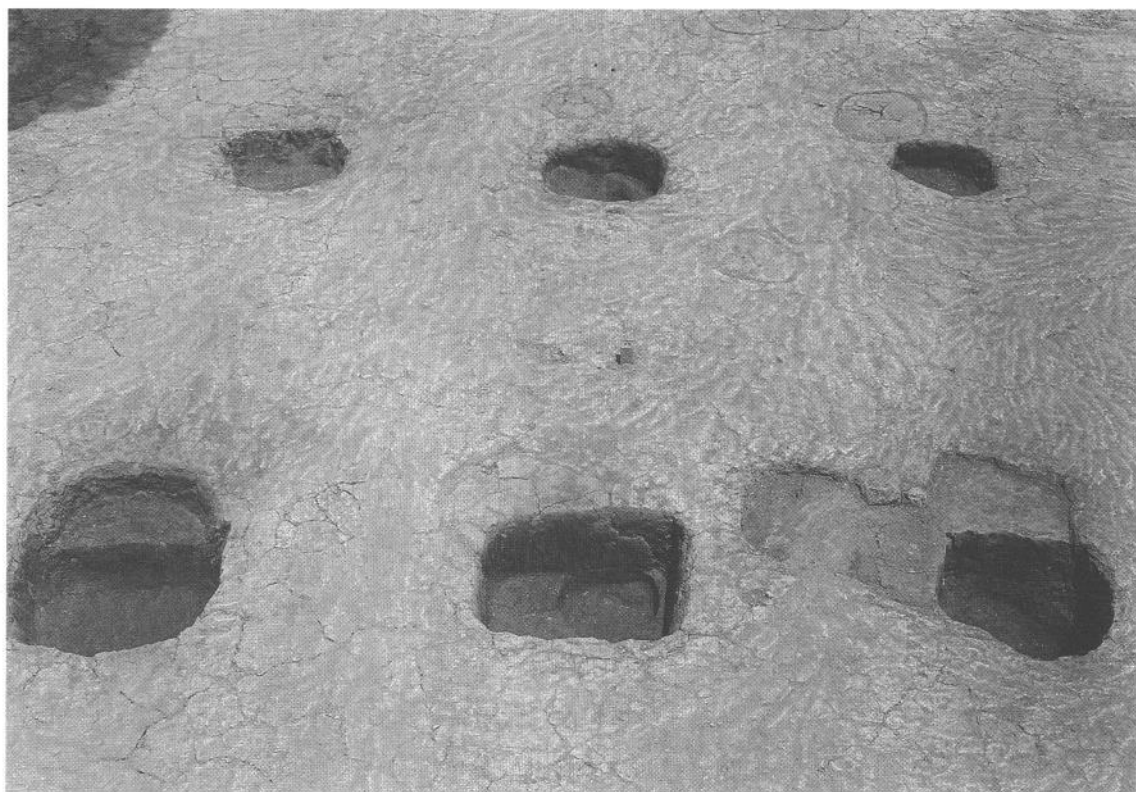
(2) 14号竪穴住居跡出土遺物



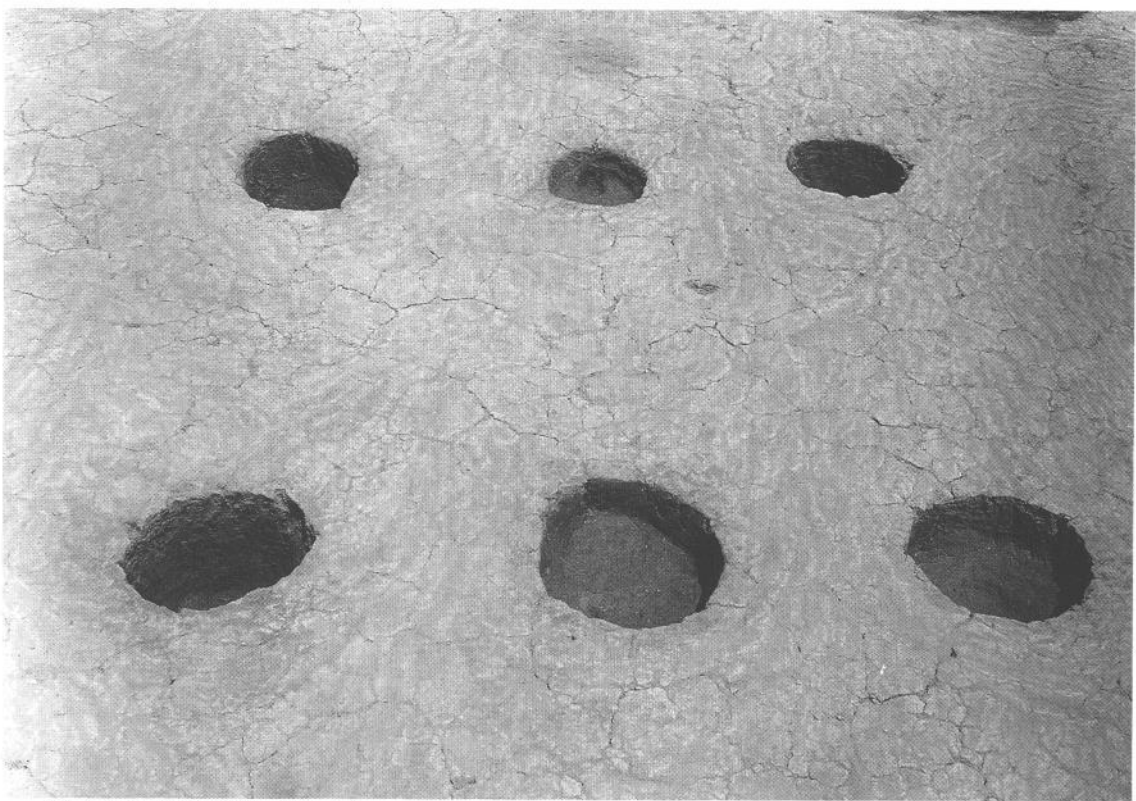
(1) 1号掘立柱建物跡（南から）



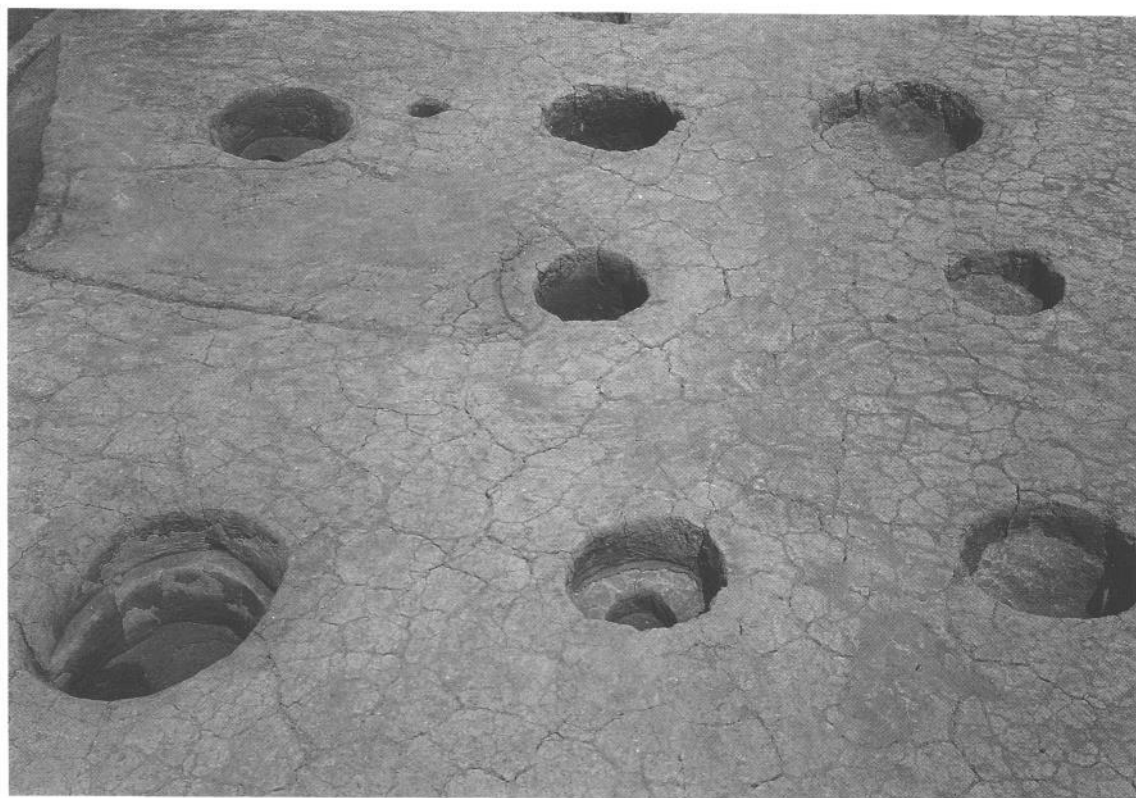
(2) 2号掘立柱建物跡および4号土壇（西から）



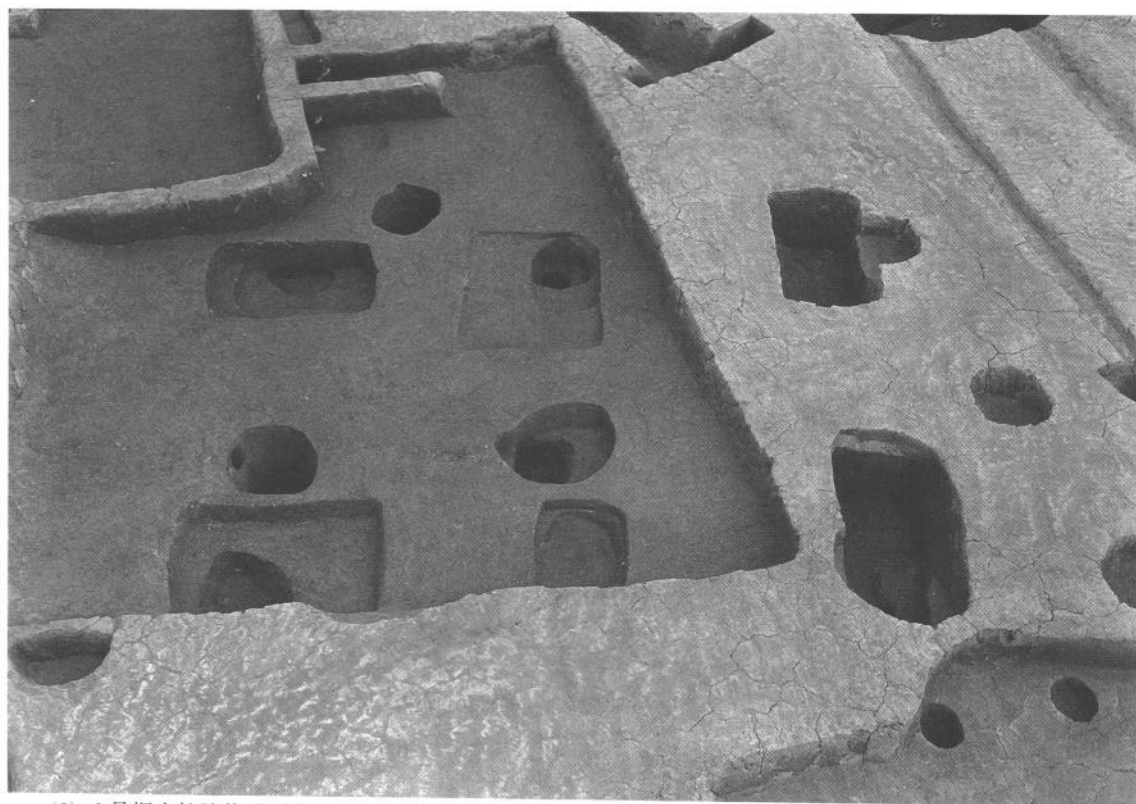
(1) 3号掘立柱建物跡 (南から)



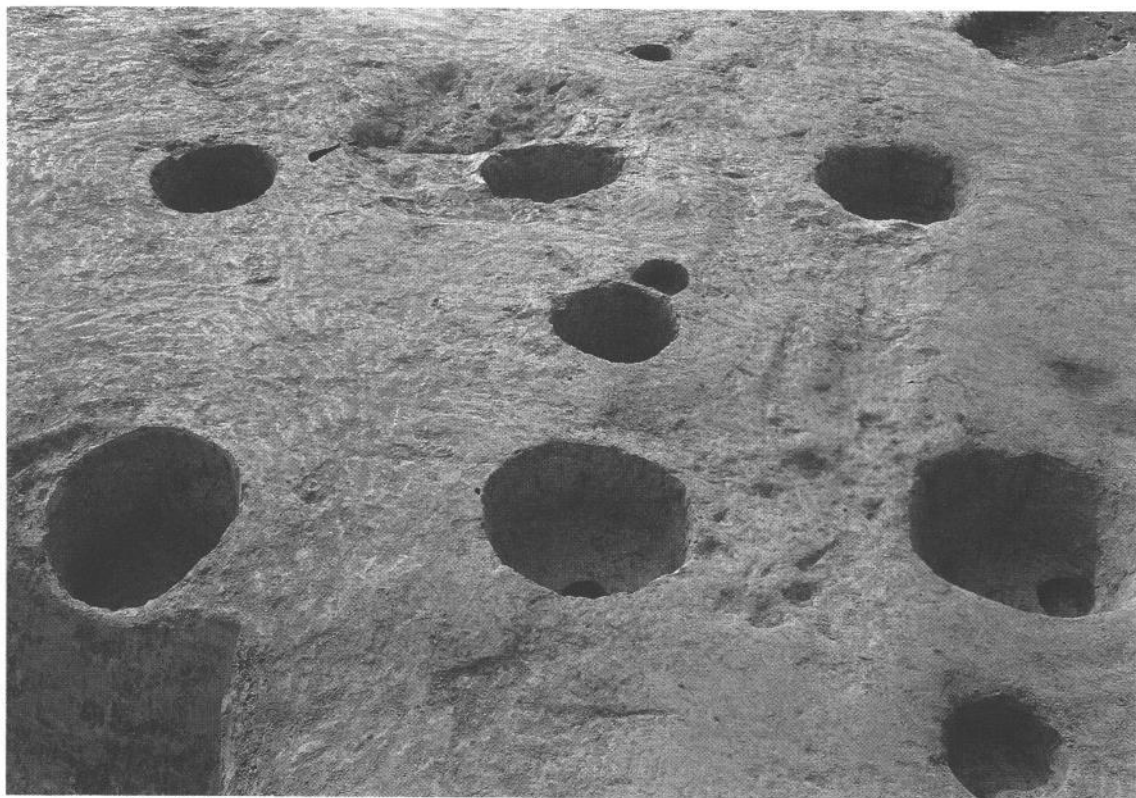
(2) 4号掘立柱建物跡 (南から)



(1) 5号掘立柱建物跡 (南から)



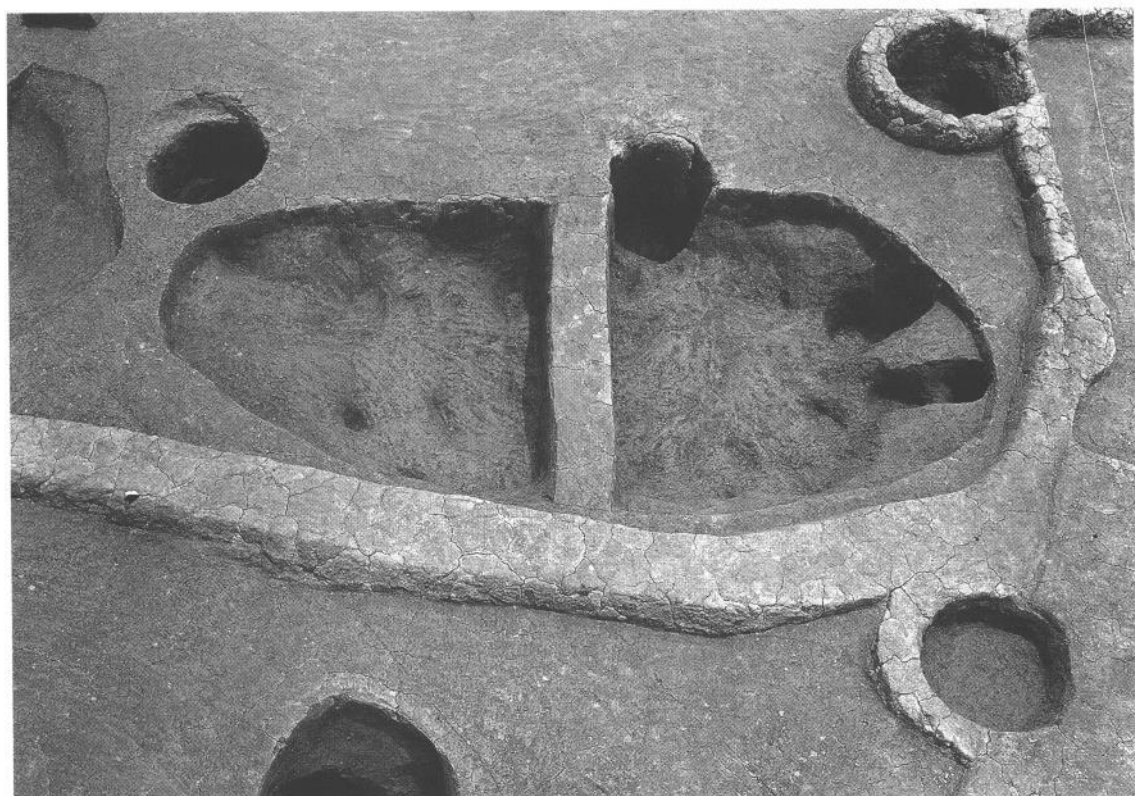
(2) 6号掘立柱建物跡 (南から)



(1) 7号掘立柱建物跡（北から）



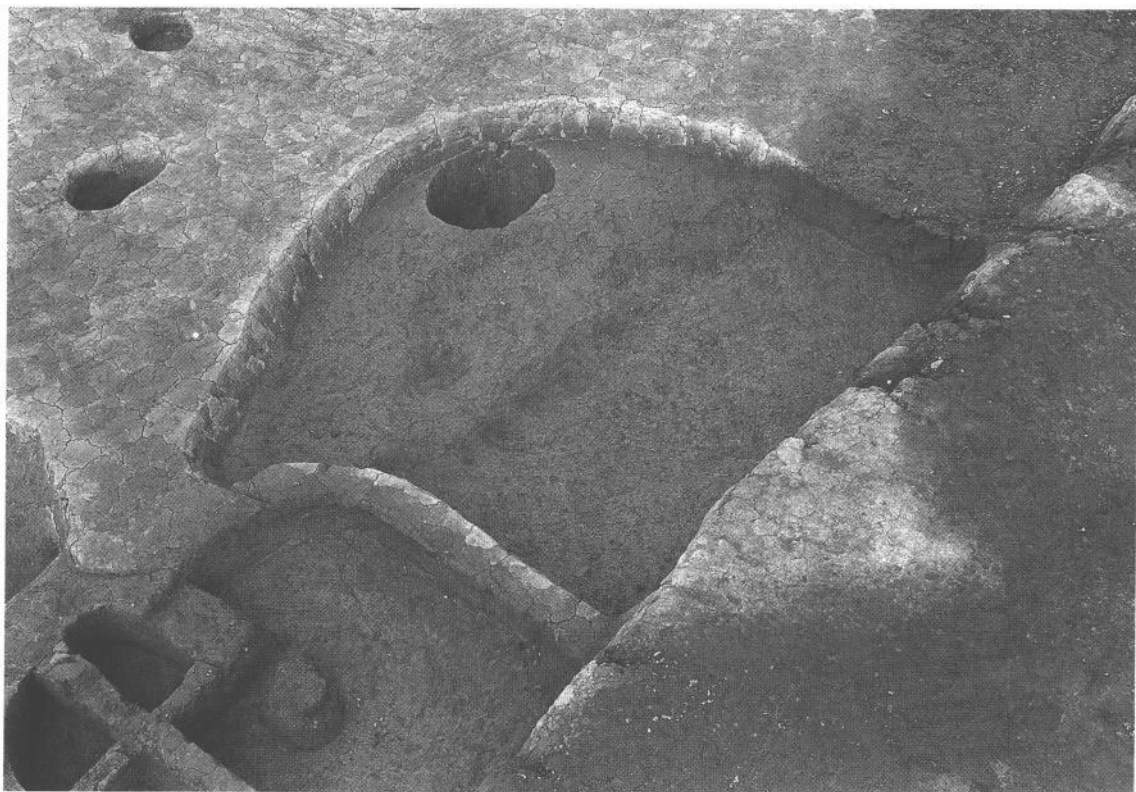
(2) 1号土壇（北西から）



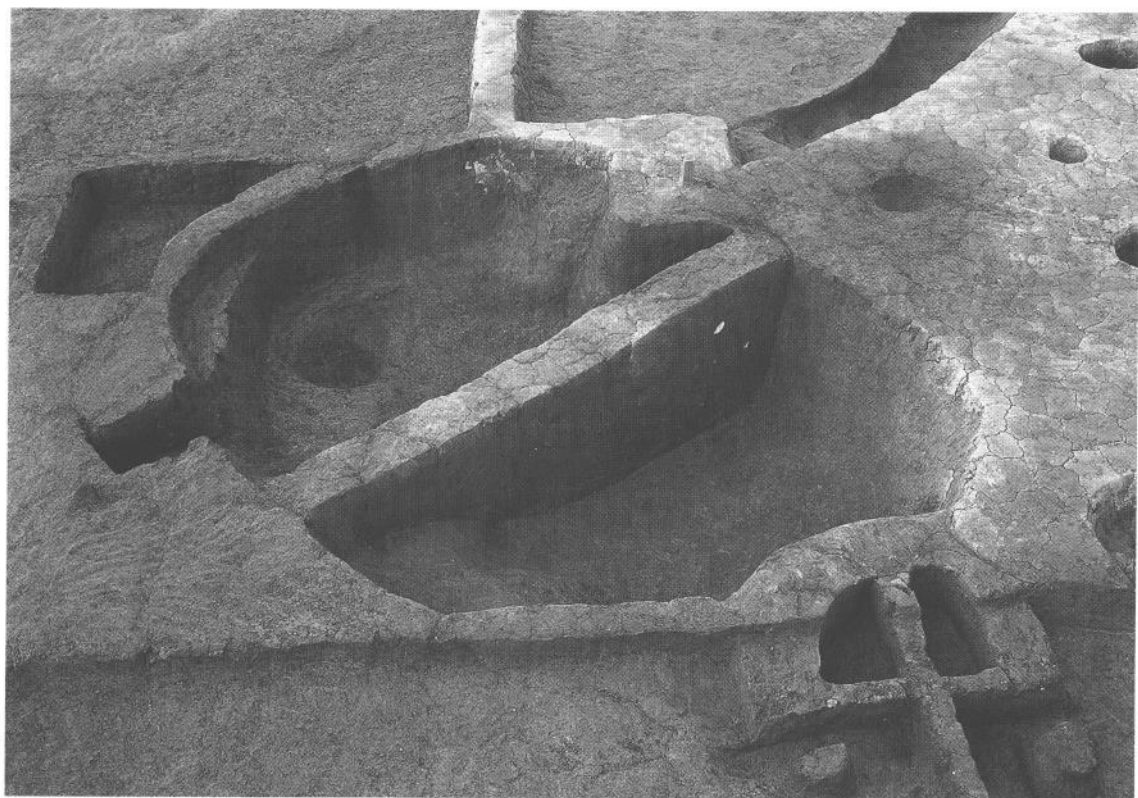
(1) 3号土壙 (西から)



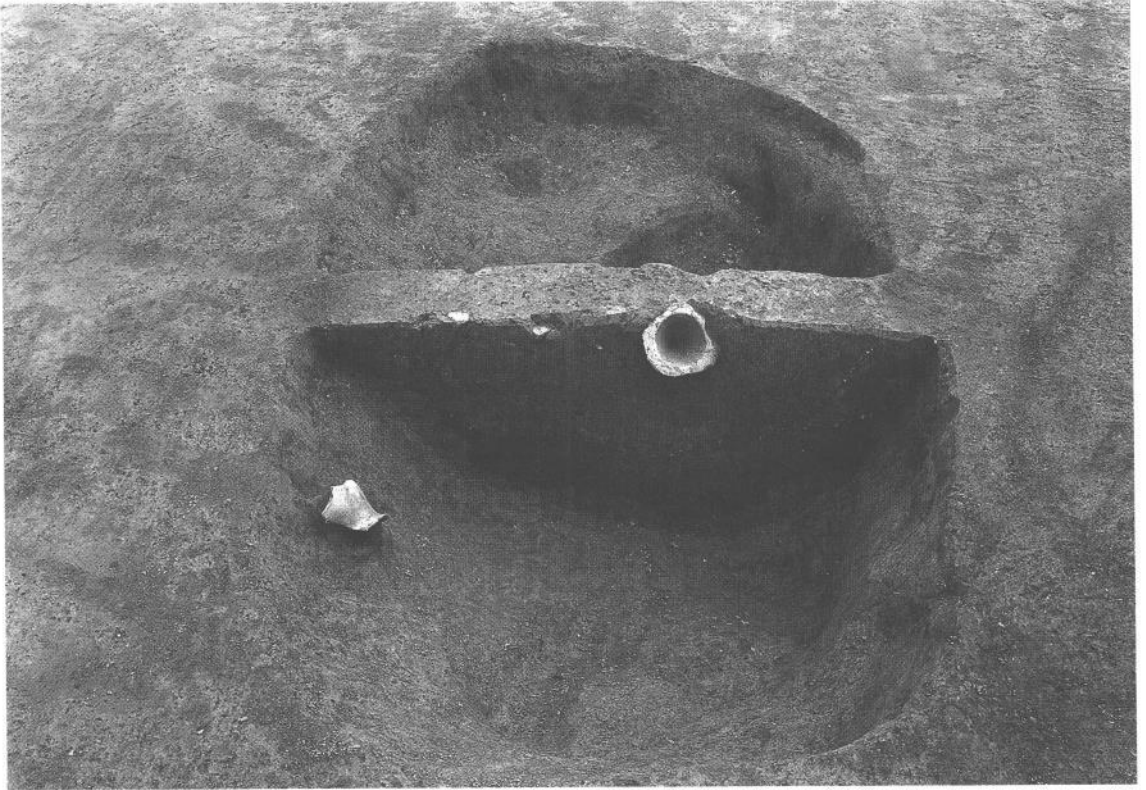
(2) 12号土壙 (北西から)



(1) 26号土坑 (南西から)



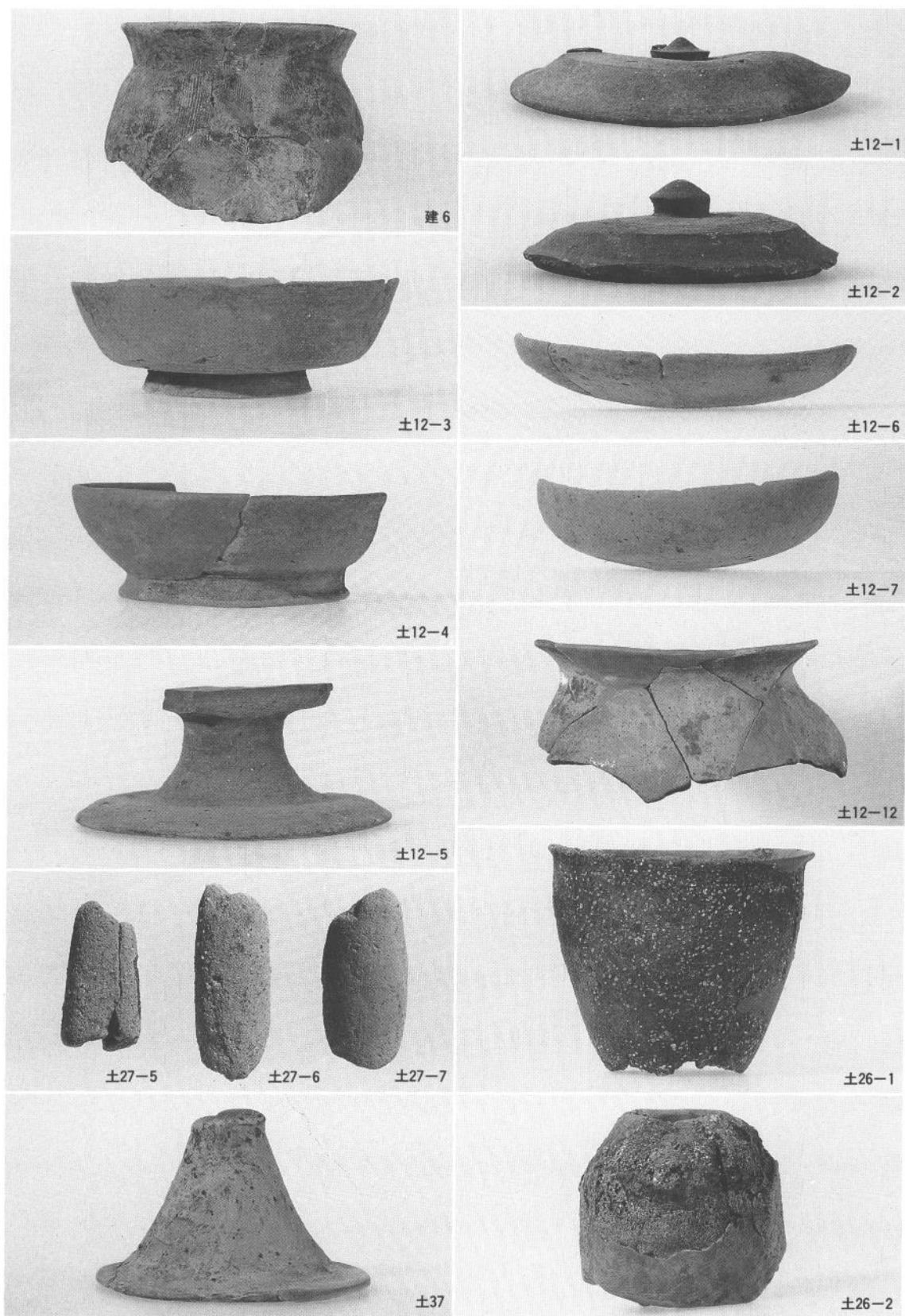
(2) 27号土坑 (南から)



(1) 37号土壙土層断面 (西から)



(2) 57号土壙 (北東から)



掘立柱建物跡および土壙出土遺物



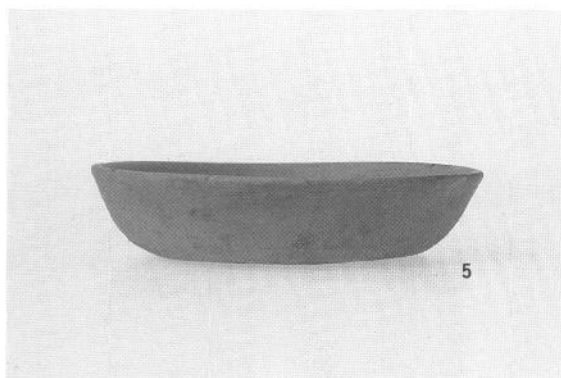
(1) 井戸検出状態 (南から)



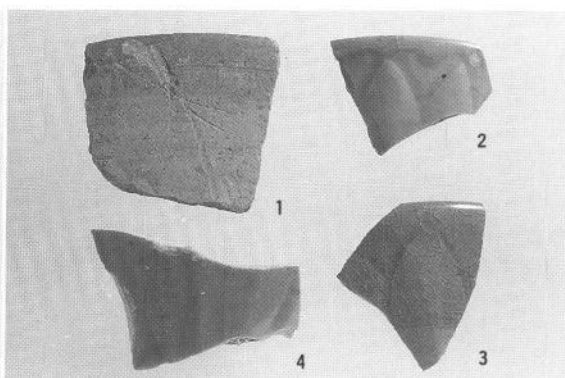
(2) 井戸断面 (西から)



(1) 井戸桶内土師皿出土状態(西から)



(2) 井戸出土遺物



(3) 井戸桶内獣骨出土状態(西から)



(1) 大碓遺跡 東部別区全景. 1 (南東から)



(2) 大碓遺跡 東部別区全景. 2 (南東から)

報告書抄録

ふりがな	さかいまち おおいかりいせき
書名	堺町・大碓遺跡
副書名	福岡県浮羽郡吉井町所在遺跡の調査
巻次	
シリーズ名	一般国道210号線 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第8集
編著者名	飛野博文、水ノ江和向
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812 福岡県福岡市博多区東公園7-7 TEL (092) 651-1111
発行年月日	西暦1994年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃 〃	東経 〃 〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さかいまち 堺町	福岡県浮羽郡 吉井町大字生葉 あざさかいまち 字堺町	40481	—	33°20'50"	130°43'40"	19900106) 19901128	10,000m ²	道路（一般 国道210号 線浮羽バイ パス）建設 に伴う事前 調査
おおいかり 大碓	福岡県浮羽郡 吉井町大字生葉 あざおおいかり 字大碓	40481	—	同上	同上	19900106) 19901128	8,800m ²	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堺町	溝	奈良 中世前期	溝、7本 橋脚状遺構、1基	弥生土器 須恵器 土師器 右鍋・青磁	幅10mの大溝が東西方向に走るが、これは中世前期の条里に伴うもの。
大碓	集落 墓	弥生 古墳 中世	<ul style="list-style-type: none"> 〔 竪穴住居跡 14軒 土壌(主に貯蔵穴) 50基 甕棺墓 5基 大溝 4本 <ul style="list-style-type: none"> 〔 竪穴住居跡 29軒 掘立柱建物跡 6棟 土壌 8基 <ul style="list-style-type: none"> 〔 掘立柱建物跡 1棟 井戸 1基 	<ul style="list-style-type: none"> 〔 弥生土器 石器 管玉1 甕棺8 <ul style="list-style-type: none"> 〔 須恵器 土師器 鉄器 <ul style="list-style-type: none"> 〔 青磁 土師器 	弥生前期後半～中期中頭の集落は、陸橋を有したV字大溝によって囲まれる。

浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第8集

堺町・大碓遺跡

1994年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷 秀巧社印刷株式会社

福岡市南区向野2丁目13-29

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
------------	------------------

登録年度 5	登録番号 9
-----------	-----------

一般国道
210号線 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告

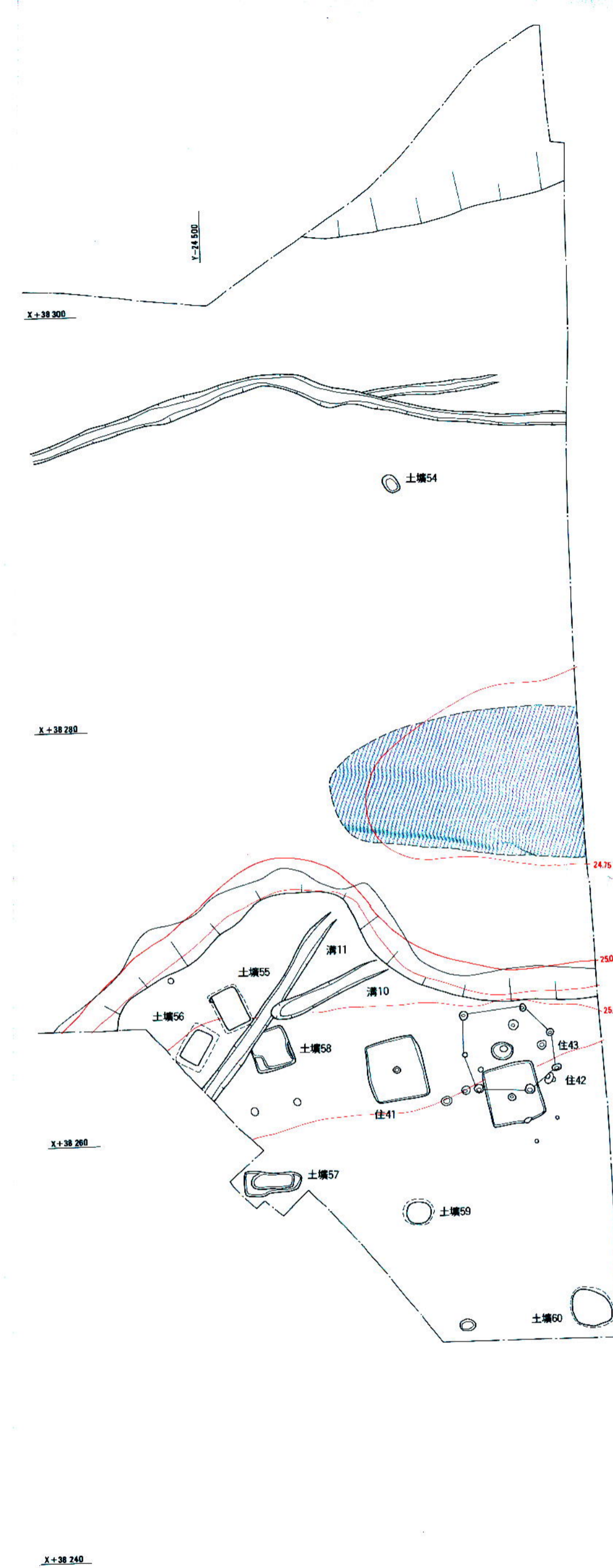
第 8 集

堺 町 ・ 大 碓 遺 跡

福岡県浮羽郡吉井町所在遺跡の調査

付 図

大碓遺跡遺構配置図 (1 / 200)



付図 大塚遺跡遺構配置図(1/200)